勝央町文化財調査報告10

小池谷遺跡
小池谷古墳群

2010年8月

岡　山　県
勝央町教育委員会

小池谷遺跡
小池谷古墳群

2010年8月

岡　山　県
勝央町教育委員会

1　調査地遠景（南から）

2　調査区全景（西から）

巻頭図版２

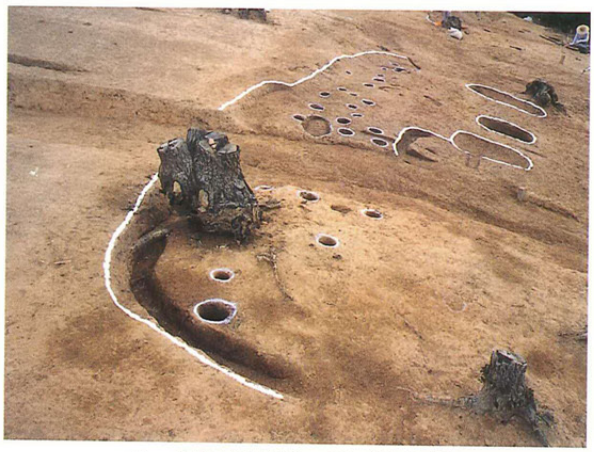
１　調査地遠景（西から）

２　調査区全景（上空から）：下が南

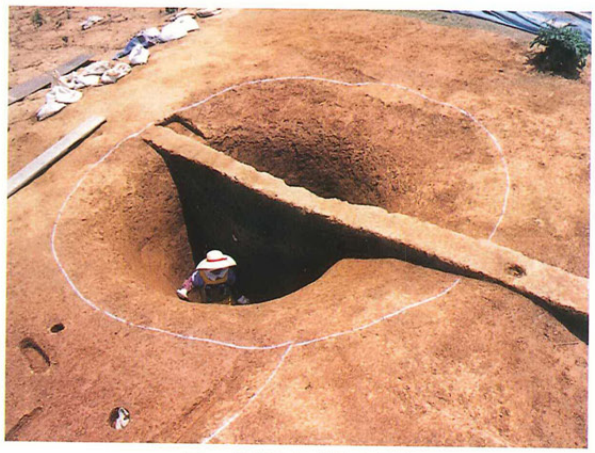
１　丘陵南部西斜面（南から）

２　段状遺構５周辺（西から）

３　段状遺構14・15（東から）



４　段状遺構19・20（北から）



５　土壙７（北から）

巻頭図版４

１　段状遺構10（東から）

２　段状遺構10土器出土状況（東から）

３　段状遺構12（東から）

４　段状遺構12土器出土状況（東から）

５　段状遺構12出土土器１

６　段状遺構12出土土器２

１　小池谷１号墳墳丘
（北から）

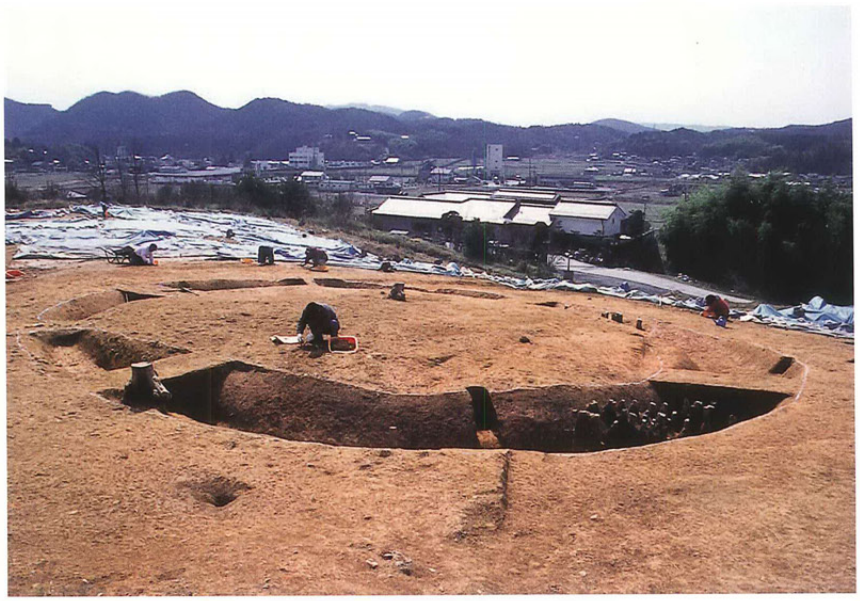
２　１号墳主体部（南から）

３　鉄刀出土状況（北から）

巻頭図版６

１　小池谷２号墳墳丘
（西から）

２　２号墳主体部（東から）



３　小池谷３号墳（北から）

１　小池谷４号墳（東から）

２　小池谷５号墳（北から）

３　小池谷６号墳（東から）

４　小池谷７号墳（南から）

５　小池谷１号墳主体部出土遺物

６　小池谷１号墳主体部上面出土遺物

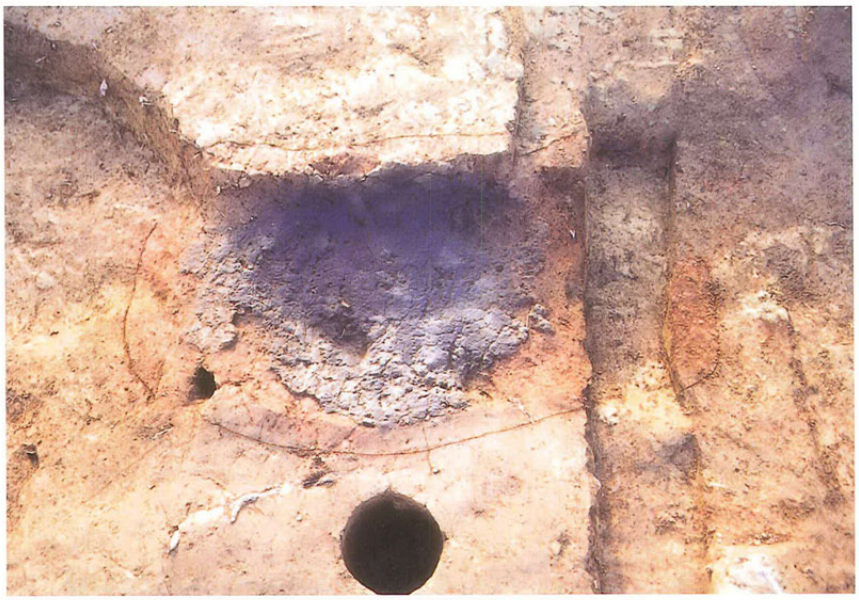
７　小池谷２号墳第１主体出土遺物

８　小池谷２号墳第２主体出土遺物

巻頭図版８

1　北東斜面部全景（南から）

2　製鉄炉作業面全景
（北から）



3　製鉄炉下部構造（東から）

序

勝央町は、岡山県北部のなだらかな丘陵地帯にあります。町の中心部を南北に滝川が流れ、周辺には肥沃な平野が広がっています。古来より人々が住みはじめ、町内には800箇所にも及ぶ遺跡が存在し、現在まで豊かな文化を育んできました。

このたび勝央町の東部の黒土地区において住宅団地造成の建設計画が策定されたことから、予定地内に存在する遺跡の保護・保存について開発者側と協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず遺跡を損壊する範囲については記録保存の処置をとることとなりました。

小池谷遺跡では、今から2000年前の弥生時代の集落跡、1500年前の古墳群などが発見されました。集落跡からは当時の土器や石器、古墳からは鉄刀をはじめとする豪華な副葬品が出土し、本町の歴史を知るための重要な成果があげられました。先人達が培ってくれたこれらの貴重な文化遺産を保存し、後世に伝承していくことは私達に課せられた責務でもあります。

この報告書が地域の歴史を理解するための一助となり、また、広く一般の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を高める上で役立てば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり多岐に渡りまして様々なご尽力をいただきました地元の方々、および発掘調査に参加して頂いた方々をはじめ、各方面からのご支援、ご協力を頂きました。心より御礼申し上げます。

平成22年８月

勝央町教育委員会

教育長　竹　久　　保

例　　言

1．本書は、岡山県勝田郡勝央町黒土地内に所在する小池谷遺跡と小池谷古墳群の発掘調査報告書である。

　なお、遺跡の名称は小字名の「小池谷」を用いており、旧丸山古墳群から変更している。

2．発掘調査は、黒土住宅団地造成に伴うもので、勝央町の委託を受けて、勝央町教育委員会が平成12年度～平成14年度に発掘調査を実施したものである。

3．小池谷遺跡は、岡山県勝田郡勝央町黒土字小池谷895-1に所在する。

4．調査および報告書作成は勝央町教育委員会教育振興部が行い、調査および本書の執筆編集は勝央町教育委員会教育振興部　團　正雄が担当した。

5．遺跡の平面測量および空中写真撮影はフジテクノ有限会社に委託した。

6．現地調査および整理作業に際し、関係各機関をはじめ多くの方々に有益なご教示、ご指導を賜りました。また、地元黒土地区の方々をはじめ関係者のご理解ご協力を賜りました。ここに感謝の意を表します。

7．本報告にかかる遺物・写真・図面は勝央町教育委員会（勝央町勝間田200-1）で保管している。

凡　　例

1．本書に示す標高値は東京湾標準潮位（T.P.）を基とし、方位は真北を指す。

2．本書に示すグリッドの座標値、経緯度は、日本測地系に準拠している。

3．本書第２図に使用した地図は、勝央町教育委員会が平成15年３月に発行した『勝央町遺跡地図』を複製したものである。また、第３図に使用した位置図は、勝央町都市計画地図（1/5,000を複製使用したものである。

4．本書に掲載した遺構は、種別ごとに通し番号を付け、全体図等では以下の略号を用いている。

　また、斜面地を段状に造成した遺構に関しては、段のみのもの、柱穴を伴うもの、溝を伴うものなど、諸要素での分類は煩雑になるため、すべて「段状遺構」という名称を用いた。

　段状遺構：**段**　　土壙：**土**　　土壙墓：**墓**

5．本書における遺構および遺物実測図の縮尺については明記しているが、主なものは以下のとおりである。

　遺構：段状遺構（1/80）　土壙・土壙墓（1/40）

　遺物：土器（1/4）　石製品（1/3）　鉄製品（1/2）　玉類（1/2）

6．遺物番号は、土器は番号のみ、それ以外は材質にしたがって下記の記号を番号に付した。

　石製品：S　　金属製品：M　　ガラス製品：G

7．本報告における土器などの色調は、新版標準土色帳（農林水産省・農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修　1998年版）によっている。

本　文　目　次

巻頭図版
序
例言・凡例
目次
第１章　地理的・歴史的環境……1
第２章　発掘調査の経緯と経過……5
第１節　調査にいたる経緯……5
第２節　調査の経過と概要……6
１．発掘調査の経過……6
２．報告書作成の経過……8
第３節　発掘調査・報告書作成の体制……8
第３章　発掘調査の成果……9
第１節　遺跡の立地と調査区の概要……9
第２節　丘陵南部の遺構・遺物……11
１．段状遺構……12
２．建物跡……41
３．土壙墓……42
４．土壙……45
５．その他の遺構・遺物……48
第３節　小池谷古墳群……50
１．小池谷１号墳……51
２．小池谷２号墳……64
３．小池谷３号墳……75
４．小池谷４号墳……77
５．小池谷５号墳……79
６．小池谷６号墳……83
７．小池谷７号墳……85
８．その他の遺構・遺物……86
第４節　丘陵北東斜面部の遺構・遺物……87
１．調査区の概要……87
２．製鉄炉……87
３．その他の遺構・遺物……89
第５節　丘陵北端部の遺構・遺物……93
１．墳墓状遺構……93
第４章　まとめ……94
第１節　小池谷遺跡について……94
１．弥生時代中期の土器群について……94
２．検出された遺構について……98
３．弥生集落の展開……98
第２節　小池谷古墳群について……99
１．古墳群の調査成果……99
２．出土遺物について……100
３．古墳群の時期と変遷……103
４．周辺地域における古墳群の動向について……104
出土遺物一覧表……108
写真図版
報告書抄録

図　目　次

第１図　調査位置図……1
第２図　遺跡分布地図（1/40,000）……3
第３図　計画位置図（1/10,000）……5
第４図　計画範囲と試掘調査位置図（1/2,500）……6
第５図　調査範囲図（1/2,500）……9
第６図　丘陵南部遺構全体図（1/800）……10
第７図　丘陵南部遺構配置図（古墳以外）(1/500)……11
第８図　段状遺構１～３（1/80）・段状遺構１出土遺物（1/4）……12
第９図　段状遺構４（1/80）・出土遺物（1/4）……13
第10図　段状遺構５・６（1/80）・段状遺構５出土遺物（1/4・1/3）……14
第11図　段状遺構７・８（1/80）……15
第12図　段状遺構７・８出土遺物（1/4）……16
第13図　段状遺構９（1/80）……17
第14図　段状遺構10（1/80）……18
第15図　段状遺構10出土遺物（1/4・1/3）……19
第16図　段状遺構11（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）…20
第17図　段状遺構12遺物出土状況（1/80）……21
第18図　段状遺構12（1/80）……22
第19図　段状遺構12出土遺物（１）（1/4）……23
第20図　段状遺構12出土遺物（２）（1/4）……24
第21図　段状遺構12出土遺物（３）（1/4・1/8）……25
第22図　段状遺構12出土遺物（４）（1/4）……26
第23図　段状遺構12出土遺物（５）（1/4）……27
第24図　段状遺構12出土遺物（６）（1/4）……28
第25図　段状遺構12出土遺物（７）（1/4）……29
第26図　段状遺構12出土遺物（８）（1/4・1/3）……30
第27図　段状遺構13（1/80）・出土遺物（1/4）……31
第28図　段状遺構14・15（1/80）・段状遺構14出土遺物（1/4・1/3）……32
第29図　段状遺構16（1/80）……33
第30図　段状遺構17（1/80）……33
第31図　段状遺構18（1/80）・出土遺物（1/4）……33
第32図　段状遺構19～21（1/80）・段状遺構19・20出土遺物（1/4・1/3）……34
第33図　段状遺構22・23（1/80）……35
第34図　段状遺構23出土遺物（1/4）……36
第35図　段状遺構24・25（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）……37
第36図　段状遺構26・27（1/80）・段状遺構26出土遺物（1/4）……38
第37図　段状遺構28（1/80）……39
第38図　段状遺構29（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）…39
第39図　段状遺構30（1/80）……40
第40図　段状遺構31（1/80）……40
第41図　段状遺構32（1/80）……40
第42図　段状遺構33（1/80）……41
第43図　段状遺構34（1/80）……41
第44図　建物１（1/80）……41
第45図　土壙墓１（1/40）……42
第46図　土壙墓１出土遺物（1/4）……42
第47図　土壙墓２（1/40）……42
第48図　土壙墓３（1/40）・出土遺物（1/4）……43
第49図　土壙墓４・５（1/40）……43
第50図　土壙墓６（1/40）……44
第51図　土壙墓７（1/40）……44
第52図　土壙墓８（1/80）・出土遺物（1/4）……44
第53図　土壙１（1/40）……45
第54図　土壙２（1/40）・出土遺物（1/4）……45
第55図　土壙３（1/40）・出土遺物（1/4）……46
第56図　土壙４（1/40）・出土遺物（1/3）……46
第57図　土壙５（1/40）・出土遺物（1/4）……47
第58図　土壙６（1/40）……47
第59図　土壙７（1/80）・出土遺物（1/4）……48
第60図　土壙８（1/40）……48
第61図　段状遺構35（1/80）・出土遺物（1/4）……49
第62図　その他の出土遺物（1/3）……49
第63図　小池谷古墳群配置図（1/800）……50
第64図　１号墳調査前地形測量図（1/200）……51
第65図　１号墳（1/200）……51
第66図　１号墳墳丘土層断面図（1/50）……52
第67図　１号墳主体部（1/40）……53
第68図　１号墳主体部土層断面図（1/50）……54
第69図　１号墳主体部遺物出土状況（1/10）……54
第70図　１号墳主体部上面遺物出土状況（1/40）……55
第71図　１号墳主体部出土遺物（１）（1/4）……56
第72図　１号墳主体部出土遺物（２）（1/2）……56
第73図　１号墳主体部出土遺物（３）（1/4・1/2）……57
第74図　１号墳主体部出土遺物（４）（1/2）……58
第75図　１号墳主体部上面出土遺物（1/4・1/2）……59
第76図　１号墳周溝出土遺物（１）（1/4）……60
第77図　１号墳周溝出土遺物（２）（1/4）……61
第78図　１号墳周溝出土遺物（３）（1/4）……62
第79図　１号墳周溝出土遺物（４）（1/4）……63
第80図　２号墳調査前地形測量図（1/200）……64
第81図　２号墳（1/200）……64
第82図　２号墳墳丘土層断面図（1/50）……65
第83図　２号墳第１・第２主体部（1/40）……66
第84図　２号墳第１主体部（1/40）・遺物出土状況（1/20）……67
第85図　２号墳第２主体部（1/40）・遺物出土状況（1/20）……68
第86図　２号墳第１主体部出土遺物（１）(1/4・1/3)……69
第87図　２号墳第１主体部出土遺物（２）(1/4・1/2)……70
第88図　２号墳第１主体部出土遺物（３）（1/2）……71
第89図　２号墳第１主体部盗掘穴出土遺物（1/4・1/2）……72
第90図　２号墳第２主体部出土遺物（1/4・1/2）……73
第91図　２号墳周溝出土遺物（1/4）……74

第92図　２号墳下層遺構（1/100・1/50）……74
第93図　３号墳（1/200）・周溝土層断面図（1/50）……75
第94図　３号墳周溝遺物出土状況（1/50）……76
第95図　３号墳周溝出土遺物（１）（1/4）……76
第96図　３号墳周溝出土遺物（２）（1/4）……77
第97図　４号墳（1/200）・周溝土層断面図（1/50）…78
第98図　４号墳周溝出土遺物（1/4・1/2）……79
第99図　５号墳（1/200）・周溝土層断面図（1/50）……80
第100図　５号墳周溝遺物出土状況（１/50）……81
第101図　５号墳周溝出土遺物（1/4・1/2）……82
第102図　６号墳（1/200）・周溝土層断面図（1/50）…83
第103図　６号墳周溝遺物出土状況（1/50）……84
第104図　６号墳周溝出土遺物（1/4）……84
第105図　７号墳（1/200）……85
第106図　７号墳周溝遺物出土状況（1/50）・出土遺物（1/4）……85
第107図　土壙墓９（１/30）・出土遺物（1/4）……86
第108図　その他の出土遺物（1/4）……86
第109図　北東斜面部遺構全体図（1/200）……87
第110図　製鉄炉・土層断面図（1/50）……88
第111図　製鉄炉炉床（１/30）……89
第112図　鉄滓・炉壁（1/4）……90
第113図　段状遺構36（1/80）……91
第114図　段状遺構37（1/80）……91
第115図　段状遺構38（1/80）……91
第116図　段状遺構39（1/80）……91
第117図　段状遺構40（1/80）……91
第118図　段状遺構41（1/80）……92
第119図　段状遺構41出土遺物（1/4・1/3）……92
第120図　墳墓状遺構（1/300）……93
第121図　墳墓状遺構土層断面図（1/50）……93
第122図　段状遺構12出土土器分類表（1/10）……95
第123図　中期中葉～後葉の土器併行関係……97
第124図　小池谷古墳群出土須恵器変遷表……101
第125図　滝川・梶並川流域の古墳分布図（1/40,000）……105

写　真　図　版　目　次

巻頭カラー図版
図版１　１　調査地遠景（南から）
　　２　調査区全景（西から）
図版２　１　調査地遠景（西から）
　　２　調査区全景（上空から）：下が南
図版３　１　丘陵南部西斜面（南から）
　　２　段状遺構５周辺（西から）
　　３　段状遺構14・15（東から）
　　４　段状遺構19・20（北から）
　　５　土壙７（北から）
図版４　１　段状遺構10（東から）
　　２　段状遺構10土器出土状況（東から）
　　３　段状遺構12（東から）
　　４　段状遺構12土器出土状況（東から）
　　５　段状遺構12出土土器１
　　６　段状遺構12出土土器２
図版５　１　小池谷１号墳墳丘（北から）
　　２　１号墳主体部（南から）
　　３　鉄刀出土状況（北から）
図版６　１　小池谷２号墳墳丘（西から）
　　２　２号墳主体部（東から）
　　３　小池谷３号墳（北から）
図版７　１　小池谷４号墳（東から）
　　２　小池谷５号墳（北から）
　　３　小池谷６号墳（東から）
　　４　小池谷７号墳（南から）
　　５　小池谷１号墳主体部出土遺物
　　６　小池谷１号墳主体部上面出土遺物
　　７　小池谷２号墳第１主体出土遺物
　　８　小池谷２号墳第２主体出土遺物
図版８　１　北東斜面部全景（南から）
　　２　製鉄炉作業面全景（北から）
　　３　製鉄炉下部構造（東から）

図版目次
図版１　１　調査地遠景（南から）：右端中央テント
　　２　調査区全景（東から）
　　３　調査区全景（西から）
図版２　１　段状遺構１（西から）
　　２　段状遺構４（西から）
　　３　段状遺構５（東から）
図版３　１　段状遺構７・８遺物出土状況（西から）
　　２　段状遺構７・８（東から）
　　３　段状遺構９（西から）
図版４　１　段状遺構10遺物出土状況（東から）
　　２　段状遺構10（東から）
　　３　段状遺構11遺物出土状況（西から）
図版５　１　段状遺構11（東から）
　　２　段状遺構12遺物出土状況（東から）
　　３　段状遺構12（西から）
図版６　１　段状遺構13（東から）
　　２　段状遺構14（東から）

	3	段状遺構15（西から）
図版７	1	段状遺構16・18（南から）
	2	段状遺構17（北から）
	3	段状遺構19（北から）
図版８	1	段状遺構20（南から）
	2	段状遺構22（北から）
	3	段状遺構23（南から）
図版９	1	段状遺構24（北から）
	2	段状遺構25遺物出土状況（西から）
	3	段状遺構25（南から）
図版10	1	段状遺構26（南から）
	2	段状遺構27（南から）
	3	段状遺構29（東から）
図版11	1	北東斜面部全景（南から）
	2	段状遺構30（北から）
	3	段状遺構31（南から）
図版12	1	段状遺構32（北から）
	2	段状遺構33（北から）
	3	建物１（南から）
図版13	1	土壙墓１（東から）
	2	土壙墓２（東から）
	3	土壙墓３（東から）
図版14	1	土壙墓４（北から）
	2	土壙墓５（南から）
	3	土壙墓６～８（北から）
図版15	1	土壙１（南から）
	2	土壙２（南から）
	3	土壙６（南から）
図版16	1	土壙７（北から）
	2	土壙８（北から）
	3	段状遺構35（東から）
図版17	1	１・２号墳（西から）
	2	１・２号墳（南から）
	3	１号墳表土掘削風景（東から）
図版18	1	１号墳墳丘（東から）
	2	１号墳埴輪検出状況（北から）
	3	１号墳主体部検出状況（北から）
図版19	1	１号墳主体部上面遺物出土状況（西から）
	2	１号墳主体部（南から）
	3	１号墳主体部遺物出土状況１（北から）
図版20	1	１号墳主体部遺物出土状況２（西から）
	2	２号墳表土掘削風景（西から）
	3	２号墳墳丘（北から）
図版21	1	２号墳主体部検出状況（西から）
	2	２号墳第１主体部（南から）
	3	２号墳第１主体部（東から）
図版22	1	２号墳第２主体部（北から）
	2	２号墳第２主体部（東から）
	3	２号墳下層　溝（北から）
図版23	1	３号墳（南から）
	2	３号墳土手状遺構（北から）
	3	４号墳（東から）
図版24	1	５号墳（南から）
	2	６号墳（東から）
	3	６号墳遺物出土状況（南から）
図版25	1	７号墳遺物出土状況（南から）
	2	７号墳（南から）
	3	土壙墓９（南から）
図版26	1	北東斜面部全景（北から）
	2	製鉄炉（北から）
	3	製鉄炉（南から）
図版27	1	製鉄炉（西から）
	2	炉下部構造（北から）
	3	段状遺構36・37（南から）
図版28	1	段状遺構41（北から）
	2	丘陵北端部遠景（東から）
	3	墳墓状遺構（南から）
図版29	小池谷遺跡出土土器１	
図版30	小池谷遺跡出土土器２	
図版31	小池谷遺跡出土土器３	
図版32	小池谷遺跡出土土器４	
図版33	小池谷遺跡出土土器５	
図版34	小池谷遺跡出土石器	
図版35	小池谷古墳群出土土器１	
図版36	小池谷古墳群出土土器２	
図版37	小池谷古墳群出土土器３・埴輪	
図版38	小池谷古墳群出土鉄器１	
図版39	小池谷古墳群出土鉄器２	
図版40	小池谷古墳群出土鉄器３・石製品・玉類、北東斜面部出土遺物	

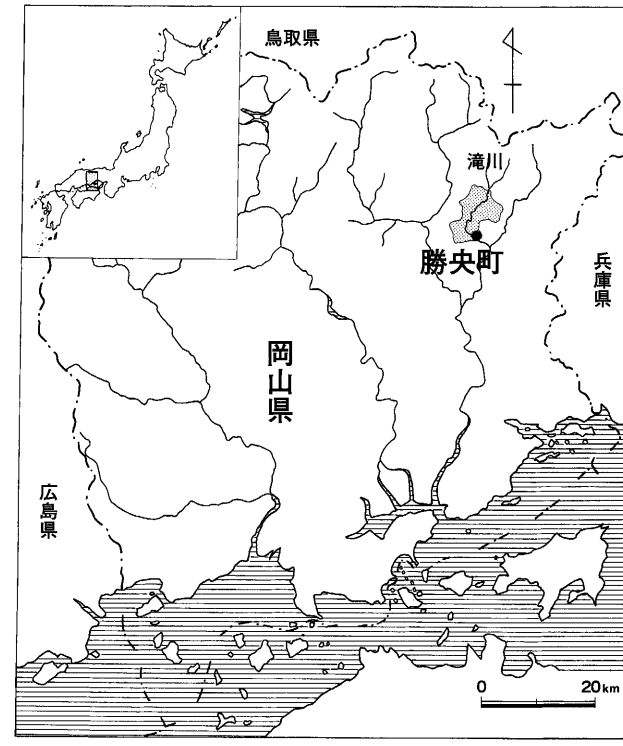
第１章　地理的・歴史的環境

勝央町は岡山県北部の山間地に開けた津山市の東隣に位置し、人口１万２千人の町である。周辺は南方に緩やかに傾斜する標高100m～200mの丘陵台地にあり、町の北部は那岐山、滝山などの中国山地を背に受けて日本原高原から緩やかな丘陵が起伏した台地を形成し、町の中南部は滝山に源を発して町の中心を南北に流れる滝川に沿って比較的平坦な盆地・平野を形成している。この滝川は吉野川を経て岡山三大河川の吉井川に合流し、県南部にそそぐ。この滝川に沿って形成された勝間田平野は東西を結ぶ要衝の地で古来より多くの人々の往来が認められる。このことを示すように勝央町内には現在までに約800箇所におよぶ様々な種類の遺跡が確認され、県下でも有数の埋蔵文化財包蔵地帯となっている[1]。

本報告に掲載した小池谷遺跡の位置する黒土地区は勝間田平野の東部に位置し、平野を囲う低丘陵や台地上に多くの遺跡が確認されている。町でも遺跡密度が高い地区で、さらに開発に伴う発掘調査が行われた例も多いことから、町の歴史を知る上で重要な地域となっている。以下では、町全体の歴史を概観しつつ、最近の調査成果についても触れたい。

まず、町内最古の遺跡としては、縄文時代早期の押型文土器が金鶏塚遺跡などで採集されていたのみであったが、最近の調査により黒土地区大河内遺跡で縄文草創期の尖頭器や石鏃がまとまって出土し、町の歴史が約１万２千年前にまで遡ることが判明した。

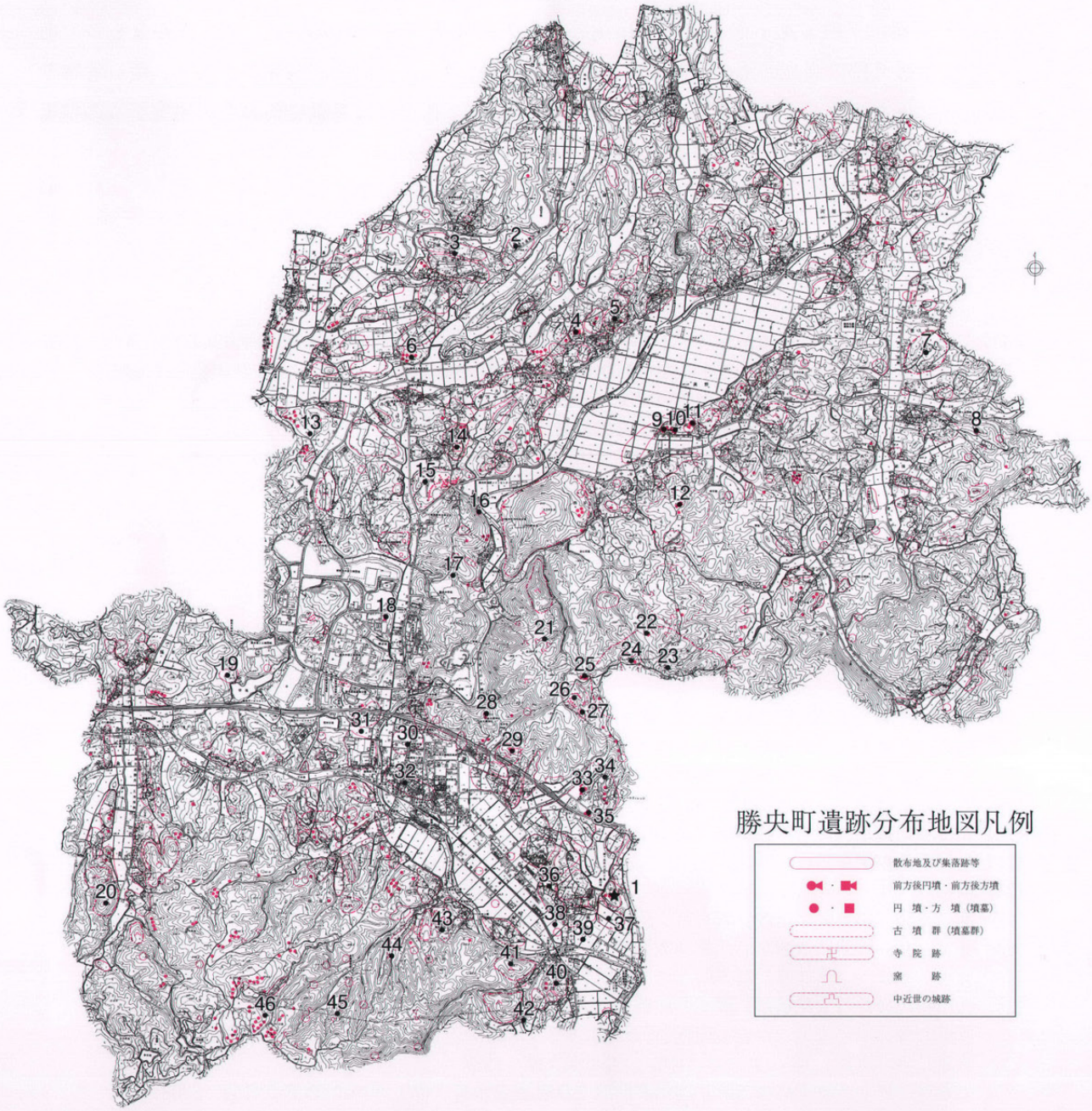
町内で本格的に集落が営まれるのは続く弥生時代からである。町内全域で多くの集落が出現するのは中期後葉に入ってからであるが、弥生時代前期に遡る土壙墓が大河内遺跡[2]で発見されたことから、周辺でも前期の集落が発見される可能性が高まった。また、本報告の黒土小池谷遺跡が発見されたことにより、中期中葉には集落が増加することが判明したが、その実数はいまだ少ない。中期後葉には大河内遺跡[3]や宮ノ上遺跡[4]などで住居跡が多く発見されており、この時期以降に集落が増加し、発展したようである。特に大河内遺跡は平野部に立地し、この時期に低位部の開発が進んだことを示している。後期には町内各地で集落が爆発的に増加している。代表的なものに滝川下流域の拠点集落と考えられる岡地区の小中遺跡[5]がある。調査により建替を含め300軒を超す住居跡などが発見され、中期後葉に始まり後期に最盛期を迎えることが判明している。また、小中遺跡の背後にある標高260mの間山山頂に高地集落として田井ちご池遺跡[6]



第１図　調査位置図

などが発見されている。後期には町北部でも集落が増加する。植月北鳥羽野周辺においては銅鐸で有名な念仏塚遺跡[7]や、住居跡が発見されている鳥羽野遺跡[8]や弥平治遺跡[9]などがあり、台地上に広範囲に集落が展開すると考えられる。後期末頃には最近になって黒土地区の土居遺跡[10]、対岸の宮ノ上遺跡で住居跡が発見されており、小中遺跡以後の集落像が明らかとなりつつある。

続く古墳時代には町内全域で多数の古墳が確認されている。特に古墳時代前期～中期初めには、町北部の美野平野周辺において、美作最大の植月寺山古墳（全長約91m）[11]、美野高塚古墳（全長約65m）、美野中塚古墳（全長約51m）、西宮神社裏古墳（全長約39m）、田井高塚古墳（全長約42m）、町南北を見下ろせる間山山頂にも岡高塚古墳（全長56m）があり、いずれも墳形が前方後方墳という点で共通している。さらに町南部の勝間田周辺の丘陵でも前方後円墳の琴平山古墳（全長50m）、殿塚古墳（全長40m）などが存在している。最近、これらの古墳の測量調査によって形状や規模があきらかとなっており、継続的に首長の系譜が追える非常に重要な地域と考えられている[12]。古墳時代中期は前期から一転し、実態は不明であるが古墳数は減少している。わずかに、緊急調査された箱式石棺を持つ落山古墳[13]、最近では宮ノ上古墳において竪穴式石室から銅鏡２面が出土しており、小円墳ながらも首長の墓と考えられる[14]。古墳時代中期後葉～後期には、前方後円墳の愛宕山古墳（全長28m）[15]、よつみだわ２号墳（全長20m）[16]を筆頭に、竪穴系を埋葬主体とする古式群集墳が多く確認されている。中でも、実態は不明ながら広高下古墳群は町の南北境の低丘陵に47基の小円墳が群集して存在し、広範囲に墓域が形成されている[17]。南部では小中古墳群や今回の小池谷古墳群などの調査で木棺直葬が発見され、土器や鉄製品が多く出土している[18]。この他、北部の狐塚古墳群、南部の東光寺古墳群などが確認されている。続く後期後半には横穴式石室を持つ群集墳が認められる。畑ノ平古墳群では、11基の横穴式石室が調査され、陶棺や土器、装飾品など豪華な副葬品が認められる。土師器炊飯具が目立つのも特徴である[19]。この他にも20～30基で構成される岡高塚古墳群や七十古墳群などが確認されている。また、最近調査された河内古墳群では横穴式石室に須恵質陶棺が出土し、７世紀後半まで横穴式石室墳が存続することが判明した[20]。古墳時代の集落に関しては不明な点が多いが、宮ノ上遺跡[21]や福吉丸山遺跡[22]で後期の集落が発見されている。住居跡から鉄滓などが出土するなど製鉄工程に関係する点で共通する。続く奈良時代には勝間田平野の西部に美作国勝田郡衙に比定される勝間田・平遺跡[23]が存在する。緊急調査ながら勝間田遺跡からは正庁とみられる大型建物や築地遺構が発見されている。谷を挟んで北に位置する平遺跡からも小規模な掘立柱建物群が発見され、いずれからも多くの瓦や硯、墨書土器など公的な様相を示す遺物が出土している。なお、古墳時代後期末～奈良時代の須恵器窯として実態は不明ながらも宇津木谷窯や豊久田窯などが存在する。平安時代の集落は不明な点が多い。平遺跡では緑釉や灰釉陶器が出土しており、奈良時代以降、平安時代にも存続している。その他虫尾遺跡で黒色土器などが発見されている[24]。平安時代末以降～鎌倉時代にかけては、勝間田平野の北にある間山山塊や南の畑屋・東吉田周辺において須恵器系中世陶器である勝間田焼の窯跡が50基以上確認されており、勝間田古窯跡群と呼称されている。全容は明らかでないが、わずかに戸岩窯[25]や進上谷窯[26]、最近では岡東高塚窯[27]などが調査され、生産地の実態が明らかとなりつつある。平安時代末以降、消費地である集落跡も多く発見されている。勝間田の石仏上遺跡では掘立柱建物や小型土器窯などが発見され、河道からは多くの土器が出土することから、窯製品の集積地と考えられる[28]。また、大河内遺跡[29]や黒土の藤ヶ瀬遺跡[30]においては大型の掘立柱建物が発見されており、勝田荘の水田経営を行う有力者の屋敷と考えられる。最近では及遺跡において鎌倉～



1．小池谷遺跡・小池谷古墳群
2．念仏塚遺跡
3．鳥羽野遺跡群
4．植月寺山古墳
5．弥平治遺跡
6．狐塚古墳群
7．高光寺跡
8．豊久田窯
9．西宮神社裏古墳
10．美野中塚古墳
11．美野高塚古墳
12．田井高塚古墳
13．金鶏塚遺跡
14．植月宮山城
15．広高下古墳群
16．戸岩窯
17．河内古墳群
18．愛宕山古墳
19．福吉丸山遺跡
20．神田山城
21．河内奥窯
22．間山瓦経塚
23．間山高福寺跡
24．田井ちご池遺跡
25．岡高塚古墳
26．高塚古墳群
27．岡東高塚窯
28．琴平山古墳
29．殿塚古墳
30．石仏上遺跡
31．勝間田・平遺跡
32．勝間田宿場跡
33．よつみだわ古墳群
34．小中遺跡
35．小中古墳群
36．土居遺跡
37．及遺跡
38．藤ヶ瀬遺跡
39．大河内遺跡
40．宮ノ上遺跡・宮ノ上１号墳
41．小矢田城
42．落山古墳
43．東光寺古墳群
44．宇津木谷窯
45．進上谷窯
46．七十古墳群

第２図　遺跡分布地図（1/40,000）

室町時代の集落が発見され、多数の粘土採掘穴が発見されている[31]。中世の城館では詳細のわかるものが少なく実態は不明であるが、植月宮山城跡や小矢田城跡、神田山城跡などが代表的なものである。寺院では豊久田の高光寺跡や、間山山頂の山岳寺院とみられる間山高福寺跡があり、礎石建物や段、間山瓦経塚を代表とする墳墓などが多く残されている。近世には参勤交代のため出雲街道の宿場町として勝間田が整備され、現在でも当時の町並みを残している。

註

（１）勝央町教育委員会『勝央町遺跡地図』2003
（２）岡本泰典ほか『大河内遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告216　岡山県教育委員会　2008
（３）前掲註（２）
（４）柴田英樹ほか『宮ノ上遺跡・宮ノ上古墳群』岡山県埋蔵文化財調査報告　197　岡山県教育委員会　2006
（５）高畑知功ほか『小中遺跡・小中古墳群』岡山県埋蔵文化財調査報告　７　岡山県教育委員会　1975
　　朝倉秀昭ほか『小中遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告　117　岡山県教育委員会　1997
（６）光永真一ほか『田井ちご池遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告　171　岡山県教育委員会　2003
　　物部茂樹『田井ちご池遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告　185　岡山県教育委員会　2004
（７）近藤義郎「美作植月村念仏塚発見の銅鐸」『吉備考古』83号　吉備考古学会　1951
（８）台地開発により土器や遺構などが発見されている。
（９）中野雅美『弥平治・能部遺跡』広域農道美作台地地区勝央町地内埋蔵文化財発掘調査委員会　1983
(10) 團　正雄『土居遺跡』勝央町文化財調査報告８　2009
(11) 光永真一「植月寺山古墳」『岡山県史』18考古資料編　岡山県　1986
(12) 倉林真砂斗、澤田秀実ほか『美作の首長墳』吉備人出版　2000
(13) 岡田　博『落山古墳』勝央町教育委員会　1983
(14) 前掲註（４）
(15) 近藤義郎編『前方後円墳集成　中・四国編』1991
(16) 朝倉秀昭ほか『小中遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告　117　岡山県教育委員会　1997
(17) 勝央町教育委員会『勝央町遺跡地図』2003
(18) 高畑知功ほか『小中遺跡・小中古墳群』岡山県埋蔵文化財調査報告　７　岡山県教育委員会　1975
(19) 弘田和司ほか『畑の平古墳群』岡山県埋蔵文化財調査報告　111　岡山県教育委員会　1996
(20) Ｈ16町教委調査
(21) 前掲註（４）
(22) 團　正雄『福吉丸山遺跡』勝央町文化財調査報告４　勝央町教育委員会　1999
(23) 井上　弘「勝間田遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財報告』４　岡山県教育委員会　1974
　　井上　弘ほか『平遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告　８　岡山県教育委員会　1975
(24) 弘田和司ほか『虫尾遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告　111　岡山県教育委員会　1996
(25) 岡田　博「戸岩窯址・戸岩古墳群」『岡山県埋蔵文化財報告』14　岡山県教育委員会　1984
(26) 伊藤　晃「窯業」『岡山県の考古学』　吉川弘文館　1987
(27) 光永真一ほか『岡東高塚遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告　171　岡山県教育委員会　2003
(28) Ｈ14町教委調査
(29) 前掲註（２）
(30) Ｈ16～Ｈ19町教委調査　『美作勝央発掘ものがたり　報告会発表資料集』2006
(31) Ｈ17～Ｈ18町教委調査　『美作勝央発掘ものがたり　報告会発表資料集』2006

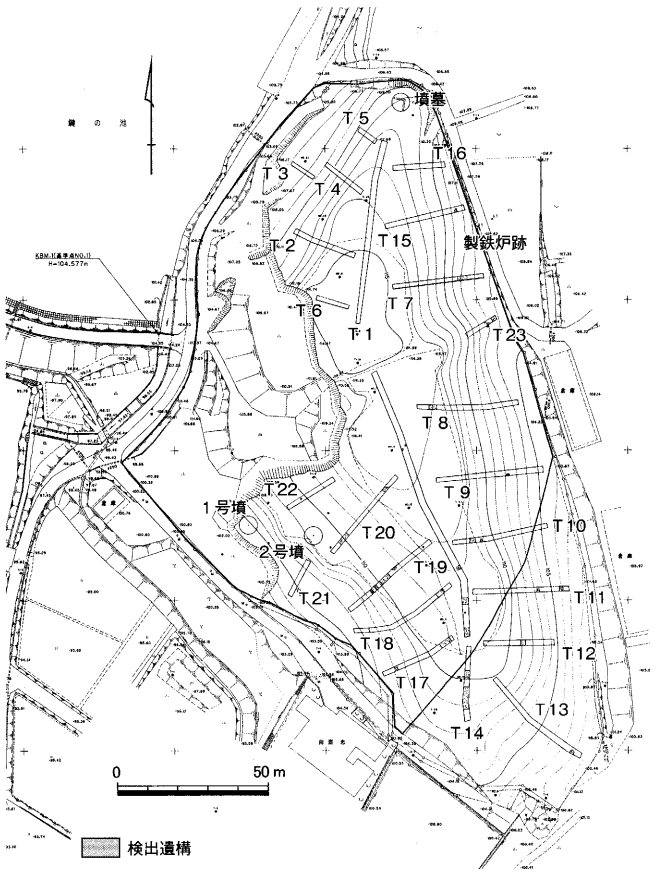
※文献は主要なもののみ明記をした。全体では以下の文献を参考にした。
　勝央町『勝央町誌』1984　　勝央町『続・勝央町誌』2005

第２章　発掘調査の経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯

勝央町では、平成９年度以降の事業として勝央町東部の黒土地内において住宅団地の造成計画を策定した。勝間田平野を南に見下ろす通称丸山と呼ばれる丘陵約20,000㎡を造成し、分譲地60区画を確保する大規模な計画であった。平成９年７月に町都市計画課から町教育委員会宛に計画地内における遺跡の取り扱いについての照会があり協議を行った。事業予定地内は、周知の埋蔵文化財包蔵地の丸山古墳群に該当し、８基の古墳群として遺跡地図に記載されていることから、町教育委員会ではまず現地の分布調査を実施することとした。踏査の結果、近年の土取り工事により尾根西斜面は大きく削りとられて崖となっていた。また、頂上部付近も、明らかにブルドーザーなどの機械による削平を受けており、周囲に排土を押し出した状況であった。この中、かろうじて南斜面で墳丘をもつ古墳２基、北尾根端で墳墓１基の残存が確認されたが、すでに８基中６基は消滅していた。また、踏査中に造成された排土中から弥生土器が数点採集されたため、古墳以外にも下層に集落遺跡の存在する可能性が考えられた。以上の踏査結果を踏まえて再度協議を行い、古墳以外の下層遺構が予想されることから、計画地全域を対象にした試掘・確認調査を実施し、確認調査後にその保護について改めて協議することとなった。

第３図　計画位置図（1/10,000）



番号	検出遺構	出土遺物
T１		
T２		
T３		
T４		
T５		
T６		
T７	製鉄炉	鉄滓
T８	住居	弥生土器　石器
T９	土壙	
T10	段状遺構　土壙	弥生土器
T11	段状遺構　溝	
T12	段状遺構	弥生土器
T13	土壙	
T14	段状遺構　住居	弥生土器　須恵器
T15	段状遺構	
T16		
T17	段状遺構　溝	弥生土器
T18	古墳周溝	
T19	段状遺構　溝	弥生土器　須恵器
T20	古墳周溝　段状遺構	弥生土器　須恵器
T21		
T22	土壙	
T23	段状遺構	土師器
T24	古墳周溝　住居　土壙	弥生土器　須恵器

第４図　計画範囲と試掘調査位置図（１/2,500）

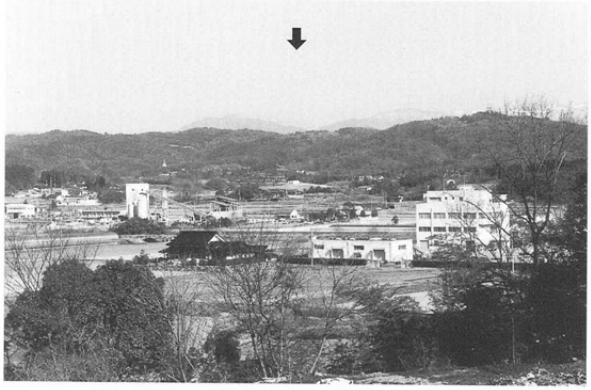
造成計画がかたまった後の平成12年２月15日から３月17日にかけて丘陵全域を対象にトレンチ24本を設定し、調査を行った(第４図)。その結果、まず丘陵北東部のＴ７斜面裾には製鉄炉とみられる遺構やＴ６で住居跡が発見され、周辺に製鉄関連遺構が広がると予想された。また、丘陵南半分全域には古墳の周溝や段状遺構などが発見され、削平された埋没古墳や集落遺跡が広がることが明らかとなった。しかし、Ｔ24など尾根頂上付近は表土すらないほど著しい削平を受けていることも判明した。調査終了後、平成12年４月４日付けで、文化財保護法99条の規定による確認調査の実施報告を県教育委員会宛て提出した。計画が具体化した平成12年８月22日付けで、文化財保護法57条の６（現在の96条）の規定による埋蔵文化財発見通知を県教委宛てに提出し、協議を行った。その後、丘陵全域を造成する当初計画は一部変更され、その当時計画策定されていた高規格道の美作岡山道路の計画地に含まれると予想された丘陵東南部は除外する事業計画となった。これにより遺跡が破壊される丘陵北端尾根上の墳墓状遺構、丘陵北東斜面、丘陵南半部全域あわせて7,400㎡について全面調査を行うこととなった。この変更により丘陵南端の遺跡の一部は保存されることとなった。

第２節　調査の経過と概要

１．発掘調査の経過

全面発掘調査は、まず丘陵北東部斜面の製鉄関連遺跡、北端部の墳墓状遺構から着手した。調査期間は平成12年８月23日～９月30日である。試掘調査によって製鉄炉や住居を確認していたため、尾根

上のＴ１から丘陵斜面Ｔ15～Ｔ23に囲まれた広い範囲の表土掘削を行った。Ｔ23の南側は、造成により窪地となっていることから除外した。結果的に、製鉄炉、段状遺構の他には顕著な遺構は発見されなかったため、製鉄炉周辺にしぼって調査を行った。結果的に調査面積は約800㎡となった。同時に丘陵北端の墳墓状遺構の調査も行なった。調査終了後、別の事業である町文化施設建設に伴う石仏上遺跡の試掘調査を行う計画が入っていることから一旦本調査を中断することとなった。丘陵南半部の調査にとりかかったのは、平成12年12月17日からであった。まず、機械により丘陵全域の表土掘削を行った。人力による本格的な作業を開始したのは、平成13年１月に入ってからである。残存する古墳２基のほか、すでに試掘調査で埋没古墳や住居が発見されていたが予想どおり多くの遺構が検出された。まず、尾根の東斜面側から調査を開始した。丘陵裾付近で段状遺構や土壙を確認したのみで、遺構密度は薄い状況であった。平成13年３月からは尾根頂部～西斜面の調査にとりかかった。しかし、急遽、平成13年４月からの予定で町文化施設である美術館・図書館棟建設に伴う石仏上遺跡の調査を急ぐこととなったことから、南半部の調査は、約９ヶ月間の中断を余儀なくされた。南半部の調査は平成14年１月７日から再開したが、調査区はかなり荒れており、現状復旧に時間を要した。まず尾根の頂上部では近年の造成による削平が著しいかったが、古墳２基分の周溝を検出した。西斜面は、まず北から南へ順次調査を行った。西斜面では多くの段状遺構や土壙墓を検出した。同時に墳丘の残る１号墳と２号墳の墳丘地形測量を行なった。２つの古墳の掘り下げは６月から開始した。この２基は盗掘を受けていたが、良好な状態で主体部が検出された。いずれからも土器や鉄製品などの副葬品が元位置を留めており慎重に調査を実施した。同時並行で西斜面の段状遺構を調査していき、８月にはほぼ遺構の全容が明らかとなったことから、空中写真撮影を行った。８月11日には、現地説明会を開催し、参加者は150名と盛況であった。８月末の調査完了予定を目の前にして、４号墳下層の遺構Ｓ



遺跡遠景（南から）：丘陵上のテント

古墳群調査風景（南から）

現地説明会風景

調査参加者集合写真

50（本報告の段状遺構12）からは予想外に多くの土器群が廃棄された状況で出土し、調査に手間取った。結局、南部の調査は９月９日をもって終了した。

発掘調査方法では、表土を重機で除去後、人力で包含層掘削、遺構の精査、掘削を行った。個別の遺構については半裁、もしくは土層観察用のベルトを残し、実測、写真撮影等の記録を作成した。測量および図面作成は、完掘後の平面図作成を㈲フジテクノに委託して行った。遺物出土状況、土層断面などの個別図は1/20～1/10で作成した。

２．報告書作成の経過

報告書作成は、調査終了後の平成14年10月～平成22年８月の期間で実施した。刊行までに７年半が経過したが、この間、実際には、他遺跡の現地調査等により、作業を実施していない期間も多く、十分な時間が確保できなかった。整理作業では、遺物洗浄、マーキング、接合、復元を行い、可能な限り実測を行った。また、平成21年度には、岡山県ふるさと雇用再生特別基金事業として整理作業員確保を目的に、整理作業の一部を㈲フジテクノに委託して実施した。平成22年度には製図・編集・執筆を行い、平成22年８月に本報告書を刊行した。

第３節　発掘調査・報告書作成の体制

○発掘調査
（平成12～平成14年度）
調査主体　勝央町教育委員会　社会教育課
教育長　岸本耕二　　課　　長　福本浩二　　技術吏員　團　正雄（調査担当）
　　課長補佐　石川寛次　　主 事 補　畝本具功（調査担当）
　　主　　任　竹内祐三

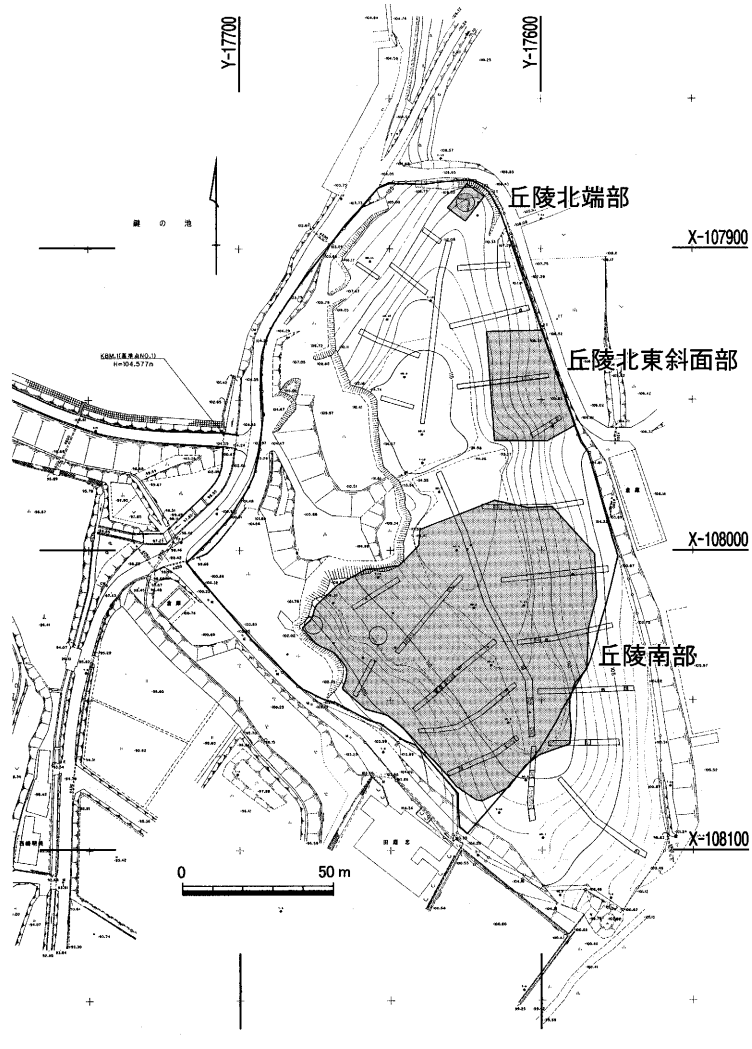
○整理作業
（平成15～平成17年度）
調査主体　勝央町教育委員会　社会教育課
教育長　岸本耕二　　課　　長　福本浩二　　主　　任　竹内祐三
　　課長補佐　石川寛次　　技術吏員　團　正雄（調査・整理担当）
（平成18年度）
調査主体　勝央町教育委員会　教育振興部
教育長　岸本耕二　　総括参事　三石和廣　　主　　査　竹内祐三
　　参 事 補　小村勝彦　　技術吏員　團　正雄（調査・整理担当）
（平成19年度）
調査主体　勝央町教育委員会　教育振興部
教育長　岸本耕二　　総括参事　三石和廣　　主　　査　竹内祐三
　　参　　事　小村勝彦　　技術吏員　團　正雄（調査・整理担当）
　　参 事 補　植月　弘
（平成20年度）
調査主体　勝央町教育委員会　教育振興部
教育長　岸本耕二　　総括参事　三石和廣　　主　　査　竹内祐三
　　参　　事　小村勝彦　　技術吏員　團　正雄（調査・整理担当）
　　参 事 補　厨子一久
（平成21年度）
調査主体　勝央町教育委員会　教育振興部
教育長　竹久　保　　総括参事　小村勝彦　　主　　査　竹内祐三
　　参　　事　厨子一久　　技術吏員　團　正雄（調査・整理担当）
（平成22年度）
調査主体　勝央町教育委員会　教育振興部
教育長　竹久　保　　総括参事　厨子一久　　参 事 補　竜門真吾
　　参　　事　佐古昌史　　技術吏員　團　正雄（調査・整理担当）
（発掘調査作業員・整理作業員：順不同）
島津洋一　影山次郎　竹端鶴松　森本春子　森本あさえ　谷口まさ子　藤木四郎　大沢公治
加藤　清　福田　護　東　　巴　小林るり　前田　恵　竹久直樹　古山雄規　田中元江
竜門　功　竜門玲子　竜門　賢　河上ひろ江　小津野久史　高山淑郎　竹久啓一　古山孝順
山本宗昭　野上伸子　山本紀子　小坂田のり子　横部圭美　忠政さつき

第３章　発掘調査の成果

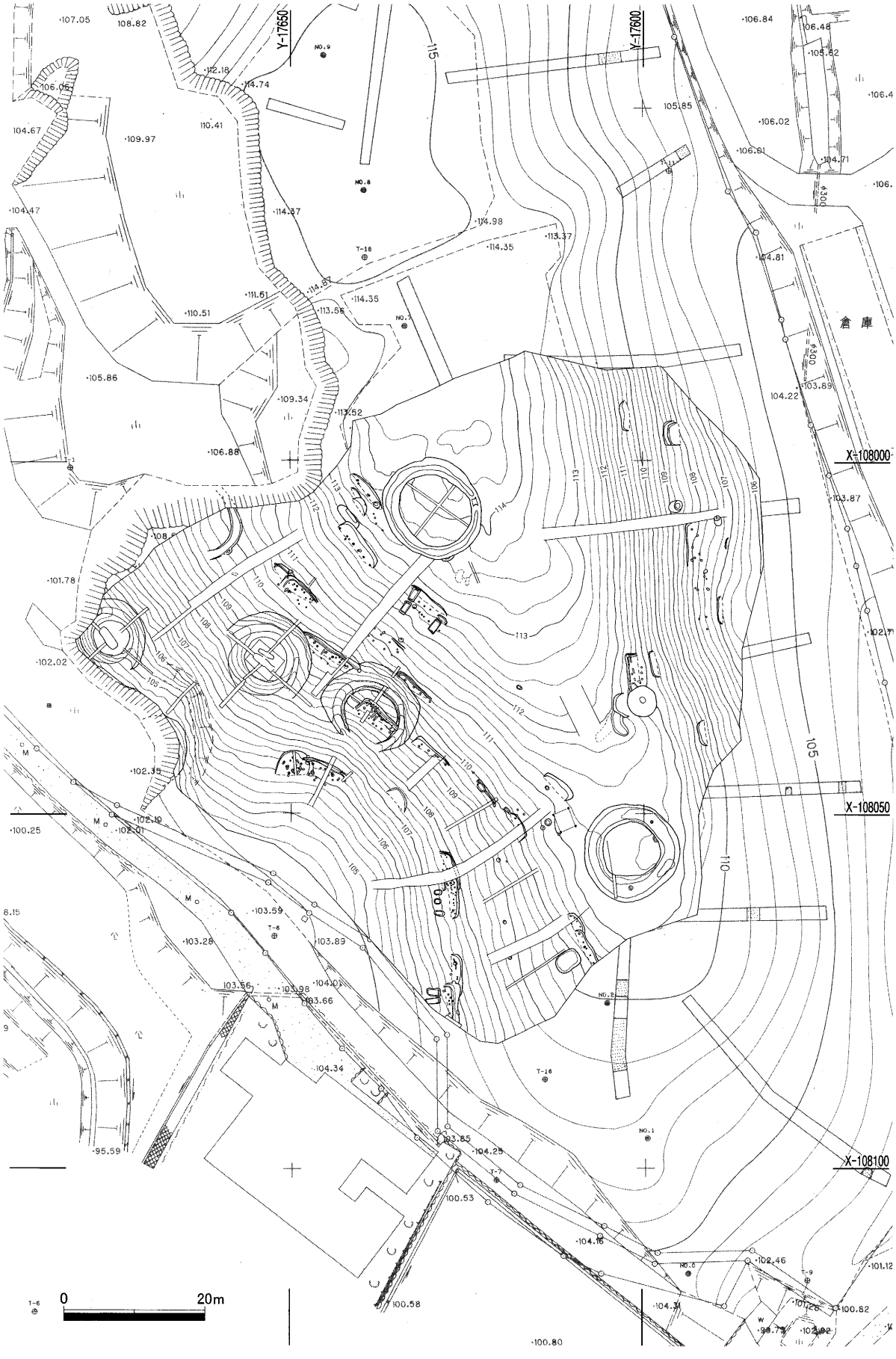
第１節　遺跡の立地と調査区の概要

小池谷遺跡・小池谷古墳群は南に張り出した丘陵上にあり、平野を見下ろせる眺望の良い場所に立地している。丘陵尾根の頂上は標高116mで、幅は広くないものの比較的平坦である。平野からは裏手となる東斜面はやや傾斜がきついが、平野に面する西斜面側は比較的緩やかな傾斜となっている。直近の水田との比高差は頂上において20m、斜面下方では10mほどしかなく、小高い丘といった状況である。本調査の対象は、墳丘の残る古墳２基と墳墓１基のほか、確認調査により発見された丘陵の北東斜面の裾に広がる製鉄遺構、古墳の周溝や弥生時代の段状遺構など多く遺構が発見された丘陵南部全域となり、合計7,400㎡の全面調査となった（第５図）。丘陵の頂上付近は、近年の乱開発による地形改変が著しい場所であったが、調査の結果、尾根上に遺構分布はほとんどなく、大きく削平された状況であった。削平範囲も斜面中腹にまでおよび、全体的に遺構の残り具合はよくなかったが、多くの遺構が検出された。全体で検出された遺構は、北東斜面部で製鉄炉１基と段状遺構６基、南部では弥生時代を中心とする段状遺構35基、土壙墓９基、土壙７基、古墳時代では古墳２基、周溝５基である（第６図）。丘陵の地山は黄褐色粘砂質土、赤褐色の風化岩層などで構成される。弥生時代の遺構埋土は褐色系の砂質土で構成され、炭や土器小片が混じるのが特徴である。

以下、丘陵南部の弥生時代を中心とする集落遺跡を第２節、古墳群に関係するものを第３節、丘陵北東斜面裾の製鉄関連遺構を第４節、丘陵北端の墳墓状遺構を第５節に分けて扱うこととする。以下、遺構・遺物の概要について述べる。



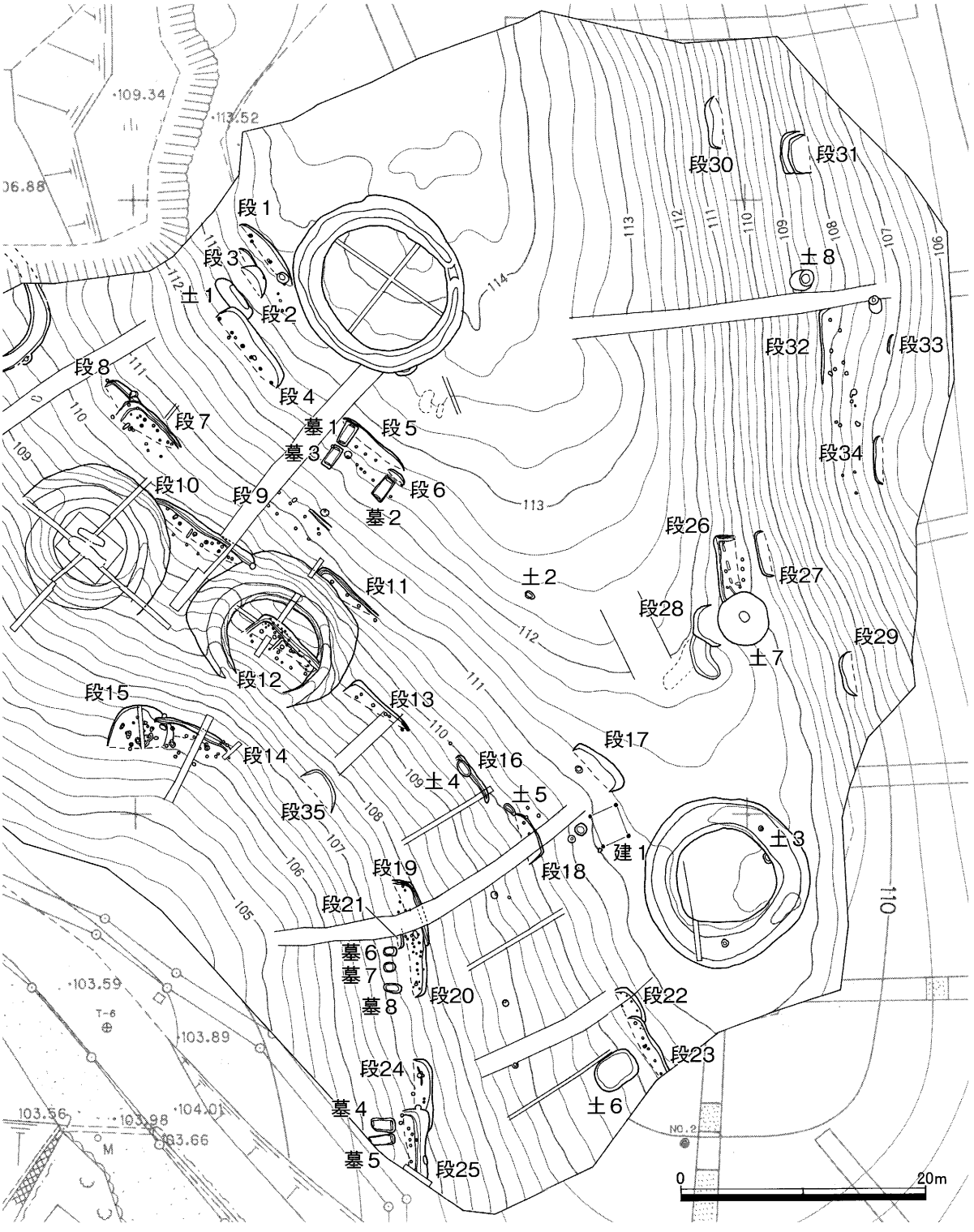
第５図　調査範囲図（1/2,500）



第６図　丘陵南部遺構全体図（1/800）

第２節　丘陵南部の遺構・遺物

本節では古墳以外の遺構を扱う。遺構は平坦な尾根頂部から緩やかな傾斜を持つ南西斜面部に大部分の遺構が確認された(第７図)。東斜面はやや急峻のため、わずかに頂部から斜面への変換点や、中腹の緩斜面で確認された。全体的に遺構の残りが悪く、表土直下で遺構が検出されたものが多い。大



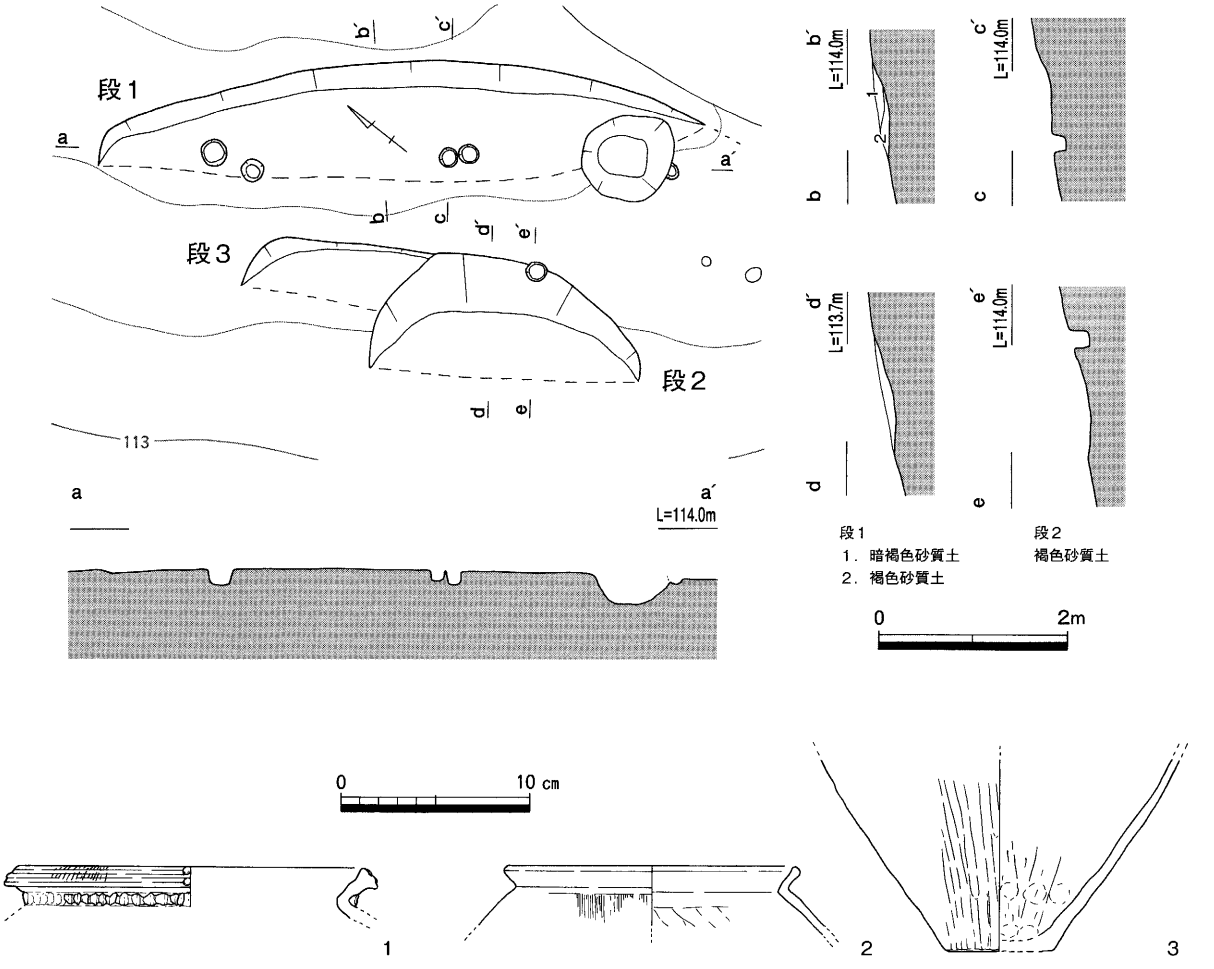
第７図　丘陵南部遺構配置図（古墳以外）（1/500）

部分が弥生時代の遺構である。特に弥生時代中期の遺構として段状遺構25基、土壙墓８基、土壙７基、古代の遺構が１基、その他、土器が出土しない時期不明の遺構も多い。確認された段状遺構については、斜面地を造成して平坦面をつくりだしたもので、本来は柱穴列を伴うものなどが建物跡や住居跡、柱穴を伴わないものは何らかの建物跡や作業場跡というように柱穴などの諸要素の有無によって遺構の性格が異なるものと推定されるが、ここでは分類を行わず一括で扱っており、文中で検討している。

１．段状遺構

段状遺構１（第８図）

標高113.80m付近、尾根頂上から西斜面と変換点で検出された。集落内では最も標高の高い場所にあたる。斜面を造成して平坦面を作りだしており、北端が屈曲することから長方形を呈していたと考えられる。規模は長さ6.7m、残存幅1.3mを測り、西側の平坦面は流失している。床面までの深さは検出面から15cmを測るのみで、表面は後世の削平を受けていた。床面において柱穴が５基確認された。裾から60cm離れた位置で３基の柱が１列に並ぶことから、桁行２間以上の建物跡と考えられる。規模は直径15cm～20cm、柱間は2.5mを測る。遺物は埋土中から土器小片が多く出土している。図化できたものに、弥生土器の壺**１**、甕**２・３**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。



第８図　段状遺構１～３（1/80）・段状遺構１出土遺物（1/4）

段状遺構２（第８図）

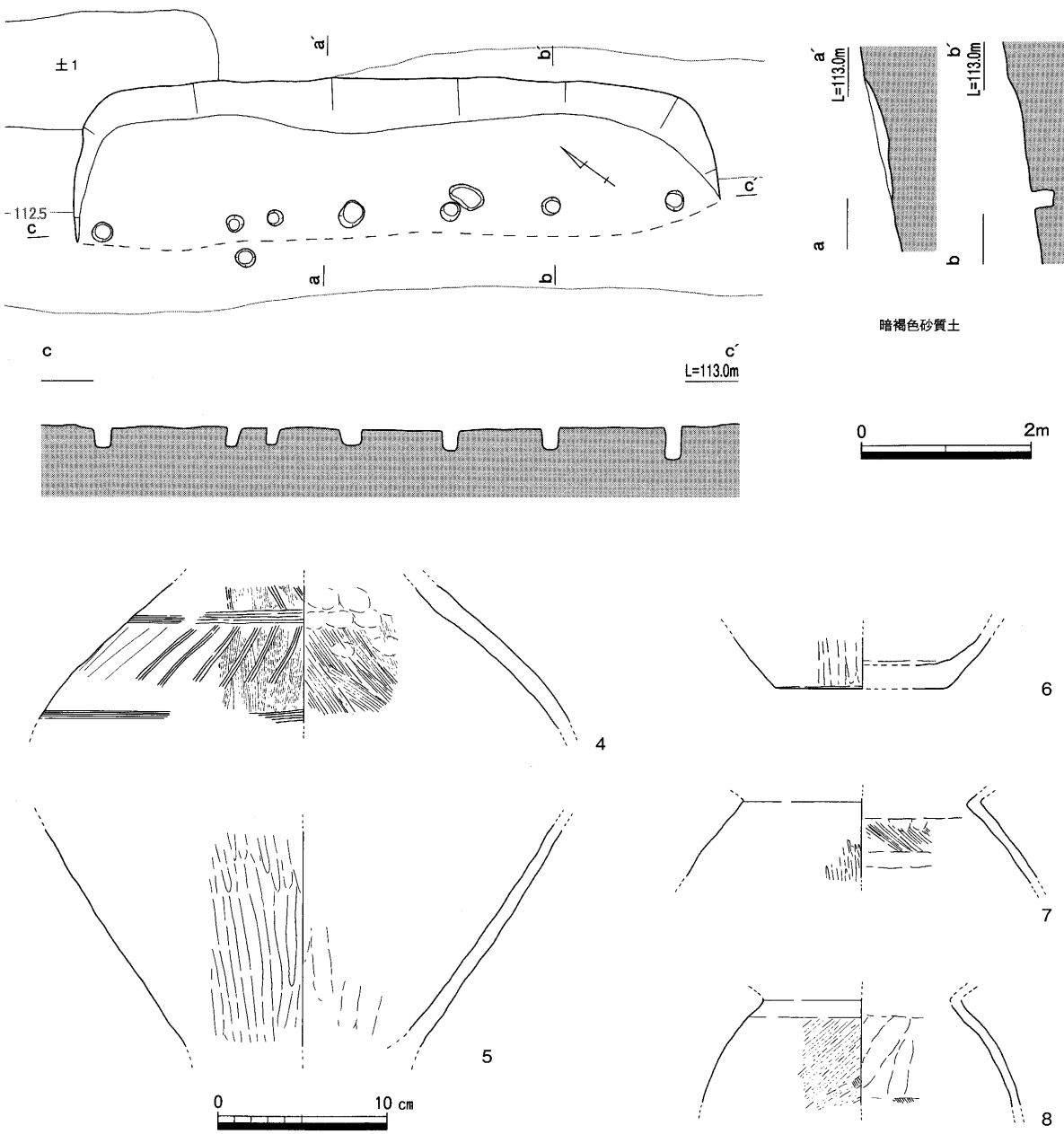
標高113.40m付近で検出された。段状遺構１の西に接し、段状遺構３と切りあう。平面は半円形を呈し、長さは2.8m、残存幅は1.4mである。床面までの深さは検出面から10cmを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

段状遺構３（第８図）

標高113.40m付近で検出された。段状遺構３と切りあう。長さは1.8m、残存幅は0.7mである。床面までの深さは検出面から10cmを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

段状遺構４（第９図）

標高112.80m付近、尾根頂上から西斜面との変換点で検出された。段状遺構１から西に５mの位置で、土壙１を切っている。付近は比較的緩斜面である。斜面を造成して平坦面を作りだしており、平

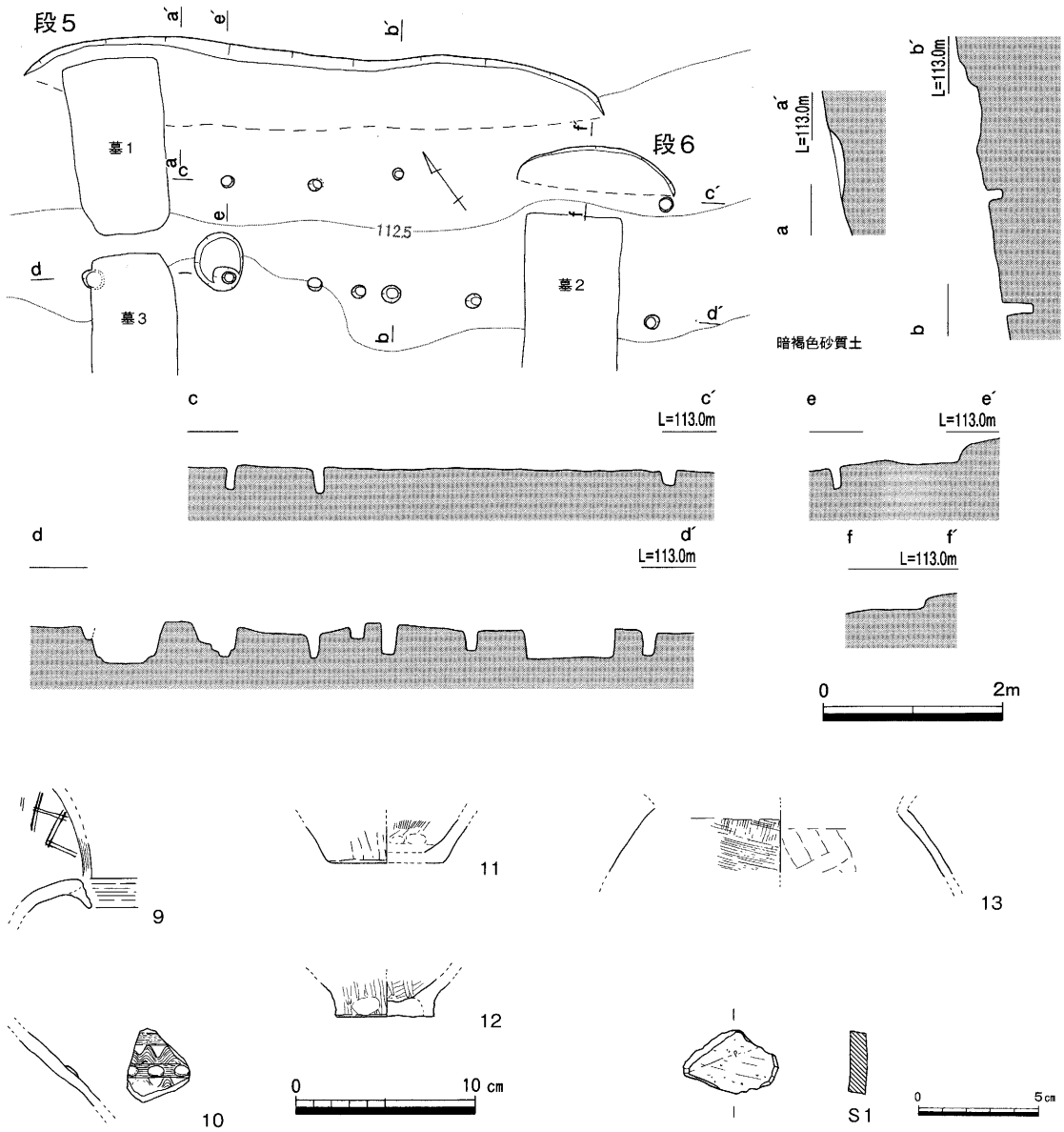


第９図　段状遺構４（1/80）・出土遺物（1/4）

面は長方形を呈する。規模は長さ7.6m、幅2.0mを測り、西側の平坦面は流失している。床面までの深さは検出面から10cmを測り、水平である。床面において柱穴が９基確認された。柱穴は裾から1.2m離れた位置で６基の柱が１列に並ぶ状況が確認でき、同一のものであれば桁行5間の建物跡と考えられる。柱の直径20cm、柱間は1.2mを測る。遺物は埋土中から土器小片が多く出土している。図化できたものに、弥生土器の壺**４～６**、甕**７・８**がある。壺**４**は外面に櫛による直線文と３条１対の斜線文を施す。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構５（第10図）

標高113.00m付近、尾根頂上から西斜面との変換点で検出された。重複するように段状遺構６、土壙墓１～３が存在している。斜面を造成してわずかに平坦面を作りだしており、規模は長さ6.5m、残存幅0.9mを測る。柱穴の存在から本来の幅は2.7m以上と考えられ、盛土による平坦面は流失したようである。床面までの深さは検出面から20cmを測るのみで、削平を受けている。床面から柱穴が１５基確認された。柱穴は裾から1.2m離れた位置で３基が１列、さらに１m離れた位置では６基の柱



第10図　段状遺構５・６（1/80）・段状遺構５出土遺物（1/4・1/3）

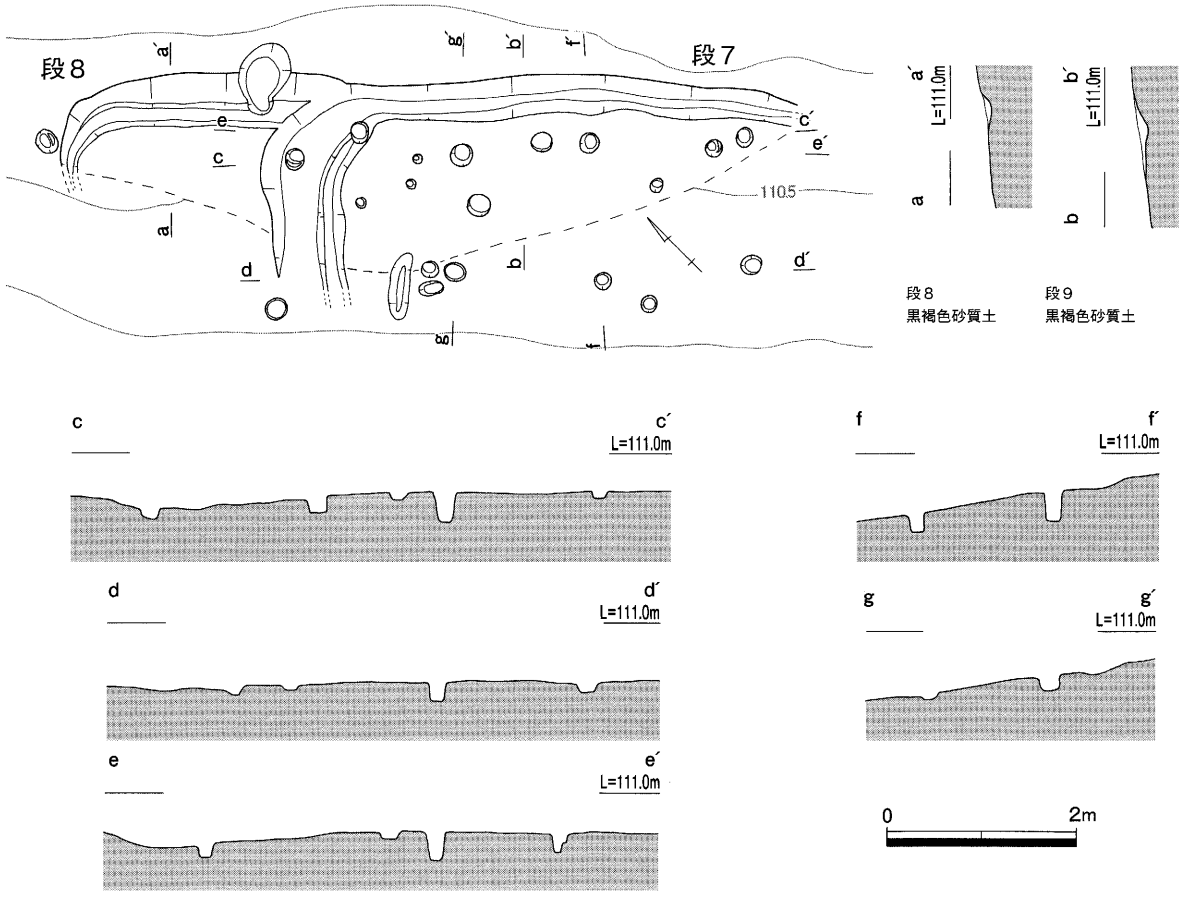
が並んでいる。規模は不明ながら建物跡と考えられる。柱穴の直径20cm、柱間は1.7m～2.0mを測る。遺物は埋土中から土器小片が出土している。図化できたものに、弥生土器の壺**９・10**、甕**11～13**の他、砥石**Ｓ１**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構６（第10図）

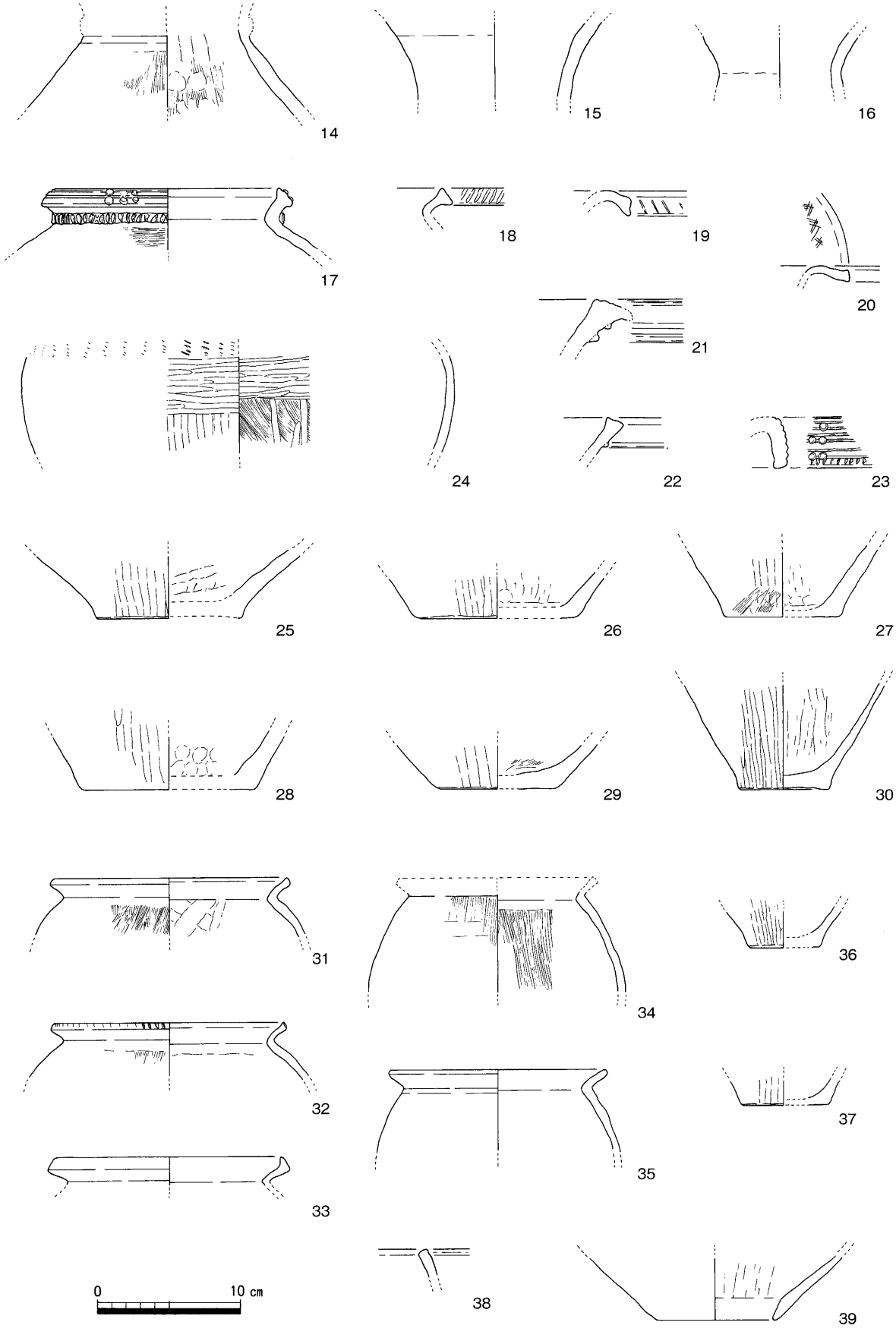
調査区の東斜面、標高112.80m付近の斜面で検出された段状遺構である。段状遺構５の南端に接する。平面は楕円形を呈し、長さは1.8m、残存幅は0.5mである。床面までの深さは検出面から10cmを測る。出土遺物はないものの、時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構７（第11・12図）

標高110.80m付近、西斜面中腹で検出された。付近は比較的緩斜面であり、これより西には傾斜がきつくなる変換点となっている。北側は段状遺構８と切りあう。斜面をわずかに造成して平坦面を作りだしており、平面は長方形を呈する。規模は長さ5.7m、残存幅2.6mを測る。柱穴の存在から本来幅はさらに大きいと考えられる。床面までの深さは検出面から５cmを測るのみで、削平を受けている。周壁溝が山側と北側で確認され、さらに内側にも見られることから１回の拡張が認められる。柱穴は裾から30cm離れた位置で３基の柱が２列並んでおり、２間×１間の建物跡と考えられる。その他の柱穴はまとまらなかった。柱穴は直径20cm前後で、柱間は1.3mを測る。遺物は埋土中、床面付近で多くの土器が出土している。後述する段状遺構８と接する位置にまとまっており、両者の遺物が接合することからここでは一括して掲載している。図化できたものに、弥生土器の壺**14～30**、甕**31～**



第11図　段状遺構７・８（1/80）



第12図　段状遺構７・８出土遺物（1/4）

37、鉢**38**、器種不明**39**がある。**23**は器台の可能性もある。**39**は古墳時代の甑に似ているが、混入の可能性もある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構８（第11図）

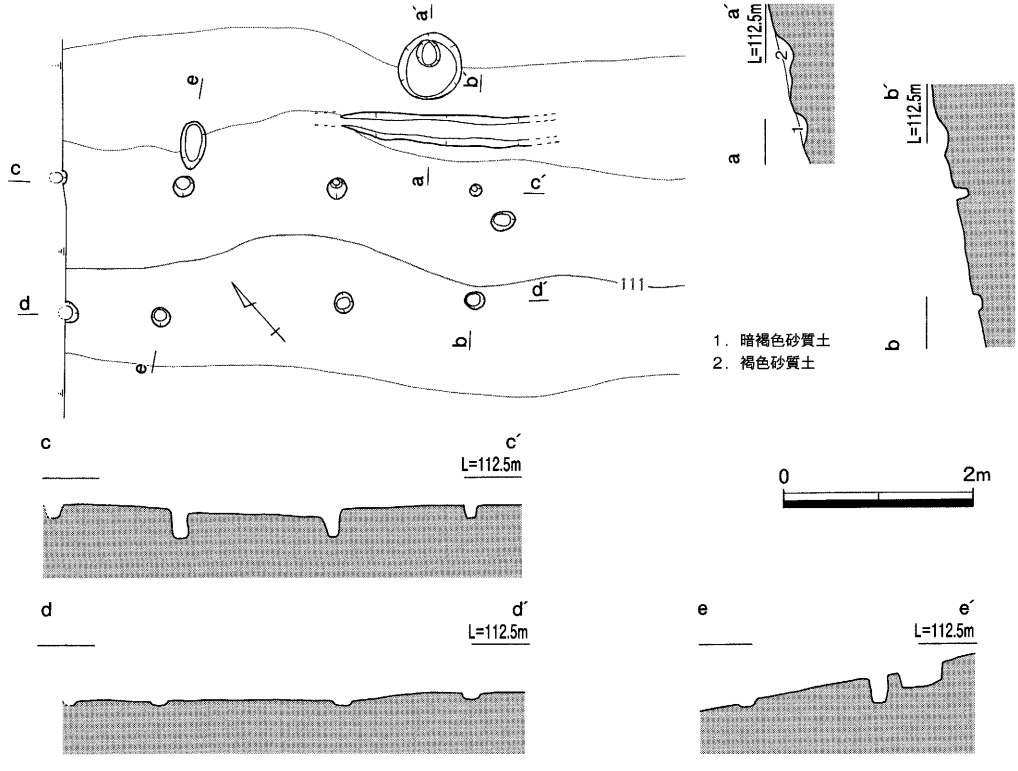
標高110.80m付近で検出された。段状遺構７と切りあう。わずかに斜面を造成しており、周壁溝のみが確認された。長さ2.8m、幅1.0mを測り、床面までの深さは検出面から10cmを測る。床面は、段状遺構７よりわずかに高い。遺物は埋土中より出土しており、段状遺構７と一括して扱っている。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構９（第13図）

標高111.20m付近、西斜面中腹で検出された。段状遺構５の下方８mの位置にある。斜面に並行する溝と柱穴が検出されたのみで、平坦部は削平もしくは流出したと考えられる。溝は残存長2.2m、幅0.3mを測り、周壁溝が残されたものと考えられる。柱穴は溝から40cm離れた位置で４基、さらに1m離れた位置で４基が２列に並んでおり、１間×３間の建物跡と考えられる。規模は直径20cm～30cm、柱間は1.5mを測る。遺物は溝埋土から弥生土器片が出土しているが、図化できるものはなかった。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構10（第14・15図）

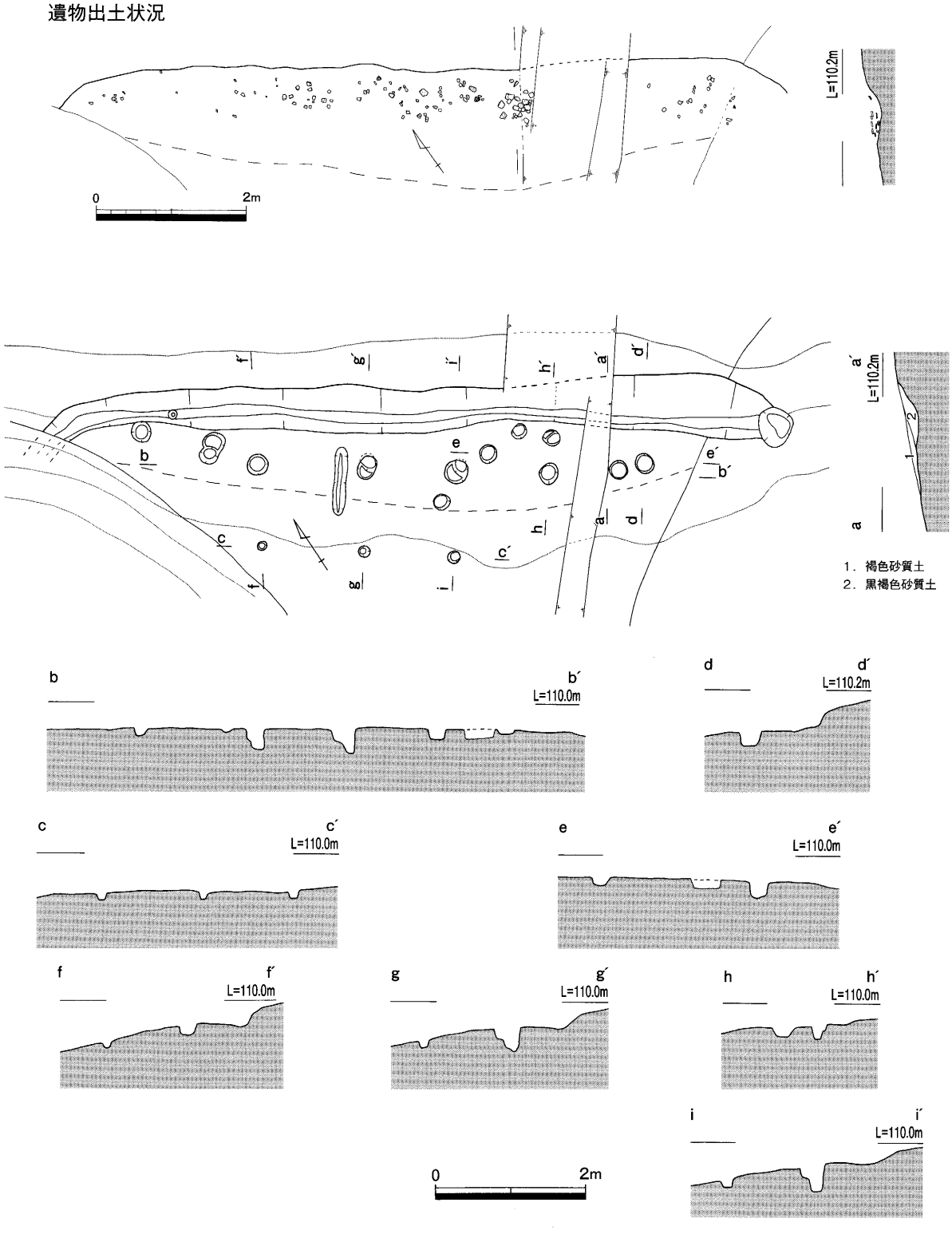
標高110.20m付近、西斜面中腹で検出された。付近は比較的緩斜面であり、これより西には傾斜がきつくなる変換点となっている。斜面を造成してわずかな平坦面を作りだしており、規模は長さ10m、残存幅1.5mを測る。両端は２号墳、４号墳の周溝により削平を受けている。床面までの深さは検出面から20cmを測る。周壁溝は山側に巡る。柱穴の存在から本来の幅は2.2m以上と考えられる。柱穴は多数検出されたが、まとまるものは少ない。裾から70cm離れた位置で４基の柱が１列、さらに



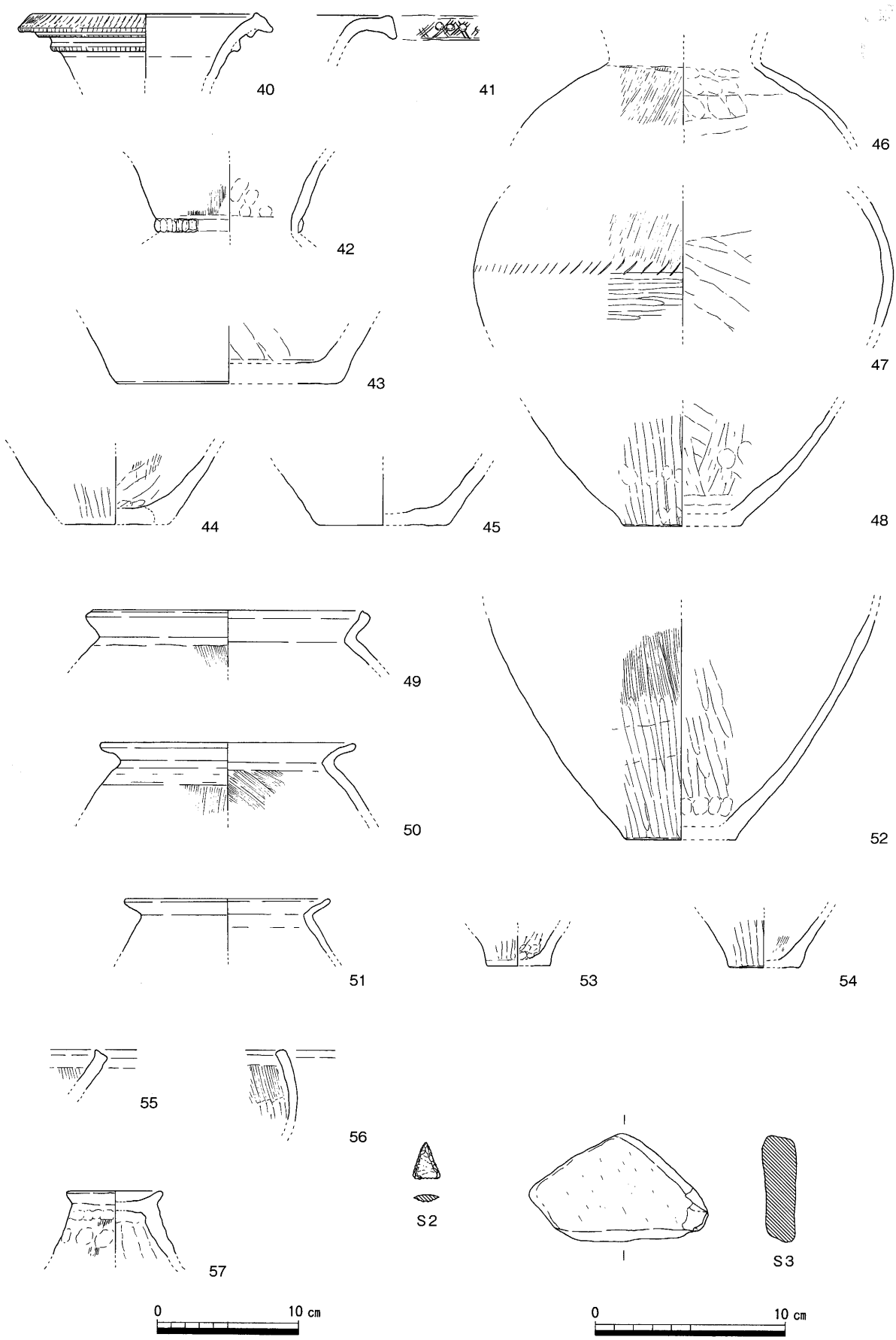
第13図　段状遺構９（1/80）

80cm離れた位置で３基の柱が並んでおり、１間×２間以上の建物跡と考えられる。柱穴の直径30cm～40cm、柱間は2.0mを測る。遺物は埋土中から多くの土器片が出土している。図化できたものに、弥生土器壺**40～49・52**、甕**50・51・53・54**、高杯**55**、鉢**56**、蓋**57**がある。石器では石鏃**Ｓ２**、用途不明製品**Ｓ３**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

遺物出土状況



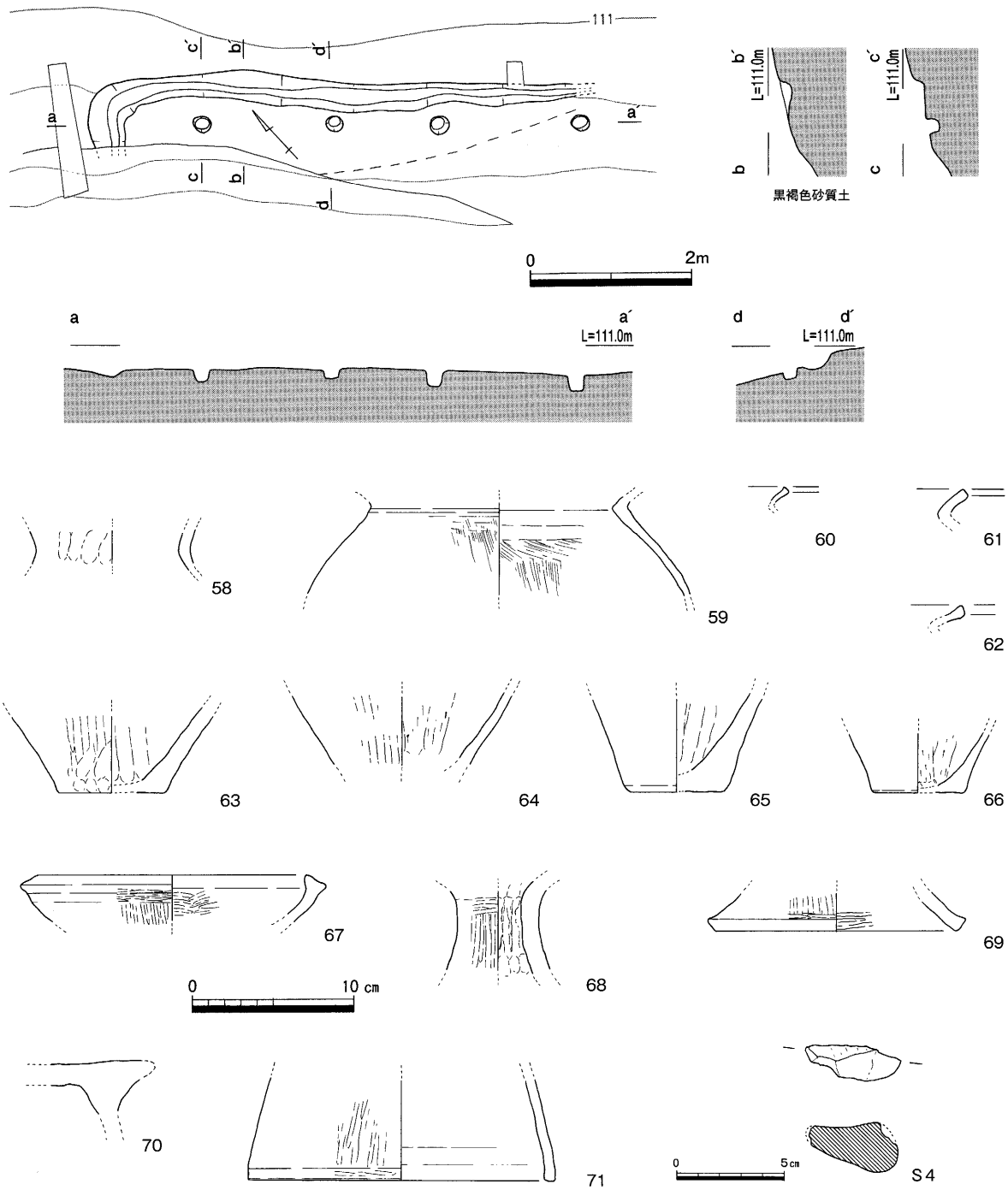
第14図　段状遺構10（1/80）



第15図　段状遺構10出土遺物（1/4・1/3）

段状遺構11（第16図）

標高110.80m付近、西斜面中腹で検出された。付近は比較的斜面であるが、これより西には傾斜がきつくなる変換点となっている。斜面を造成して平坦面を作りだしており、北端が屈曲することから、平面は長方形を呈していたと考えられる。規模は長さ6.2m、残存幅1.2mを測る。西側は４号墳の周溝により削平されている。床面までの深さは検出面から10cmを測るのみで、削平を受けている。周壁溝は山側と北側に巡る。床面から柱穴が確認された。柱穴は裾から40cm離れた位置で４基の柱が１列に並ぶ状況が確認でき、桁行３間以上の建物跡と考えられる。柱穴は直径20cm、柱間は1.3mを測る。遺物は埋土中、床面付近から多くの土器片が出土している。図化できたものに、弥生土器の壺



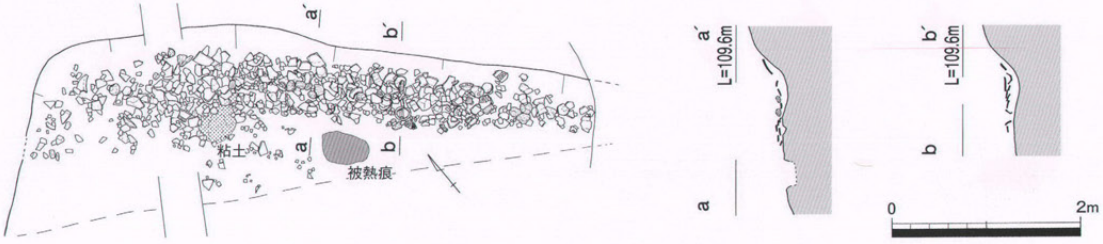
第16図　段状遺構11（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）

58、甕59～66、高杯67～69、台形土器70・71がある。石器では砥石とみられるＳ４が出土している。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構12（第17～26図）

標高109.50m付近、西斜面中腹で検出された。これより西には傾斜が急になる変換点となっている。４号墳の周溝に囲まれた内側に位置し、東側は周溝により削平を受けていた。４号墳の検出段階から、弥生土器の破片が多く出土することが確認されていたが、盛土の下でもあり、全体像は不明であった。４号墳調査後の精査で、段状遺構12の輪郭が検出され、その床面付近に土器層が形成されていることが判明した。丘陵上部からの流入土である暗褐色砂質層を掘り下げた段階で、床一面から重なり合うように大量の土器片が検出された。断面観察からは周壁溝から床面、一部は壁にもたれ掛かるような状況で、５cm程の厚さの土器だまり層が形成されていた。山側から土器の廃棄がなされたとみられ、特に中央から東側で密度が高い状況が観察できた。これらの状況からは、段状遺構12廃絶後すぐに土器の廃棄場として利用されたと考えられ、短期間で埋没したようである。

段状遺構12は、斜面を造成して平坦面を作りだしており、西端が屈曲することから平面は長方形を



第17図　段状遺構12遺物出土状況（1/80）

段状遺構12遺物出土状況１（東から）

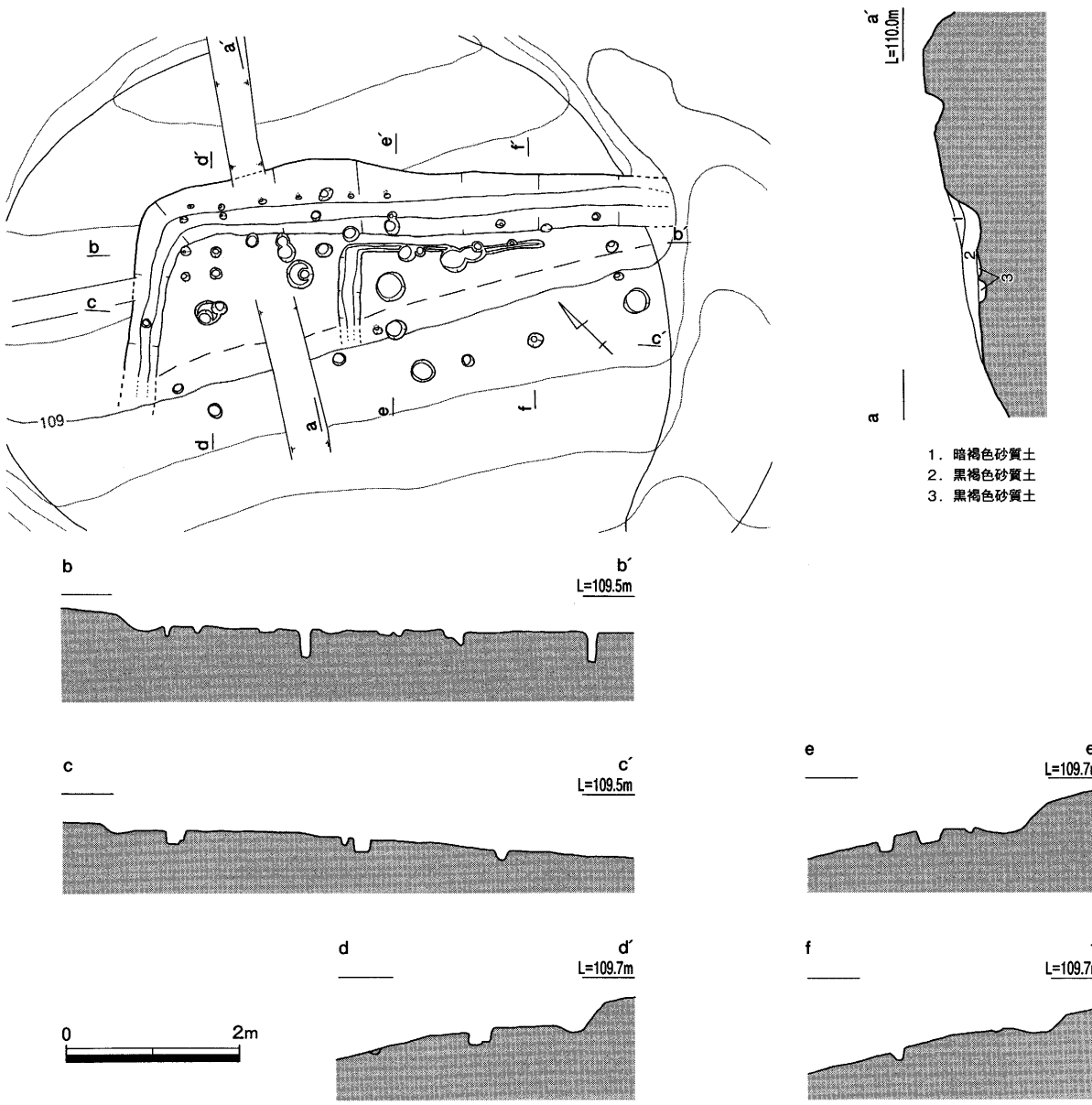
段状遺構12遺物出土状況２（西から）

段状遺構12遺物出土状況３（北から）

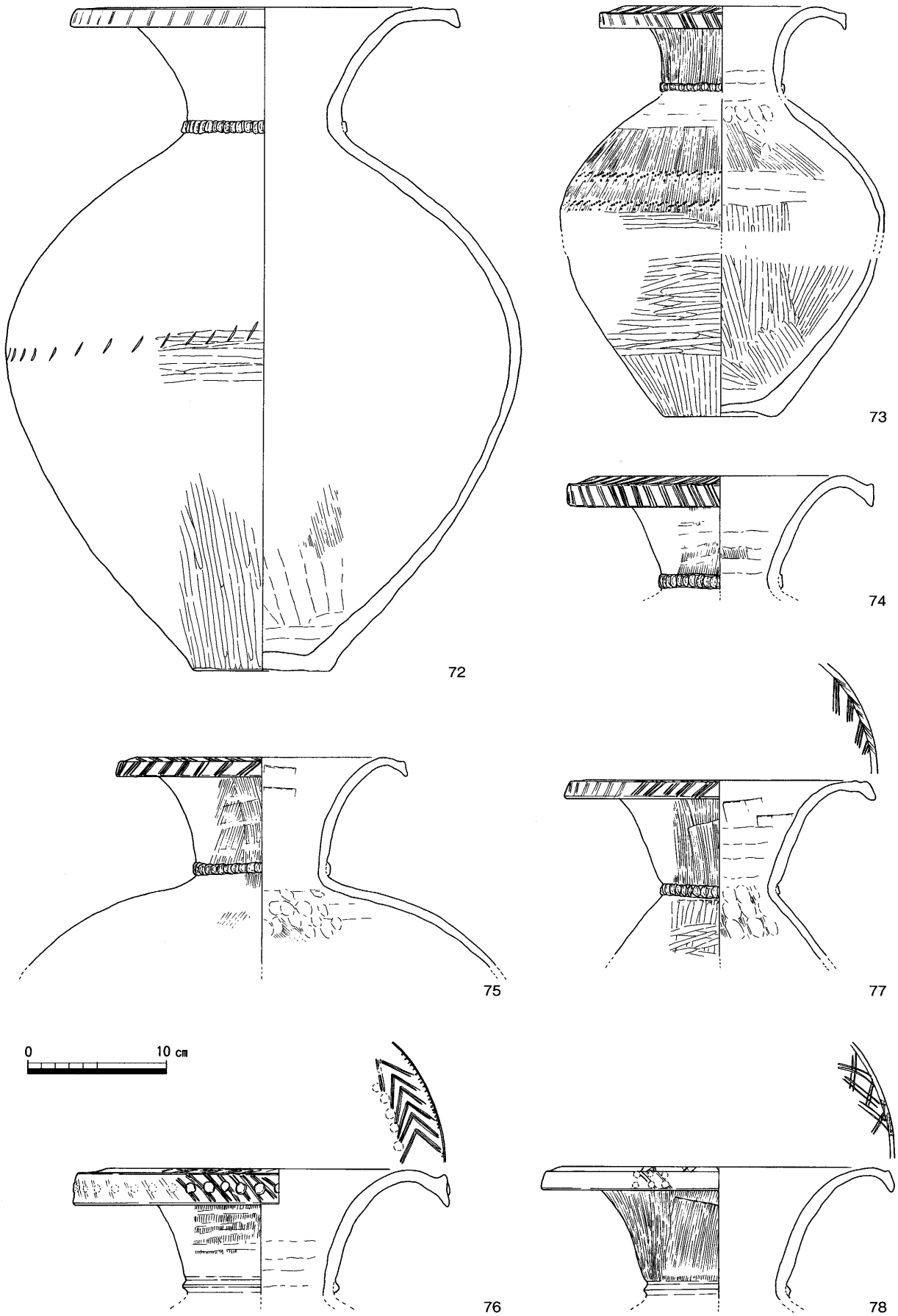
段状遺構12粘土塊検出状況（西から）

呈していたと考えられる。規模は残存長６ｍ、残存幅2.5ｍを測る。東端は４号墳の周溝により削平されており、本来の幅も柱穴の存在から2.8ｍ以上と考えられる。床面までの深さは検出面から30cmを測る。周壁溝は山側と西側に巡っている。柱穴は多数検出されたが、まとまるものは少ない。わずかに裾から１ｍ離れた位置で３基の柱穴が１列に並ぶことから、桁行２間以上の建物跡と考えられる。柱穴は直径20cm～30cm、柱間は2.0ｍを測る。また、床面において周壁溝に沿うように並ぶ直径10cm程の５基の小ピットや、周壁溝内の山側の壁に向けて打ち込んだような杭の痕跡が７箇所確認できた。その他、周壁溝に添うように仕切り溝が検出された。長さ２ｍ延びて西側が屈曲し、南に80cm延びる。

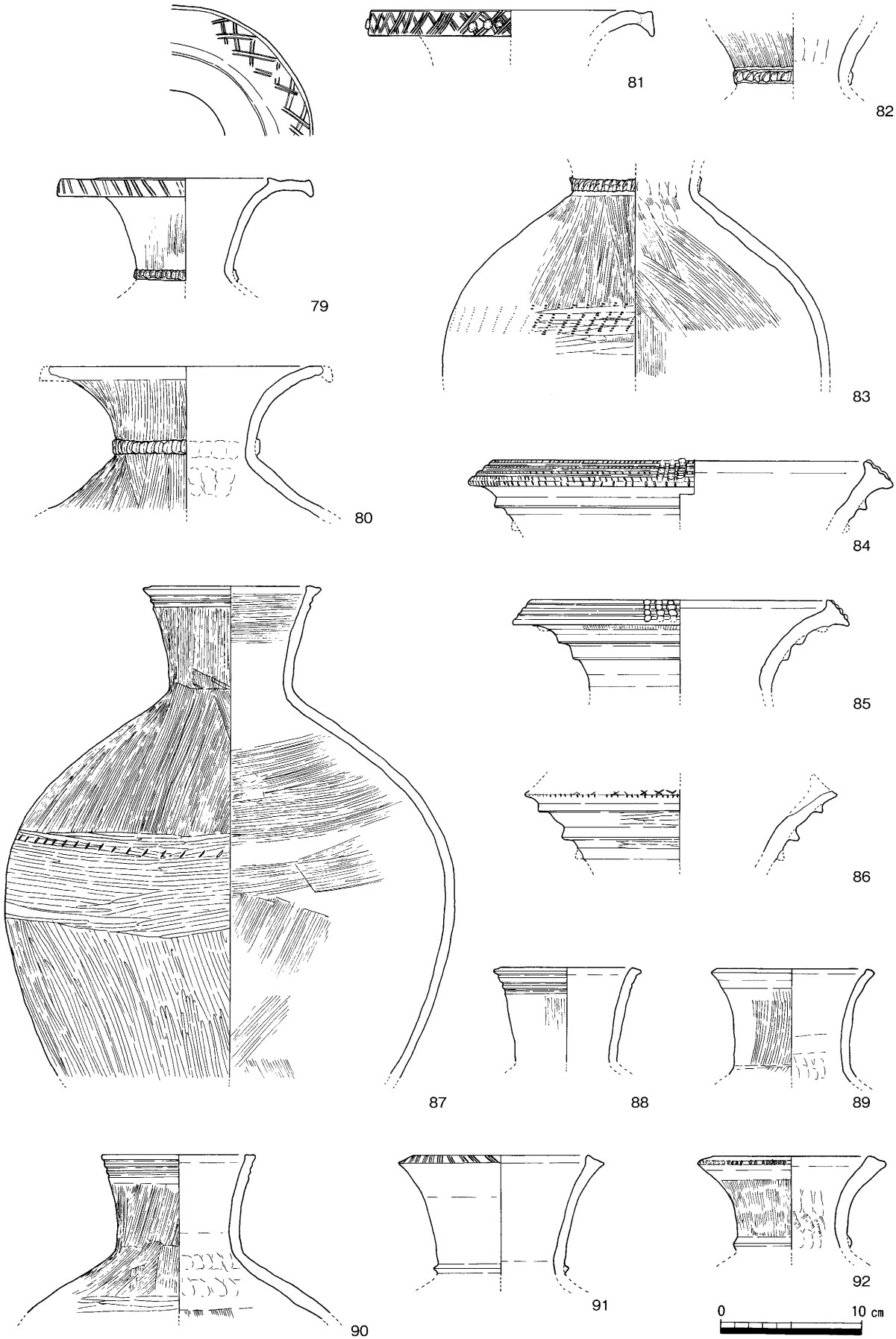
出土遺物は土器層を形成していたもので、非常に一括性が高い良好な資料と考えられる。可能な限り図化したが、接合できなかった体部破片も多く存在し、全形のわかるものは少なかった。弥生土器の壺**72～121**、甕**122～157**、鉢**158～160**、高杯**161～166**、蓋**167～169**、器台**170**、台形土器**171**・



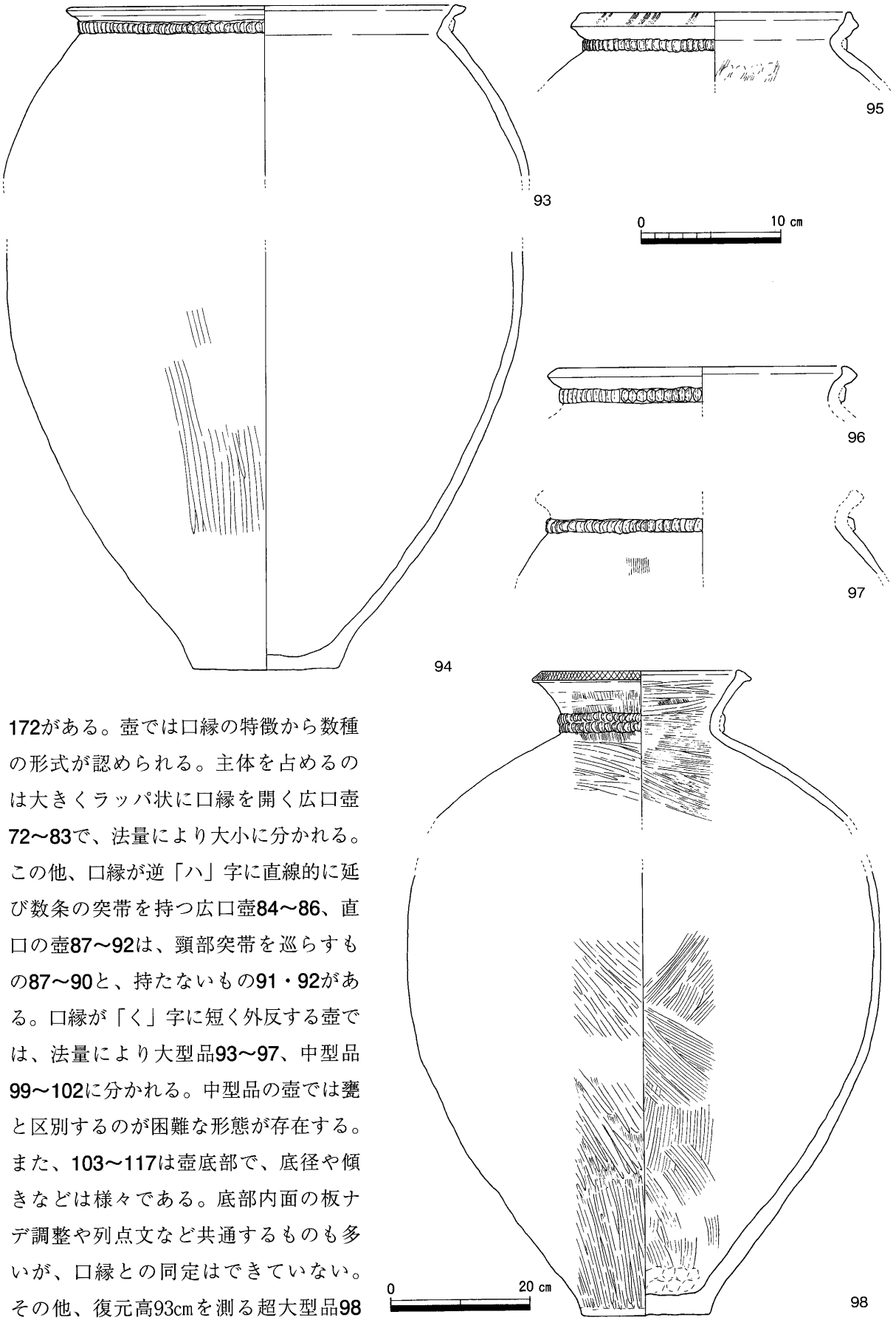
第18図　段状遺構12（1/80）



第19図　段状遺構12出土遺物（１）（1/4）

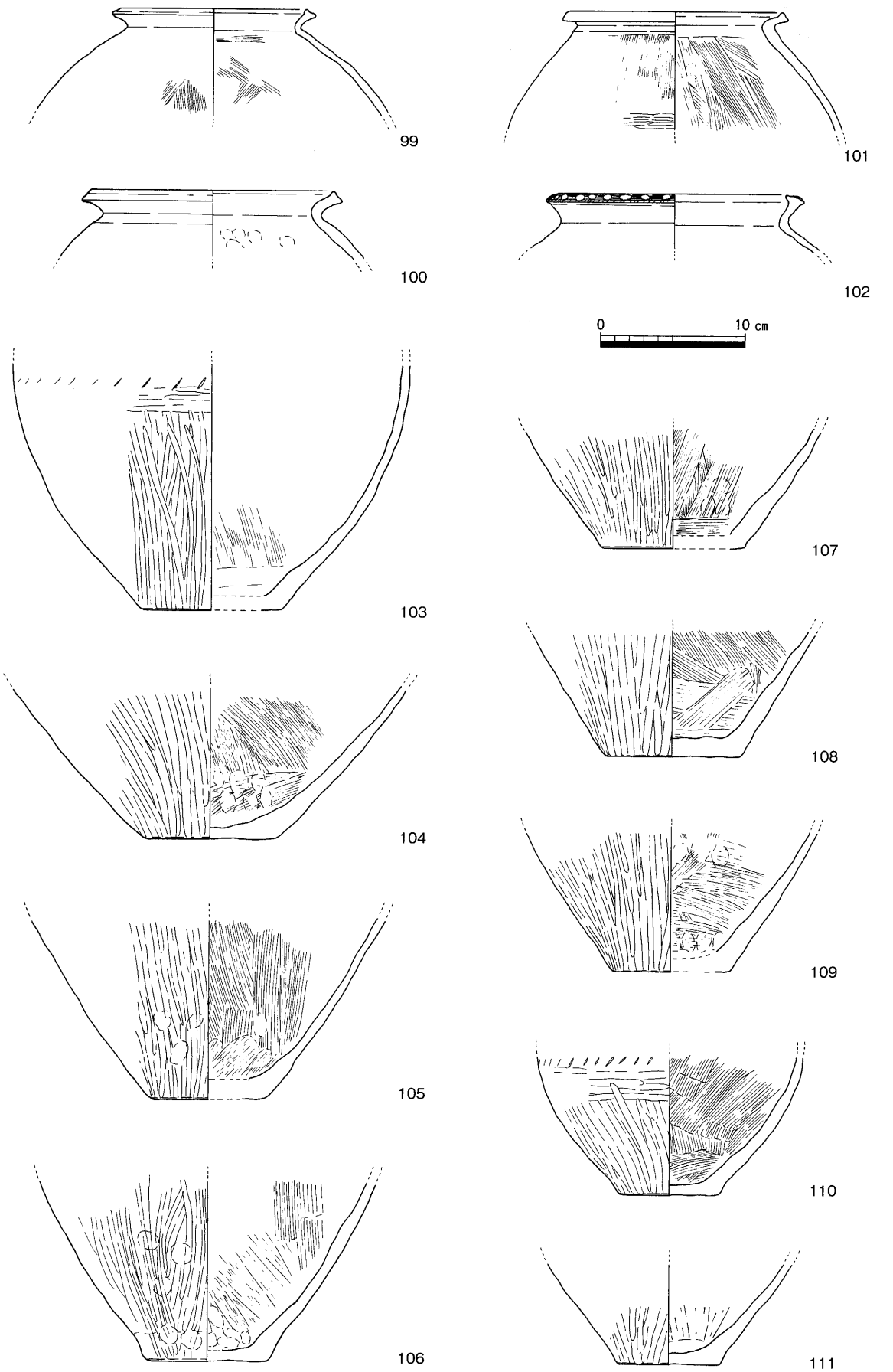


第20図　段状遺構12出土遺物（２）（1/4）

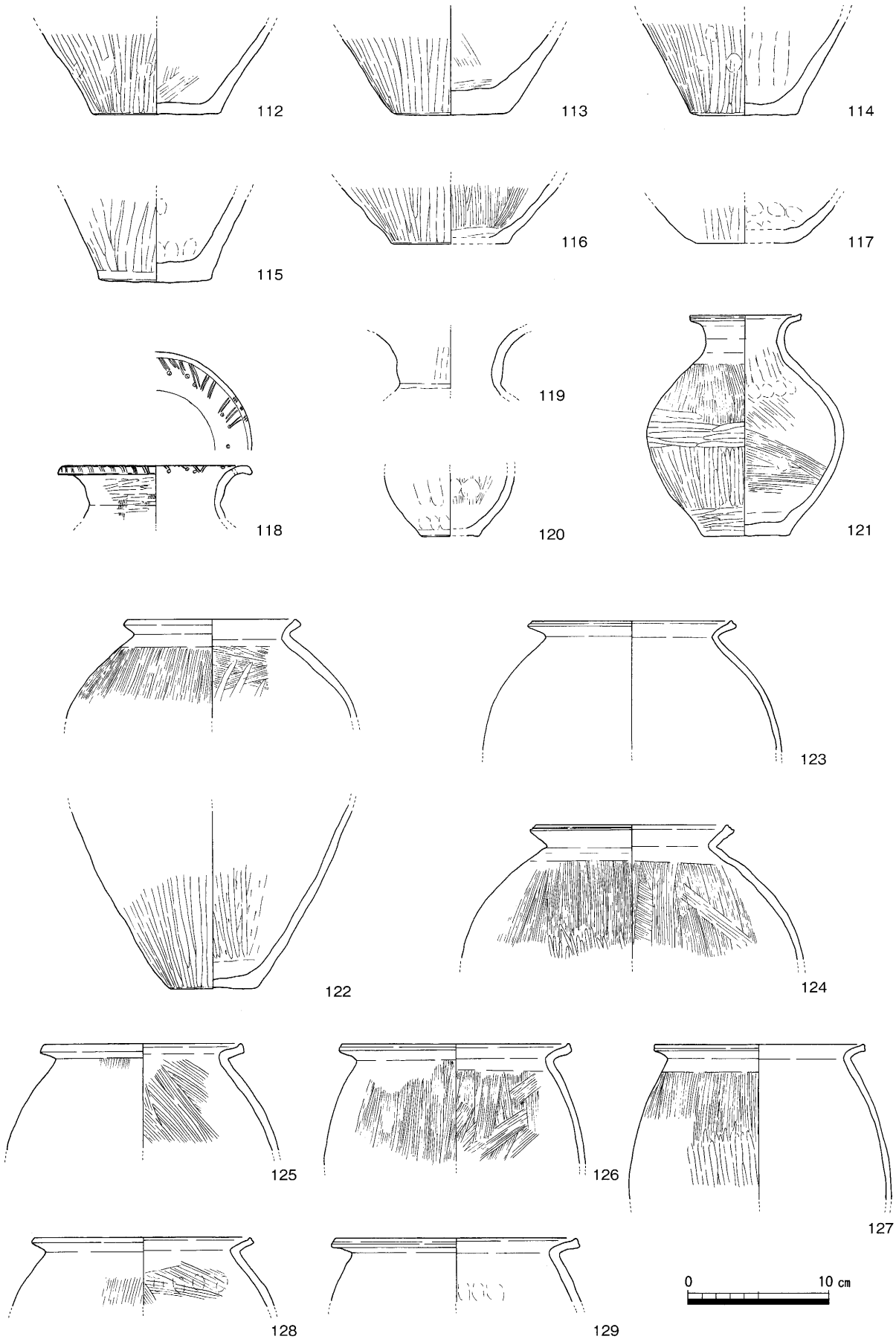


第21図　段状遺構12出土遺物（３）（1/4・1/8）

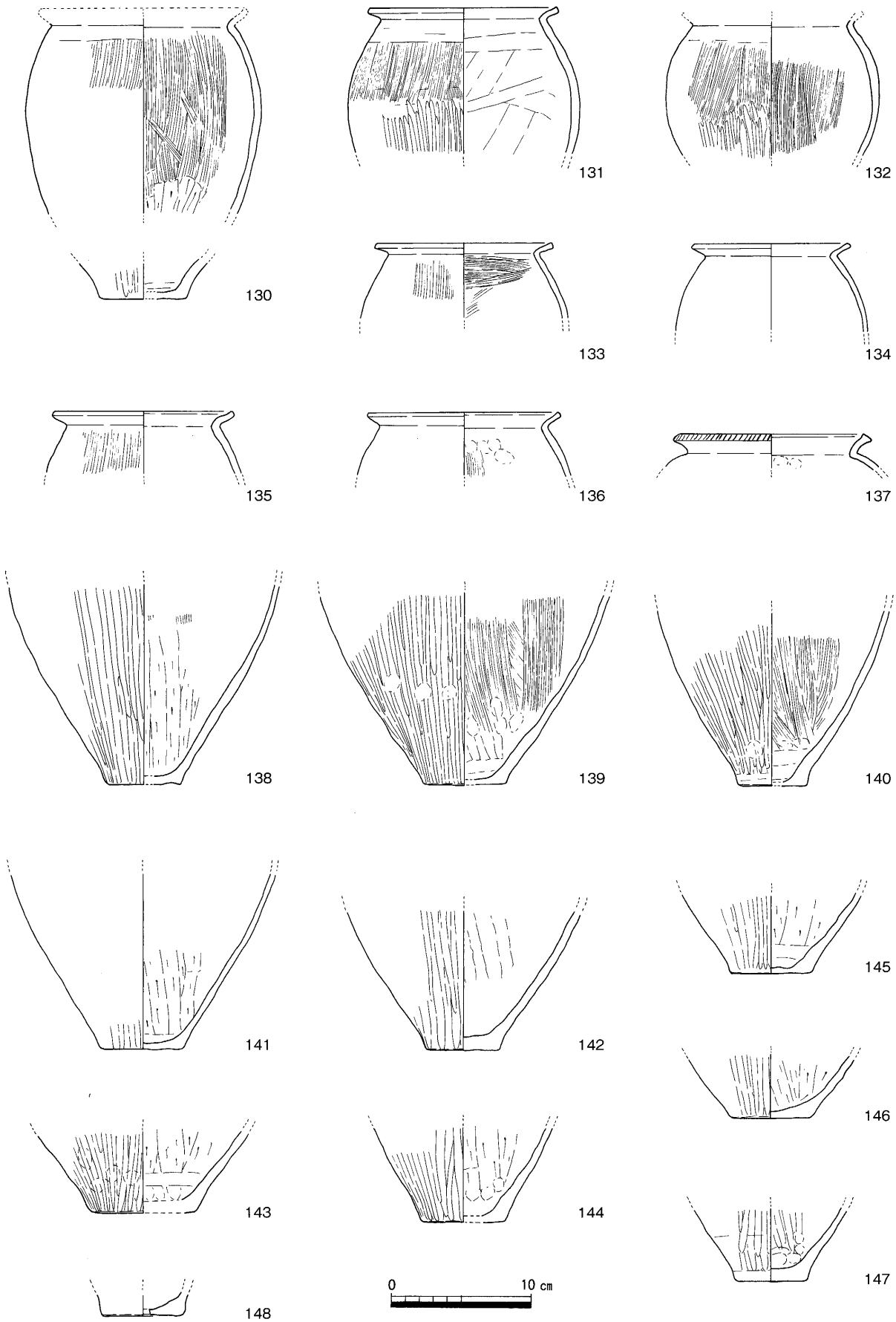
172がある。壺では口縁の特徴から数種の形式が認められる。主体を占めるのは大きくラッパ状に口縁を開く広口壺72～83で、法量により大小に分かれる。この他、口縁が逆「ハ」字に直線的に延び数条の突帯を持つ広口壺84～86、直口の壺87～92は、頸部突帯を巡らすもの87～90と、持たないもの91・92がある。口縁が「く」字に短く外反する壺では、法量により大型品93～97、中型品99～102に分かれる。中型品の壺では甕と区別するのが困難な形態が存在する。また、103～117は壺底部で、底径や傾きなどは様々である。底部内面の板ナデ調整や列点文など共通するものも多いが、口縁との同定はできていない。その他、復元高93cmを測る超大型品98や小型壺118～121に分けられる。また、



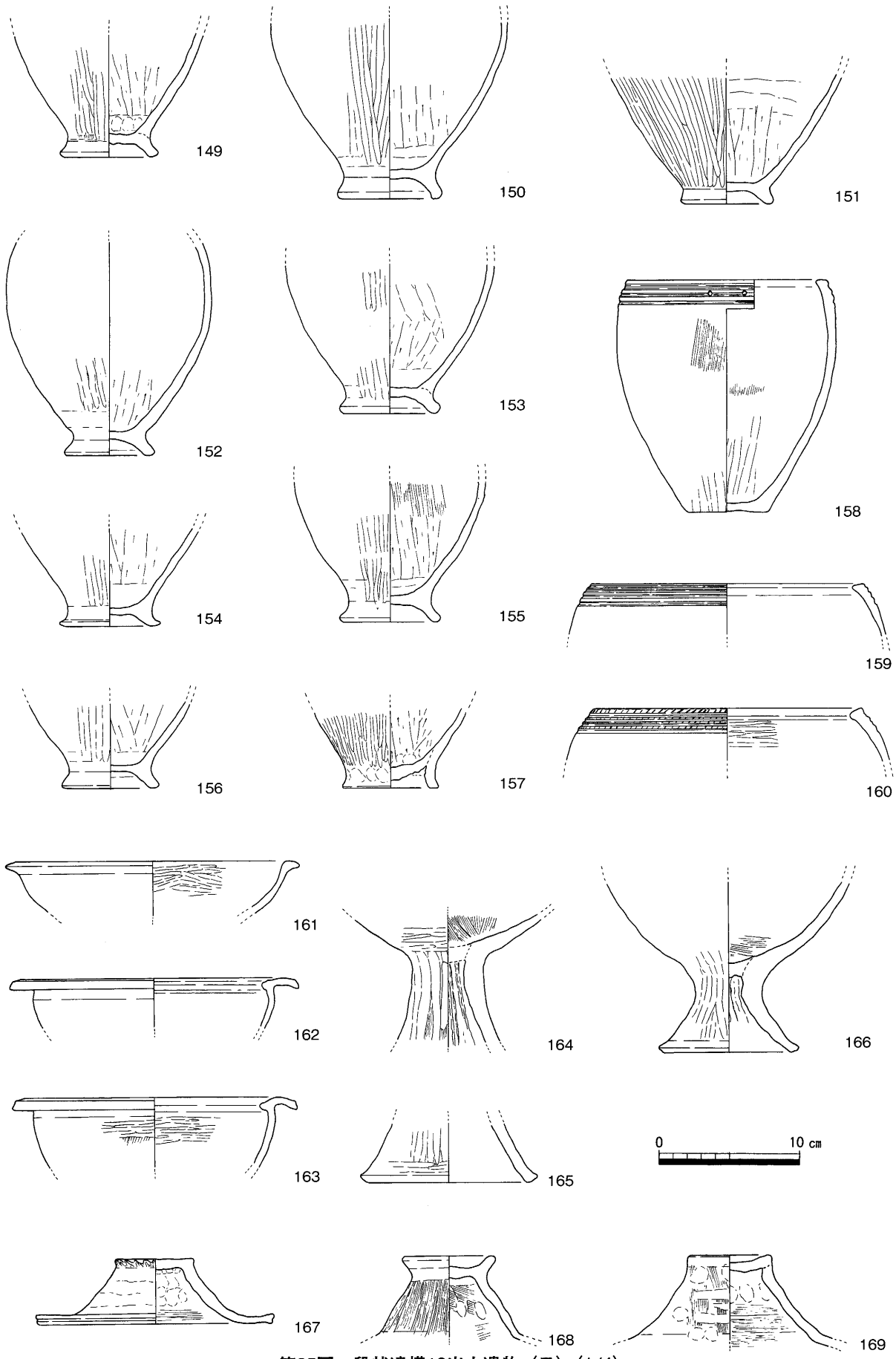
第22図　段状遺構12出土遺物（４）（1/4）



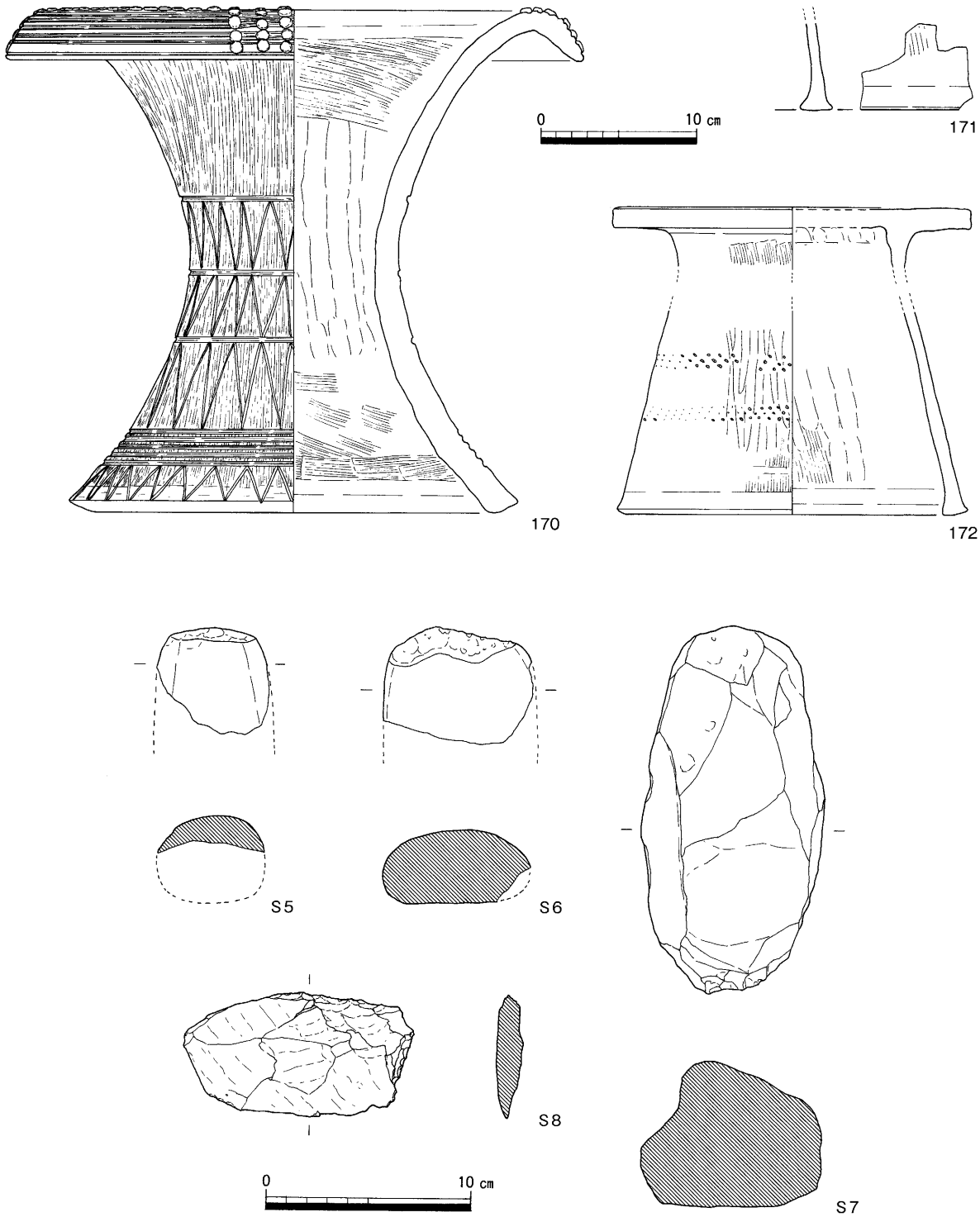
第23図　段状遺構12出土遺物（５）（1/4）



第24図　段状遺構12出土遺物（６）（1/4）



第25図　段状遺構12出土遺物（７）（1/4）



第26図　段状遺構12出土遺物（８）（1/4・1/3）

甕では法量により中型品で胴の張るもの**122～124**とそうでないもの**125～129**のほか、小型品**130～137**があり、底部は**138～147**が中型、高台をもつ**149～157**が小型に対応すると考えられる。中には、底部を穿孔した甕**148**も存在する。鉢では、小型品**158**と中型品**159・160**、高杯では口縁が外へ拡張されるもの**161**、水平口縁を有するもの**162・163**がある。この他、石器では磨製石斧**Ｓ５・Ｓ６**、叩き石**Ｓ７**、未製品と考えられる石包丁**Ｓ８**がある。土器群の詳細については『第４章　まとめ　１節』

において検討する。

段状遺構13（第27図）

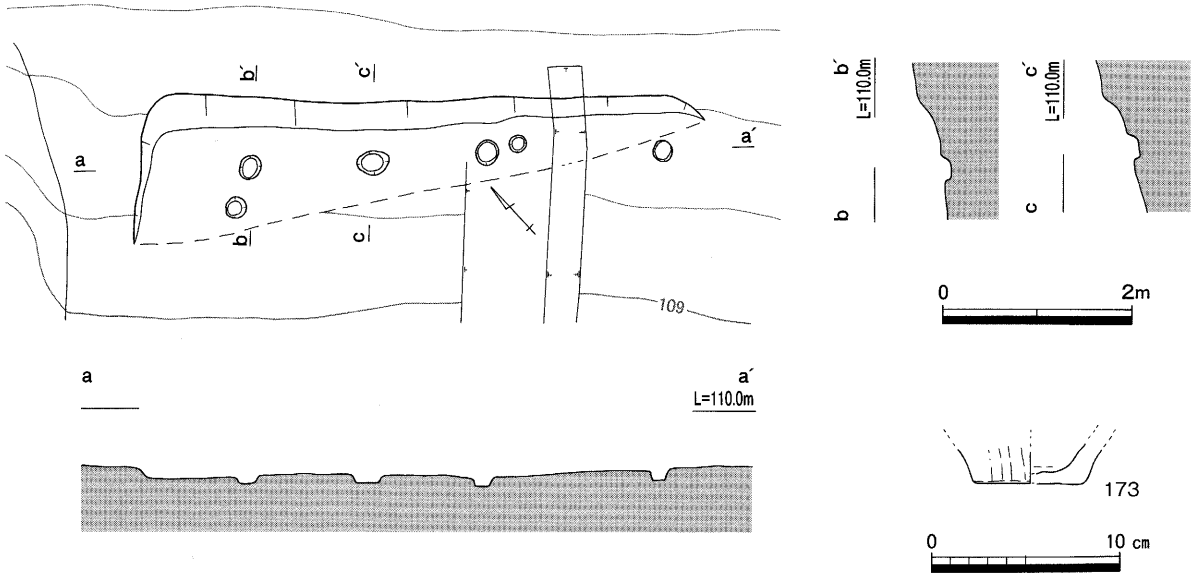
標高109.50m付近、西斜面中腹で検出された。段状遺構12から東に４mの位置にあり、付近の傾斜はややきつい。斜面を造成して平坦面を作りだしており、平面は長方形を呈していたと考えられる。規模は長さ6.0m、残存幅1.5m、深さは検出面から15cmを測る。周壁溝は確認されなかった。床面からは柱穴が６基確認された。裾から20cm離れた位置で４基の柱が１列に並ぶことから、桁行３間以上の建物跡と考えられる。柱穴の直径20cm前後で、深さは浅いものである。柱間は1.3m～1.8mを測る。遺物は埋土中から少量の土器片が出土している。図化できたものに、弥生土器の甕**173**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構14（第28図）

標高106.60m付近、西斜面下方で検出された。西斜面をえぐる小さい谷の頭にあたり、傾斜は緩くなっている。西端は段状遺構15と切りあう。斜面に並行する溝と柱穴が検出されたのみで、平坦部は流出している。溝は残存長6.8m、幅0.3mを測り、周壁溝と考えられる。柱穴の位置などから本来の規模は長さ6.8m、幅2.8m以上と考えられる。柱穴は裾から40cm離れた位置で４基の柱穴、さらに1.5m離れた位置で３基の柱が並んでおり、１間×３間以上の建物跡と考えられる。柱穴の直径20cm前後で、柱間は1.2m～1.5mを測る。遺物は溝中から少量の土器片が出土している。図化できたものに、弥生土器の甕**174**と、不明石器**Ｓ９**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構15（第28図）

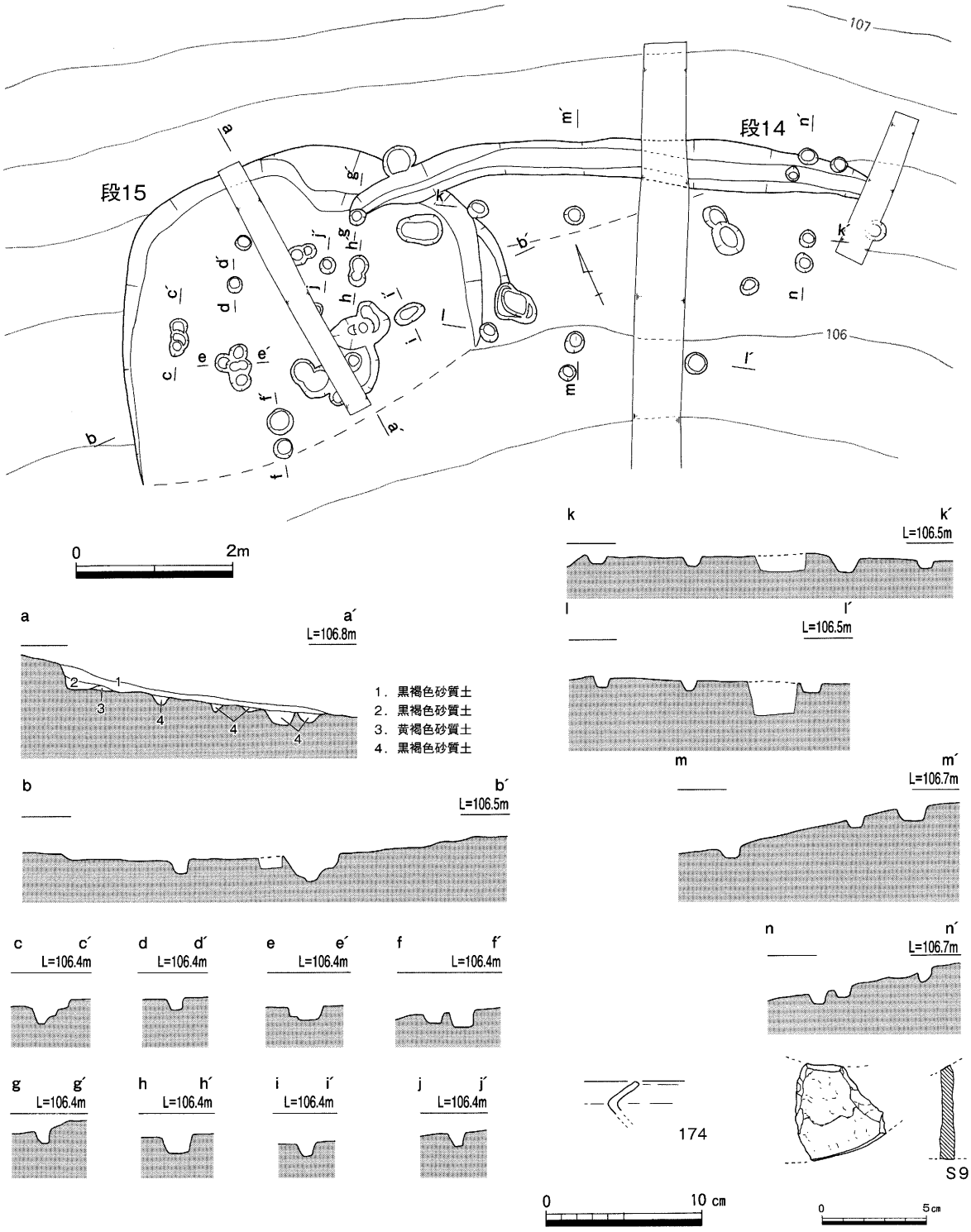
標高106.60m付近、西斜面下方で検出された。東は段状遺構14と切りあう位置にある。斜面を造成して大きな平坦面を作りだしている。平面は不整円形を呈し、円弧から直径５mに復元できる。深さは検出面から30cmを測る。東側は２段に掘られる箇所があり、床面もいびつである。周壁溝は確認されなかったが、多くの柱穴が検出された。明確にまとまるものはないが、４本柱構造の竪穴住居の可能性が高い。また、中央付近では、不整形土壙が検出された。遺物は埋土中から少量の土器片が出土しているが、図化できるものはなかった。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。



第27図　段状遺構13（1/80）・出土遺物（1/4）

段状遺構16（第29図）

標高110.00m付近、西斜面中腹で検出された。傾斜が急な位置である。段状遺構13の東南５ｍの位置にあり、土壙４と切りあう。斜面に並行する溝のみが確認された。長さは4.5m、幅は0.5mを測る。北端は屈曲していることから、本来は平面が長方形を呈する段状遺構と考えられる。深さは検出面から20cmを測る。溝からの出土遺物はないが、土壙４からは弥生土器片が出土していることなどから、時期は弥生時代中期中葉と考えられる。



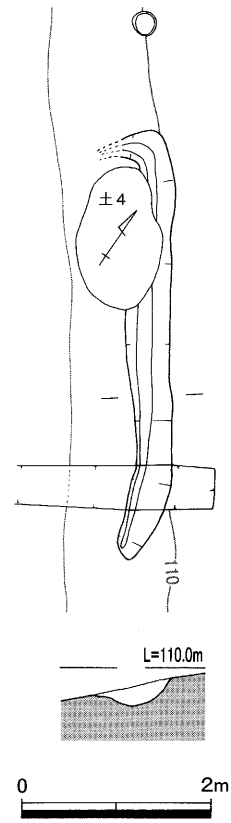
第28図　段状遺構14・15（1/80）・段状遺構14出土遺物（1/4・1/3）

段状遺構17（第30図）

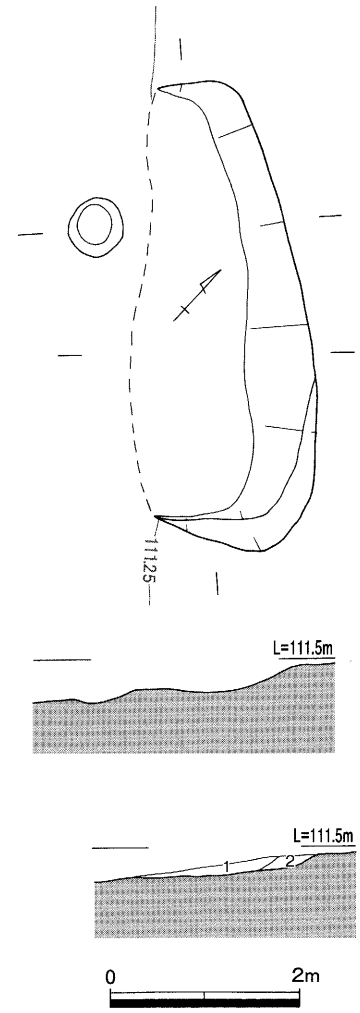
標高111.40m付近、頂上部から西斜面にかかる位置で検出された。付近はほぼ平坦である。斜面をわずかに造成して平坦面を作りだしており、平面は長方形を呈する。長さは5.0m、残存幅は1.9mである。床面までの深さは検出面から15cmを測るのみで、上部は大きく削平を受けている。床面から直径60cmの浅い土壙が検出された。出土遺物はなく、時期は不明である。

段状遺構18（第31図）

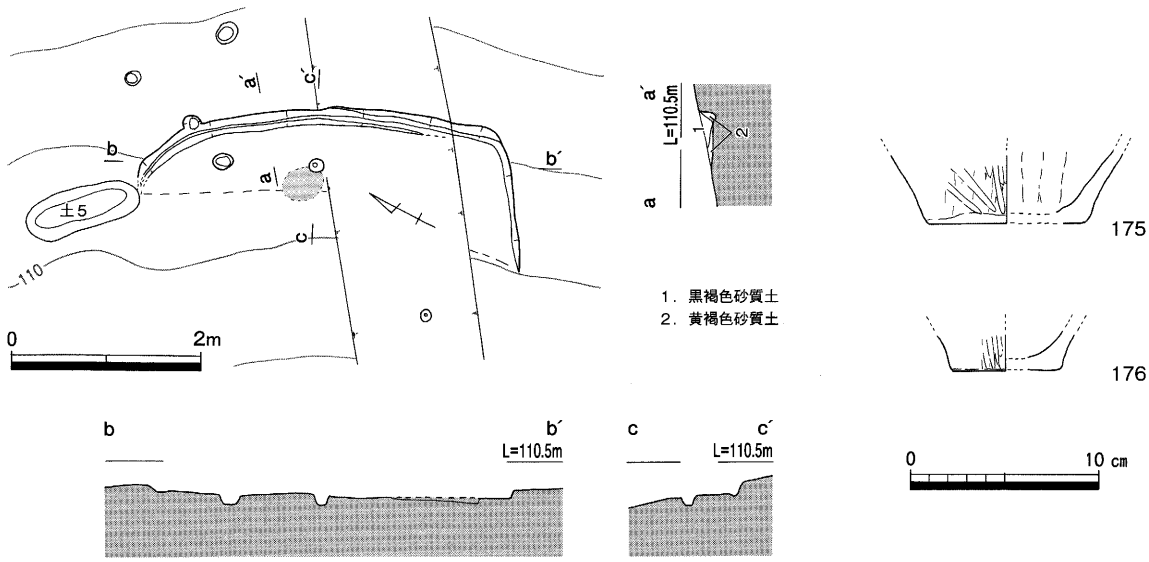
標高110.40m付近、西斜面中腹で検出された建物である。付近は傾斜が急な位置である。土壙５と近接している。斜面を造成して平坦面を作りだしており、平面は長方形を呈していたと考えられる。規模は長さ4.0m、残存幅1.4mを測る。周壁溝は北側半分で確認できたのみで、南側半分には認められない。床面から３基の柱穴が確



第29図　段状遺構16（1/80）



第30図　段状遺構17（1/80）

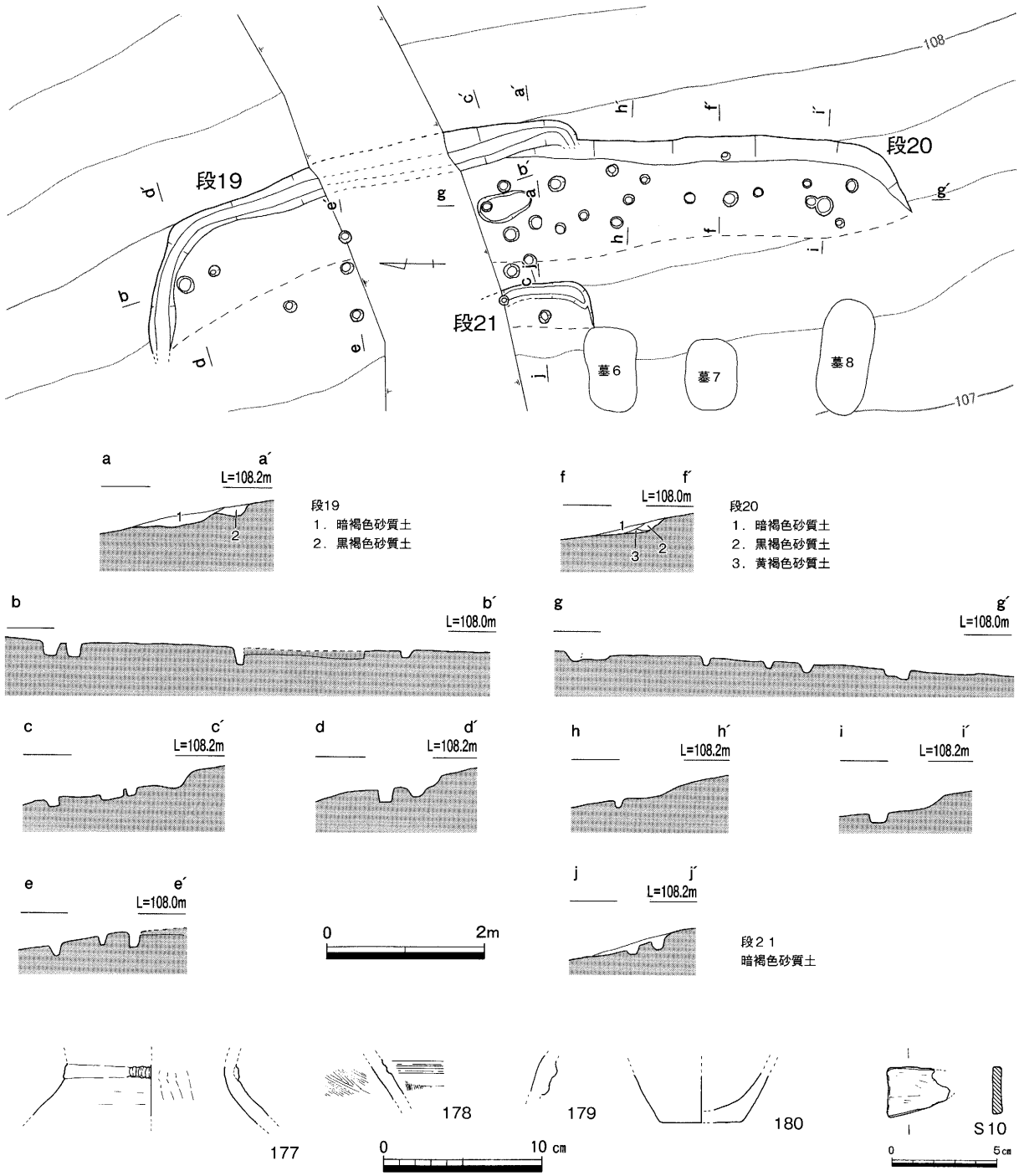


第31図　段状遺構18（1/80）・出土遺物（1/4）

認されたが、まとまらなかった。１基は裾から1.8m離れた斜面で検出され、そこまで床面があった可能性がある。柱穴は直径15cm前後を測る。遺物は埋土中から少量の土器片が出土している。図化できたものに、弥生土器の壺**175**、甕**176**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構19（第32図）

標高108.00m付近、調査区南部の西斜面下方で検出された。南側は段状遺構20と切りあう。付近は比較的急斜面である。斜面を造成して平坦面を作りだしており、平面は隅丸の長方形を呈する。規模は長さ5.9m、残存幅1.2m、深さは10cmを測る。柱穴の存在から本来の幅は1.8m以上と考えられる。床面の高さは段状遺構20とほぼ同じである。周壁溝は山側と北側に巡る。柱穴は段状遺構20に伴うも



第32図　段状遺構19～21（1/80）・段状遺構19・20出土遺物（1/4・1/3）

のとの区別がつかないものが多いが、裾から40cm離れた位置で３基の柱穴が１列、さらに１m離れた位置で２基の柱穴が並ぶ状況が確認でき、１×２間以上の建物跡と考えられる。柱穴は直径15cm～20cm、柱間は1.8mを測る。遺物は埋土中から土器片が出土している。ここでは後述する段状遺構20と一括して掲載している。図化できたものに、弥生土器の壺**177～179**、甕**180**の他、砥石**S 10**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構20（第32図）

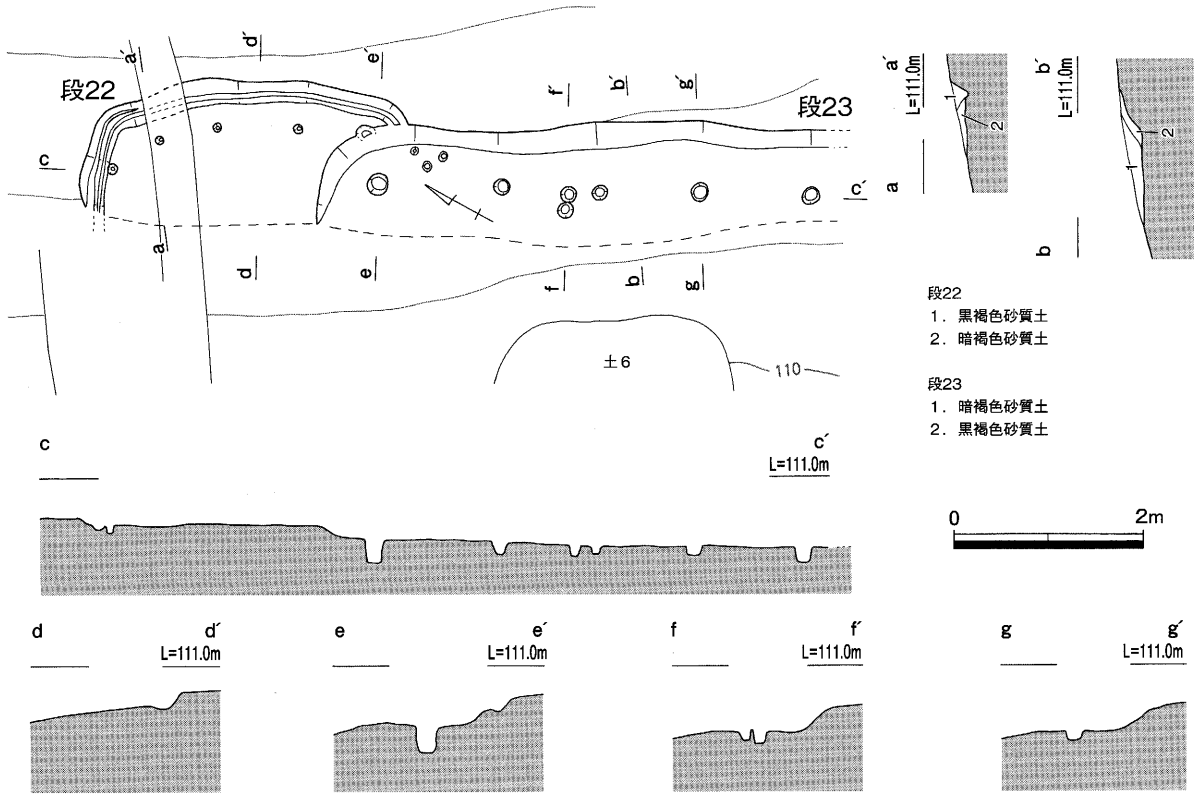
標高107.80m付近、調査区南半の西斜面下方で検出された。北端で段状遺構19と切りあうほか、西側は段状遺構21と土壙墓６～８に接する。斜面を造成して平坦面を作りだしており、平面長方形を呈する。規模は長さ5.6m、残存幅1.5m、深さは検出面から15cmを測る。周壁溝は確認されなかったが、多くの柱穴が確認された。まとまるものは少ないが、裾から50cm離れた位置で４基の柱穴が一列に並ぶことから、桁行３間の建物跡と考えられる。柱穴は直径15cm～20cm、柱穴間は1.6m～1.8mを測る。遺物は埋土中から土器片が出土しており、段状遺構19と一括して扱っている。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構21（第32図）

標高107.50m付近、調査区南部の西斜面下方で検出された。土壙墓６と切りあう関係にある。斜面を造成して平坦面を作りだしており、平面長方形を呈する。規模は長さ2.2m、残存幅0.6m、深さ10cmを測る。山側のみ周壁溝が確認された。柱穴は１基確認されたのみである。出土遺物はないが、時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構22（第33図）

標高110.70m付近、調査区南端の西斜面で検出された。付近は比較的傾斜がきつい。南側が段状遺



第33図　段状遺構22・23（1/80）

構23と切りあう位置にある。斜面を造成して平坦面を作りだしたもので、平面は隅丸の長方形を呈する。規模は長さ3.5m、残存幅1.5mを測る。床面までの深さは検出面から10cmを測る。周壁溝は山側の３方向に巡る。柱穴は確認されなかったが、裾から30cm離れた位置で周壁溝に沿って５基の杭痕が並ぶ状況が確認された。杭痕は直径５cm、杭間は70cmを測る。遺物は埋土中から少量の土器片が出土しているが、図化できるものはなかった。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構23（第33・34図）

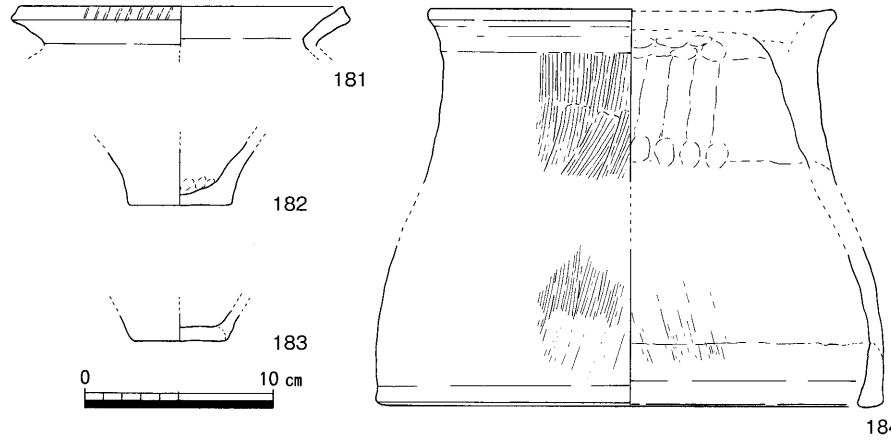
標高110.50m付近、調査区南端の西斜面で検出された。付近は比較的傾斜がきつい。北端が段状遺構22と切りあう位置にある。斜面を造成して平坦面を作りだしており、平面は長方形を呈する。規模は長さ5.5m、残存幅1.2mを測るが、西側は大部分が流失したと考えられる。また、南は調査区外へ延びている。深さは検出面から20cmを測る。周壁溝は確認されなかった。床面から７基の柱穴が確認された。柱穴は裾から40cm離れた位置で５基の柱が１列に並んでおり、桁行４間以上の建物跡と考えられる。柱穴は直径20cm、柱間は1.2mを測る。遺物は埋土中から土器片が出土している。図化できたものに、弥生土器の壺**181**、甕**182・183**の他、台形土器**184**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構24（第35図）

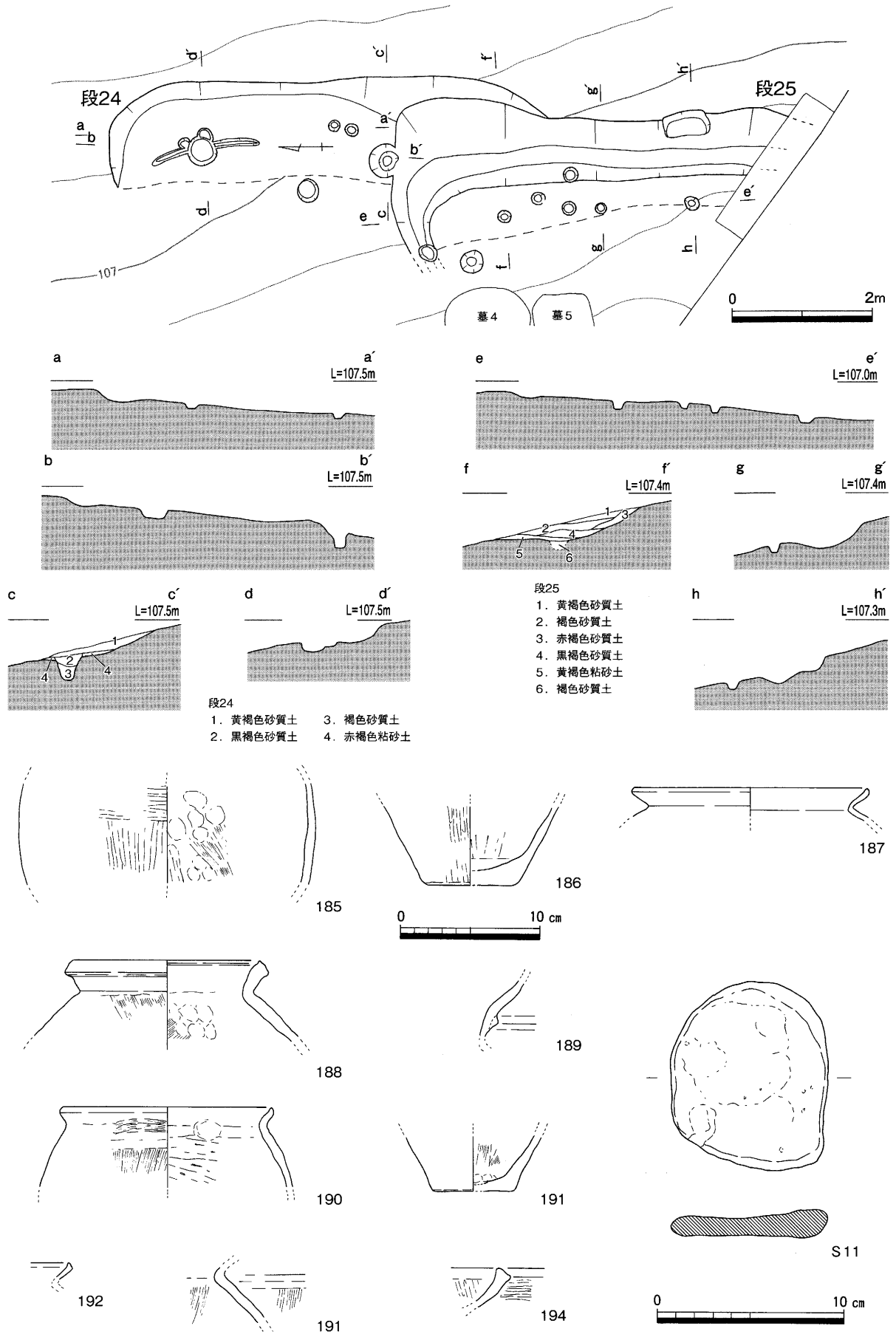
標高107.30m付近、調査区南端の西斜面下方で検出された。南側が段状遺構25と切りあう位置にある。付近は比較的急な斜面である。斜面を造成して平坦面を作りだしており、平面は長方形を呈する。規模は長さ4.1m、残存幅1.4m、深さは検出面から20cmを測り、南側の段状遺構25の床面からは20cm程高い。周壁溝は確認されなかった。床面から７基の柱穴が確認された。柱穴は裾から50cm離れた位置で２基の柱が並ぶ状況が確認され、直径40cm、柱間2.6mを測る。さらにほぼ同じ位置で直径15cmの柱穴が２基並ぶことから、規模は不明ながら建物跡と考えられる。床面で幅10cm、長さ1.5mの小溝が確認されたが、周壁溝かは不明である。遺物は埋土中から土器片が出土している。図化できたものに弥生土器の壺**185**、甕**186・187**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構25（第35図）

標高107.30m付近、調査区南端の西斜面下方で検出された。北側が段状遺構25と切りあう位置にあり、西側に土壙墓４・５が接している。斜面を造成して平坦面を作りだしており、平面は長方形を呈すると考えられる。規模は長さ5.6m、残存幅1.6mを測り、南は調査区外へ延びている。深さは検出面から30cmを測る。山側と北側に周壁溝が巡り、幅が60cmと広くなっている。床面から８基の柱穴が確認され



第34図　段状遺構23出土遺物（1/4）

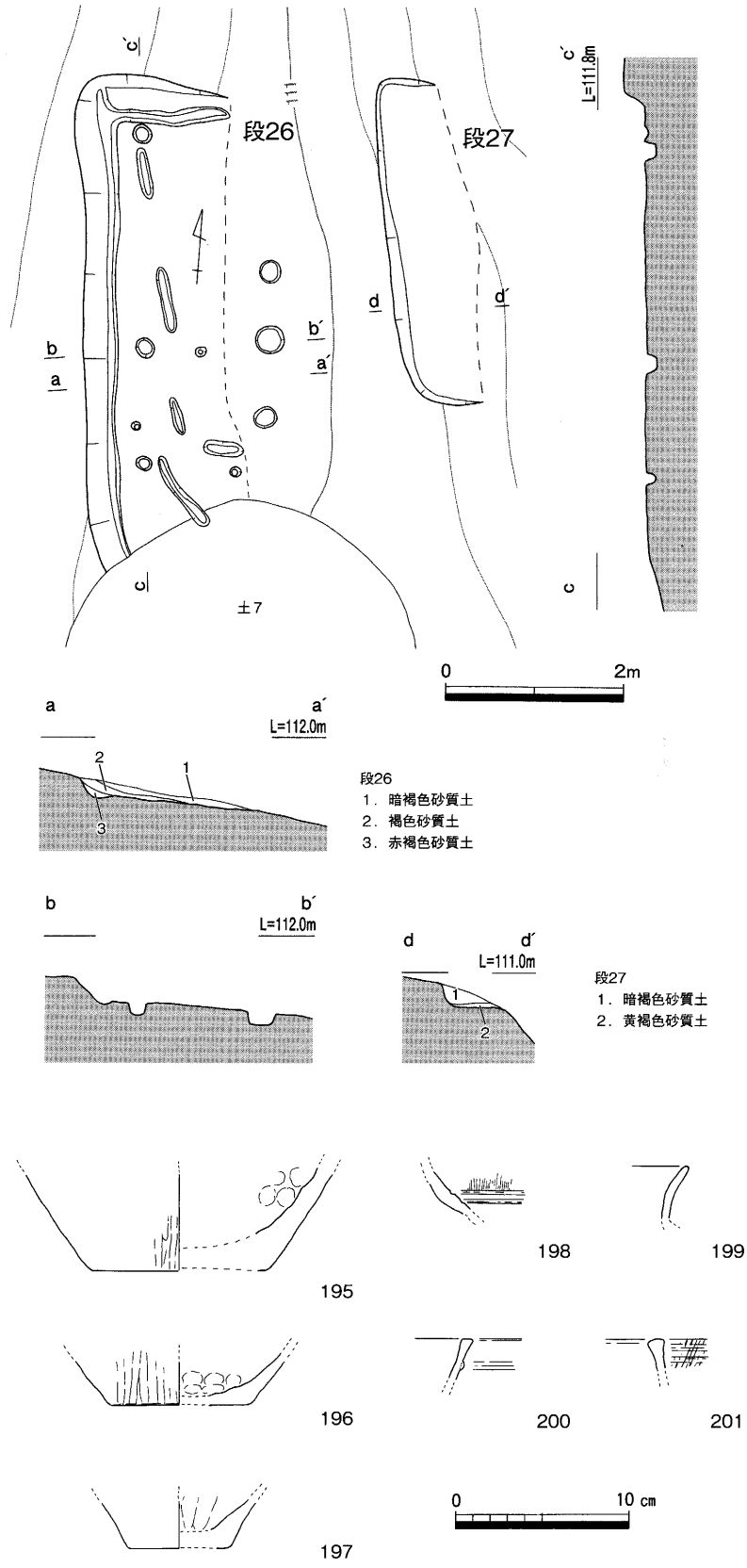


第35図　段状遺構24・25（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）

た。裾から80cm離れた位置で３基の柱が１列に並ぶことから、桁行２間以上の建物跡と考えられる。規模は直径15cm前後、柱間は1.3mを測る。遺物は埋土中から多くの土器片が出土している。図化できたものに弥生土器の壺**188・189**、甕**190～193**、高杯**194**のほか、台石とみられる**S11**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構26（第36図）

標高111.70m付近、尾根頂上から東斜面との変換点で検出された。東側は段状遺構27に接し、南側は大型土壙７と切りあう。斜面を造成して平坦面を作りだしており、平面は長方形を呈する。規模は長さ5.5m、幅1.8m、深さ20cmを測る。東半分は流失しているが、柱穴の存在から本来の幅は2.0m以上と考えられる。周壁溝は山側と北側に巡る他、その内側で部分的ながら別の周壁溝が確認された。床面からは６基の柱穴が確認された。柱穴は裾から20cm離れた位置で２基の柱が１列分並び、規模は不明ながら建物跡と考えられる。規模は直径30cm～40cm、柱間は2.0mを測る。遺物は埋土中から少量の土器片が出土している。図化できたものに、弥生土器の壺**195・196**、**198～200**、甕**197**、鉢**201**がある。



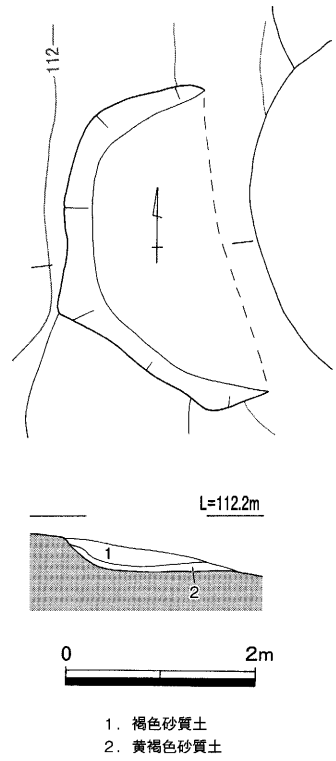
第36図　段状遺構26・27（1/80）・段状遺構26出土遺物（1/4）

段状遺構27（第36図）

標高110.80m付近、東斜面で検出された。段状遺構26の東に接する。付近の傾斜はきつい。斜面を造成して平坦面を作りだす。長さは3.6m、残存幅は1.0m、深さは20cmを測る。周壁溝、柱穴は確認されなかった。遺物は埋土中から少量の土器片が出土しているが、図化できるものはなかった。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構28（第37図）

標高110.80m付近、尾根頂上から東斜面との変換点で検出された。大型の土壙７の西に接する位置にあたり、付近の傾斜は緩やかである。斜面を造成して平坦面を作りだしている。平面は半円形を呈し、長さは3.4m、残存幅は1.5mである。床面までの深さは検出面から25cmを測る。周壁溝、柱穴は確認されなかった。出土遺物はなく、時期は不明である。



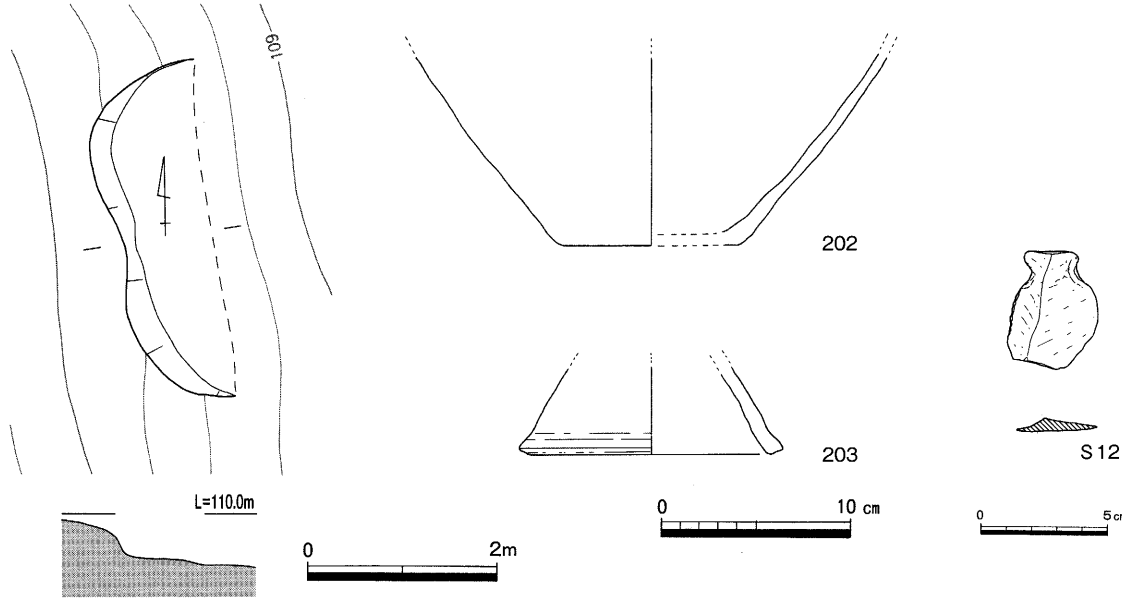
第37図　段状遺構28（1/80）

段状遺構29（第38図）

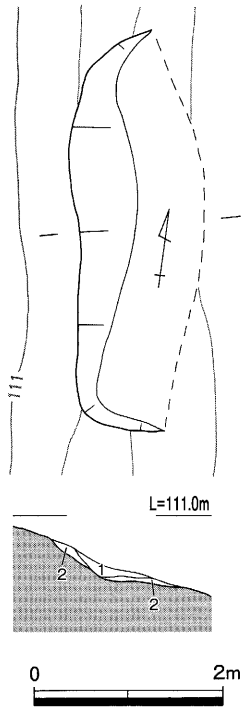
標高109.80m付近、調査区南端の東斜面中腹で検出された。付近は比較的急な斜面にあたる。斜面を造成してわずかな平坦面を作りだしている。長さは3.5m、残存幅は1.2m、深さは20cmを測る。周壁溝、柱穴は確認されなかった。遺物は埋土中から少量の土器片が出土している。図化できたものに、弥生土器の壺**202**、高杯**203**の他、砥石**S 12**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

段状遺構30（第39図）

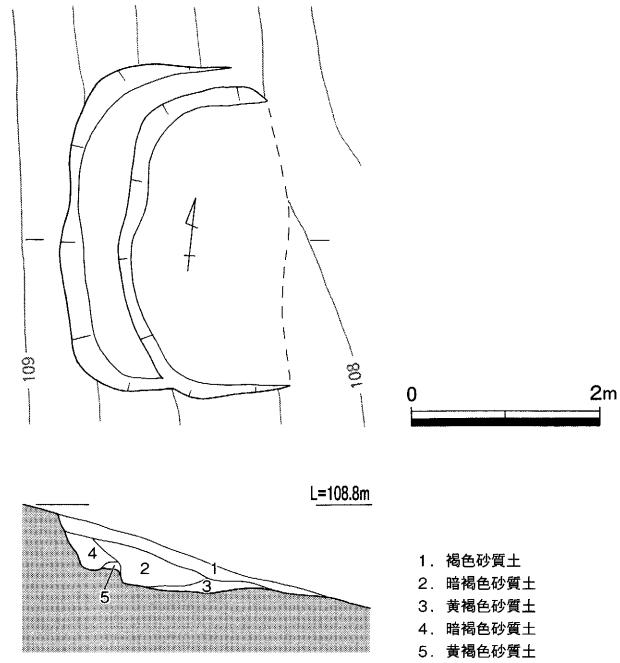
標高110.80m付近、調査区北端の東斜面中腹で検出された。付近は比較的急な斜面にあたる。斜面



第38図　段状遺構29（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）



第39図　段状遺構30（1/80）



第40図　段状遺構31（1/80）

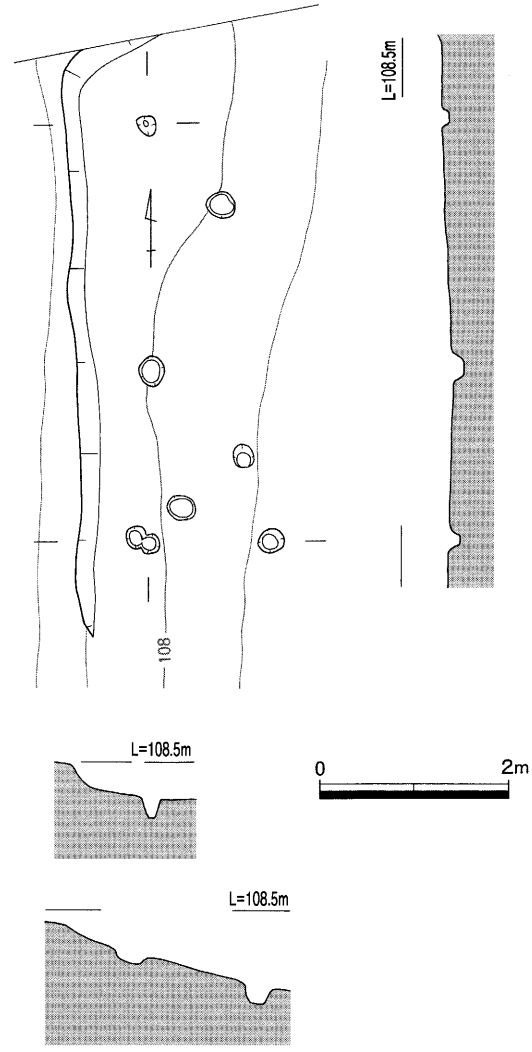
を造成して平坦面を作りだしている。平面は長方形を呈していたと考えられ、長さは4.3m、残存幅は1.4m、深さは20cmを測る。床面から周壁溝、柱穴などは確認されなかった。出土遺物はなく、時期は不明である。

段状遺構31（第40図）

標高108.80m付近、調査区北端の東斜面下方で検出された。付近は比較的急な斜面であるが、これより東側はわずかに傾斜が緩くなっている。斜面を造成して平坦面を作りだしており、平面は長方形を呈する。長さは3.8m、残存幅は2.2m、深さは60cmを測り、２段に掘り込まれている。床面から周壁溝、柱穴などは確認されなかった。出土遺物はなく、時期は不明である。

段状遺構32（第41図）

標高108.80m付近、調査区北端の東斜面下方で検出された。付近は比較的緩い斜面で

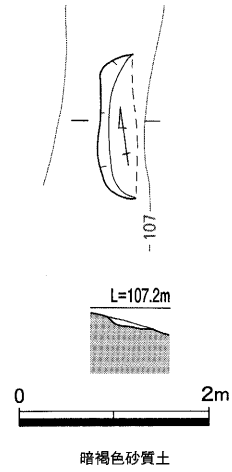


第41図　段状遺構32（1/80）

ある。斜面をわずかに造成している。平面は長方形を呈し、長さは6.4m、幅は柱の位置関係から2.4mを測る。深さは検出面から10cmを測るのみで、床面は緩やかな傾斜を持つ。周壁溝、柱穴などは確認されず、貼床の大部分が流失した可能性もある。出土遺物はなく、時期は不明である。

段状遺構33（第42図）

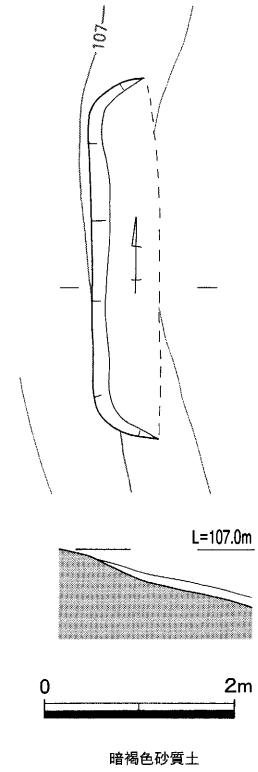
標高107.20m付近、東斜面下方で検出された。斜面を長さ1.5m、幅0.4m、深さ10cmにわたって造成している。床面から周壁溝、柱穴などは確認されなかった。出土遺物はなく、時期は不明である。



第42図　段状遺構33（1/80）

段状遺構34（第43図）

標高107.00m付近、東斜面下方で検出された。斜面を長さ3.8m、幅0.6m、深さ10cmにわたって造成している。床面から周壁溝、柱穴などは確認されなかった。出土遺物はなく、時期は不明である。

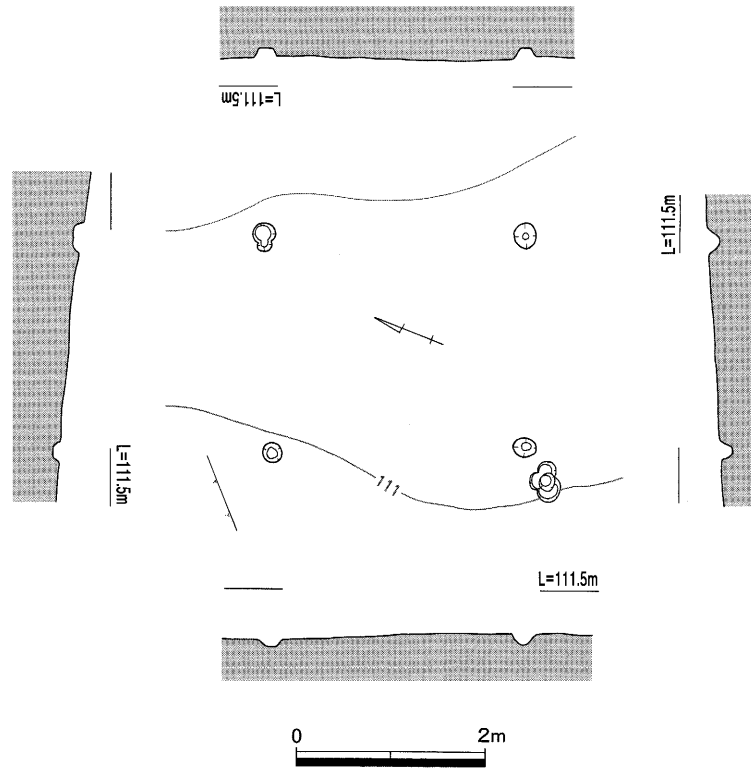


第43図　段状遺構34（1/80）

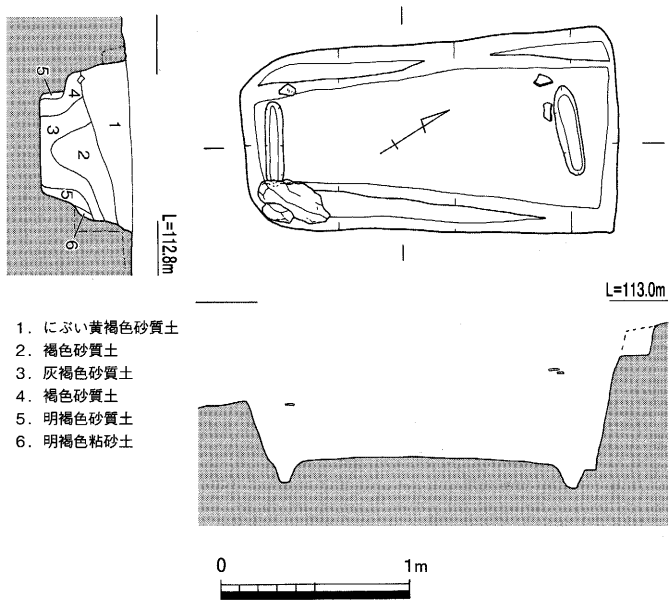
２．建物跡

建物１（第44図）

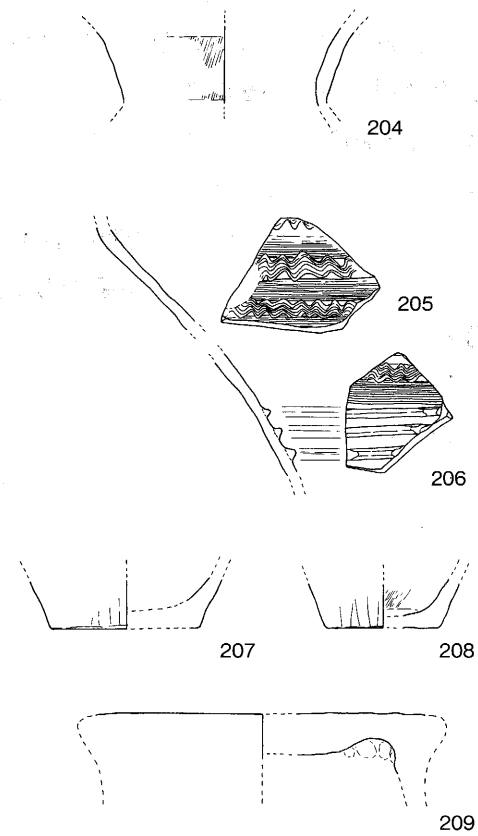
標高111.20m付近、尾根頂部で検出された建物である。段状遺構17の南に接する位置である。柱穴が４基確認され、１間×１間の建物跡と考えられる。周辺は大きな削平を受けているため、柱穴のみか、本来段を伴うものかは不明である。柱穴は20cm～25cm、柱間は東西2.2m、南北2.8mを測る。出土遺物はないが、時期は弥生時代中期中葉と考えられる。



第44図　建物１（1/80）



第45図　土壙墓１（1/40）



第46図　土壙墓１出土遺物（1/4）

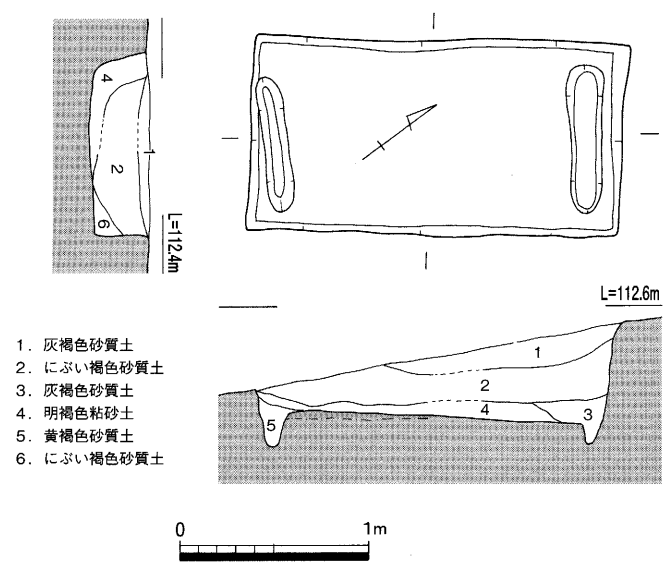
３．土壙墓

土壙墓１（第45・46図）

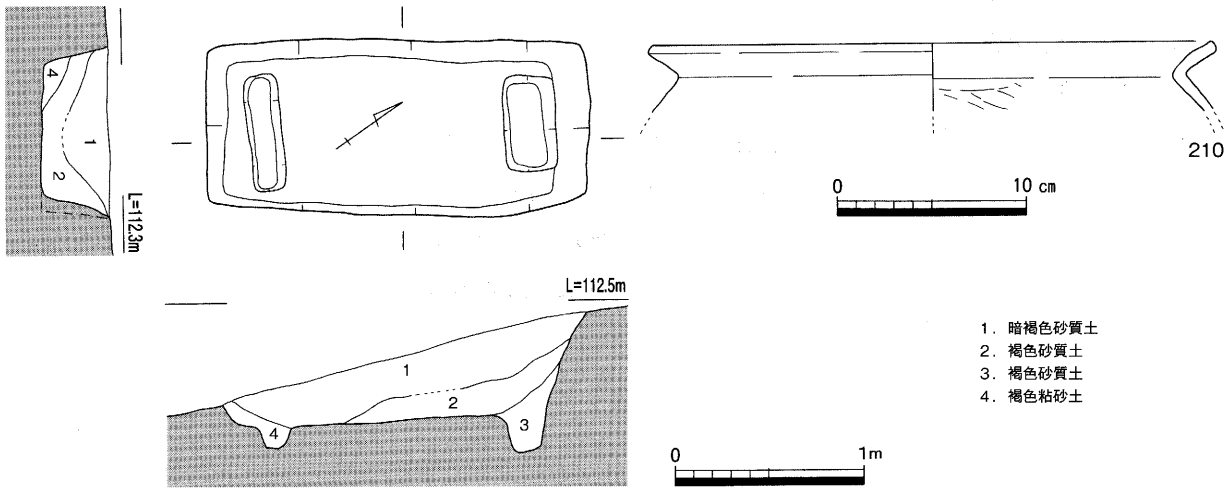
標高112.80m付近、尾根頂上から西斜面との変換点で検出された。段状遺構５と重なる位置にあり、土壙墓３と近接する。主軸は斜面に直交する。平面は長方形を呈し、谷側がすぼまる。長さ2.0m、幅1.2m～0.9m、深さは60cmを測り、底はほぼ水平である。底面両端に小口溝が検出された。小口溝の間隔は1.5mを測る。また、南東隅検出面で棺を固定するためのものと考えられる30cm大の石材が出土した。遺物は埋土上面を中心に少量の土器片が出土している。図化できたものに、弥生土器の壺**204～207**、甕**208**、台形土器**209**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

土壙墓２（第47図）

標高112.50m付近、尾根頂上から西斜面との変換点で検出された。段状遺構５と重なる位置にある。主軸は斜面に直交する。平面は長方形を呈する。長さ1.9m、幅1.0m、深さは50cmを測り、底はほぼ水平である。底面両端に小口溝が検



第47図　土壙墓２（1/40）



第48図　土壙墓３（1/40）・出土遺物（1/4）

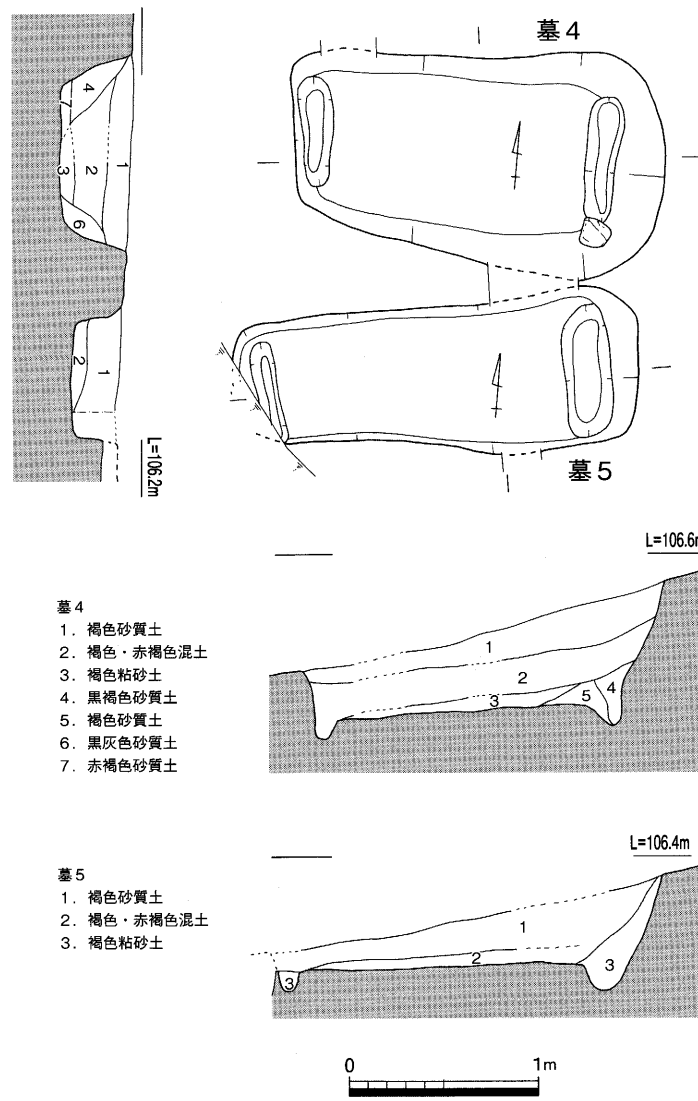
出された。小口溝の間隔は1.6mを測る。遺物は出土していないが、時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

土壙墓３（第48図）

標高112.40m付近、尾根頂上から西斜面との変換点で検出された。土壙墓１と近接した位置にある。主軸は斜面に直交し、土壙墓１と軸がそろっている。平面は長方形を呈する。長さ2.0m、幅0.9m、深さは45cmを測り、底はほぼ水平である。底面両端に小口溝が検出された。小口溝の間隔は1.4mを測る。遺物は埋土中から少量の土器が出土している。図化できたものに、弥生土器の甕**210**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

土壙墓４（第49図）

標高106.50m付近、調査区南端の西斜面下方で検出された。段状遺構25の西に位置し、土壙墓５に接する。主軸は斜面に直交し、土壙墓５と軸がそろっている。平面は長方形を呈し、谷側がすぼまる。長さ2.0m、幅1.2m～0.9m、深さは50cm



第49図　土壙墓４・５（1/40）

を測り、底はほぼ水平である。床面両端に小口溝が検出された。小口溝の間隔は1.5mを測る。遺物は出土していないが、時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

土壙墓５（第49図）

標高106.30m付近、調査区南端の西斜面下方で検出された。土壙墓４に近接する。主軸は斜面に直交する。平面は長方形を呈し、谷側がややすぼまる。西端は調査区外へ延びているが、長さ2.2m、幅0.8m～0.7m、深さは40cmを測り、底はほぼ水平である。床面両端に小口溝が検出された。小口溝の間隔は1.7mを測る。遺物は出土していないが、時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

土壙墓６（第50図）

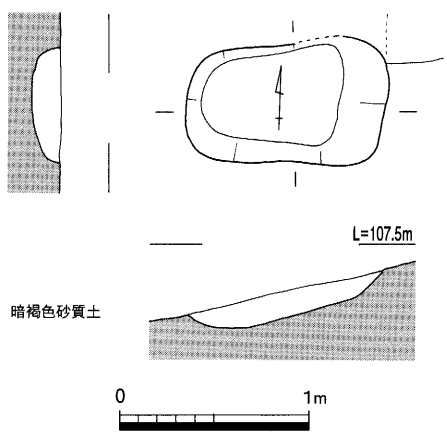
標高107.40m付近、西斜面中腹で検出された。段状遺構20の西に接し、土壙墓７・８と並んでいる。主軸は斜面に直交する。平面は隅丸方形を呈し、長さ1.1m、幅0.6m、深さは15cmと浅く、傾斜をもつ。小口溝などは確認されなかった。出土遺物はないが、時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

土壙墓７（第51図）

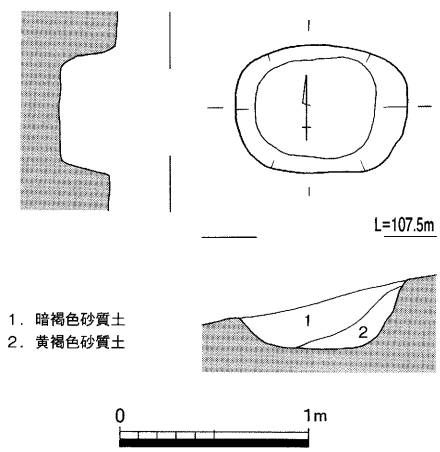
標高107.30m付近、西斜面中腹で検出された。土壙墓６・８と並んでいる。主軸は斜面に直交する。平面は隅丸方形を呈し、長さ0.9m、幅0.7m、深さは25cmを測り、底は平坦である。小口溝などは確認されなかった。出土遺物はないが、時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

土壙墓８（第52図）

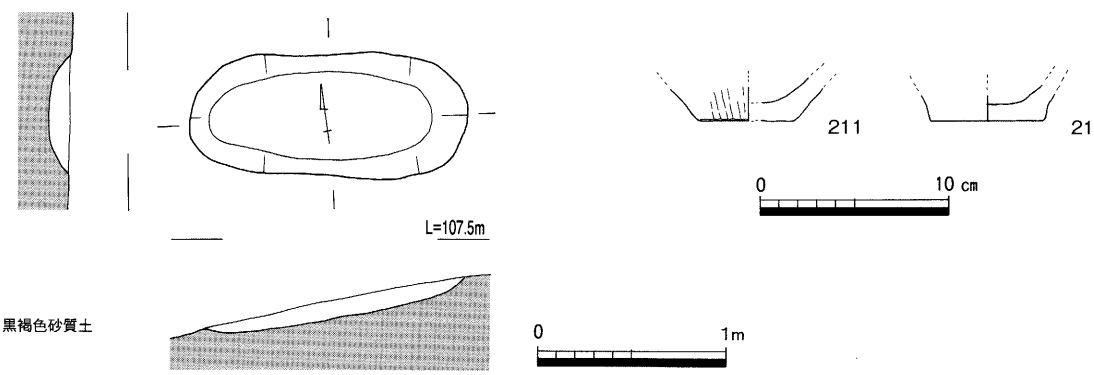
標高107.30m付近、西斜面中腹で検出された。土壙墓６・７と並んでいる。主軸は斜面に直交する。



第50図　土壙墓６（1/40）



第51図　土壙墓７（1/40）



第52図　土壙墓８（1/80）・出土遺物（1/4）

平面は細長い楕円形を呈し、長さ1.5m、幅0.7m、深さは10cmを測り、底は傾斜をもつ。小口溝などは確認されなかった。遺物は埋土中から少量の土器が出土している。図化できたものに、弥生土器の甕**211・212**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

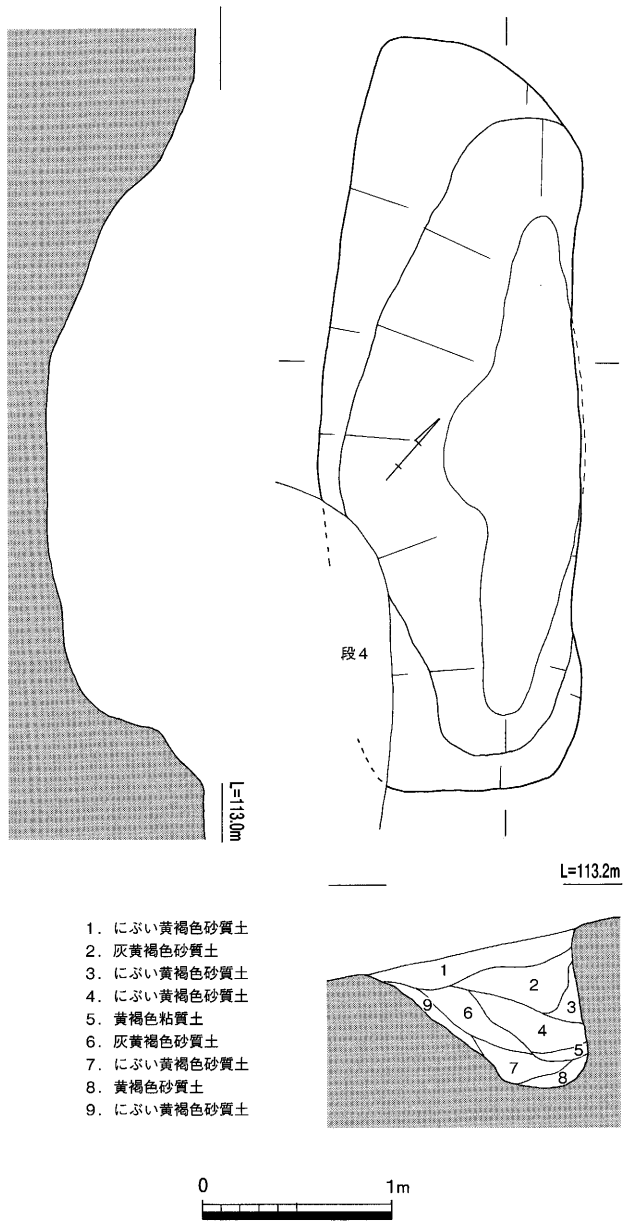
４．土壙

土壙１（第53図）

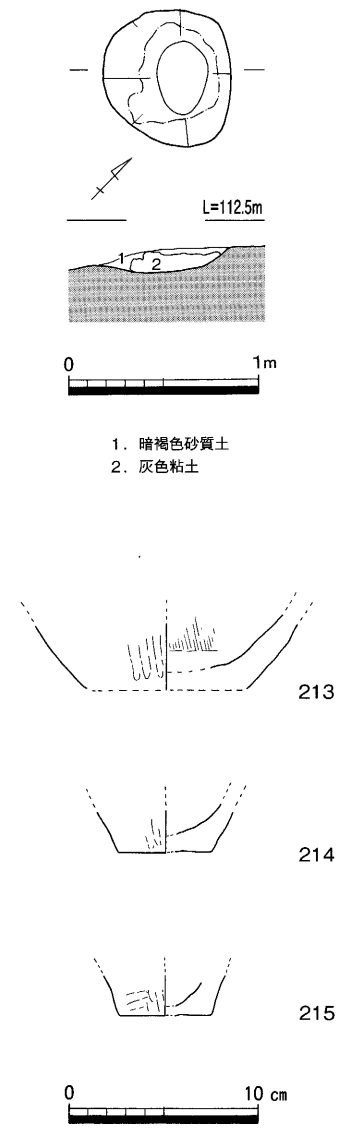
標高113.00m付近、西斜面で検出された。比較的緩斜面に位置し、段状遺構４に切られている。形態は隅丸長方形を呈し、長さ4.1m、幅1.4m、深さは80cmを測り、北側底面は山側に向けて少しオーバーハングしている。出土遺物はなく、時期も不明である。

土壙２（第54図）

標高112.30m付近、尾根上平坦部で検出された。削平が著しいため、土壙単体か建物などの遺構に



第53図　土壙１（1/40）



第54図　土壙２（1/40）・出土遺物（1/4）

伴うものかは不明である。形態は円形を呈し、直径0.7m、深さは10cmと浅い。底面に灰白色粘土が充填された状態で発見された。遺物は埋土中から少量の土器が出土している。図化できたものに、弥生土器の壺**213**、甕**214・215**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

土壙３（第55図）

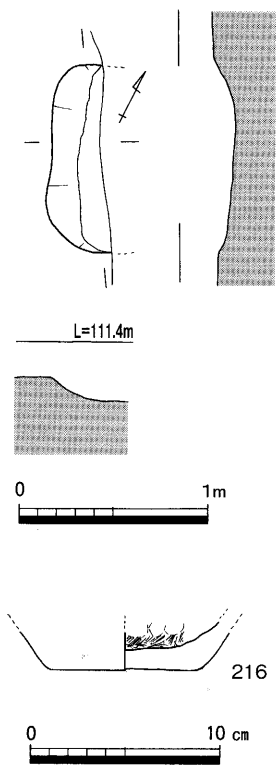
標高111.30m付近、尾根上平坦部で検出された。東半分は５号墳の周溝に削平されている。形態は隅丸方形を呈し、長さ0.9m、残存幅0.3m、深さは10cmと浅く、上部は削平されたようである。遺物は埋土中から少量の土器が出土している。図化できたものに、弥生土器の壺**216**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

土壙４（第56図）

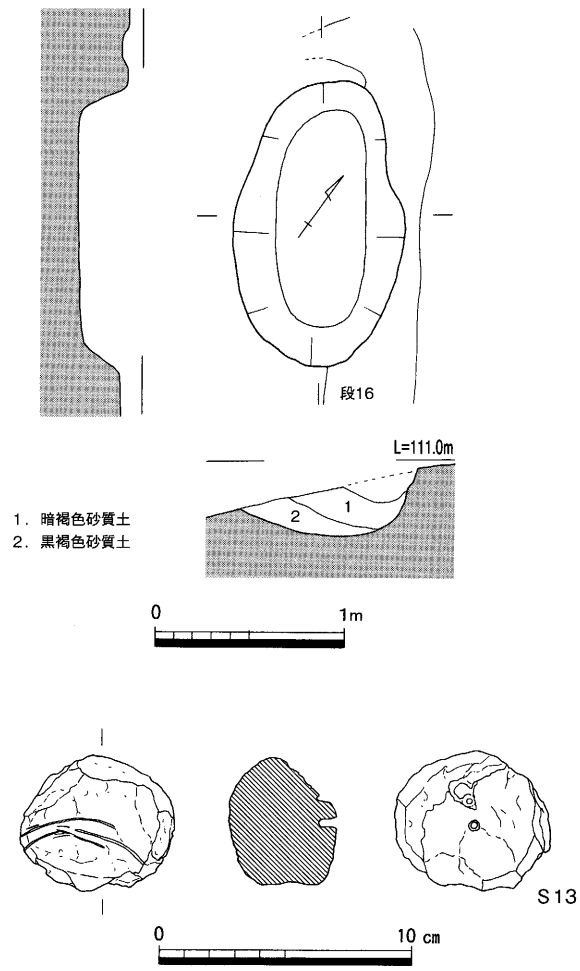
標高111.00m付近、西斜面中腹で検出された。段状遺構16と切りあう位置にある。形態は楕円形を呈し、長さ1.3m、幅0.9m、深さは20cmを測る。遺物は埋土中から少量の土器片が出土しているが、図化できなかった。図化できたものに、石錘の可能性がある**Ｓ13**があり、貫通していないが２箇所の穿孔や、筋状の切れ目線がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

土壙５（第57図）

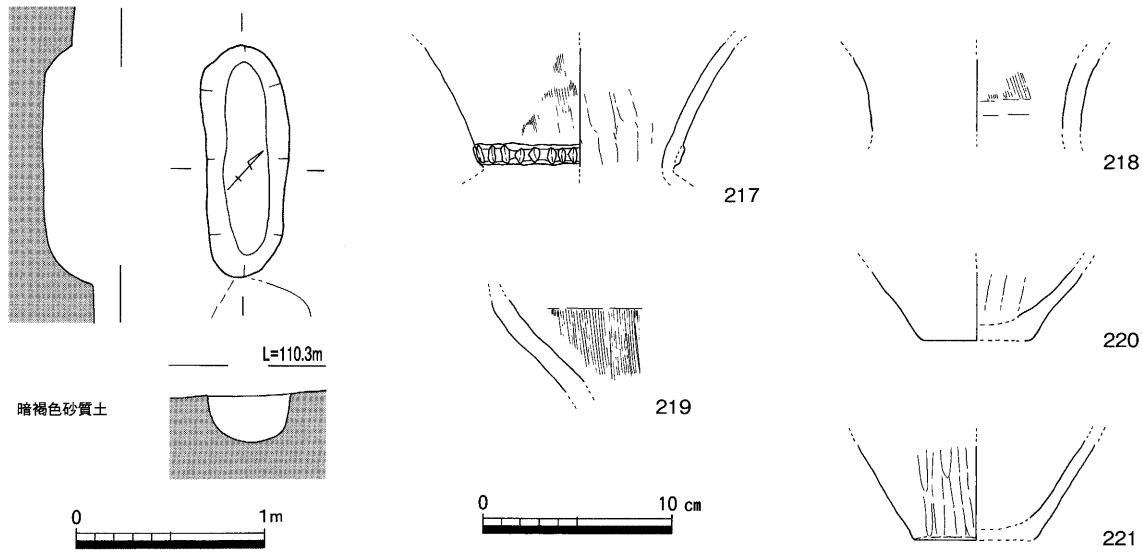
標高110.20m付近、西斜面中腹で検出された。南は段状遺構18と接する。形態は楕円形を呈し、長さ1.2m、幅0.5m、深さは20cmを測る。遺物は埋土中から少量の土器片が出土している。図化できたものに、弥生土器の壺**217～219**、甕**220・221**がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。



第55図　土壙３（1/40）・出土遺物（1/4）



第56図　土壙４（1/40）・出土遺物（1/3）



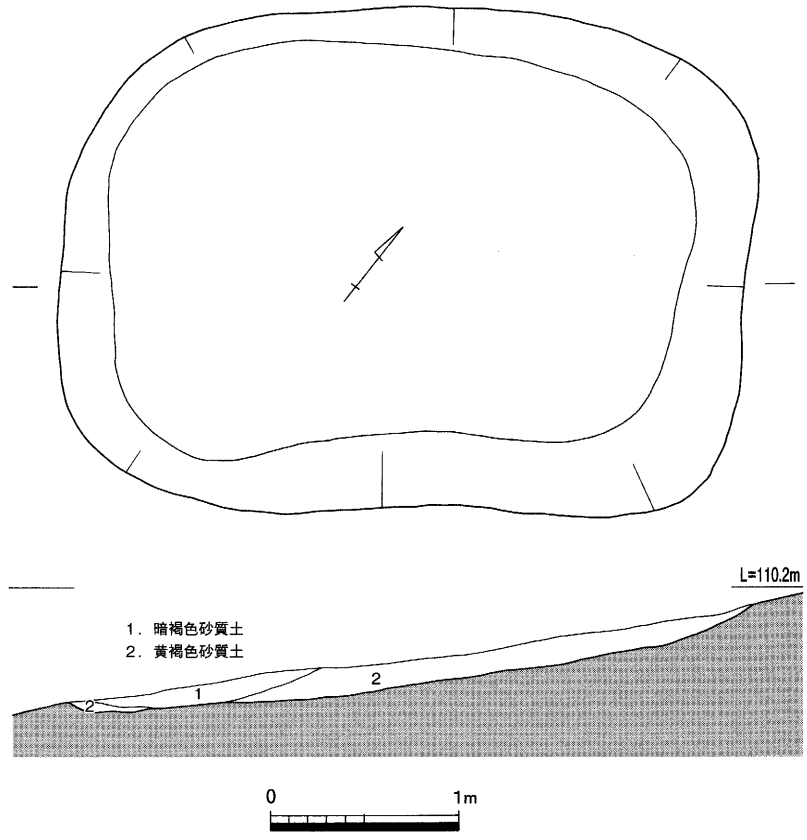
第57図　土壙５（1/40）・出土遺物（1/4）

土壙６（第58図）

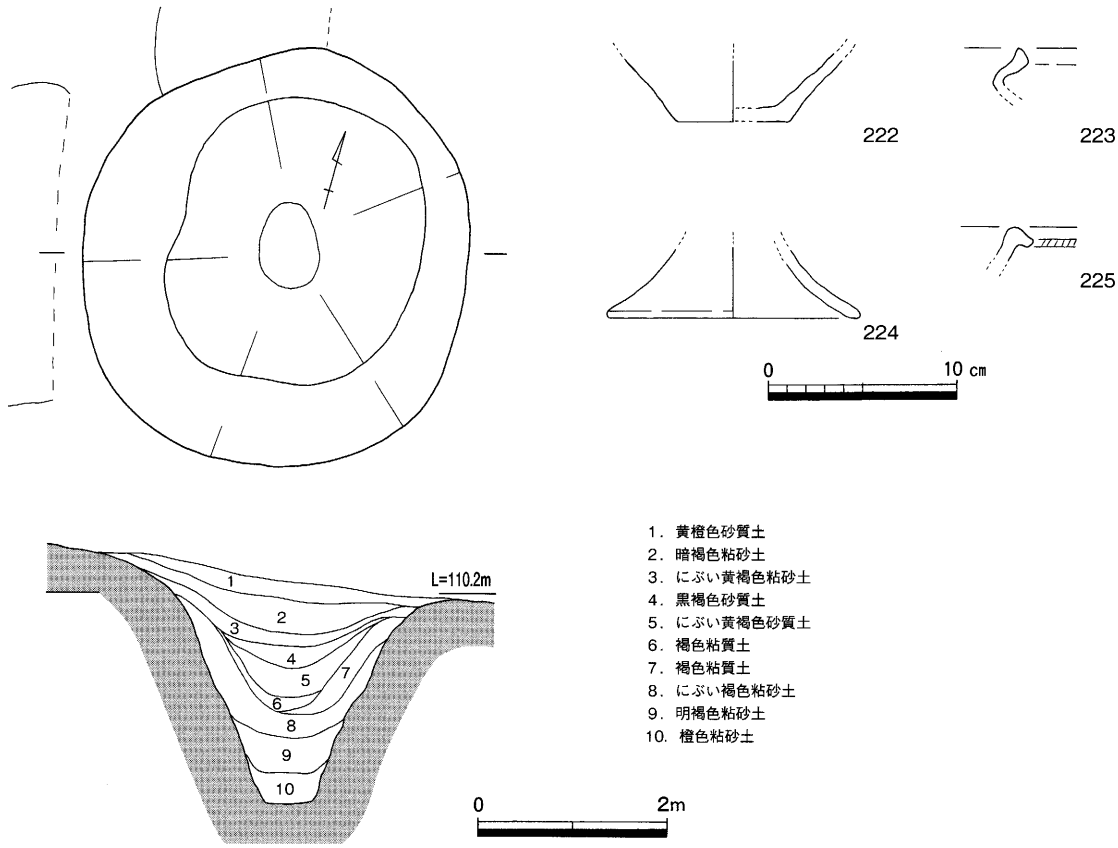
標高110.00m付近、西斜面中腹で検出された。東の山側に１m離れて段状遺構23が位置する。形態は隅丸方形を呈し、長さ3.6m、幅2.6mを測る。深さは20cmを測るが、底面は傾斜を持つ。遺構の性格は不明である。遺物は埋土中から少量の土器片が出土しているが、図化できなかった。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

土壙７（第59図）

標高110.40m付近、尾根から東斜面への変換点で検出された。北は段状遺構26に接し、切り合う関係にある。形態はほぼ円形で長軸4.4m、短軸4.2m、深さ2.5mを測る大型土壙である。断面は下すぼまりの逆台形となり、底面は平坦である。埋土は10層に分かれ、自然堆積を示す。上層の黒褐色土からは弥生土器小片が少量出土した。遺構の性格は不明である。図化できたものに、弥生土器の甕**222**、壺**223**、高杯**224**・



第58図　土壙６（1/40）



第59図　土壙７（1/80）・出土遺物（1/4）

225がある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

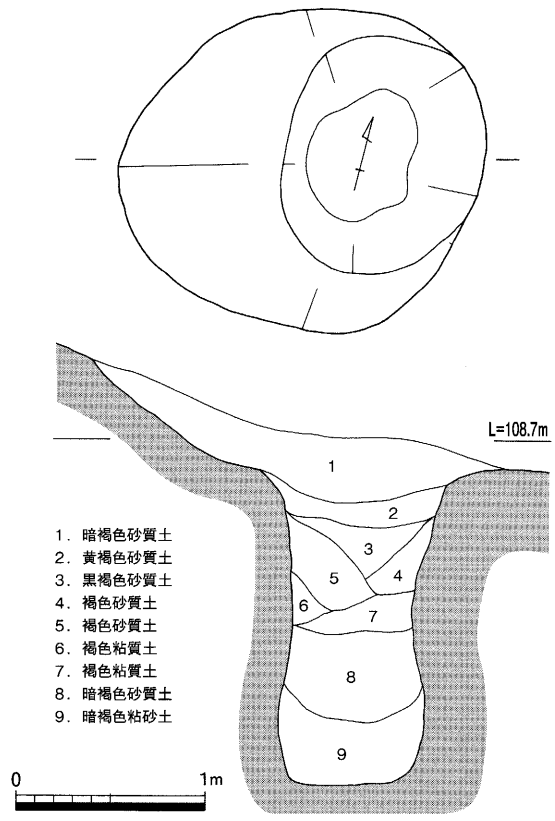
土壙８（第60図）

標高109.00m付近、東斜面中腹で検出された。南に２m離れて段状遺構32が位置する。形態は円形で、２段に掘り込まれ、検出面では直径1.8m、内側で直径1.2m、深さは1.8mを測る非常に深い土壙である。断面はやや袋状を呈し、底面は平坦である。埋土は９層に分かれ、自然堆積を示している。遺構の性格は不明である。遺物は出土しておらず、時期も不明である。

５．その他の遺構・遺物

段状遺構35（第61図）

標高107.80m付近、西斜面下方で検出された。斜面を長さ3.6m、幅0.8m、深さ15cmにわたって造成している。平面は楕円形を呈

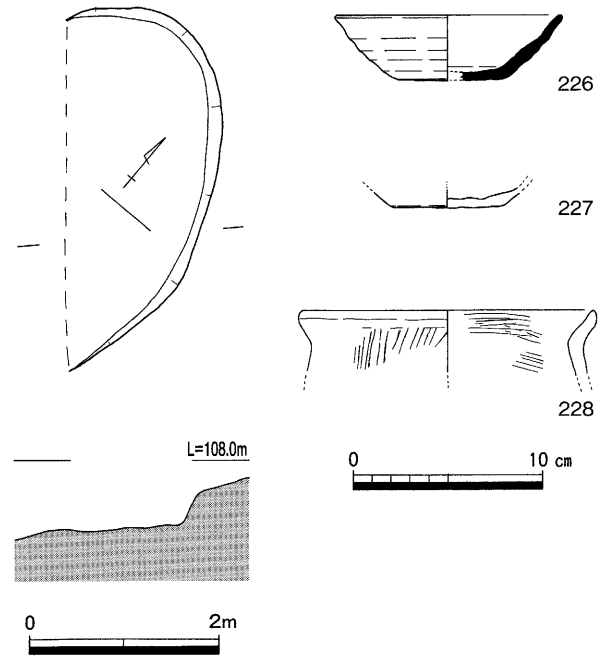


第60図　土壙８（1/40）

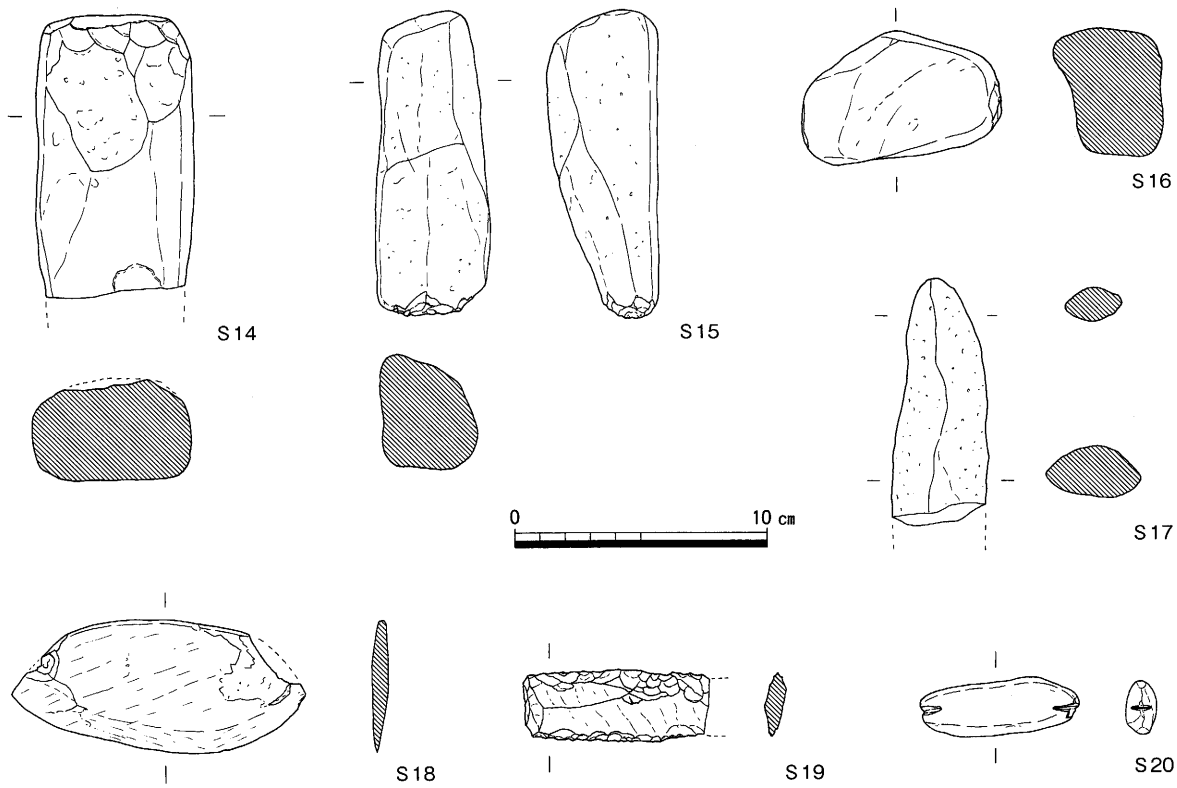
する。遺物は埋土中から少量の土器片が出土している。図化できたものに、須恵器の杯**226**、土師器の小皿**227**、甕**228**がある。時期は平安時代後期頃と考えられる。

その他の出土遺物（第62図）

包含層などから、弥生土器の他、石器が出土している。図化したものに、石斧**S 14**、叩き石**S 15**、用途不明石器**S 16**、石槍の可能性がある**S 17**、磨製石包丁**S 18**、打製石包丁**S 19**、両端に切り込みのある石錘**S 20**がある。



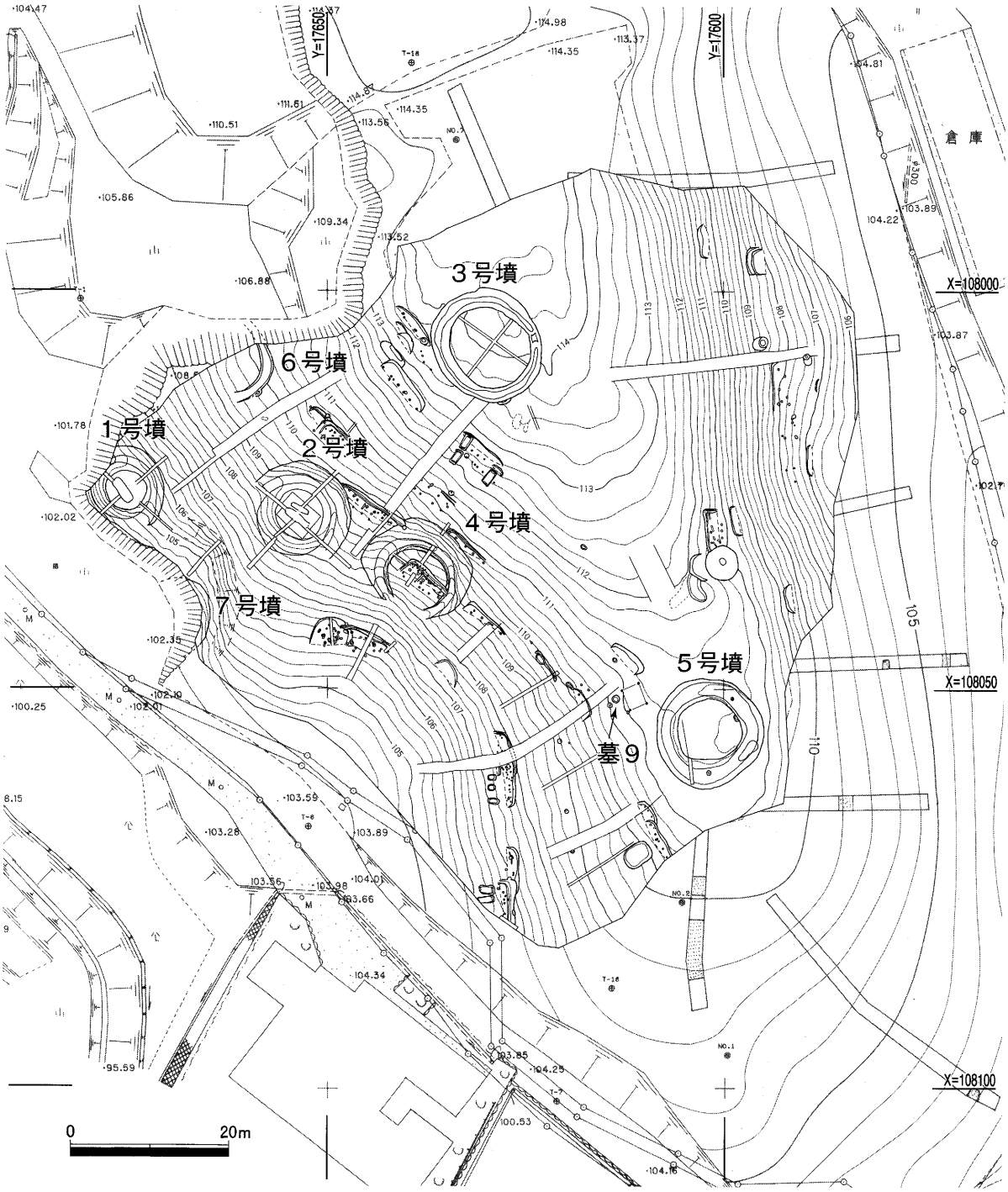
第61図　段状遺構35（1/80）・出土遺物（1/4）



第62図　その他の出土遺物（1/3）

第３節　小池谷古墳群

古墳に関する遺構として、７基の古墳、土壙墓を確認した。小池谷古墳群は実態が不明ながら遺跡地図には８基の古墳群との記載があったため、それを裏付ける結果となったが、さらに数基の古墳が存在していた可能性が高い。当初から墳丘が確認されていた２基の古墳は、墳丘盛土、主体部が良好に残存し、副葬品が出土した。残りの５基は削平により墳丘が失われていたもので、周溝のみが検出され、古墳の規模、位置が明らかとなった。その他、数は少ないが土壙墓が１基確認された。

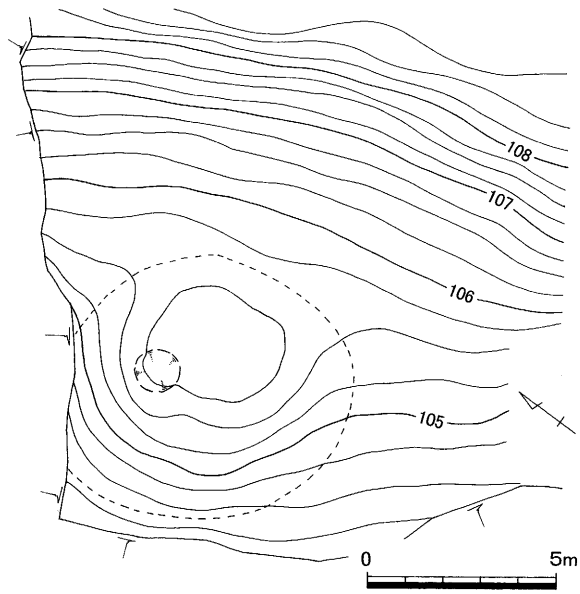


第63図　小池谷古墳群配置図（1/800）

１．小池谷１号墳

調査前状況（第64図）

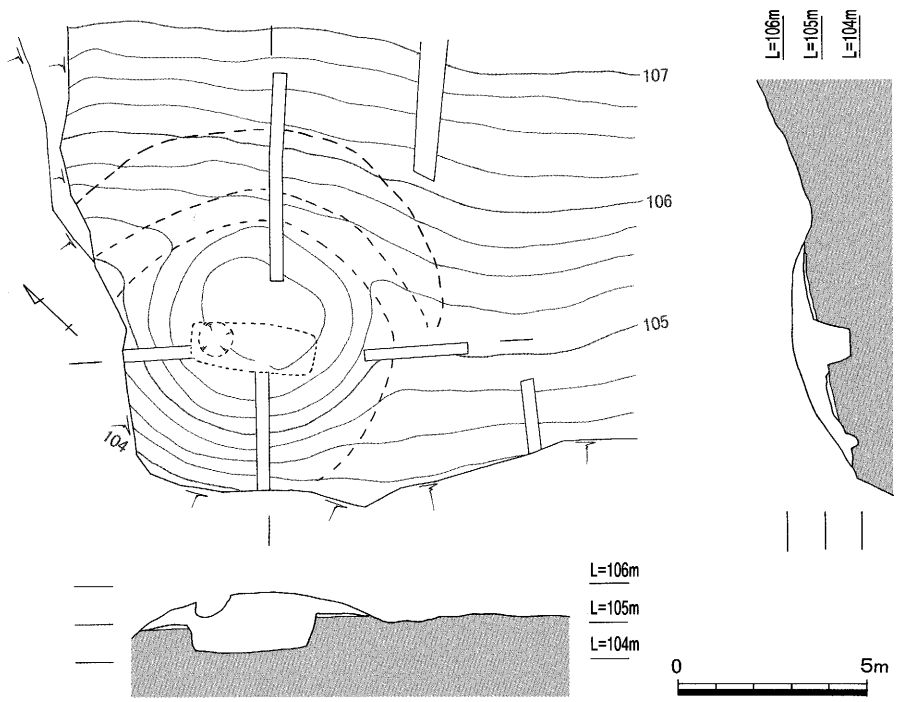
丘陵西斜面、標高105.00m付近に位置し、古墳群の中では標高が低い場所に位置する。調査前の観察では、わずかな墳丘の高まりと斜面を掘り込んだ周溝らしき窪みが確認できた程度である。尾根の高い側には近年の削平により頂上部から押し出された土が表土上に堆積しており、等高線が密な状況であった。西と南側は近年の土取りによる削平が著しく断崖となっており、南側はかろうじて墳丘裾が残っていると考えられたが、西側は墳丘まで削平が及んでいる。墳頂部の中央やや西寄りに盗掘穴とみられる直径１ｍ、深さ60cmの穴が確認された。



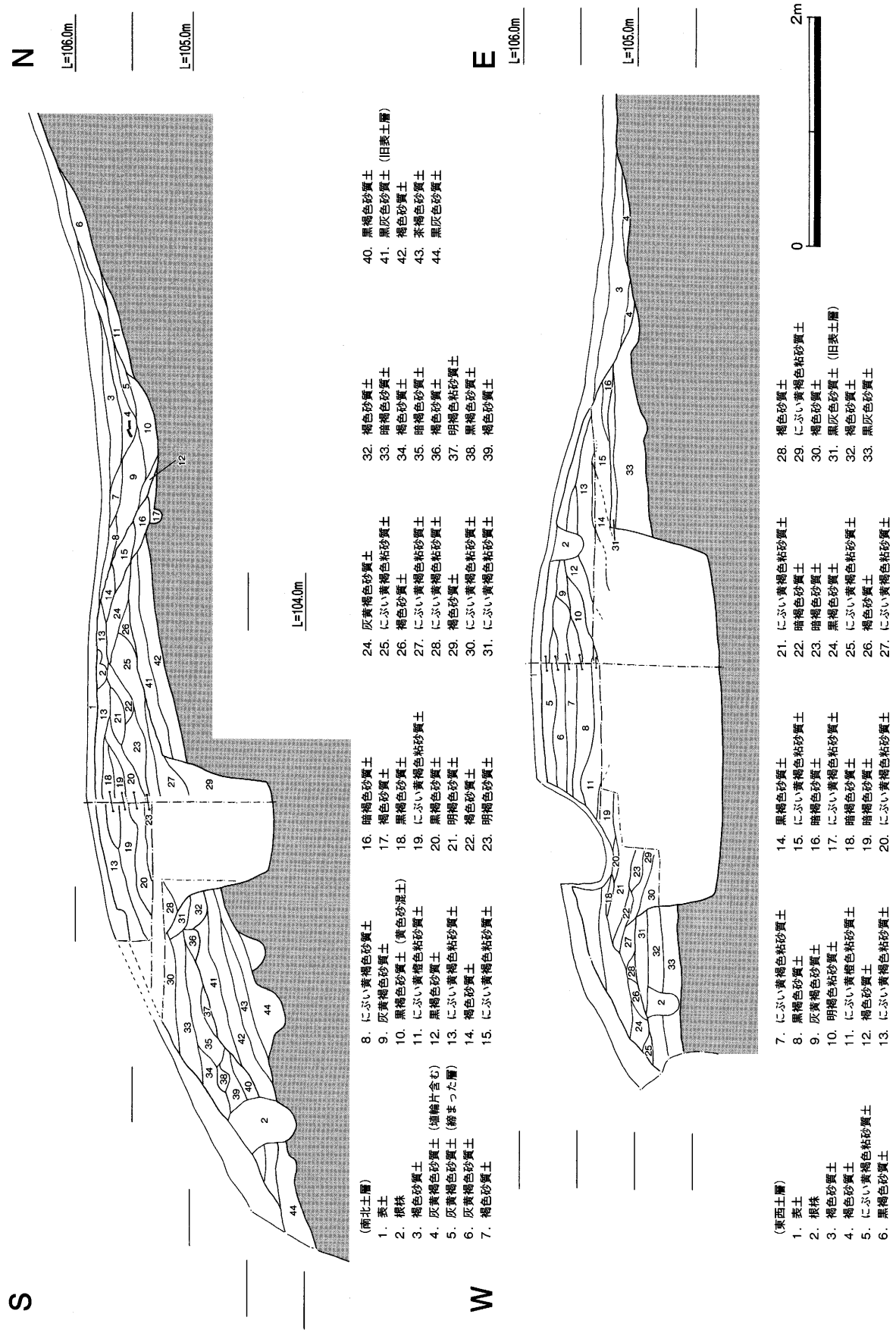
第64図　１号墳調査前地形測量図（1/200）

墳丘（第65・66図）

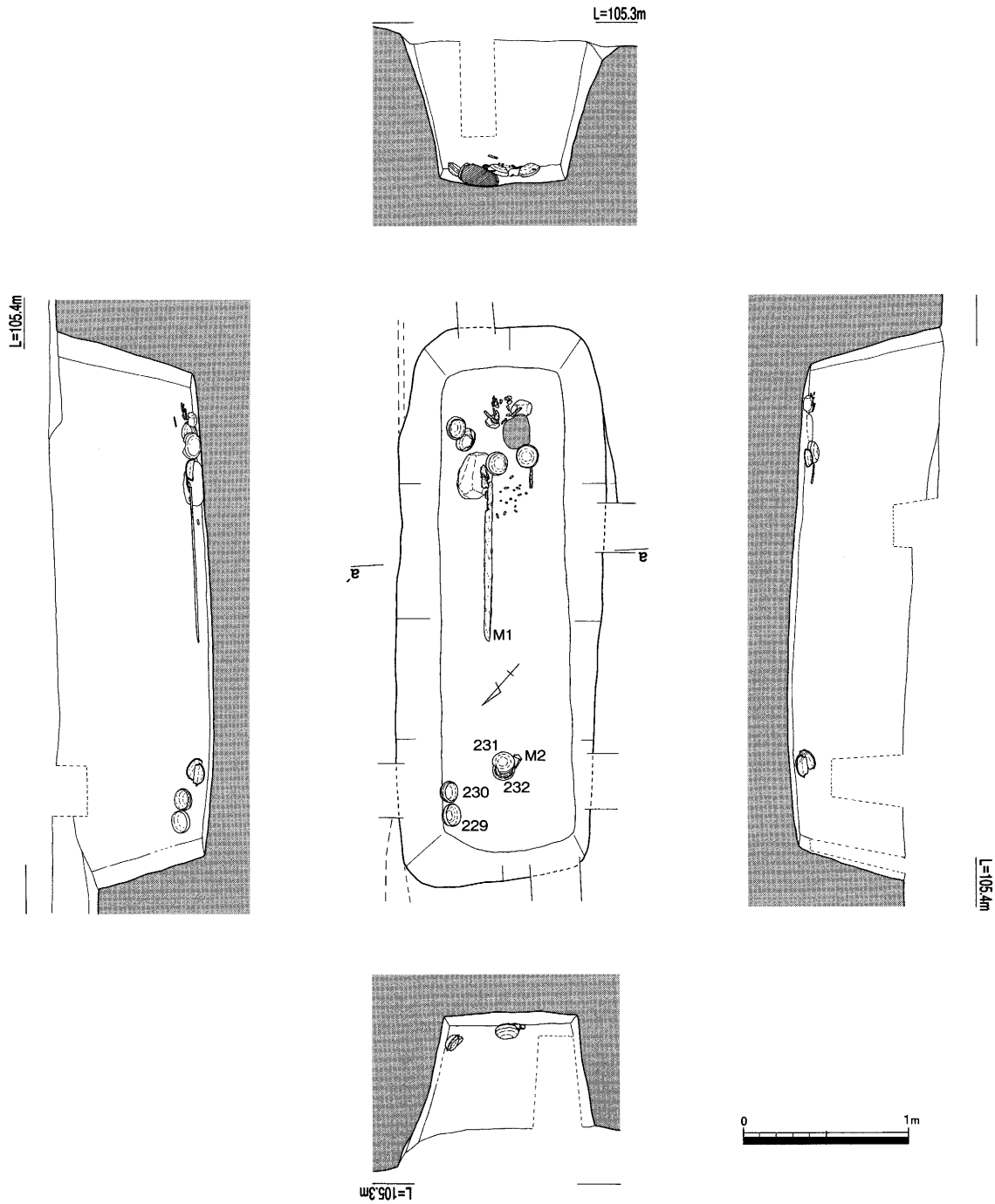
表土除去後すぐに墳丘盛土が現れた。西側および南側は墳丘裾が削平されており、規模は確定できなかったが直径７ｍの円墳と考えられる。墳丘の高さは周溝東側の裾から１ｍを測るのみで、高さは低くかなりの盛土が流出したと考えられる。墳丘は周溝掘削による地山削り出しと盛土により築造される。盛土は主に黄褐色土、褐色、黒褐色土などにより構成され、周溝を掘った際の排土を



第65図　１号墳（1/200）

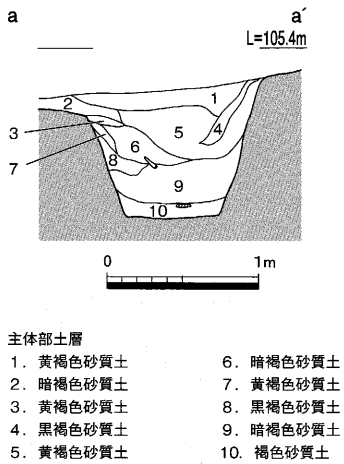


第66図　１号墳墳丘土層断面図（1/50）

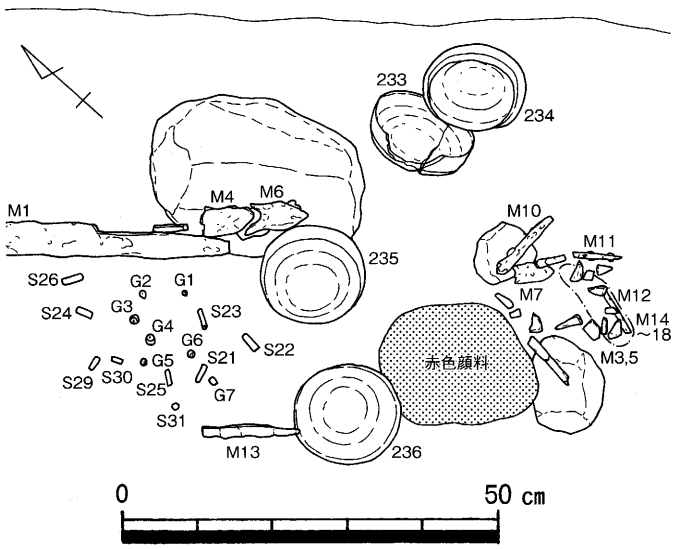


第67図　１号墳主体部（1/40）

盛り上げたものと考えられる。墳丘の構築については大きく２段階に分かれる。南北断面の観察から、まず古墳築造時の旧表土層である黒灰色砂質土上の谷側の低い方に土を盛り上げて水平な面を作っている。付近の傾斜はややきつく、盛土は50cm程度である。墓壙を掘削して棺を設置した後に、さらに50cm程の盛土をして墳丘形状を整えたと考えられる。盛土の最大厚は谷側の低い場所で70cmを測る。また、断面の観察結果から、墳丘北側裾には墳丘整形後とみられる細かな単位の盛土の積み上げ状況が見られた。これは、最終段階に埴輪を設置に伴う盛土状況を示すものと考えられる。



第68図　１号墳主体部土層断面図（1/50）



第69図　１号墳主体部遺物出土状況（1/10）

主体部

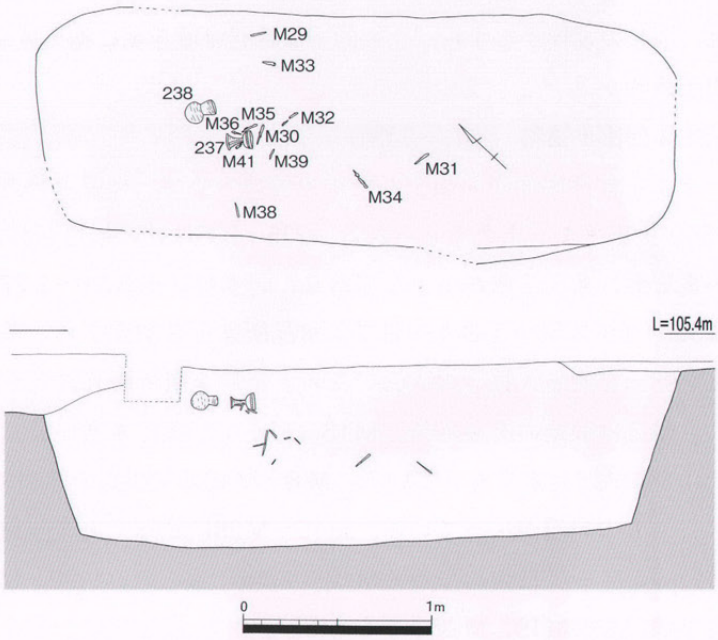
・主体部１（第67～69図）

主体部は墳丘の中央部で検出された。墓壙は北側が旧表土層上、南側は盛土により築かれた平坦面上から掘りこまれている状況である。墓壙の平面は長方形を呈し、規模は長さ3.4m×幅1.2m、深さ山側で90cmを測る。墓壙は垂直に近い傾斜で掘り込まれており、底部はほぼ平坦であった。主軸は真北から北－47°－西である。埋葬には木棺が使用されたと考えられる。墓壙埋土は黄褐色と暗褐色系の土が堆積し、上層は木棺腐食後の盛土崩落土、底部付近は木棺内に流入したとみられる砂質土で構成される。木棺の痕跡や据付痕は確認できなかった（第68図）。床面直上において、約5cm程浮いた状態で土器や鉄製品など多くの副葬品が検出された。特に東と西小口付近にまとまっている。東小口側では、須恵器杯蓋**235**と杯身**236**を伏せて並べて置いて、枕として使用した状況である（第69図）。すぐ東側で直径20cmの範囲に赤色顔料の付着が認められることや、土器枕の西側に接して管玉、ガラス小玉、水晶製丸玉などの装身具類がまとまって出土していることなどから、東頭位の埋葬と考えられる。その他、須恵器杯蓋**233**・杯身**234**が北側壁から倒れるような状況で出土している。大振りの鉄刀**Ｍ１**は、土器枕の北壁寄りで切先を西に向けている。柄部分に重なるように鉄鏃**Ｍ４・Ｍ６**が２基置かれ、南側では刀子**Ｍ13**が切先を西に向け置かれている。その他、30cmを測る大型の自然石が検出されたが、棺を固定するものか不明である。東小口端では鉄鏃、鉄鐸、鉄鎚が雑然とした状態で検出された。鉄鏃などの当初の副葬状況は不明である。鉄鐸についてはまとまって出土しており、袋状の入れ物にまとめられていたと考えられる。西小口側では、東の土器枕からは1.7m離れた中央付近において須恵器杯蓋**231**・杯身**232**を重ねている（第67図）。その下に鉄斧**Ｍ２**を挟んだ状態で出土しており、意図的な副葬とみられる。その他、北側壁で須恵器杯蓋**229**・杯身**230**が傾いた状態で出土している。

・主体部上面（第70図）

墳丘の掘り下げ中に墓壙検出面西側において、須恵器、鉄鏃が出土した。須恵器は高杯**237**、直口壺**238**が横倒しの状態で出土している。いずれも墓壙床面からは70cm高い位置で、一見規則的な配置

と見られるが、当初の設置状態は不明である。鉄鏃については、平面・高さなどの出土状態、および切先の方向についても不規則であった。平面上は最大で１ｍほど離れており、床面からは40cm～70cm高い位置にある。これらの遺物については、土器が出土した段階で別の主体部の可能性も考えて精査したが、平面・断面観察では明確な墓壙などは確認できなかった。そのため木棺埋葬後の蓋上面もしくは棺を埋め戻した盛土上に副葬したものと考えられ、鉄器などは木棺腐食後の崩落により大きく下方へ落ち込んだと考えられる。



第70図　１号墳主体部上面遺物出土状況（1/40）

外表施設（第65図）

周溝は墳丘を囲うように検出された。西側は削平のため、北側から東側が残存する。幅2.5m、深さ50cmを測る。北側底面が高く、東西に徐々に低くなっていく。断面は皿状で、黒褐色砂質土、褐色砂質土が堆積している。遺物は、周溝北半分を中心に底面から浮いた状態で多くの埴輪片や若干の須恵器等が出土した。一方で南側はあまり出土せず、大半が流失したようである。埴輪については現位

１号墳主体部（西から）

１号墳主体部遺物出土状況（北から）

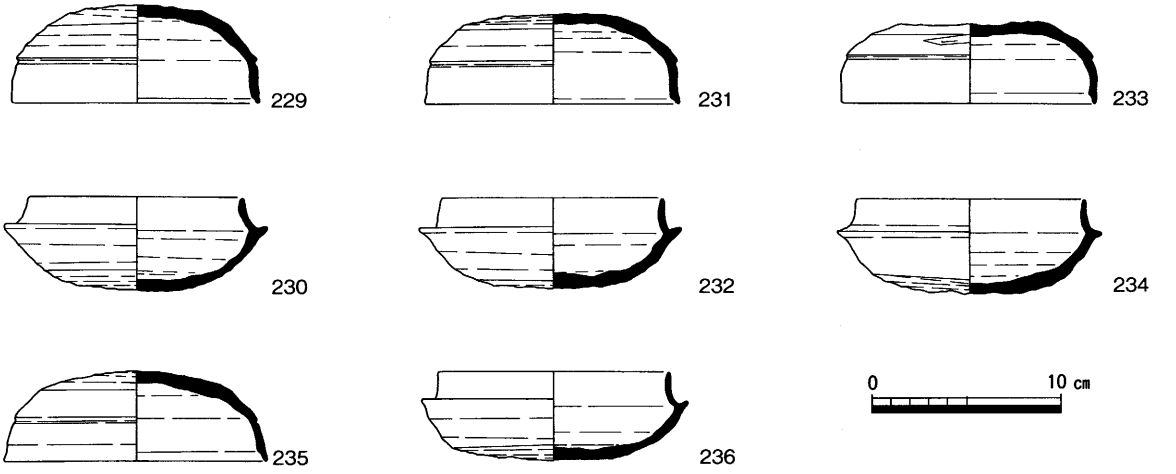
１号墳主体部上面遺物出土状況（北から）

置を保つものは確認されず、設置痕跡も確認できなかったが、北半分の出土で10個体程度と推測され、墳丘の規模からすれば比較的密な状態で墳丘裾に据え置かれていたと考えられる。

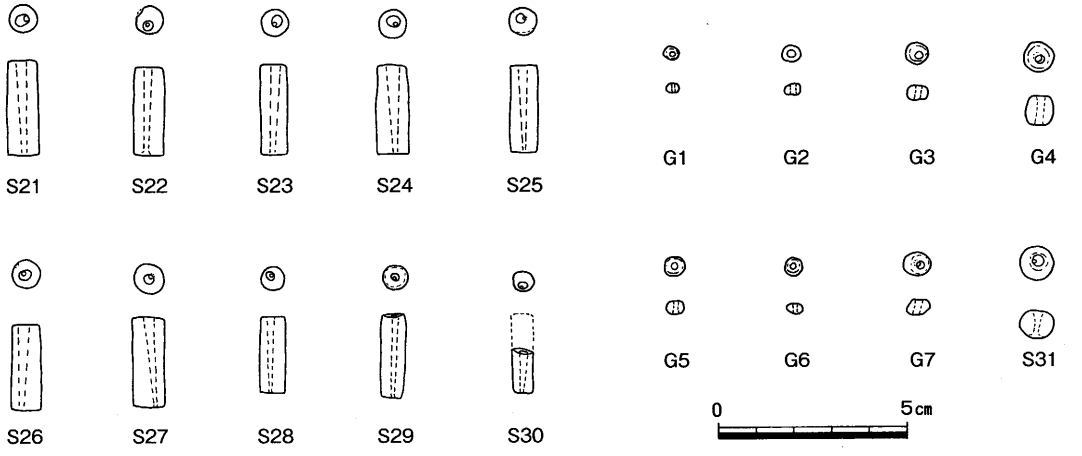
出土遺物

・主体部出土遺物（第71～74図）

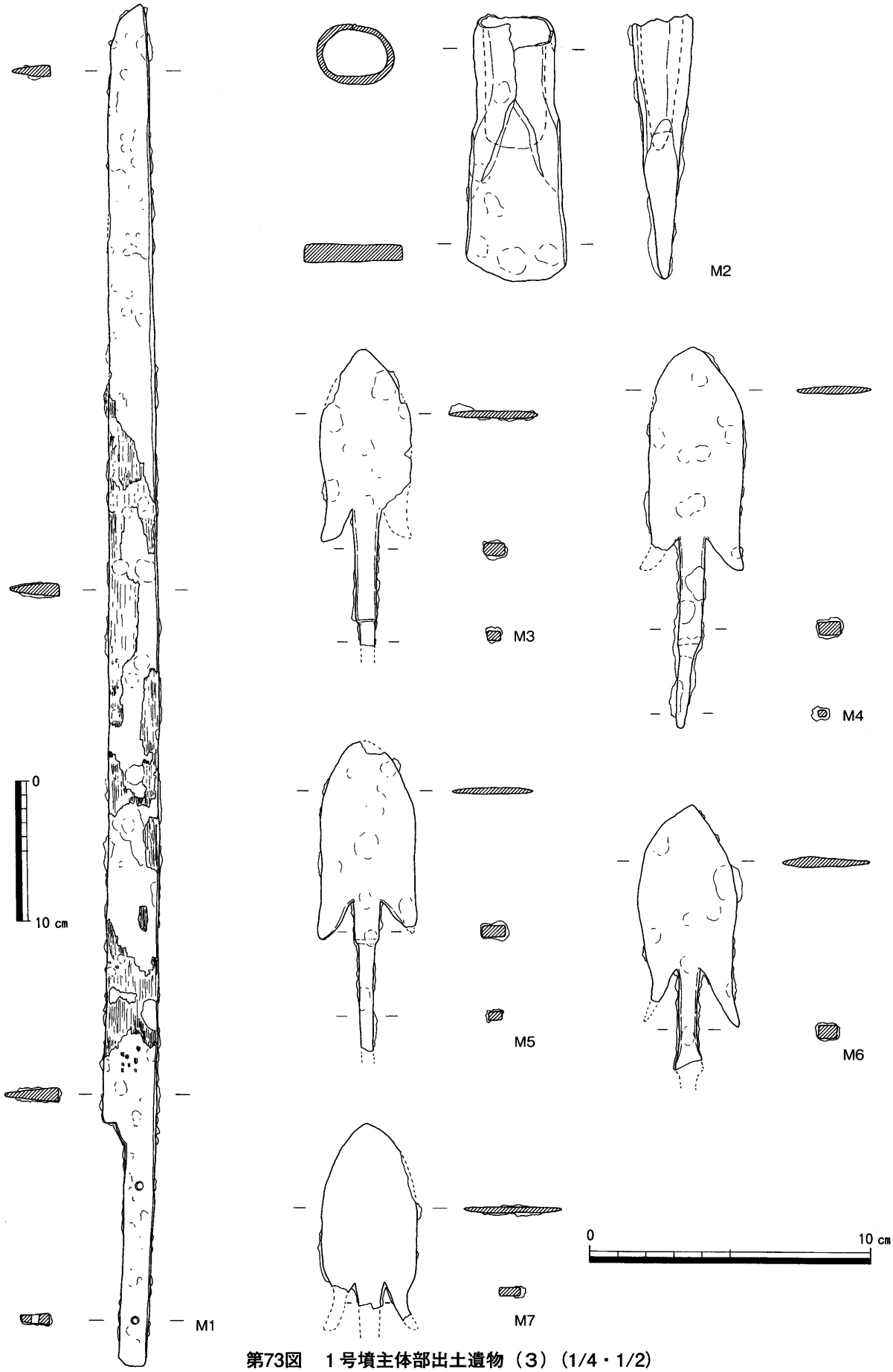
まず主体部底面から出土した須恵器は８点で、杯蓋と杯身**229～236**がある。出土状況から**229～234**が上下でセットと考えられる。**235・236**は枕に転用されたものである。装身具では管玉が10個、小玉７個、丸玉１個が出土しており、碧玉製管玉**Ｓ21～Ｓ27**、緑色凝灰岩製とみられる管玉**Ｓ28～Ｓ30**、ガラス製小玉**Ｇ１～Ｇ７**、水晶製丸玉**Ｓ31**がある。鉄器は28点が出土している。鉄刀**Ｍ１**は長さ98cmを測る大振りの太刀である。茎に２箇所の目釘孔がある。刃部には鞘の木質が遺存している。**Ｍ２**は鍛造の有袋鉄斧、**M13**は刀子で、茎に木質が残る。鉄鏃は**Ｍ３～M12**がある。**Ｍ３～Ｍ７**は平根式で逆刺をもっている。**Ｍ８・M10**は尖根式で鏃身の長いものである。**M14**は鉄鎚と考えられ、一方の先端が尖っている。**M15～M28**は鉄鐸である。**M16**で２個重なっているのをいれると合計15個となる。最大のもので**M18**の4.7cmを測るが、**M20～M24**の３cm前後のものが多い。このうち舌を残すもの**M19**、**M22**などもある。



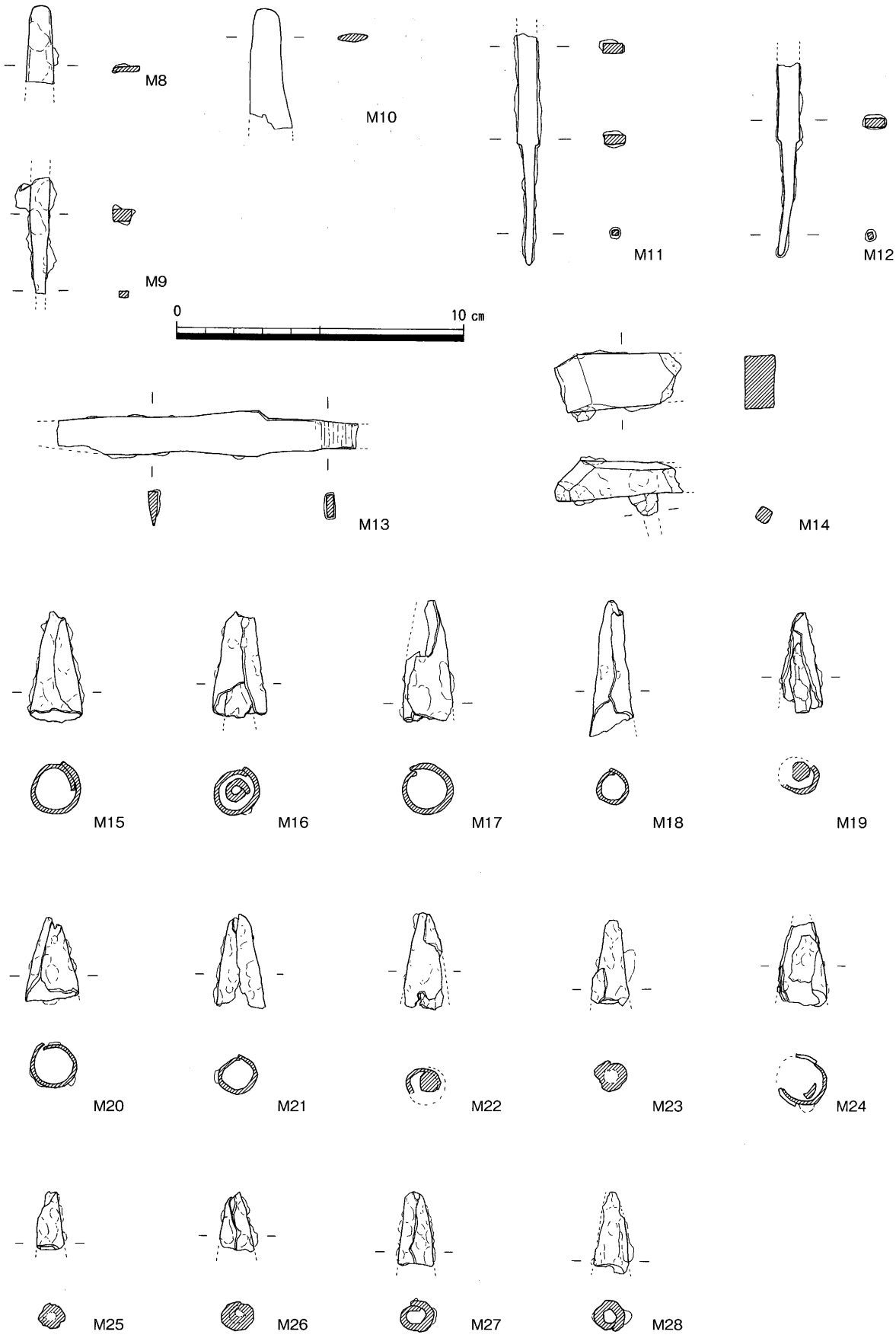
第71図　１号墳主体部出土遺物（１）（1/4）



第72図　１号墳主体部出土遺物（２）（1/2）



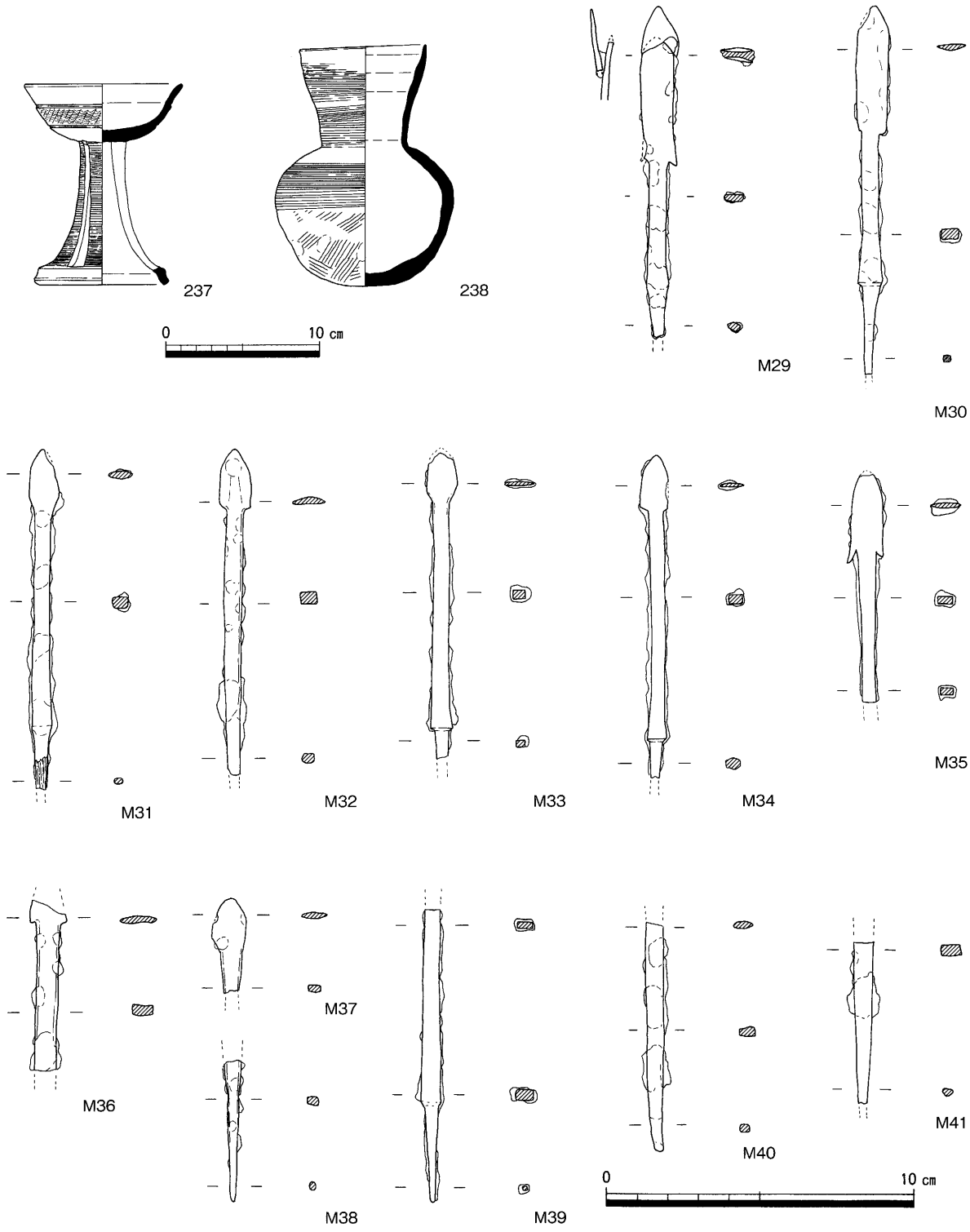
第73図　１号墳主体部出土遺物（３）（1/4・1/2）



第74図　１号墳主体部出土遺物（４）（1/2）

・主体部上面出土遺物（第75図）

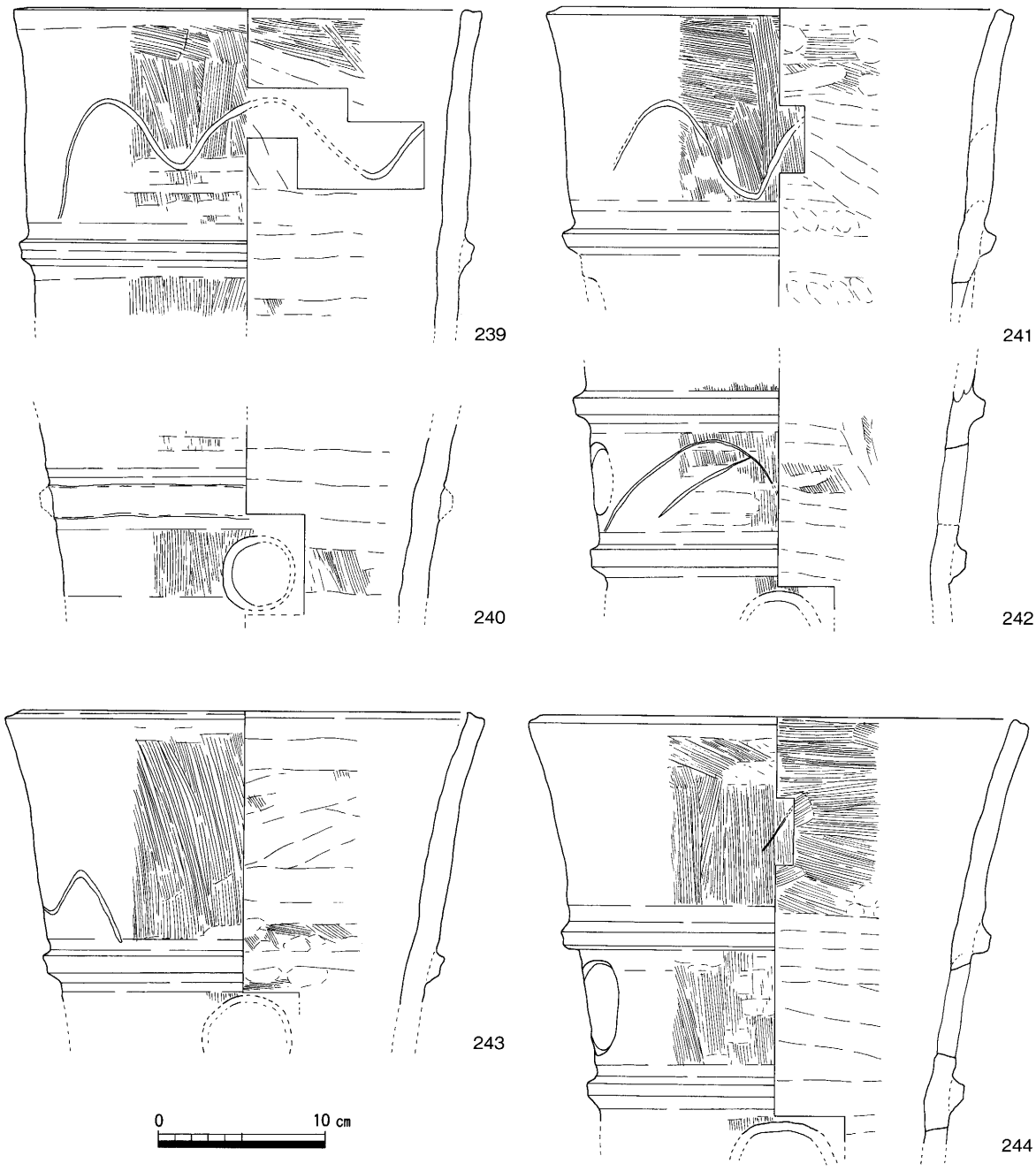
主体部上面で出土した遺物は、須恵器２点、鉄器13点である。須恵器はいずれも完形で、３方向１段透かしを有する高杯**237**と、直口壺**238**がある。鉄器では鉄鏃**M29～M41**がある。形式のわかる鉄鏃はすべて尖根式で占められ、鏃身のやや長いもの**M29・M30**、逆刺をもつ**M35**や、鏃身の短いもの**M31～M34**、**M36～M41**がある。



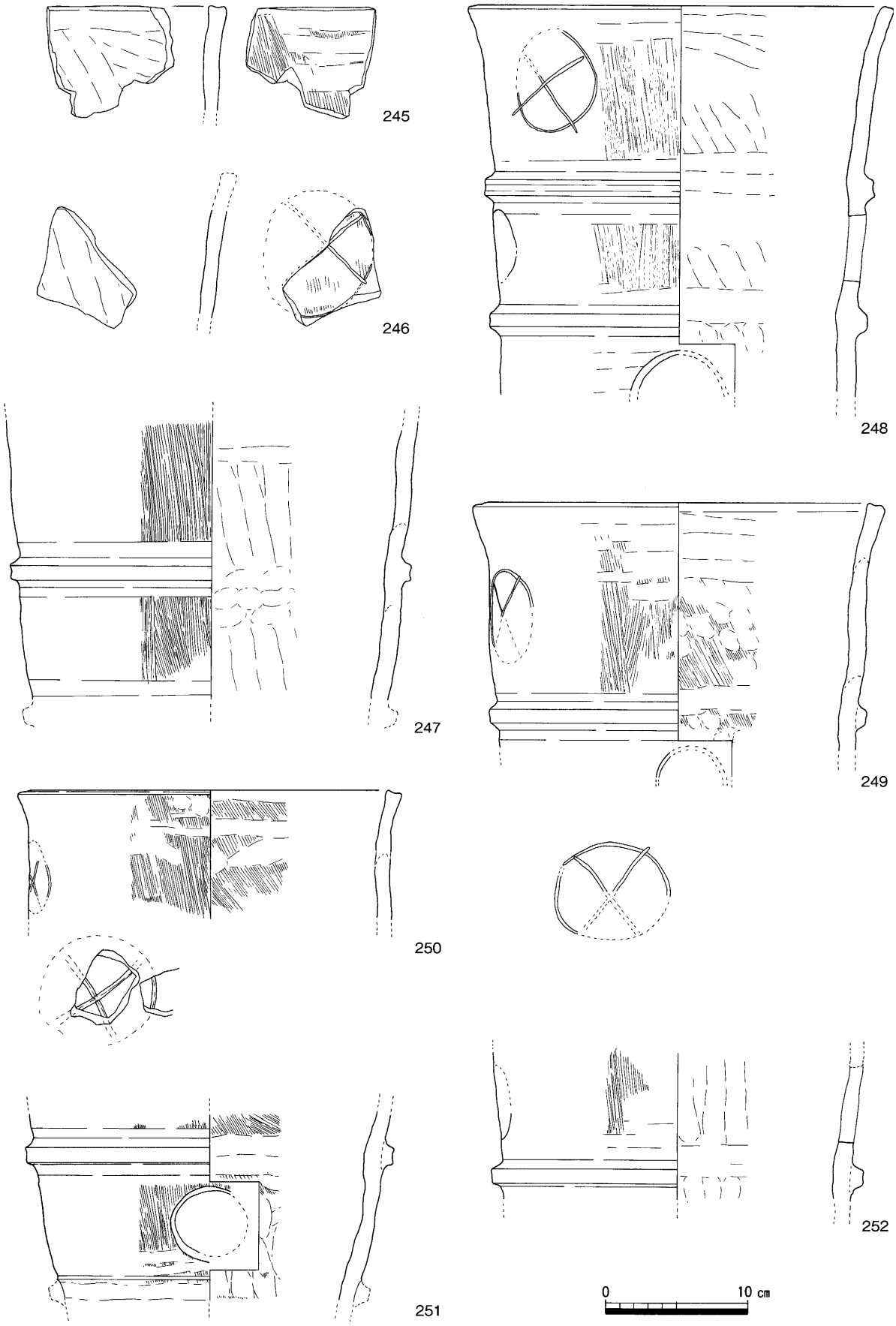
第75図　１号墳主体部上面出土遺物（1/4・1/2）

・**周溝出土遺物**（第76～79図）

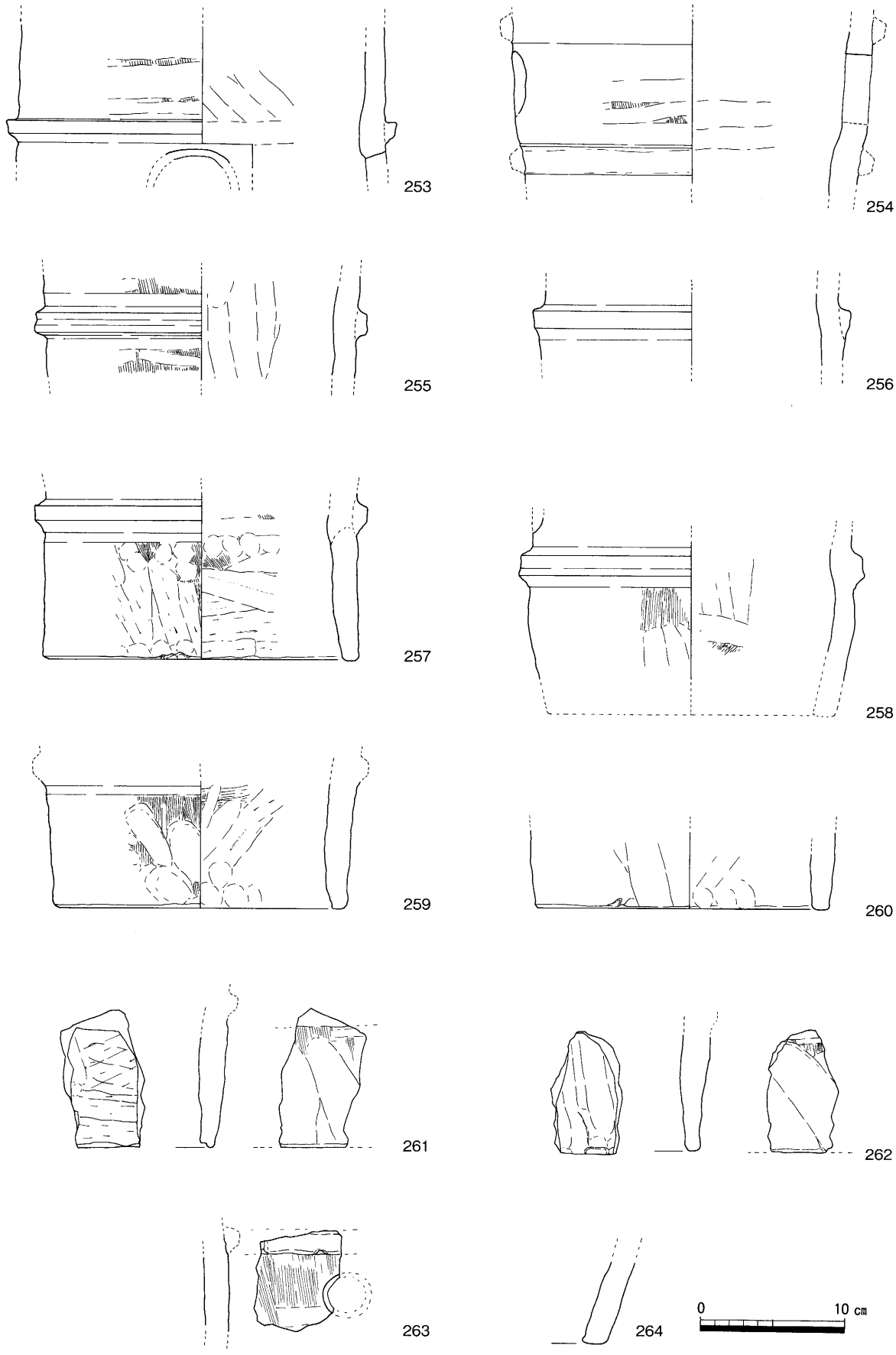
周溝からは須恵器、埴輪が出土している。埴輪は比較的多く出土している。円筒埴輪**239～264**、朝顔形埴輪**265～267**、形象埴輪とみられる**268**がある。全体的に口縁部の残りが良く、底部は少ない印象である。ここでは口縁部同士接合していなくても、同一個体と判別が可能なものについては別々に図化していない。そのため、掲載した口縁部の数がおよその個体数を表していると考えられる。口縁部の数で計算すれば、円筒埴輪が８個体、朝顔形が２個体と考えられる。これらは大きく黄褐色・赤橙色などの色調や焼成などの特徴によって数種類に分けることができる。口縁部と体部とが同一と考えられるものには、**239**と**240**、**241**と**242**、**245～247**、**250**と**251**があり、底部とは確実で



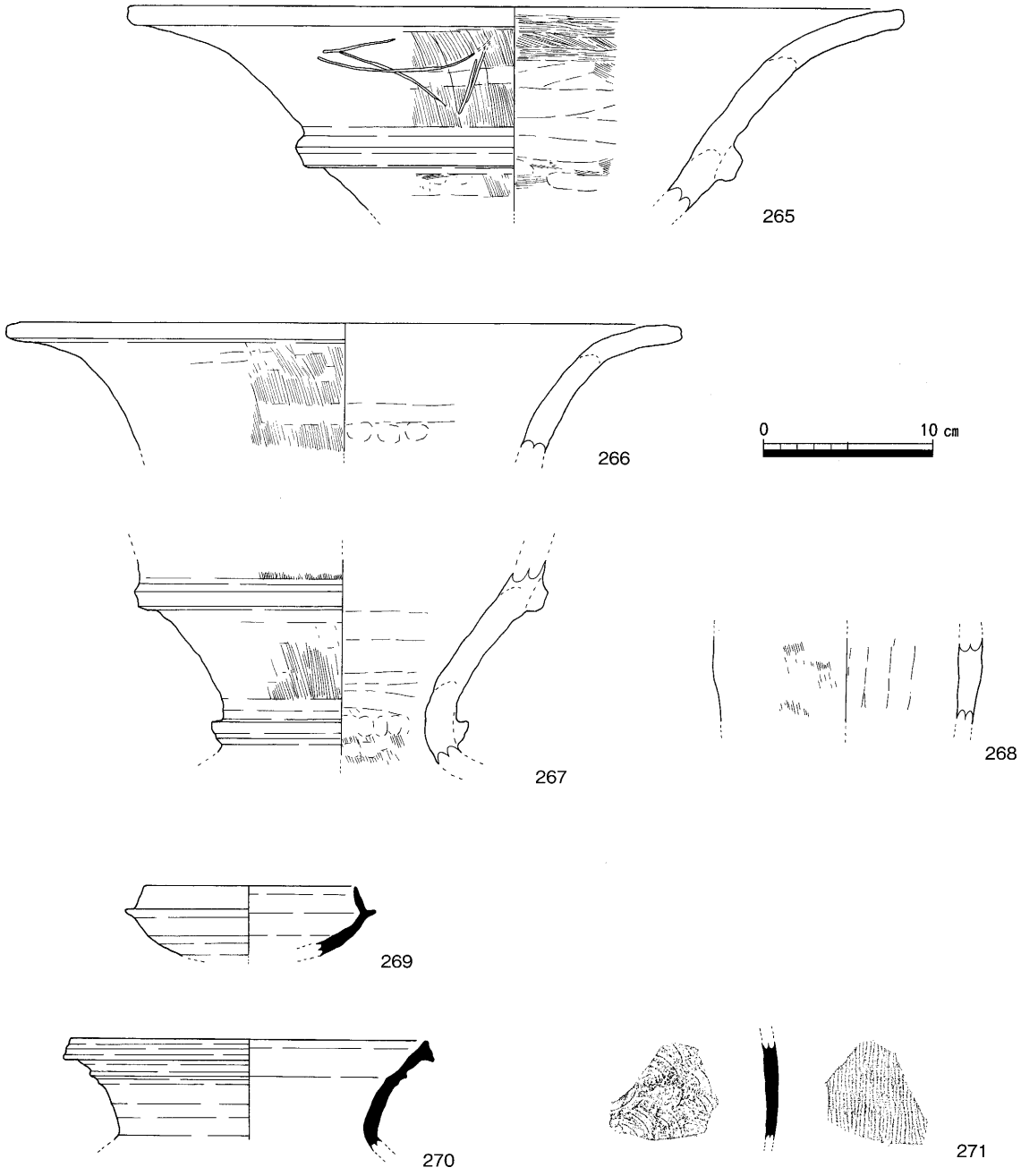
第76図　１号墳周溝出土遺物（１）（1/4）



第77図　１号墳周溝出土遺物（２）（1/4）



第78図　１号墳周溝出土遺物（３）（1/4）



第79図　１号墳周溝出土遺物（４）（1/4）

はないものの、**239**と**257**、**241**と**259**、**247**と**258**が同一の可能性が高い。円筒埴輪の形状については、全形のわかるものは無かったが、**244**や**248**などは口縁下に２条の突帯があり、各段にスカシが互い違いに存在することや、**258**など基底部の突帯上の２段目にスカシが存在することから、形状は３条突帯４段の可能性が高いと考えられる。その他、口縁部に「～」や「⊗」などの共通するヘラ記号をもつものが多い。この他、須恵器では少量ながら杯身**269**、壺**270**・**271**がある。

築造時期

以上、出土遺物などから小池谷１号墳は、おおむね古墳時代後期中葉に築造されたと考えられる。

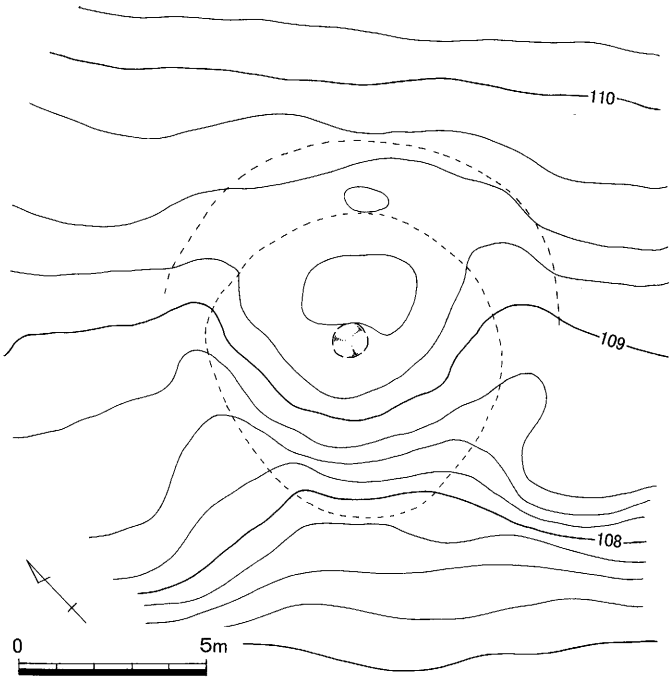
２．小池谷２号墳

調査前状況（第80図）

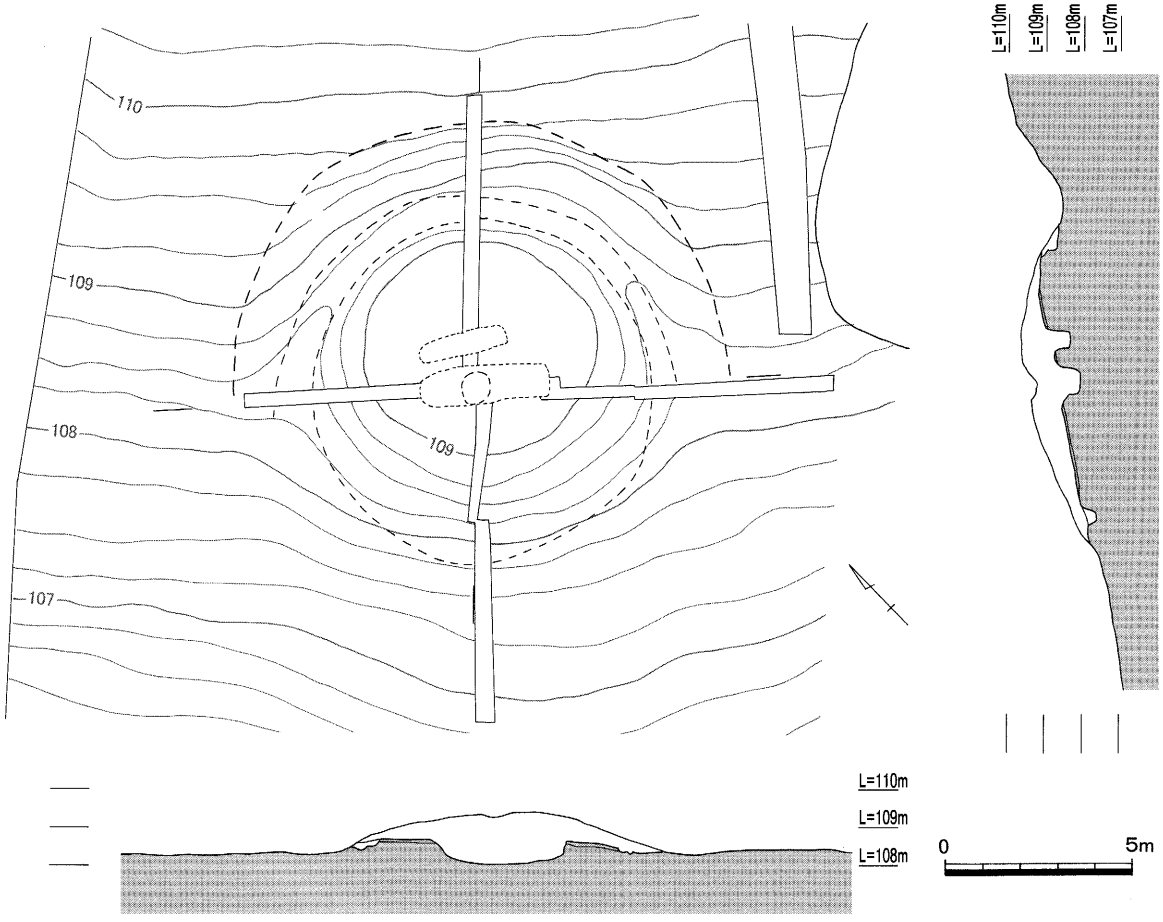
西斜面の中腹、標高109.00m付近に位置し、傾斜が急になる変換点にあたる。調査前の観察では、墳丘の高まりは明確に確認できたが、近年の削平の際に押し出されたと見られる土が墳丘の周囲を埋めており、周溝の形状などはよくわからない状況であった。この造成土を取り除いた段階で、ようやく直径９ｍほどの墳丘が確認された。墳丘中央には盗掘穴とみられる直径60cmの穴が確認された。盗掘穴はかなり深く掘られている状況であった。

墳丘（第81・82図）

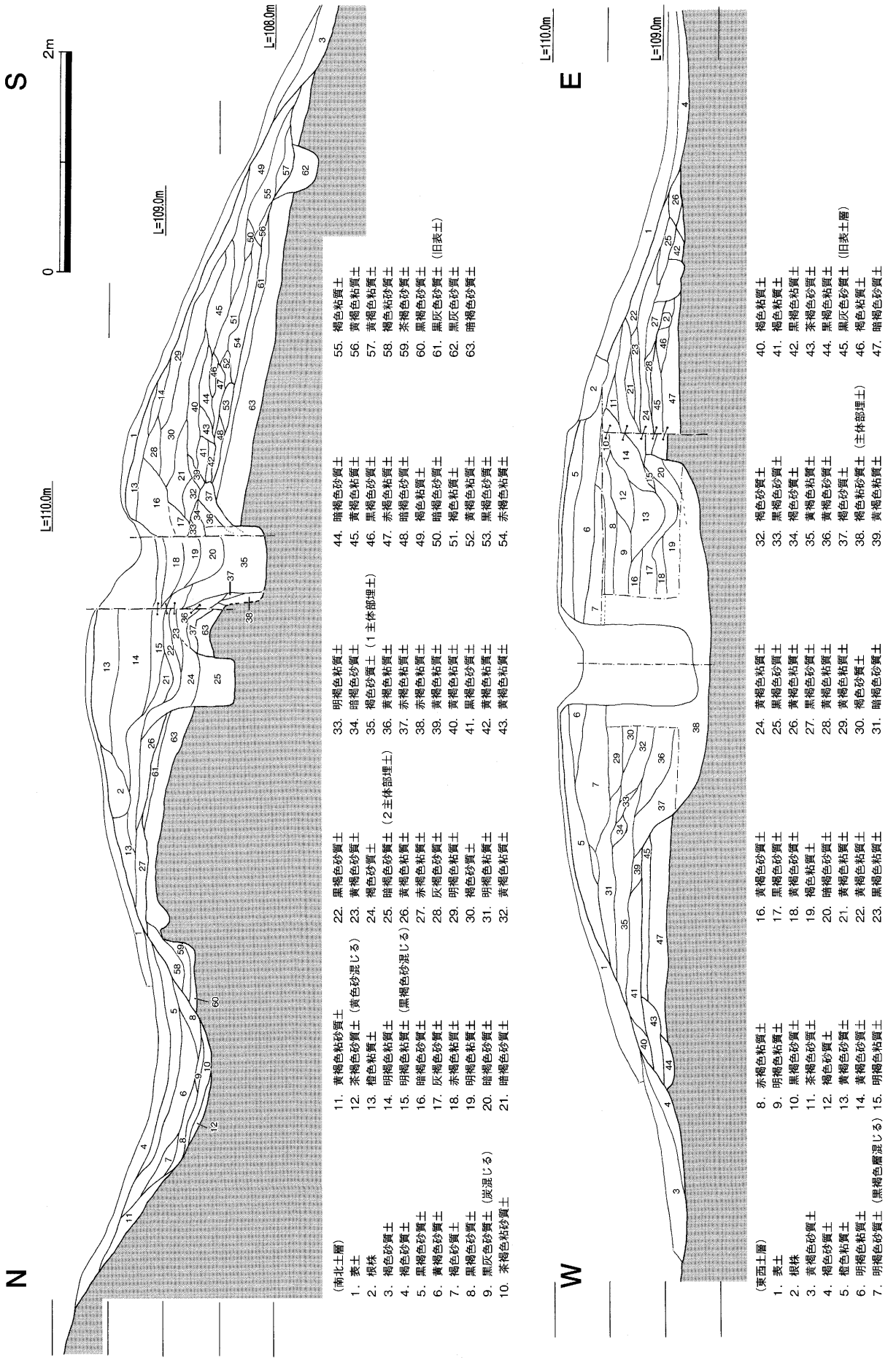
表土除去後すぐに墳丘盛土が現れた。直径９ｍの円墳と考えられる。墳丘の高



第80図　２号墳調査前地形測量図（1/200）



第81図　２号墳（1/200）



第82図　２号墳墳丘土層断面図（1/50）

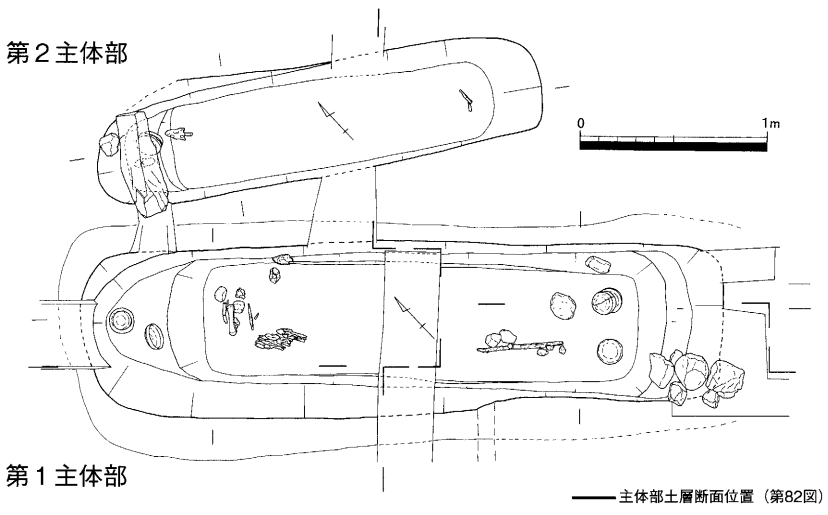
さは周溝北側裾から1.0mを測る。墳丘は周溝掘削による地山削り出しと盛土により築造される。墳丘の盛土は主に黄褐色土、暗褐色土などにより構成され、周溝を掘った際の排土を盛り上げたと見られる。墳丘の構築については、南北断面の観察から推測すると、まず古墳築造時の旧表土層である黒褐色砂質層上、谷側の低い方に細かな土を盛り上げて水平な面を作っている。付近の傾斜はきついことから、盛土は50cm程度行っている。この後に２つの主体部が順次構築されていくが、これについては第１主体の墓壙を埋めた層を第２主体の墓壙が切っていることが土層断面で確認できることから、最初に第１主体の棺を設置後、一旦20cm程度盛土が行われて墳丘が構築されたと考えられる。一定期間経過後、第２主体の棺を設置してもう一度盛土を行い、現在の墳丘の状態に整えられたと考えられる。最終的に墳頂までの盛土は１ｍを測る。第２主体の設置にあたっては、埋まった第１主体をうまく避けるように墓壙掘削がなされており、第１主体検出面の端でみつかった石材の集積が墓標として配置されていた可能性も考えられる。

主体部（第83図）

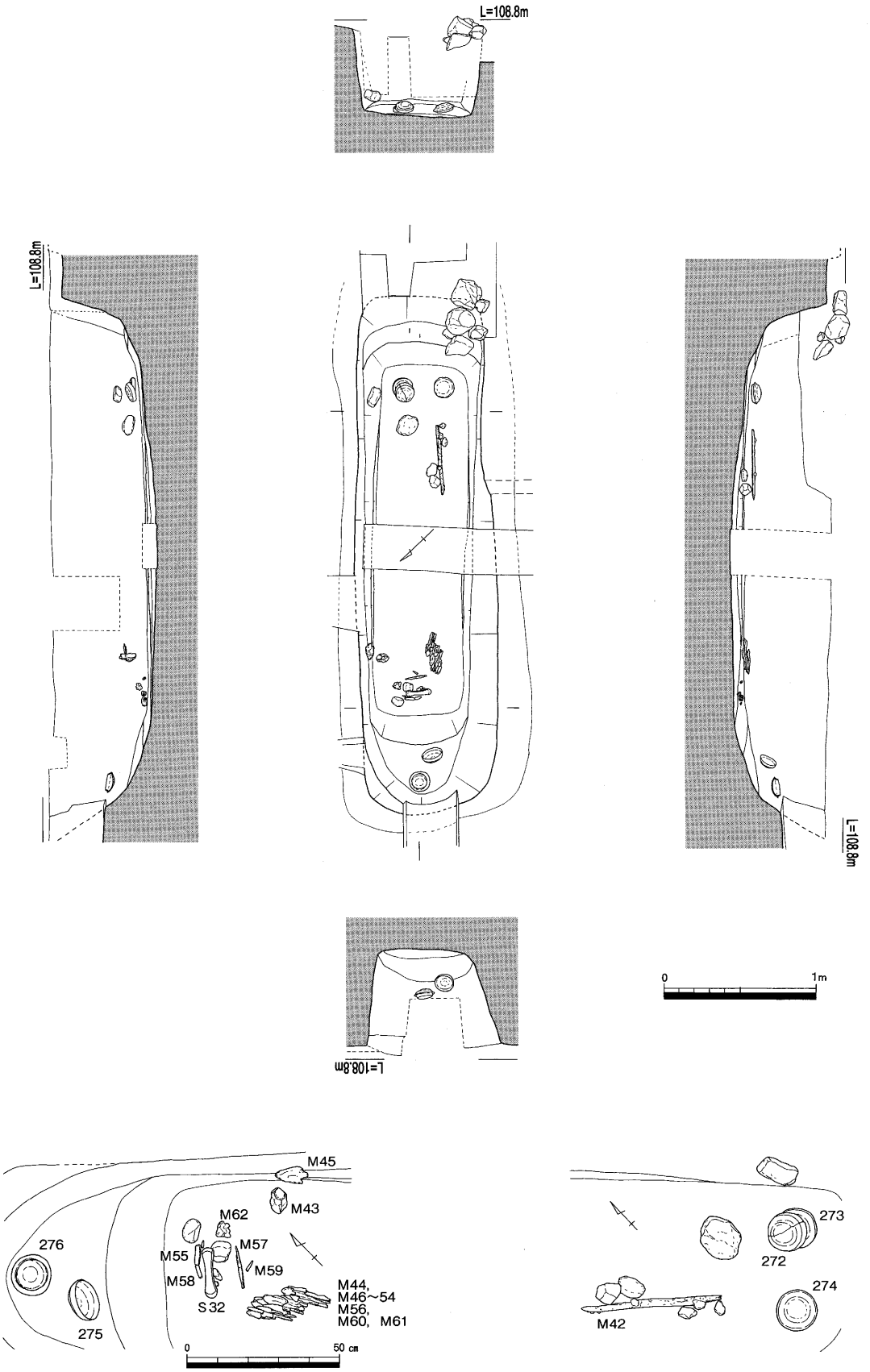
墳丘の中央部において、２基の埋葬施設が発見された。山側では墳丘盛土下の旧表土層面、谷側では盛土による平坦面上から墓壙が検出された。第１主体を設置して一定期間経った後に第２主体が築かれている。時期差のためか２基は平行ではなく、第１主体との距離は第２主体の西端で30cm、東端で60cm離れている。主軸は第２主体の方が10°西に振っている。

・第１主体部（84図）

まず第１主体は、墓壙平面が長方形を呈し、規模は長さ3.4m×幅0.9m、深さ60cmを測る。主軸は真北から北－43°－西である。墓壙内の埋土は褐色砂質土が認められた。木棺腐食後に土砂が流入したと考えられ、上層には盛土の崩落が認められた。墓壙は南北側、東側はほぼ垂直に近い傾斜で掘り込まれていたが、西側は緩やかな傾斜で掘りこまれる。平面も西側のみ先細りしたような形状が確認され、墓壙が一見舟形を呈している。底部もほぼ平坦であった。このことから埋葬には舟形の木棺が使用された可能性がある。木棺の規模は、墓壙底面に１cmほどの段差があり、幅は60cmと推定されるが、長さは形状も含めて不明である。土層断面でも木棺の明確な痕跡は検出できなかった。墓壙底面直上概ね５cm浮いた位置で土器や鉄製品など多くの副葬品が検出された。ここでは東・西小口にまとまりが認められた。東小口側では、須恵器杯蓋**272・273**を２枚重ねたものと反転した杯身**274**を並べて設置し、枕として使用していることから東頭位の埋葬と考えられる。鉄刀**M42**は、須恵器枕の西側で切先を西に向けている。西小口側では須恵器の他、多くの鉄製品が確認された。須恵器杯蓋**275**・杯身**276**は西小口端の先細りとなる部分で検出された。鉄器などは、中央からやや西側に集中し、東小口の土器枕から



第83図　２号墳第１・第２主体部（1/40）



第84図　２号墳第１主体部（1/40）・遺物出土状況（１/20）

は1.7m離れた位置である。北壁寄りに鉄鏃**M45**と鉄斧**M43**が確認されたが、底面からやや浮いた状態であり、棺内副葬ではない可能性もある。反対の南壁寄りには切先を西に向けた鉄鏃12点・刀子１点がまとまって出土した。その西側、中央付近に砥石**S32**が置かれ、その周辺に鉄鏃**M55**・**M57**、不明鉄器**M61**が置かれている。その他、重要なものに第１主体の盗掘穴掘り下げ中に、馬具**M63**～**M70**が出土した。盗掘穴の位置から、本来、第１主体中央部西寄りに副葬されていたと考えられる。その他、検出段階で東端で10cm～20cm大の石材６点が据え置かれた状態で出土しており、墓壙の位置を示すためのものか性格は不明である。

・第２主体部（第85図）

第２主体は、第１主体の北側で確認された。墓壙平面が長方形を呈し、規模は長さ2.5m×幅0.6m、深さ60cmを測り、第１主体より小さい。主軸は北－33°－西である。第１主体の主軸とは10°ずれている。墓壙西端の検出面において、長細く加工された石材１点が蓋にするかのように設置されていた。墓壙の埋土は暗褐色砂質土で、木棺腐食後に土砂が流入したと考えられ、上層には盛土の崩落が認められた。墓壙は垂直に近い傾斜で掘り込まれていた。底面も平坦である。埋葬には木棺が使用されたと考えられるが、明確な痕跡は検出できなかった。底面から５cm程浮いた状態で土器や鉄製品などの副葬品が検出された。西小口側には須恵器の杯蓋**277**・**278**を２枚重ねて枕としている。須恵器枕に接して鉄鏃**M71**～**M73**が確認された。**M72**に赤色顔料が付着していることなどからも西頭位と考えられる。東小口側には刀子**M74**が置かれていた。

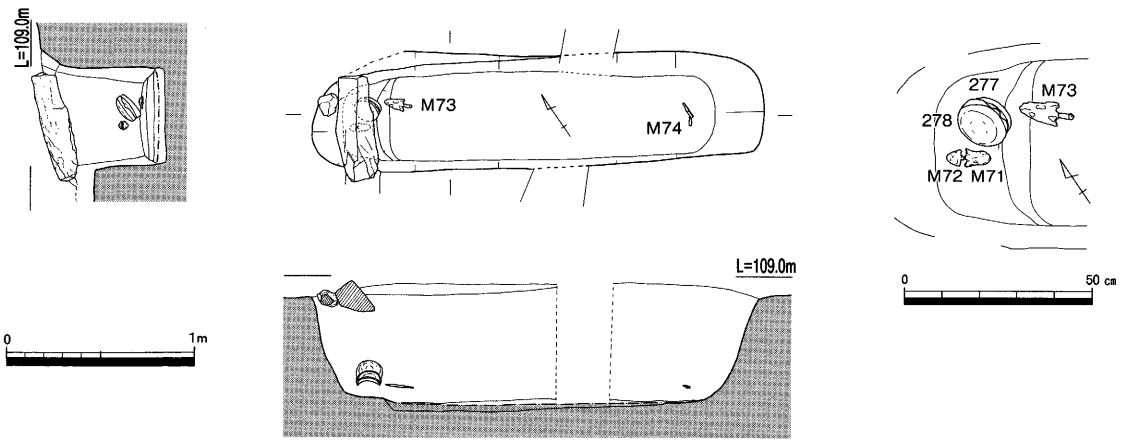
外表施設

周溝は墳丘を囲うように存在する。溝底面北側が高く、両側は徐々に低くなっていき、自然傾斜に合わさる。幅３m、深さは60cmである。断面は椀形に近く、黄褐色砂質土、褐色砂質土が堆積している。埋土中からは須恵器等が若干出土したが、現位置を保つものはなく、浮いた状態である。

出土遺物

・第１主体部出土遺物（第86～89図）

主体部底面から出土した須恵器では杯蓋**272**・**273**・**275**、杯身**274**・**276**がある。杯蓋**275**と杯身**276**は、出土状況はセット関係にあるが、口径が合わず重ならない。石製品では、砥石**S32**があり４面ともかなり磨り減っている。鉄器は29点が出土している。鉄刀**M42**は長さ46cmを測る。**M43**は有袋鉄斧で、柄の木質がよく残っている。その他に刀子の茎とみられる**M61**がある。鉄鏃は**M44**～**M60**



第85図　２号墳第２主体部（1/40）・遺物出土状況（１/20）

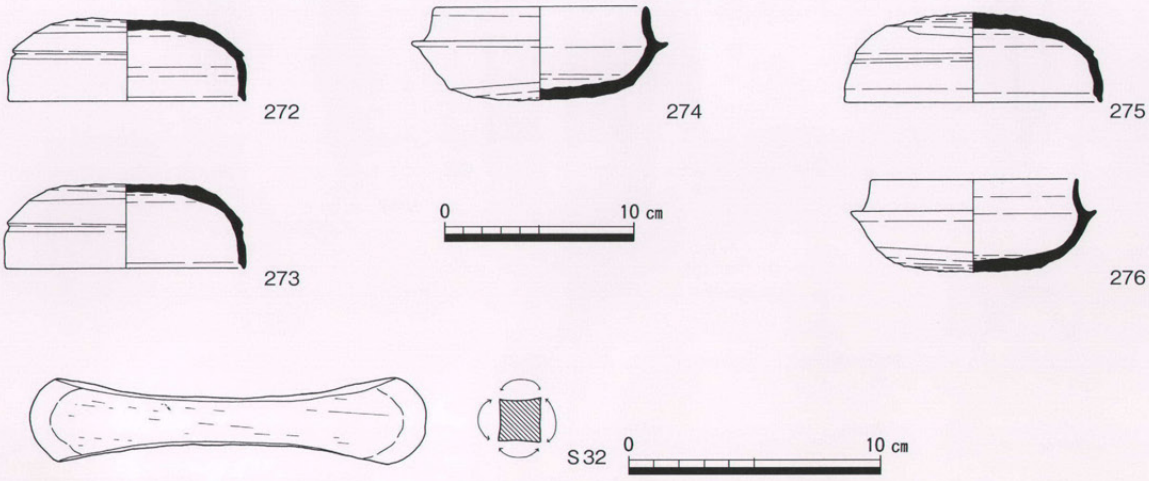
２号墳第１・第２主体部（南から）

２号墳第１主体部遺物出土状況１（南から）

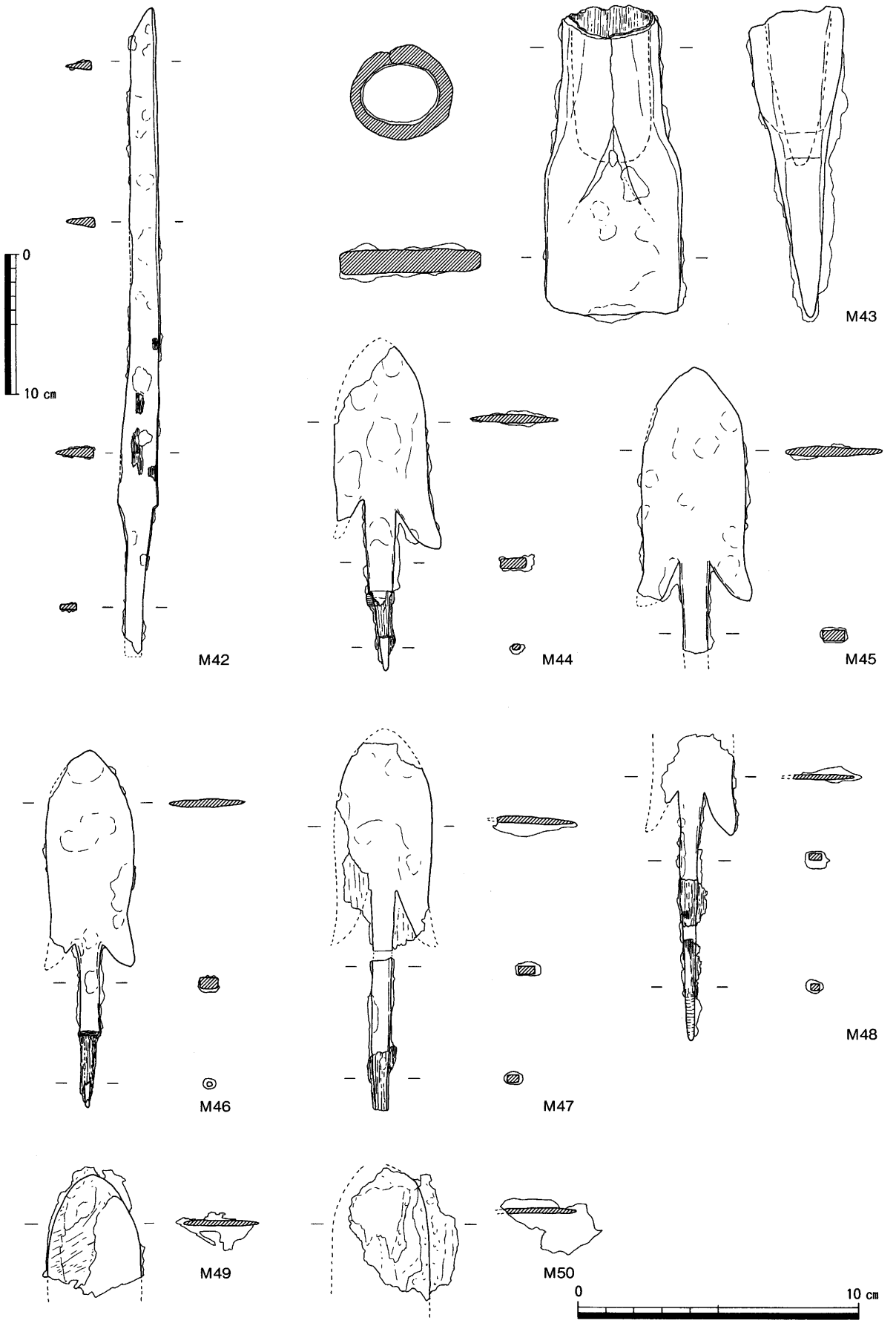
２号墳第１主体部遺物出土状況２（南から）

２号墳第２主体部遺物出土状況（東から）

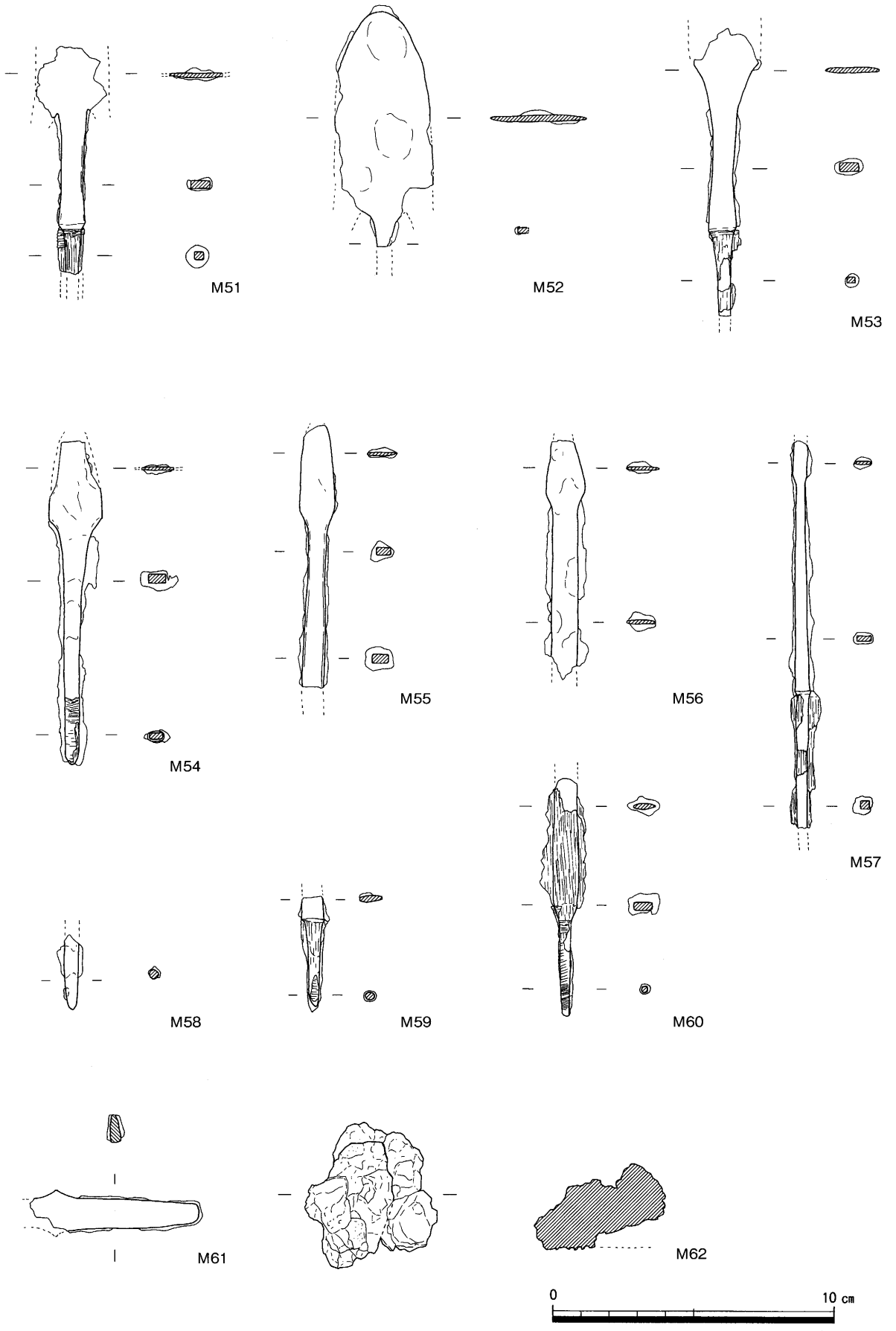
がある。M44～M54は平根式でM44～M52は逆刺をもつもの、M53・M54は破片のため確証はないが、関が外に開く形態と考えられる。M55～M57は尖根式である。M55・M56は鏃身の長いもので、M57は非常に細い形態である。また、不明鉄器としたM62は当初鉄滓と公表していたものであるが、ここで訂正し、鉄滓ではなく種類は特定できないもののなんらかの鉄製品と考えられる。錆びぶくれ等により形状がわからないものとなっている。その他、重要なものに盗掘穴の埋土中から馬具M63～M70が出土している。M63は轡である。鏡板は破損しているため形式は確定できないものの、素環鏡板付轡と考えられる。ハミは２連式で、長さ10cmのものを連結している。引手は長さ14cmで、先



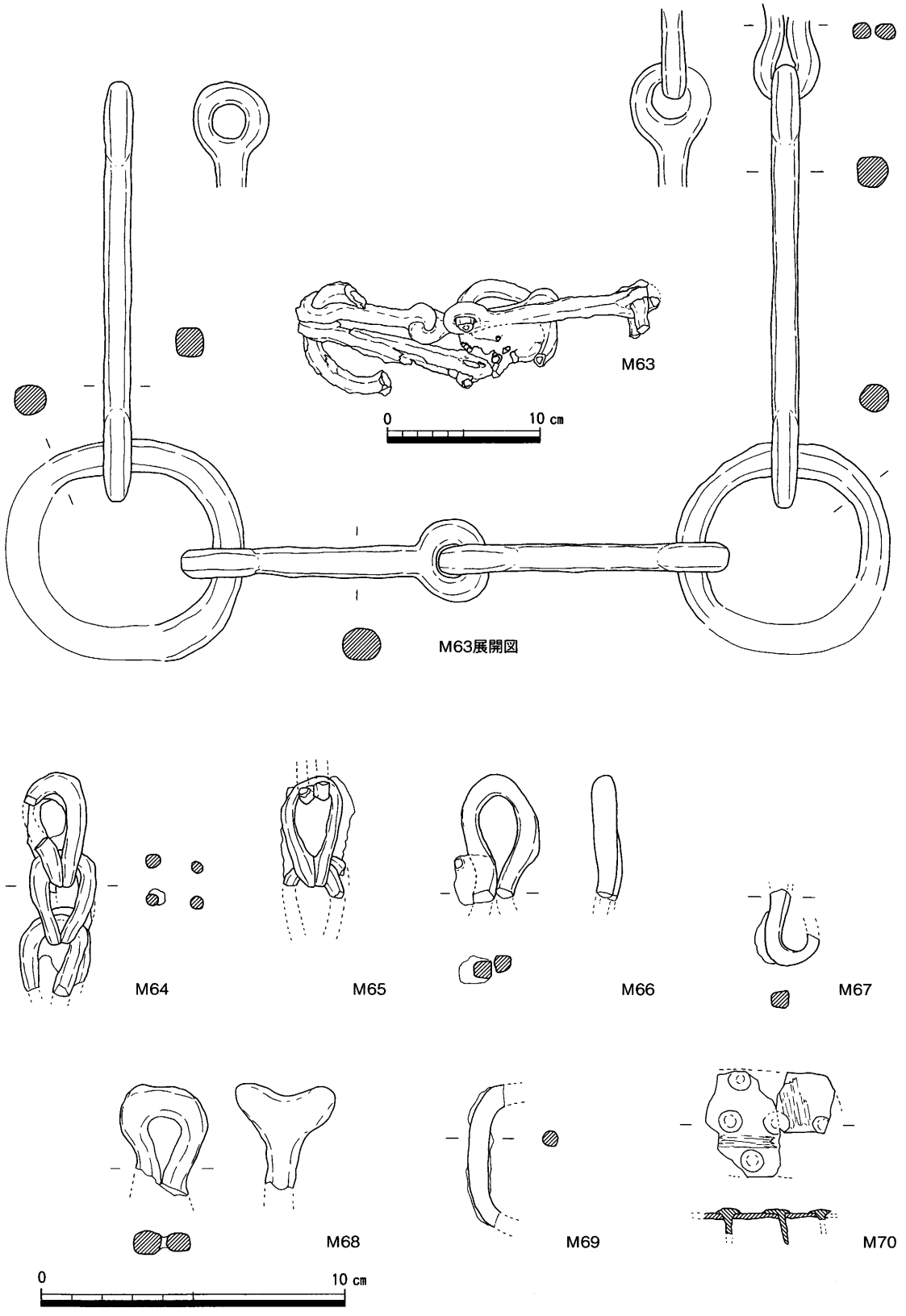
第86図　２号墳第１主体部出土遺物（１）（1/4・1/3）



第87図　２号墳第１主体部出土遺物（２）（1/4・1/2）



第88図　２号墳第１主体部出土遺物（３）（1/2）



第89図　２号墳第１主体部盗掘穴出土遺物（1/4・1/2）

端には別の金具を用いて引手壺としている。**M64・M65**は兵庫鎖で、折り曲げの単位は3.5cm前後である。著しい錆びにより轡部分に小さい兵庫鎖の部品が付着したままのものもあり、それらは図化できておらず、兵庫鎖の点数はもう少し増加すると考えられる。これらは引手壺に繋がる可能性が考えられる。その他には、鉸具**M69**、留金具**M70**がある。**M66・M67**は不明製品としたもので、連結金具と考えられる。**M66**は錆びて轡に付着しているものを図化したものである。

・第２主体部出土遺物（第90図）

底面から出土した須恵器では杯蓋**277・278**がある。鉄器では刀子**M74**、鉄鏃**M71～M73**がある。鉄鏃**M73**には鏃身中心部に木質が残っており、木製の柄を挟んで固定したと考えられる。**M72**は関が直角に広がる三角形式である。

・周溝出土遺物（第91図）

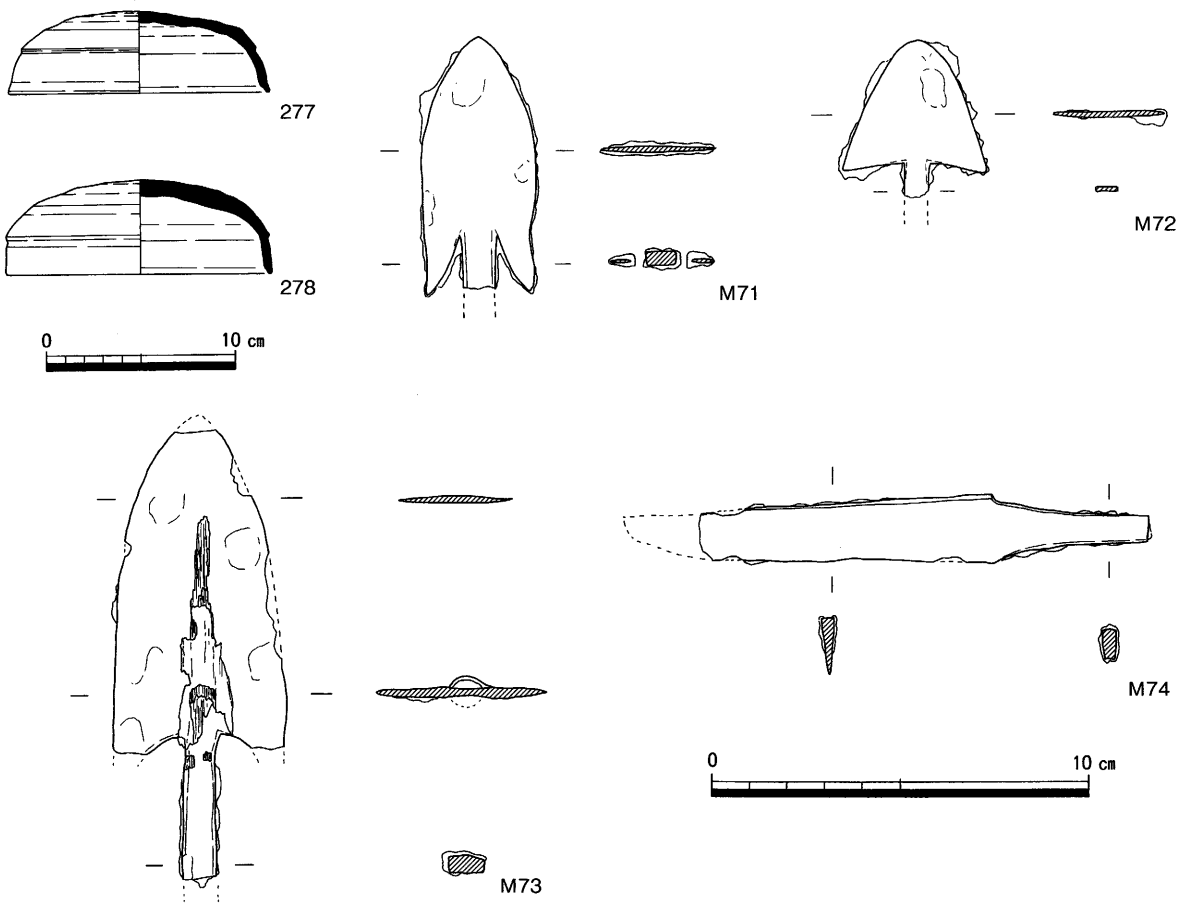
周溝からの出土遺物は須恵器のみである。量は少なくすべて破片の状態である。杯蓋**279**、杯身**280**、甕**281～283**がある。この他、図示できないものの甕破片が多く出土している。

築造時期

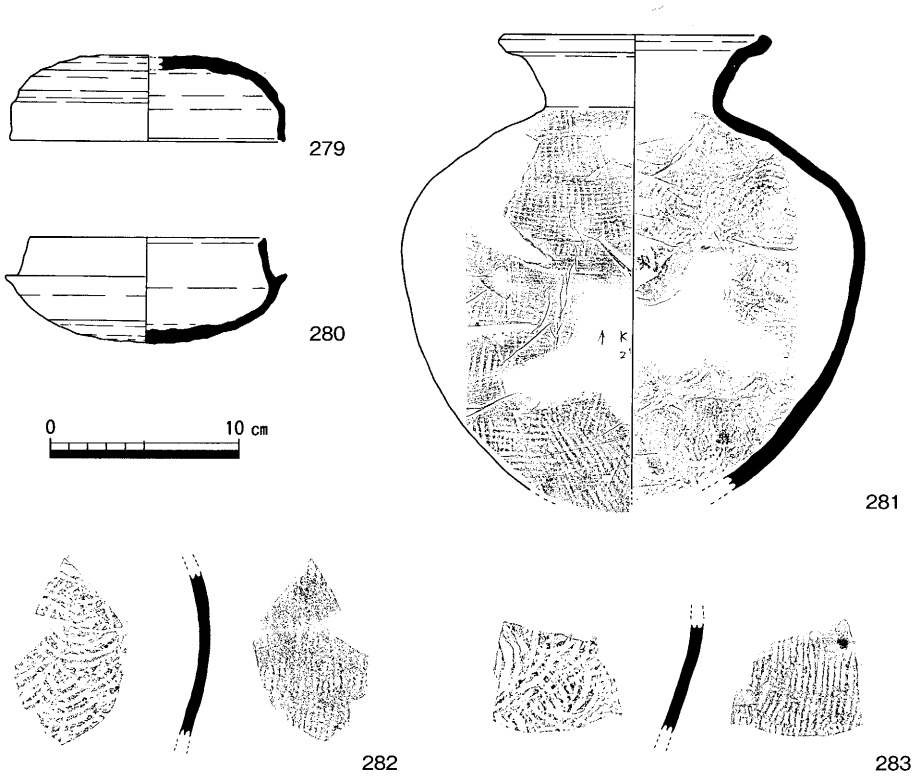
以上、出土遺物などから２号墳は、おおむね古墳時代後期前葉に築造されたと考えられる。

下層遺構（第92図）

主体部調査終了後、墳丘盛土を除去した段階で地山面において周溝の内側に沿って円弧状に延びる溝が発見された。周溝と同じく南斜面側には巡らず、自然傾斜に合わさる。円弧は直径７ｍを測る。

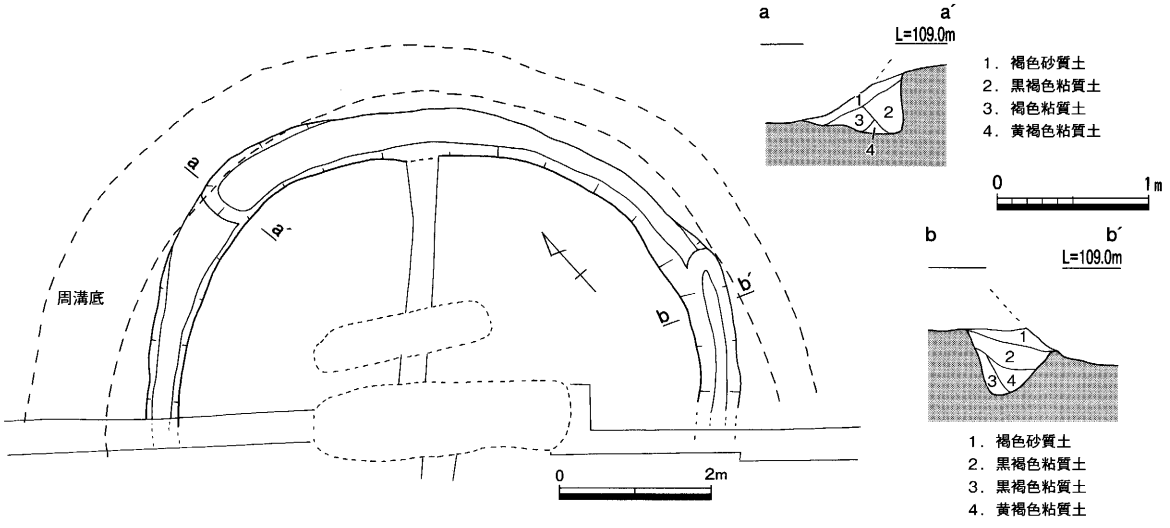


第90図　２号墳第２主体部出土遺物（1/4・1/2）



第91図　２号墳周溝出土遺物（1/4）

小溝の幅は50cm～70cm、深さは最大で40cmを測る。東側では断面Ｕ字状、北側はＬ字状となり、北側は古墳周溝により肩が削平されているためと考えられる。出土遺物は確認されておらず時期は不明である。第１主体部構築時の周溝とも考えられたが、溝の断面形状や墳丘の断面観察などから、古墳を築造する際の基準線として築造前に掘られた溝と考えられる。

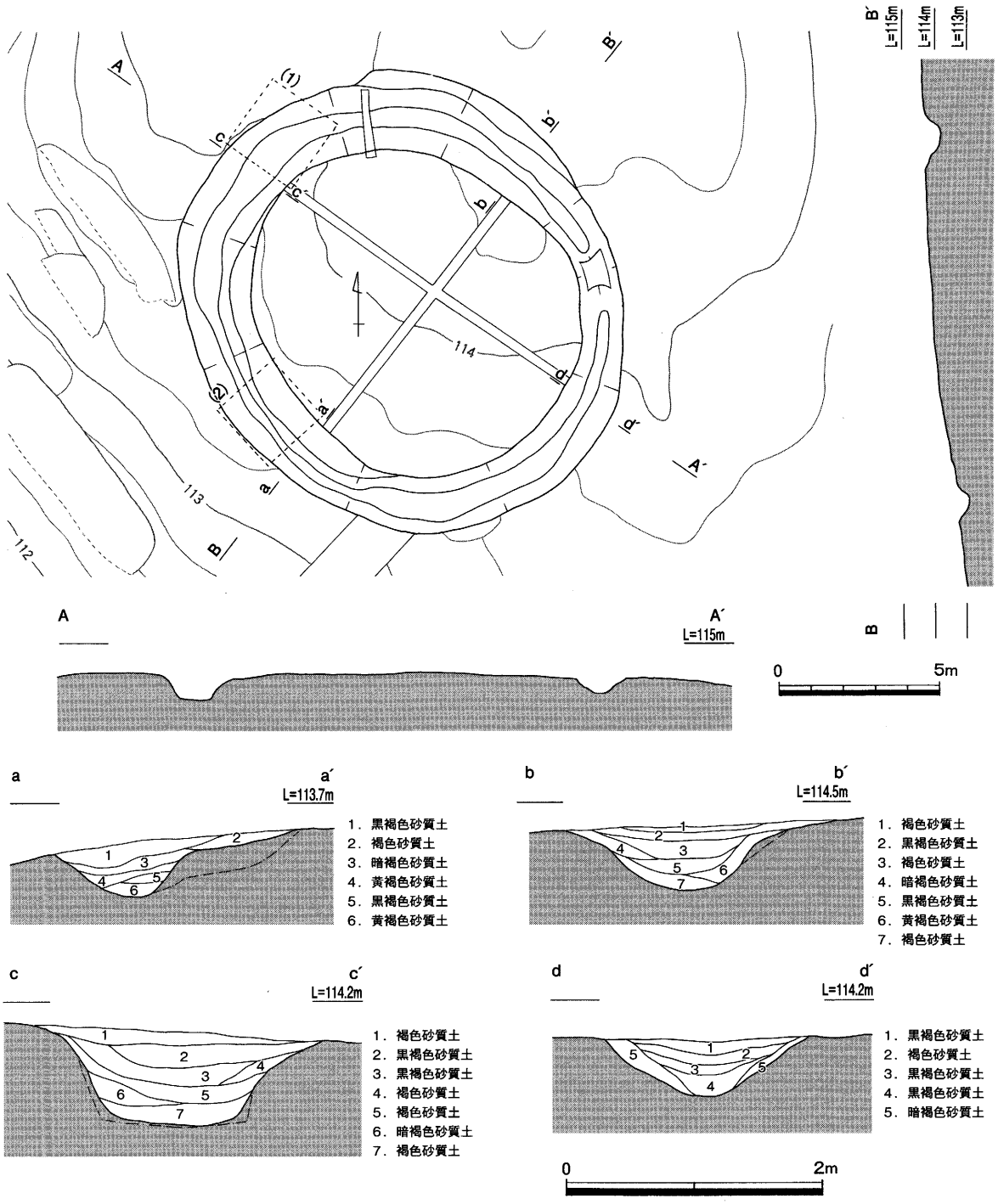


第92図　２号墳下層遺構（1/100・１/50）

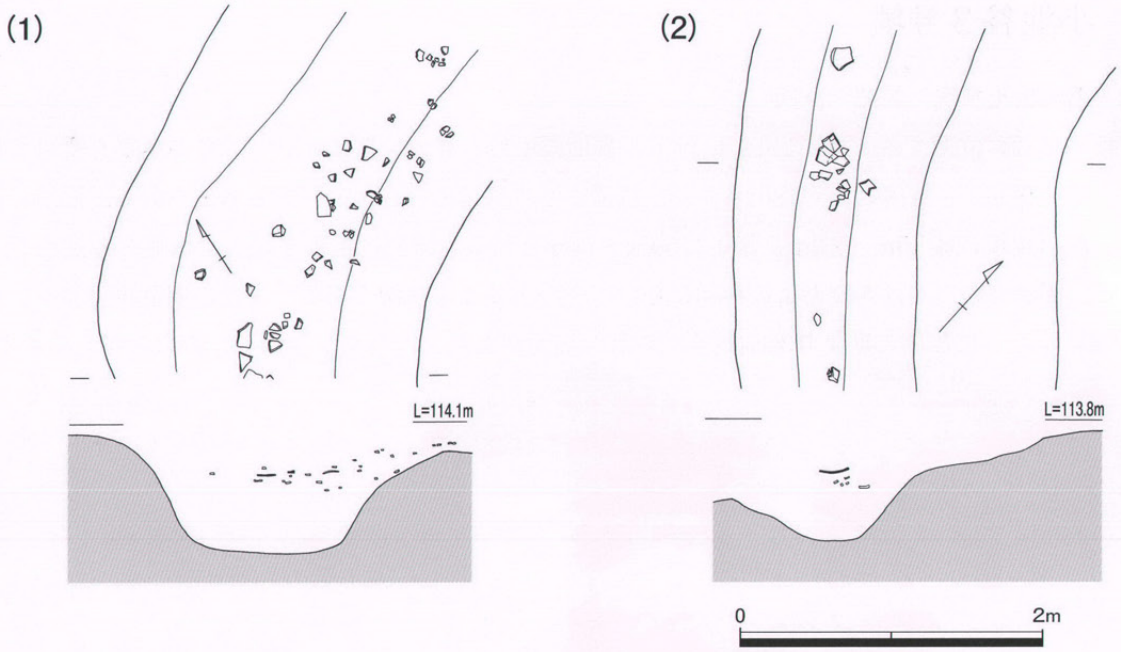
３．小池谷３号墳

周溝・遺物出土状況（第93・94図）

尾根の頂部に位置する。標高114.00m付近、古墳群中最も高い位置にある。近年の削平を受けて墳丘盛土は残存せず、周溝のみが検出された。周溝から本来は直径10mの円墳と考えられる。周溝は全周し、溝の規模は幅1.5m～2.0m、深さは50cm～70cmを測る。断面は椀形を呈し、西側のみ逆台形を呈する。周溝底の高さは西側および南側にむけてやや低くなる状況である。また、周溝東側には、長さ1.2mにわたって周囲の底より30cm浅く掘られた箇所があり、土橋を削り出したものと考えられる。



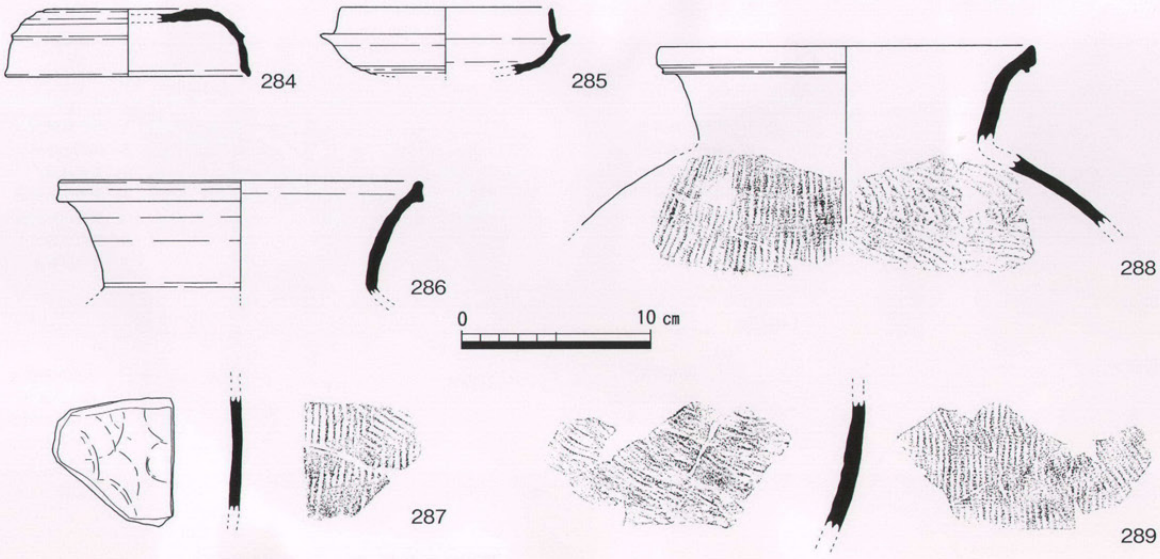
第93図　３号墳（1/200）・周溝土層断面図（１/50）



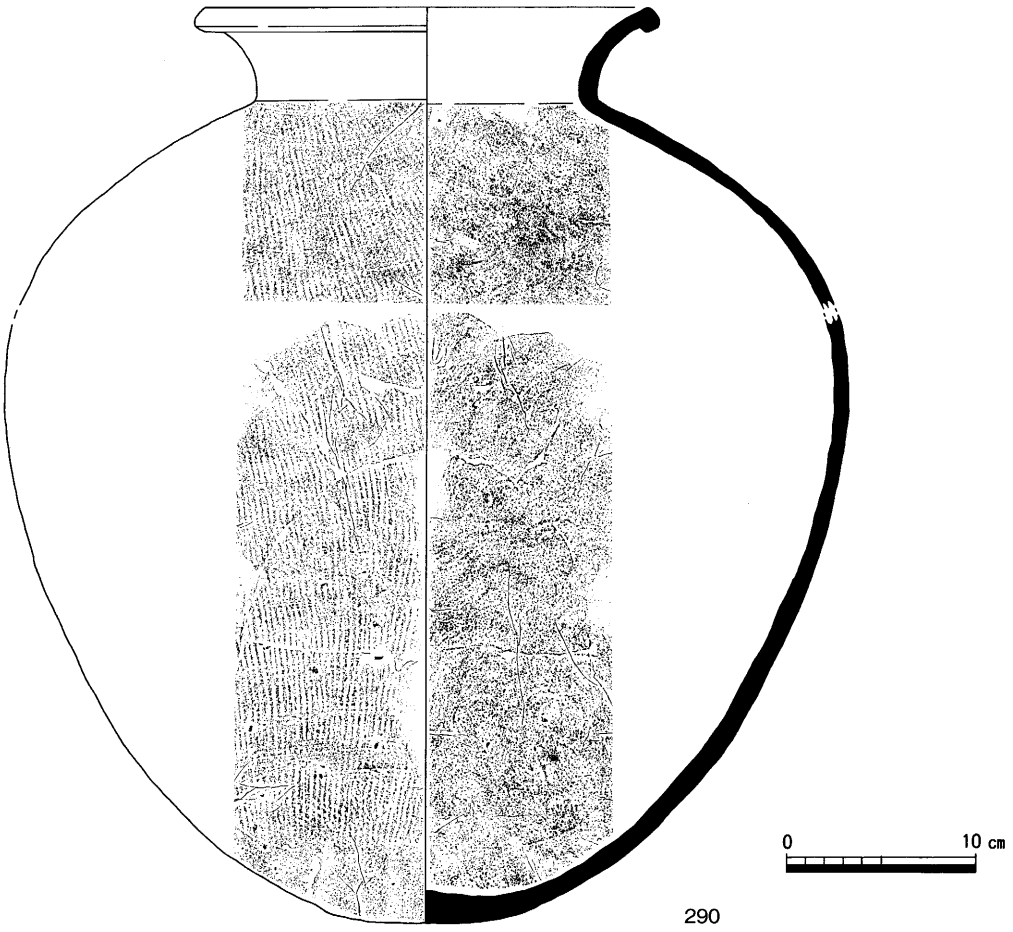
第94図　３号墳周溝遺物出土状況（１/50）

主体部については、周溝の内側の断ち割りを行って存在の把握に努めたが、削平が著しく、痕跡も残存していなかった。周溝掘り下げ中、西と南の２箇所で須恵器の破片がややまとまった状態で出土した。とくに西側では周溝底より40cm以上浮いた状態で破片が出土しており、古墳築造後に一定期間が経過し、周溝が半分以上埋まった段階で流入したと考えられる。特に須恵器甕290は、西と南の２箇所にまたがって接合が確認され、1/2程

３号墳遺物出土状況（南から）



第95図　３号墳周溝出土遺物（１）（1/4）



第96図　３号墳周溝出土遺物（２）（1/4）

度が残存している。

出土遺物（第95・96図）

周溝埋土から出土した須恵器の杯蓋**284**、杯身**285**、甕**286～290**がある。甕**290**は口縁部と体部で接合しないが特徴から同一個体と考えられ、高さ48.5cmに復元できる。

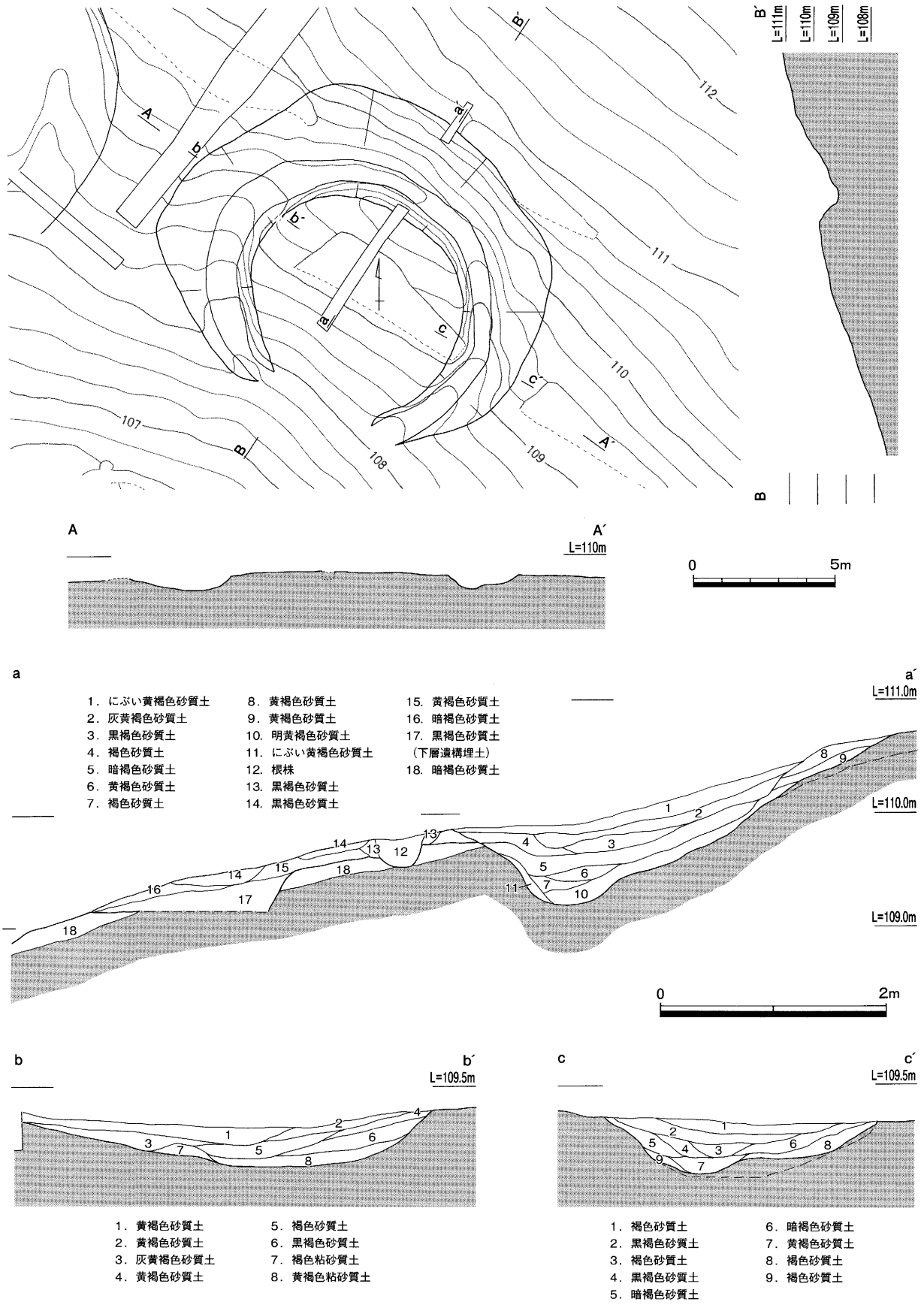
築造時期

出土遺物から３号墳は、おおむね古墳時代後期前葉から中葉に築造されたと考えられる。

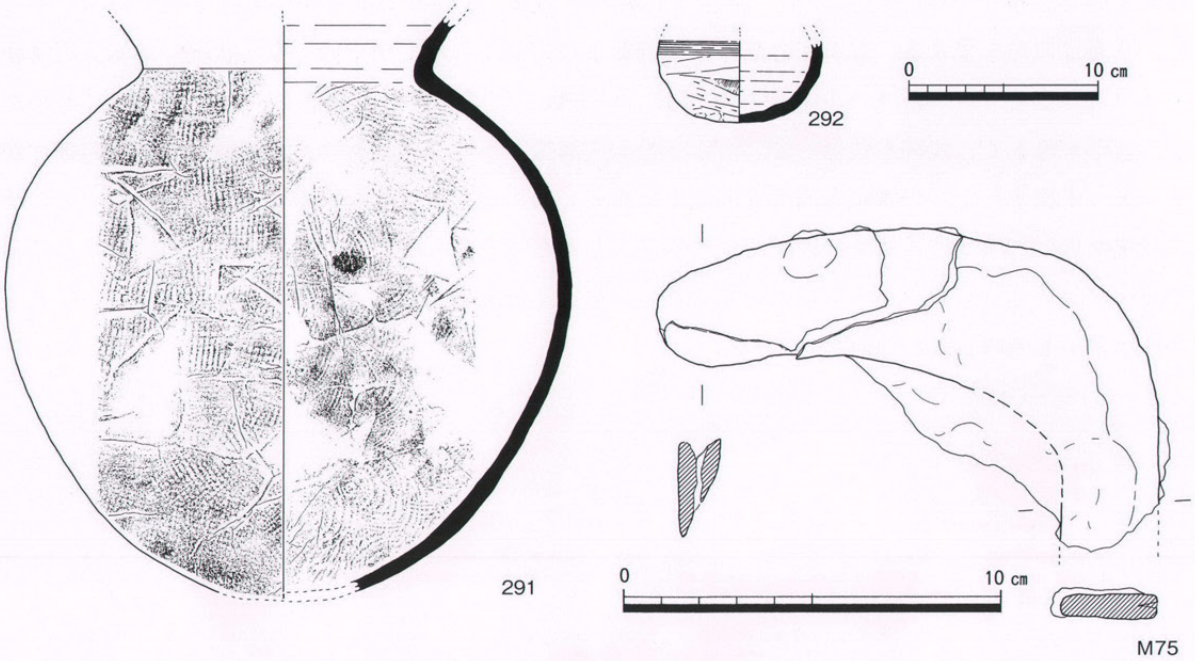
４．小池谷４号墳

周溝・遺物出土状況（第97図）

西斜面中腹、標高110.00m付近に位置し、付近は傾斜がきつくなる変換点にあたる。西側にはほぼ同じ高さで２号墳が位置し、周溝と周溝との間は３m離れている。近年の削平を受けて墳丘盛土はほとんど残存せず、周溝のみが検出された。周溝の円弧から直径８mの円墳と考えられる。周溝は墳丘を囲うように山側で４分の３程度巡っており、谷側の一部は切れている。周溝の幅は最大3.5m、深さは山側で70cmを測る。断面は逆台形を呈し、東側では２段掘りになっている。溝底面は北側が高く、両側は徐々に低くなり、谷側では自然傾斜に合わさる。周溝には黄褐色砂質土、褐色土などが堆積している。ここでは、弥生時代の地山である暗褐色土上に10cm程であるが黒褐色土や黄色砂質土層



第97図　４号墳（1/200）・周溝土層断面図（１/50）



第98図　４号墳周溝出土遺物（1/4・1/2）

がわずかに確認され、これらが墳丘盛土の可能性もある。主体部については、周溝内側の断ち割りを行い主体部の把握に努めたが、削平により残存していなかった。２号墳のように深く掘削する主体部構造とは異なり、墳丘盛土後の浅い位置に主体部が築かれていたと推測される。周溝西側を掘り下げ中、谷側の先端付近で須恵器が少量出土した。なかでも須恵器甕**291**が比較的まとまった状態で出土した。底面から10cm程浮いている。また、鉄鎌**M75**は周溝北西側検出面での出土であり、本古墳に伴うものか不明である。

４号墳遺物出土状況（北から）

出土遺物（第98図）

周溝埋土から出土した須恵器甕**291**、瑠**292**などがある。甕**291**は1/3程残存し、タタキ目を丁寧にナデ消している。鉄鎌**M73**は錆びによる腐食が著しい。

築造時期

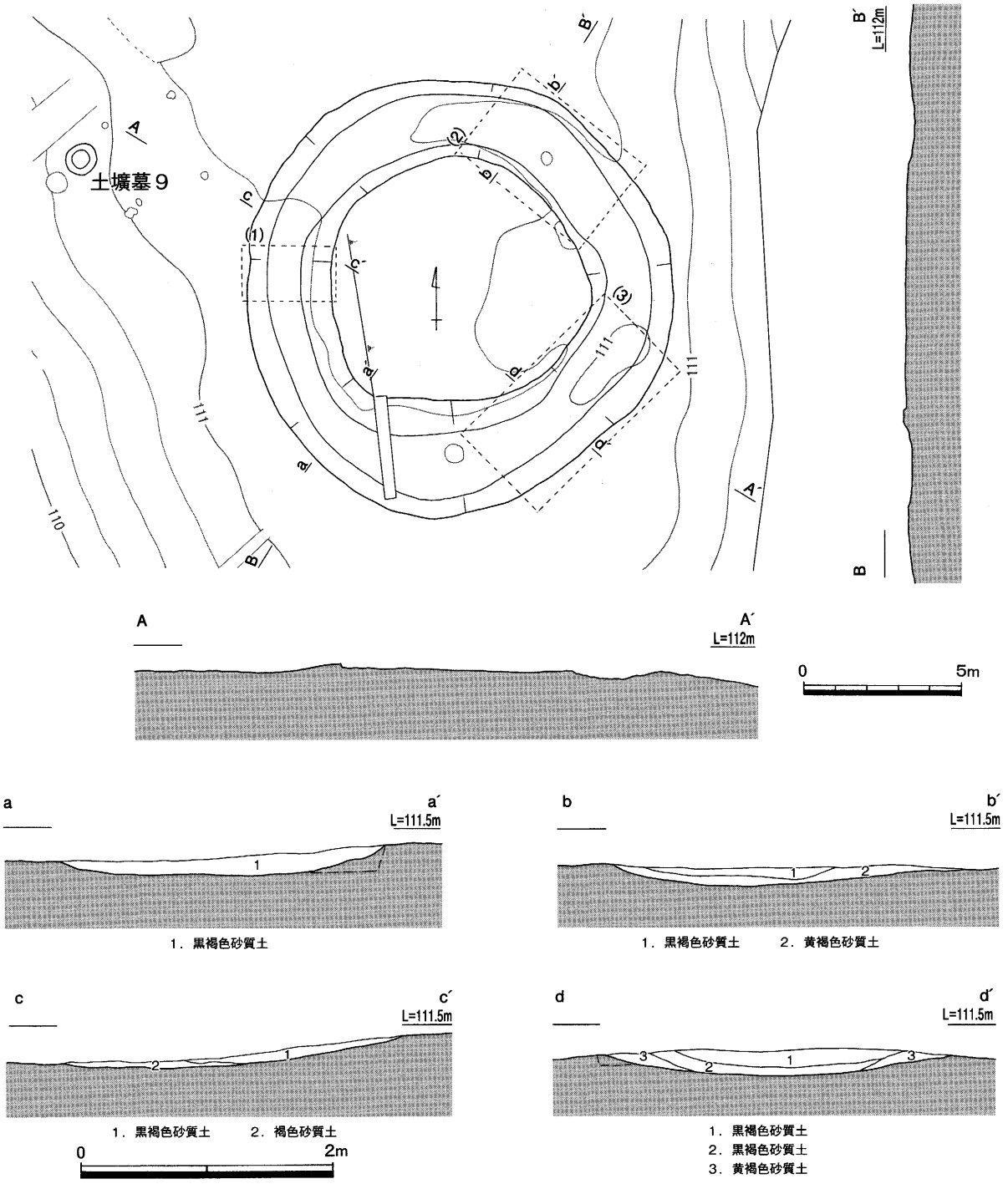
出土遺物などから４号墳は、おおむね古墳時代後期中葉に築造されたと考えられる。

５．小池谷５号墳

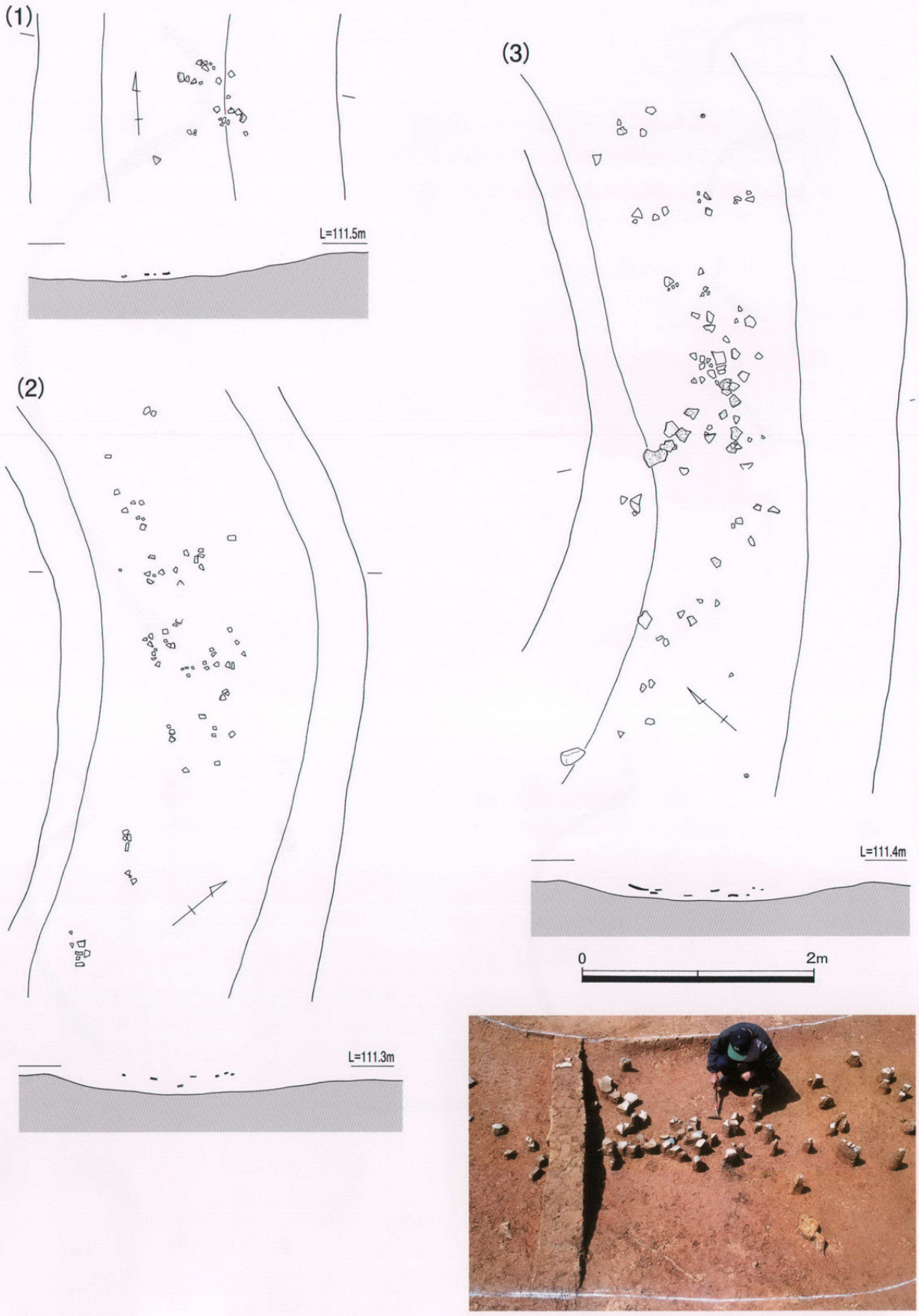
周溝・遺物出土状況（第99・100図）

尾根頂上部の南端、標高111.00m付近に位置する。付近は尾根先端にあたり、平野を眺望できる。近年の削平を受けて墳丘盛土は残存せず、周溝のみが検出された。周溝の円弧から本来は直径８ｍの円墳と考えられる。周溝は全周するが、５号墳周辺は特に削平が著しく、周溝の上面までおおきく失

われている。現状で幅2.5m～2.8m、深さは最深部で20cm、浅い所ではわずか５cmを残すのみであった。断面は皿形を呈する。周溝底の高さは東側および南側にむけてやや低くなる状況である。周溝埋土は黒褐色砂質土が堆積していた。主体部については、周溝の内側を精査し、存在の把握に努めたが、削平が著しく、痕跡も残存していなかった。周溝掘り下げ中に、大きく３箇所で須恵器の破片がまとまって出土した。いずれも周溝底面直上において破片がちらばった状態で出土している。この出土状況から、古墳築造後はやい段階で土器が流入したと考えられる。これらは３箇所のまとまりごとで破片が接合し、分布の(1)～(3)においてそれぞれ須恵器壺**300・299**、甕**298**が復元された。いずれも小片が多いものの1/2以上残存している。

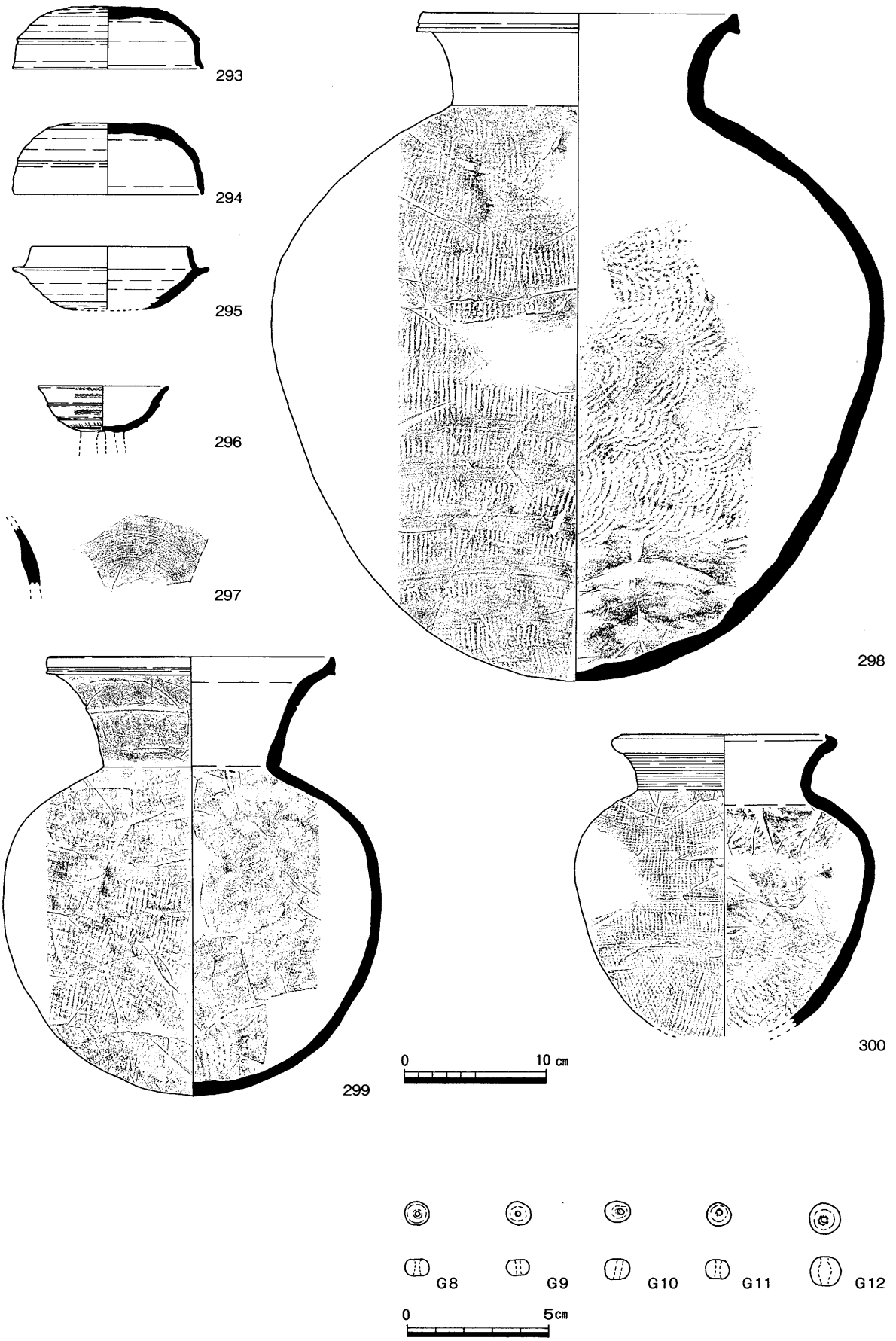


第99図　５号墳（1/200）・周溝土層断面図（１/50）



５号墳(3)遺物出土状況（東から）

第100図　５号墳周溝遺物出土状況（１/50）



第101図　５号墳周溝出土遺物（1/4・1/2）

出土遺物（第101図）

周溝埋土から出土した須恵器の杯蓋**293・294**、杯身**295**、高杯**296**、提瓶**297**、甕**298**、壺**299・300**などがある。甕**298**は器高46.8cmを測る大甕で、外面は平行タタキ後に一定間隔で横ハケを施す。また、内面底部には同心円文のない異なる当て具痕が見られる。壺**299**の内面は丁寧な指圧痕で当て具痕を消している。その他、周溝から散在した状況でガラス小玉５点**Ｇ８～Ｇ12**が出土している。直径８㎜前後の小さなものである。

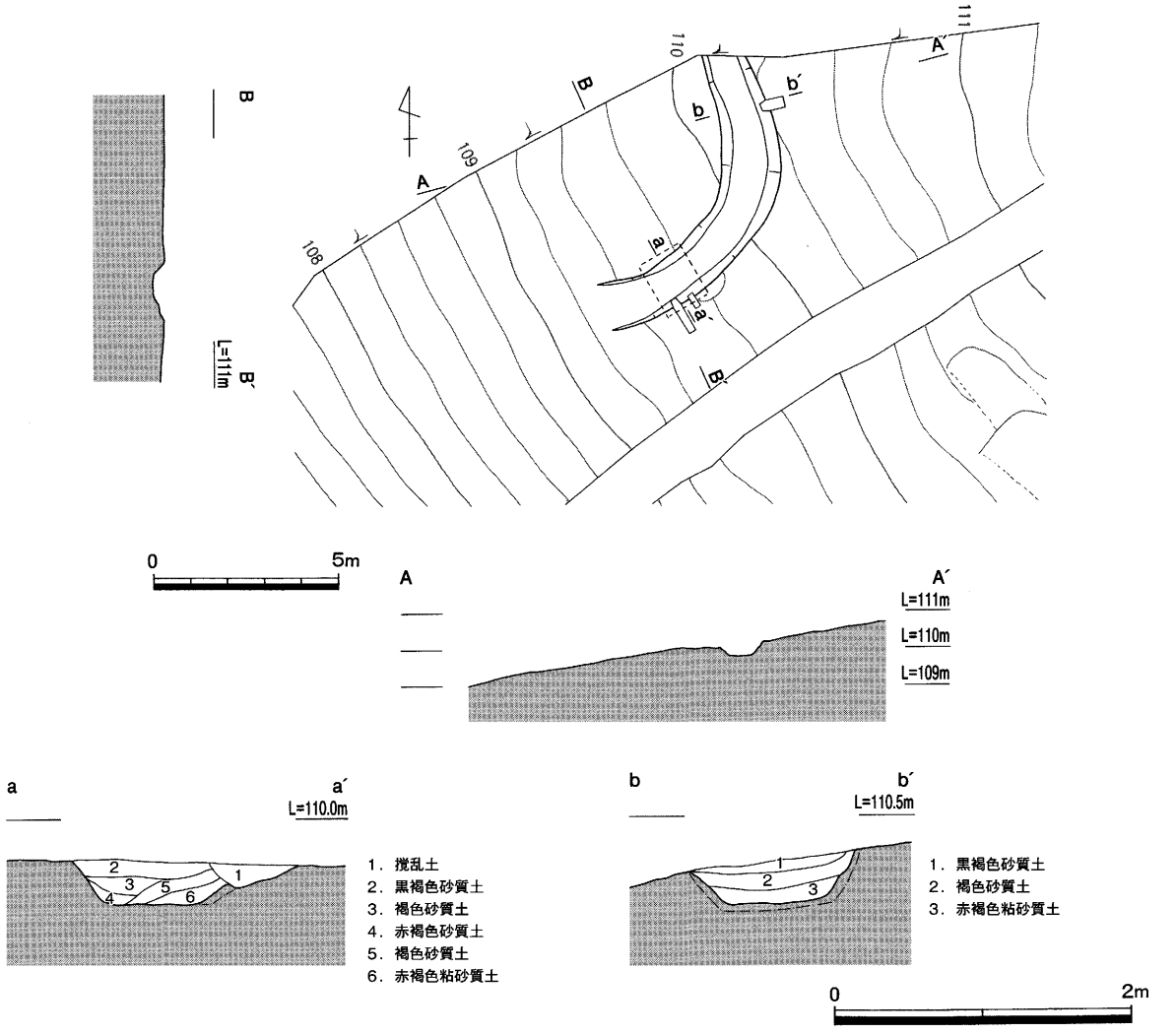
築造時期

出土遺物などから５号墳は、おおむね古墳時代後期中葉に築造されたと考えられる。

６．小池谷６号墳

周溝・遺物出土状況（第102・103図）

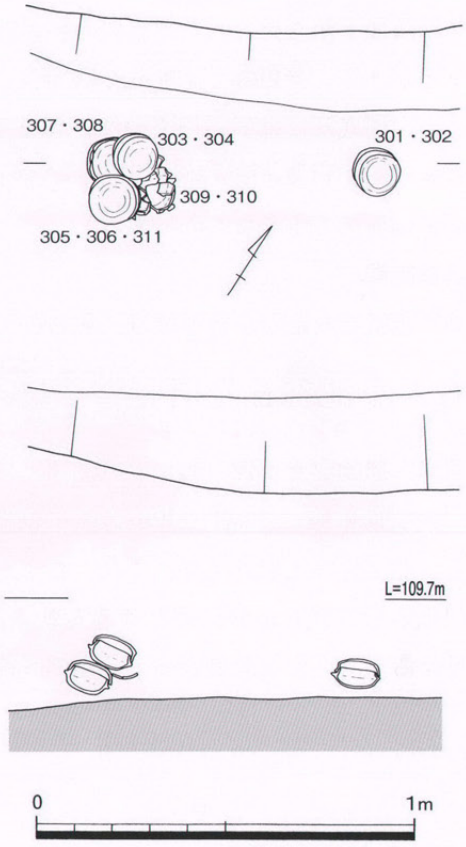
西斜面中腹、標高110.00m付近に位置する。これより西斜面へは傾斜がきつくなる変換点にあたる。北半分は土取り工事により、わずかに周溝の東半分、全体の４分の１のみが確認された。周溝の円弧から直径８ｍの円墳と考えられる。幅は1.5m前後、深さは山側で30cmを測る。断面は逆台形を呈する。溝底面は北側が高く、南側へ徐々に低くなっていき、自然傾斜に合わさる。埋土は赤褐色砂



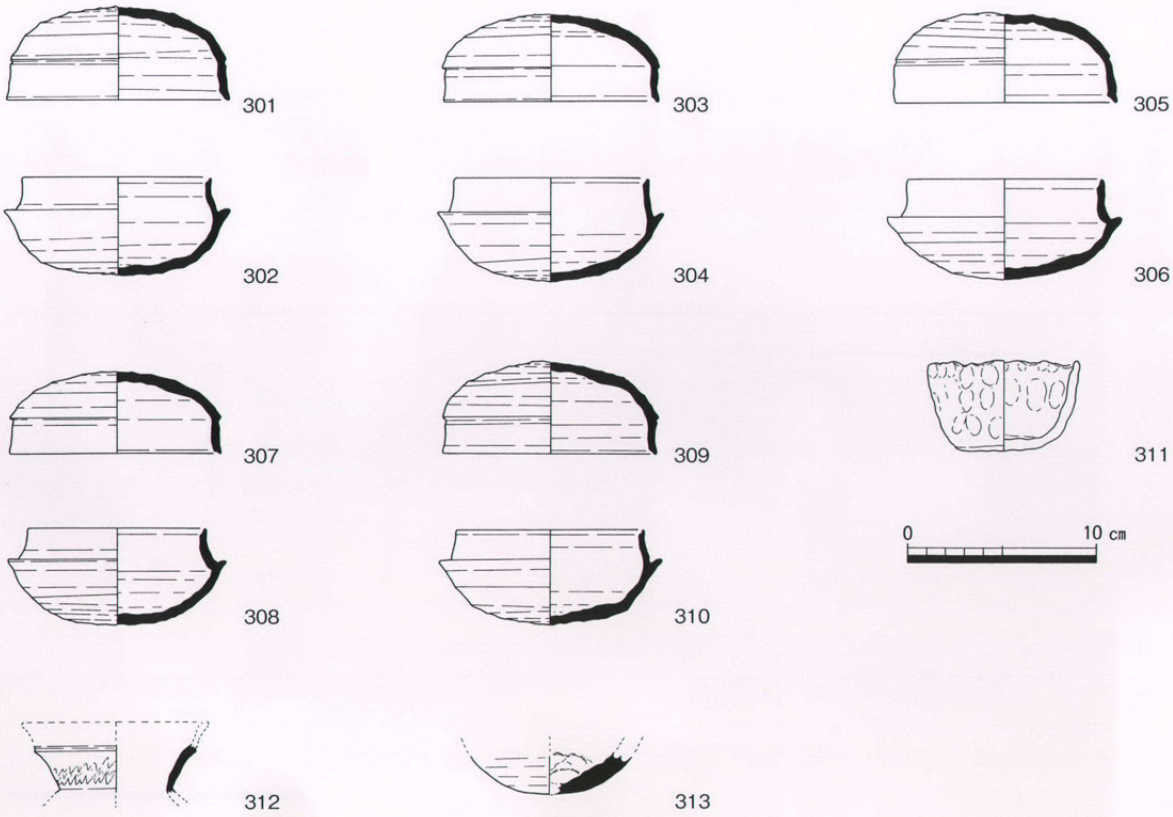
第102図　６号墳（1/200）・周溝土層断面図（１/50）

質土、褐色土が堆積している。主体部については、周溝の内側を精査して存在の把握に努めたが、近年の削平が著しく、痕跡も残存していなかった。周溝東側を掘り下げ中に、東側の溝底面から須恵器杯蓋と杯身**301～310**がまとまった状態で検出された。そのため、平面、断面を精査したが、埋葬施設は確認できなかった。まず杯蓋と杯身が合わさった状態で４セット分、計８個体がかたまった状態で検出され、上下２段になっていた。さらに杯蓋と杯身１セット２個体も50cm北に離れた位置で検出された。いずれも人為的に置かれた状態と考えられる。このうち、須恵器杯身**306**の中には土師器の手づくね土器**311**が入れられて

６号墳遺物出土状況（西から）



第103図　６号墳周溝遺物出土状況（１/50）



第104図　６号墳周溝出土遺物（1/4）

いた。

出土遺物（第104図）

周溝底面に据えられた杯蓋と杯身**301～310**があり、それぞれセット関係にある。土師質土器**311**は手づくねで成形され、指圧痕が残っている。その他、周溝埋土中から須恵器甕**312**、**313**などが出土している。

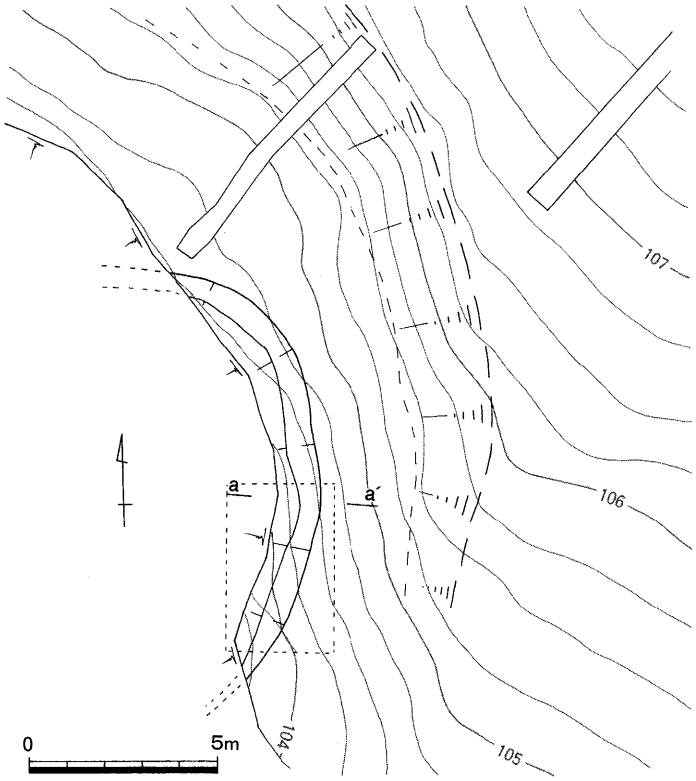
築造時期

出土遺物などから６号墳は、おおむね古墳時代後期初頭頃に築造されたと考えられる。

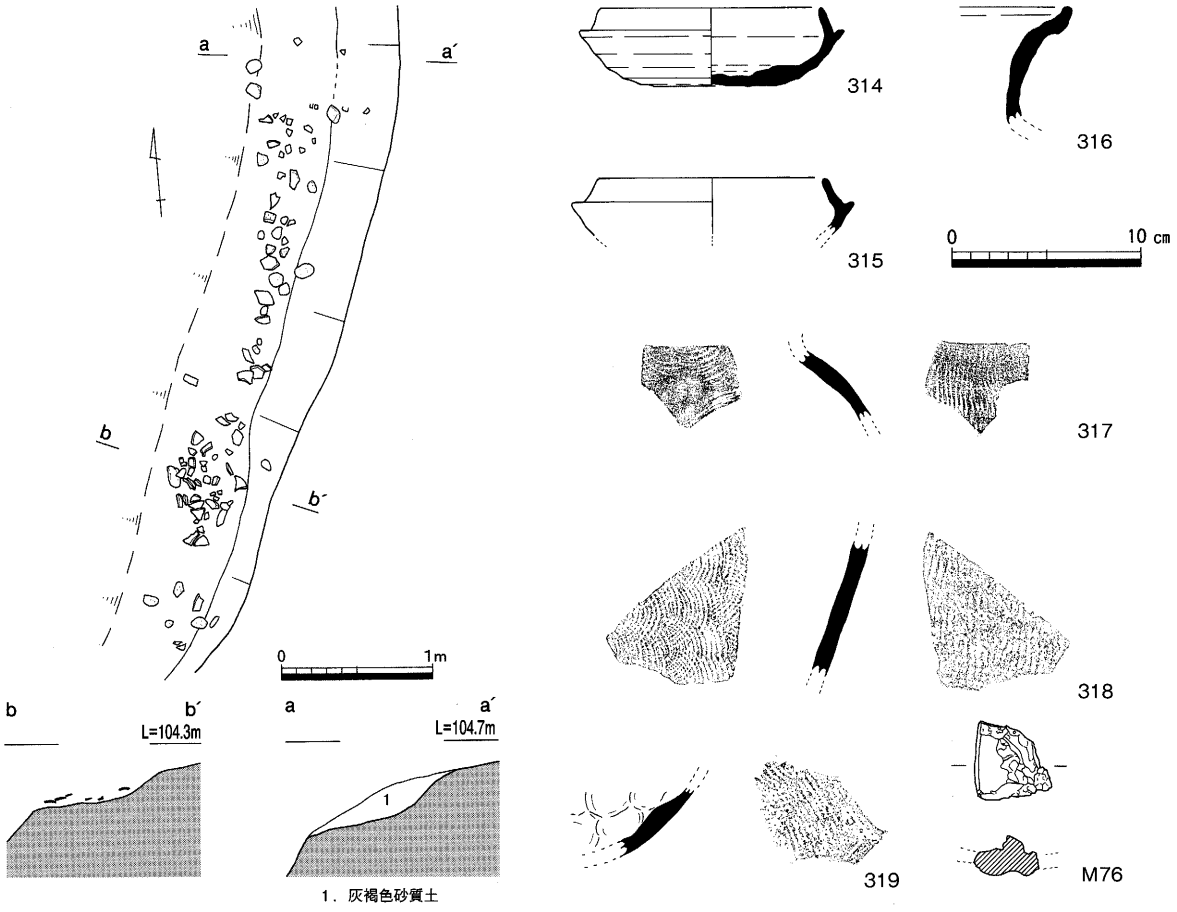
７．小池谷７号墳

周溝・遺物出土状況（第105・106図）

西斜面下方、標高105.00m付近に位置する。１号墳の東、２号墳の下方に



第105図　７号墳（1/200）



第106図　７号墳周溝遺物出土状況（1/50）・出土遺物（1/4）

位置し、１号墳の周溝との間は８ｍ離れている。丘陵南側の土取りによる削平を受けており、墳丘盛土や周溝の大部分は残っておらず、周溝でも山側の一部が検出されたのみである。全体の３分の１が確認された。周溝のさらに山側には斜面地を造成した痕跡が確認されたが、堆積状況から後の時代のものと考えられる。検出された周溝外周の円弧は直径13m程度で、周溝幅が仮に３ｍとすれば、直径７ｍ程度の円墳と考えられる。残存幅は１ｍで、深さは最深部で20cmを測る。断面は椀状を呈すると考えられる。溝底面は北側が高く、南側へ徐々に低くなっていく。埋土は灰褐色砂質土が堆積している。周溝掘削中、南半分で須恵器などが破片の状態で多く出土した。出土状況はまとまっているが、小破片が全体に散らばっている状況である。接合するものは少なかった。

出土遺物（第106図）

周溝埋土から出土した須恵器杯身**314・315**、甕**316～318**、壺**319**がある。この他、鉄滓**M76**が１点出土した。

築造時期

出土遺物などから７号墳は、おおむね古墳時代後期中葉～後葉に築造されたと考えられる。

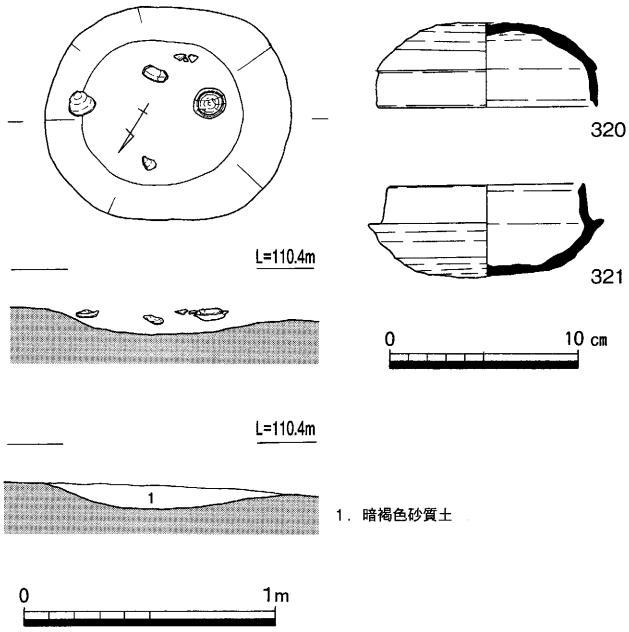
８．その他の遺構と遺物

土壙墓９（第107図）

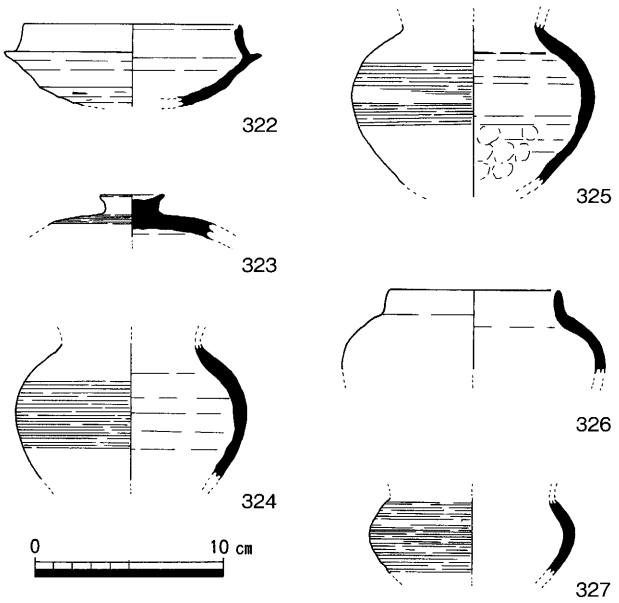
標高110.00m付近に位置し、尾根頂部からやや西斜面に下った位置にあたる。東５ｍの位置には５号墳の周溝が存在する。平面円形を呈し、直径1.3cm、深さ10cmを測るが、近年の削平を受けているため、上部が失われている。埋土は暗褐色砂質土が堆積している。掘り下げ中、須恵器杯身**321**が正置された状態で出土し、ほぼ完形に近い状態であった。須恵器杯蓋**320**は破片の状態で分かれて出土した。出土遺物などから時期はおおむね古墳時代後期前葉と考えられる。

その他の出土遺物（第108図）

包含層などから須恵器などが出土している。図化できたものに須恵器杯身**322**、蓋**323**、小型壺**324～327**がある。**323**以外は、５号墳から西の斜面で出土したものである。



第107図　土壙墓９（１/30）・出土遺物（1/4）



第108図　その他の出土遺物（1/4）

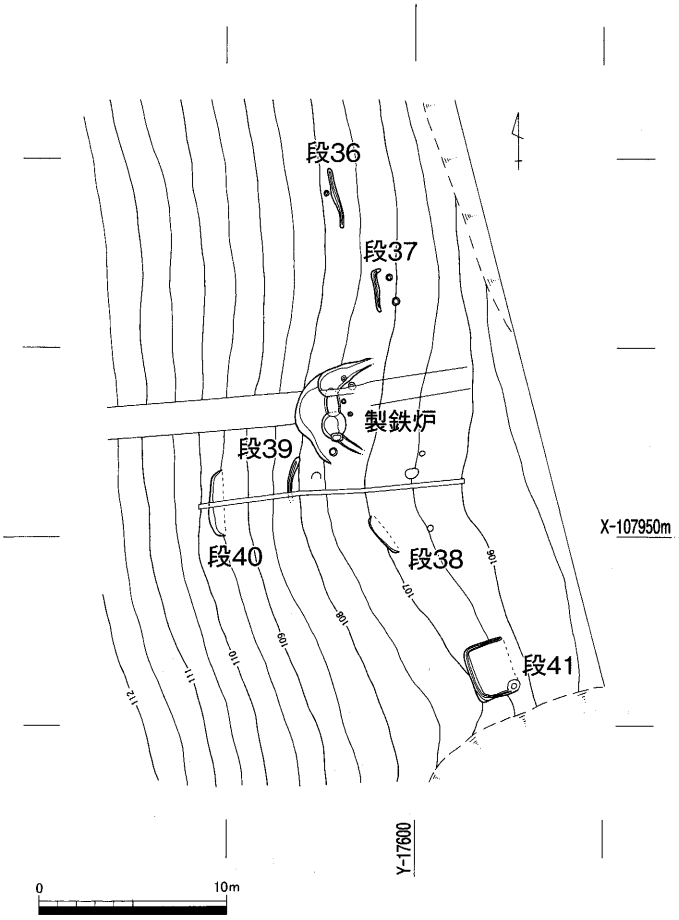
第４節　丘陵北東斜面部の遺構・遺物

１．調査区の概要（第109図）

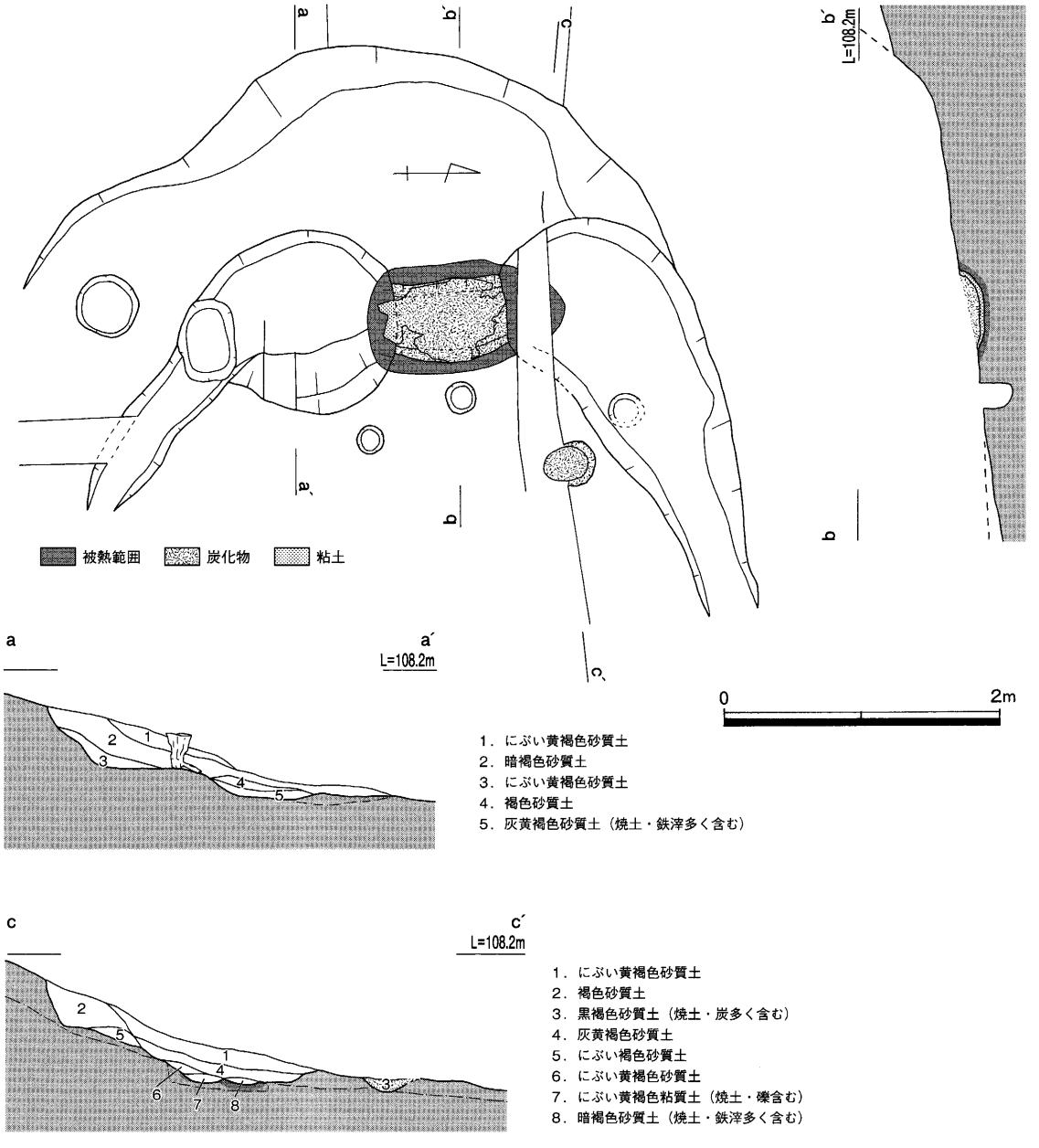
調査対象となる丘陵の北側東斜面の裾部を中心に製鉄炉跡１基、段状遺構が６基検出された。この調査区は第１次全面調査として実施した地区である。確認調査Ｔ７の下方において、段状に造成された面と、その床面中央で楕円形に赤く比熱した痕跡が確認され、多くの鉄滓が出土したことから、製鉄炉の遺構と考えられた。そのため、本調査では製鉄炉およびそれに関係する遺構の存在を想定し、丘陵頂上部のＴ１から東斜面、北はＴ15、南はＴ５を越えて斜面裾が土取りにより削平された箇所までの広範囲に調査区を設定した。広範囲の表土を除去し精査したものの、製鉄炉１基以外には明確な製鉄関係の遺構は確認されなかったため、調査範囲を絞って実施した。しかしながら、谷部にあたる調査区東側は調査対象外で、現在生活道として利用され埋められた場所であることからも、さらに斜面地形が下方に延びる可能性が十分あり、未発見の遺構が存在する可能性がある。その他の段状遺構としては南端で検出された古墳時代中期頃の土器を伴う段状遺構41以外は時期不明であり、製鉄炉に伴うものか古墳時代中期のものか判別できない。さらに調査区南端から15m南には第２節の東斜面部にある時期不明の段状遺構などもあり、これらと関連する可能性も考えられる。

２．製鉄炉（第110～112図）

丘陵東斜面裾、標高108.000m付近において検出された。斜面を段状に造成して平坦面を築いている。中央は試掘トレンチの掘り下げにより削平されているが、５ｍ×３ｍを測る平坦面が認められた。平坦面は半円形を呈する。その平坦面のほぼ中央で製鉄炉の下部構造が検出され、その両側に排滓溝が取り付く形状である。平坦面は、炉下部構造から西は1.2m、南側の排滓溝の西側に回り込むように平坦面が続いている。逆に北側の排滓溝では平坦面は途切れる。炉下部構造の東側は２ｍほどの平坦面が確認された。その他、ピットが東側で少数検出された。西側で対となるピットを検出できなかったため、明確な上屋等の構造物は復元できなかった。炉の下部構造は平坦面への流入土を取り除いた段階で、長方形を呈する赤く変色した地面と、それに

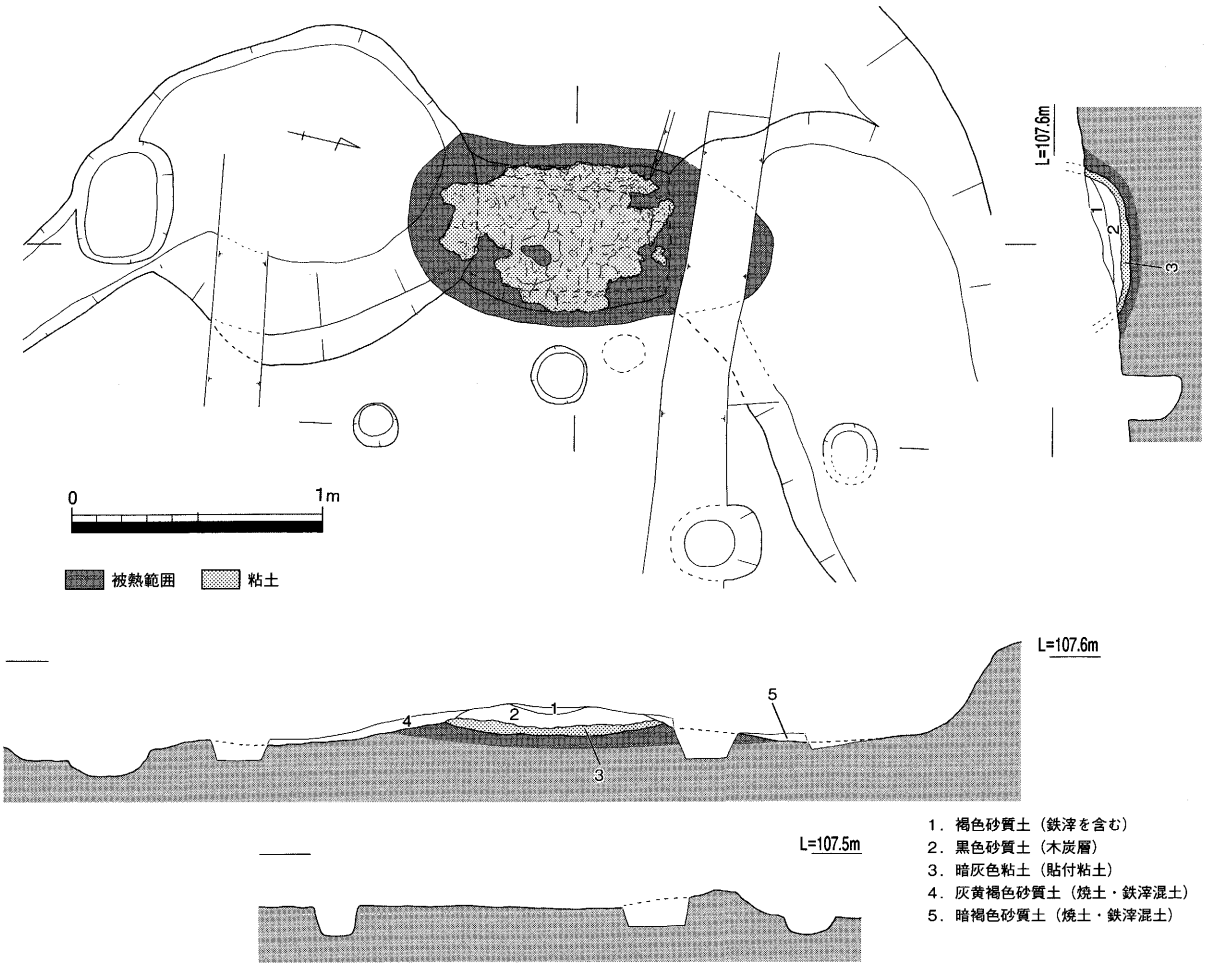


第109図　北東斜面部遺構全体図（1/200）



第110図　製鉄炉・土層断面図（1/50）

囲まれるように内側から木炭混土が検出された。この層は２層に分層でき、上層は木炭に鉄滓が混じる層で厚さ３cm、下層は木炭のみの層で厚さ４cmである。木炭層を取り除くと、その下には黒く焼け締まった粘土面が確認された。粘土は地山を掘りくぼめた浅い土壙の全面に貼り付けており、粘土の層になっている。80cm×60cmの範囲で確認された。東西の断面は皿状を呈し、山側は10cmの立ち上がりが確認できたが、南北は端が若干立ち上がるものの開いた状態で、排滓溝へつながっている。貼付けた粘土のまわりの地山は比熱して赤く変色し、厚さは５cmにも達する。比熱範囲は南北の排滓溝の底でも確認され、南北1.5m、東西幅70cmの範囲であった。排滓溝については、底は貼付け粘土面より５cm程下がっている。形状は、北側は幅広の溝から先すぼまりの形状を呈し、南側は直径1.3mの楕円土壙から小溝が延びる形状である。いずれも谷側へむけて若干下がっていく。最下層は鉄滓を含む炭混じり層である。北側の排滓溝内とくに下部構造に接する位置で炉壁や鉄滓が多く出土してい



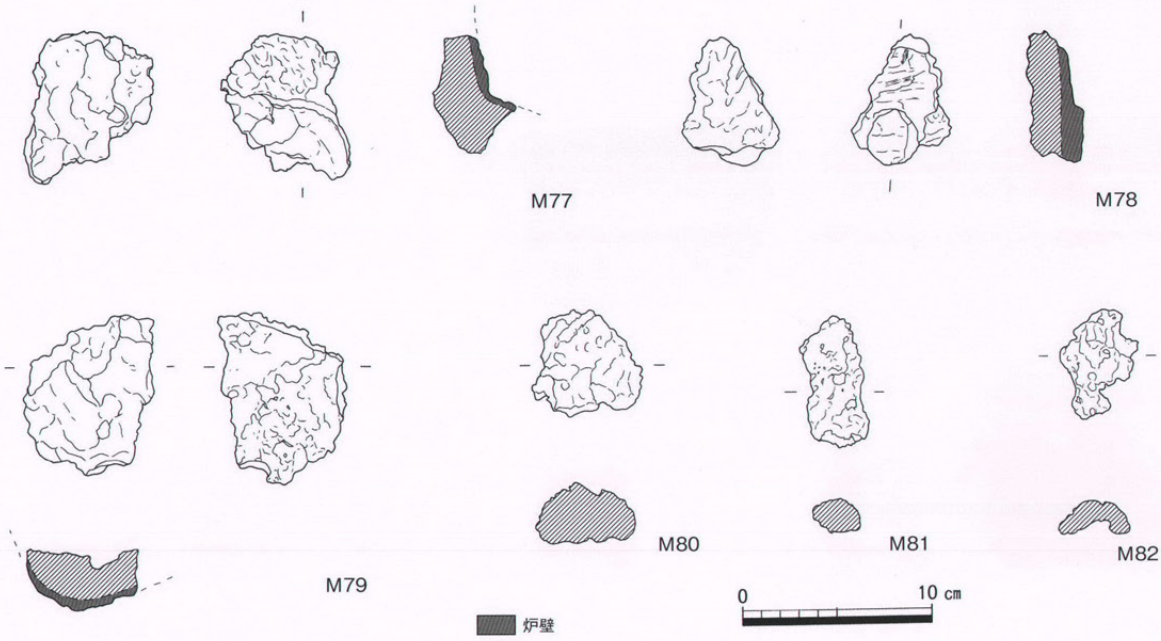
第111図　製鉄炉炉床（１/30）

る。これらの状況から構築過程は、まず80cm×60cmの長方形の土壙を掘った後に全体に粘土を貼りつけ、土壙内部の空焚きを行ったことにより粘土は黒く焼き締まり、周囲が比熱し赤く変色したと考えられる。内部の木炭混じり土は空焚きしたままの状態が残され、カーボンベッドとして機能したものと考えられる。この木炭混じり土の上面に炉を築いたと考えられ、一層防湿効果を高める工夫がなされたと考えられる。製鉄炉の時期は、出土遺物がなく不明であるが、構造から古墳時代後期末～奈良時代頃のものと考えられる。出土遺物は、炉壁や鉄滓のみである。遺物コンテナにして、２箱分の量があり、大部分が排滓溝からの出土である。全体的に炉壁の破片が多い。鉄滓などの出土量に関しては、通常の製鉄炉の事例に比べて圧倒的に出土量が少ない。出土遺物のうち図化したものは６点である。炉壁**M77～M79**、流出滓とみられる**M80～M82**がある。**M77**は壁部分の形状から送風孔と考えられる。**M79**は壁の形状から炉底付近の破片とみられる。これらの製鉄関連の遺物に関しては、化学分析などを行っておらず、現状では十分な検討ができなかった。

３．その他の遺構・遺物

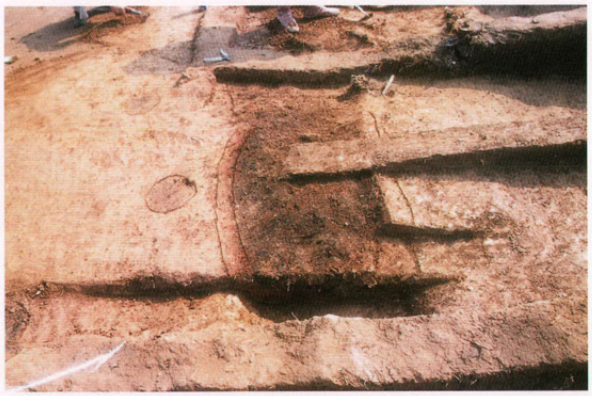
段状遺構36（第113図）

標高108.0m付近の斜面で検出された。付近は斜面裾付近の緩斜面にあたる。製鉄炉の北側８ｍに位置している。斜面に並行する溝が検出されたのみである。溝は残存長3.1m、幅25cmを測り、溝の



第112図　鉄滓・炉壁（1/4）

製鉄炉調査風景（北から）



炉下部構造検出状況（北から）

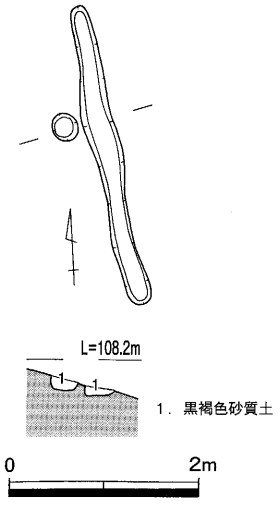
炭層堆積状況（東から）

炉下部構造（北から）

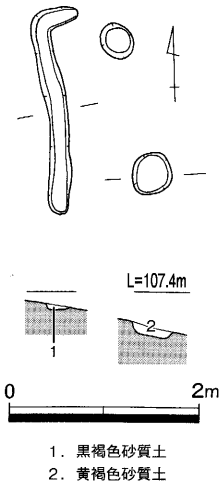
深さは10cmを測る。周壁溝と考えられ、平坦部は流出している。溝の埋土は黒褐色砂質土が堆積する。山側には直径20cmの柱穴が１基確認されたが、関係は不明である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

段状遺構37（第114図）

標高107.4m付近の斜面で検出された。付近は斜面裾付近の緩斜面にあたる。段状遺構36からは南に2.5m離れている。斜面に並行する溝と柱穴が検出されたのみである。溝は残存長2.2m、幅20cmを測り、北端は屈曲して谷側に延びる。溝の深さは10cmを測る。形状から周壁溝と考えられ、平坦部は流出している。柱穴は溝から40cm～60cm離れた位置で２基の柱が並ぶ状況が確認され、建物跡の可能性がある。直径30cm前後、柱間1.5mを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第113図　段状遺構36（1/80）



第114図　段状遺構37（1/80）

段状遺構38（第115図）

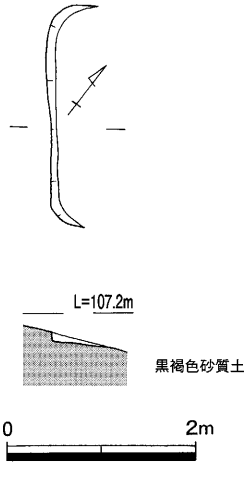
標高107.0m付近の斜面で検出された。斜面裾の緩傾斜にあたる。製鉄炉の南側３mに位置している。平面は長方形を呈し、長さは2.3m、残存幅は40cmで、床面までの深さは５cmを測る。埋土は黒褐色砂質土が堆積する。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

段状遺構39（第116図）

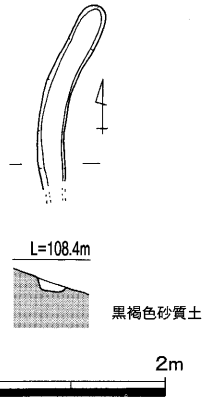
標高108.2m付近の斜面で検出された。付近は斜面中腹でやや傾斜がきつくなっている。製鉄炉の西に接する。斜面に並行する溝が検出されたのみである。溝は残存長1.5m、幅25cmで弧状に延びる。溝の深さは10cmを測る。形状から周壁溝の可能性が考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

段状遺構40（第117図）

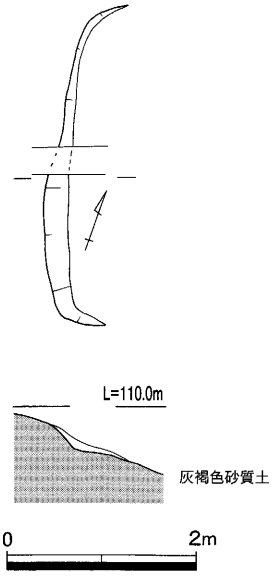
標高109.7m付近で検出された段状遺構である。付近は斜面中腹でやや傾斜がきつくなっている。平面は長方形を呈し、長さは3.4m、残存



第115図　段状遺構38（1/80）



第116図　段状遺構39（1/80）

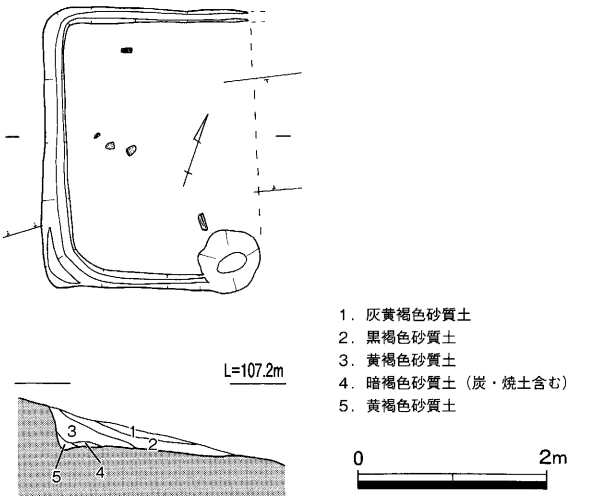


第117図　段状遺構40（1/80）

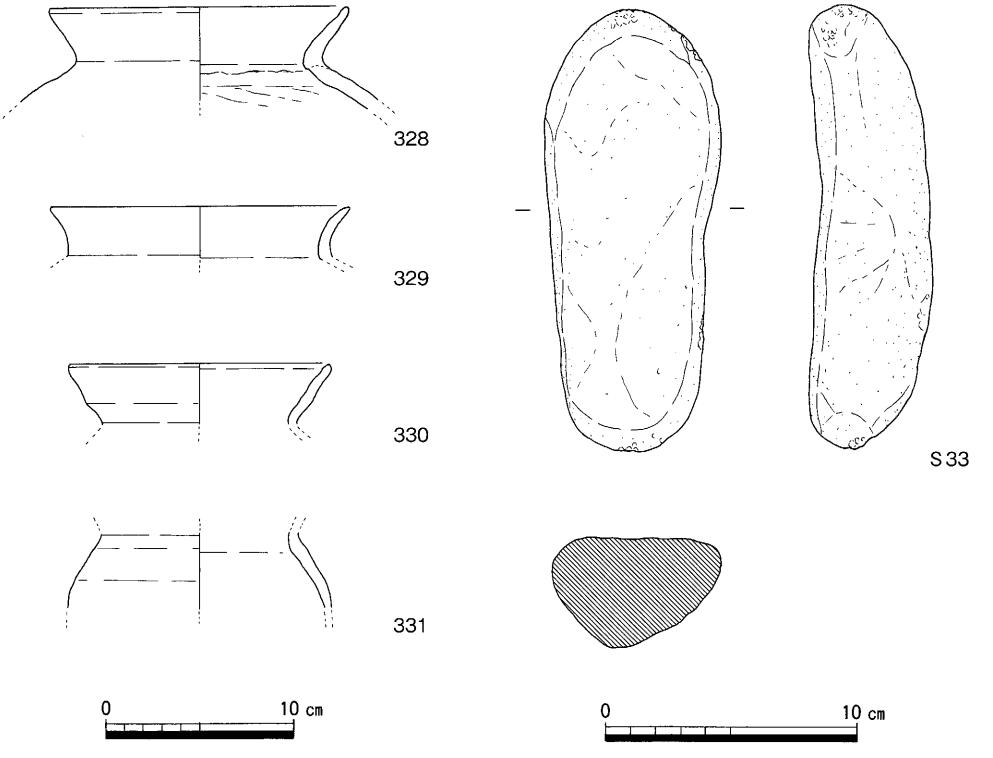
幅は60cm、床面までの深さは20cmを測る。埋土は灰褐色砂質土が堆積する。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

段状遺構41（第118・119図）

調査区南端、標高107.0m付近の緩斜面で検出された。製鉄炉の南12mに位置する。斜面を造成して平坦面を作りだしており、平面は方形を呈する。南北の一辺が2.9m、東西の残存幅は2.2mを測り、東側は床面が流失している。床面までの深さは検出面から30cmを測る。周壁溝が確認され、山側の３方に巡る。床面から柱穴は確認されなかった。埋土は丘陵上部からの堆積層であるが、５層に分層された。床面上には土器、弱冠の炭を含む層が堆積する。床面直上から炭化した木材や石器**Ｓ33**が出土した。また、南東角で直径60cm、深さ15cmの土壙が検出された。土壙の埋土からは土師器甕**328～331**が出土している。土師器甕**330・331**は同一個体と見られる。**Ｓ33**は石杵と考えられる。時期は、古墳時代中期と考えられる。



第118図　段状遺構41（1/80）



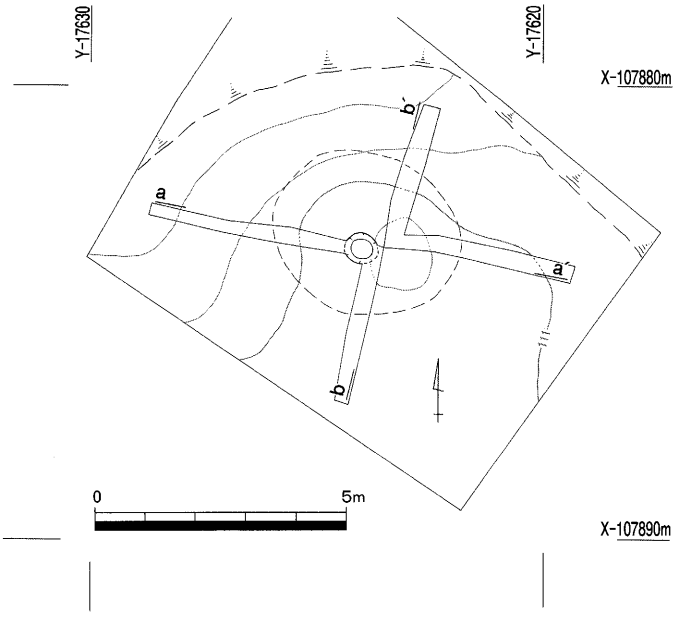
第119図　段状遺構41出土遺物（1/4・1/3）

第５節　丘陵北端部の遺構・遺物

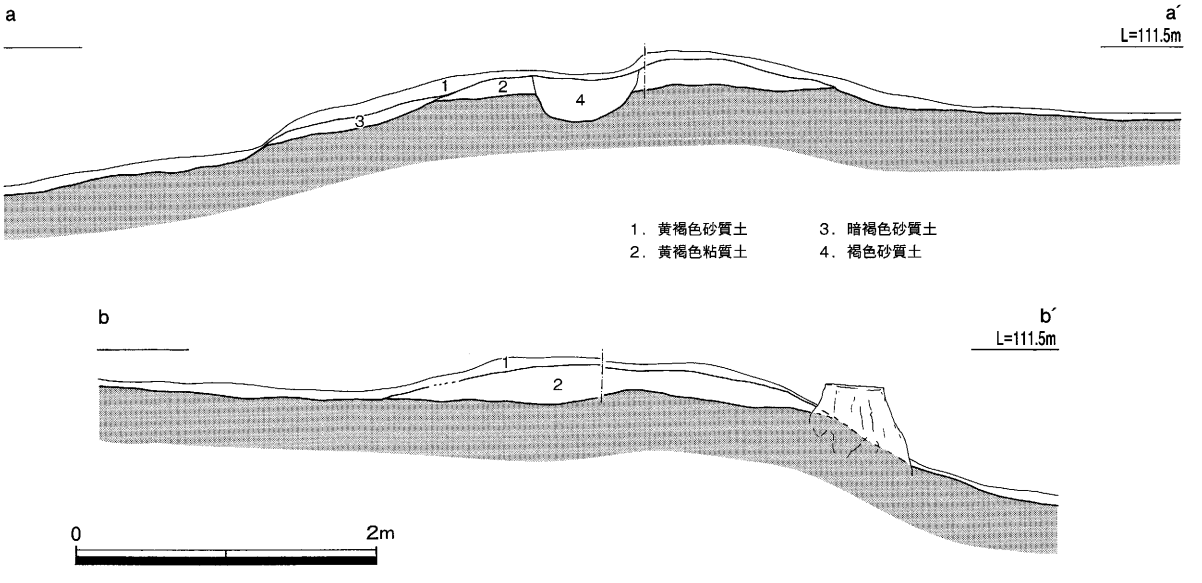
丘陵の北端は頂上から徐々に地形が下がっており、尾根の鞍部にあたる。北側は道路により崖となっている。調査前の踏査で、わずかな土盛による高まりが発見され、墳墓の可能性が考えられた。確認調査の結果、わずかな盛土と、埋納遺構とみられる小さい穴が中心で検出されたことから、拡張して本調査を実施した。

１．墳墓状遺構

北斜面北端の、標高111.00m付近に位置する。北側は道路により崖となっている。調査の結果、平面円形の墳墓状遺構と考えられる。直径４ｍ、高さは谷側で70cmを測る。盛土は20cmを測るのみで流出が著しい。盛土は黄褐色粘質土が確認された。中心部において直径70cm、深さ40cmの土壙が検出された。埋納遺構の痕跡と考えられたが、盗掘穴の可能性もある。出土遺物は確認されなかったため、時期は不明である。



第120図　墳墓状遺構（1/300）



第121図　墳墓状遺構土層断面図（1/50）

第４章　ま　　と　　め

第１節　小池谷遺跡について

１．弥生時代中期の土器群について

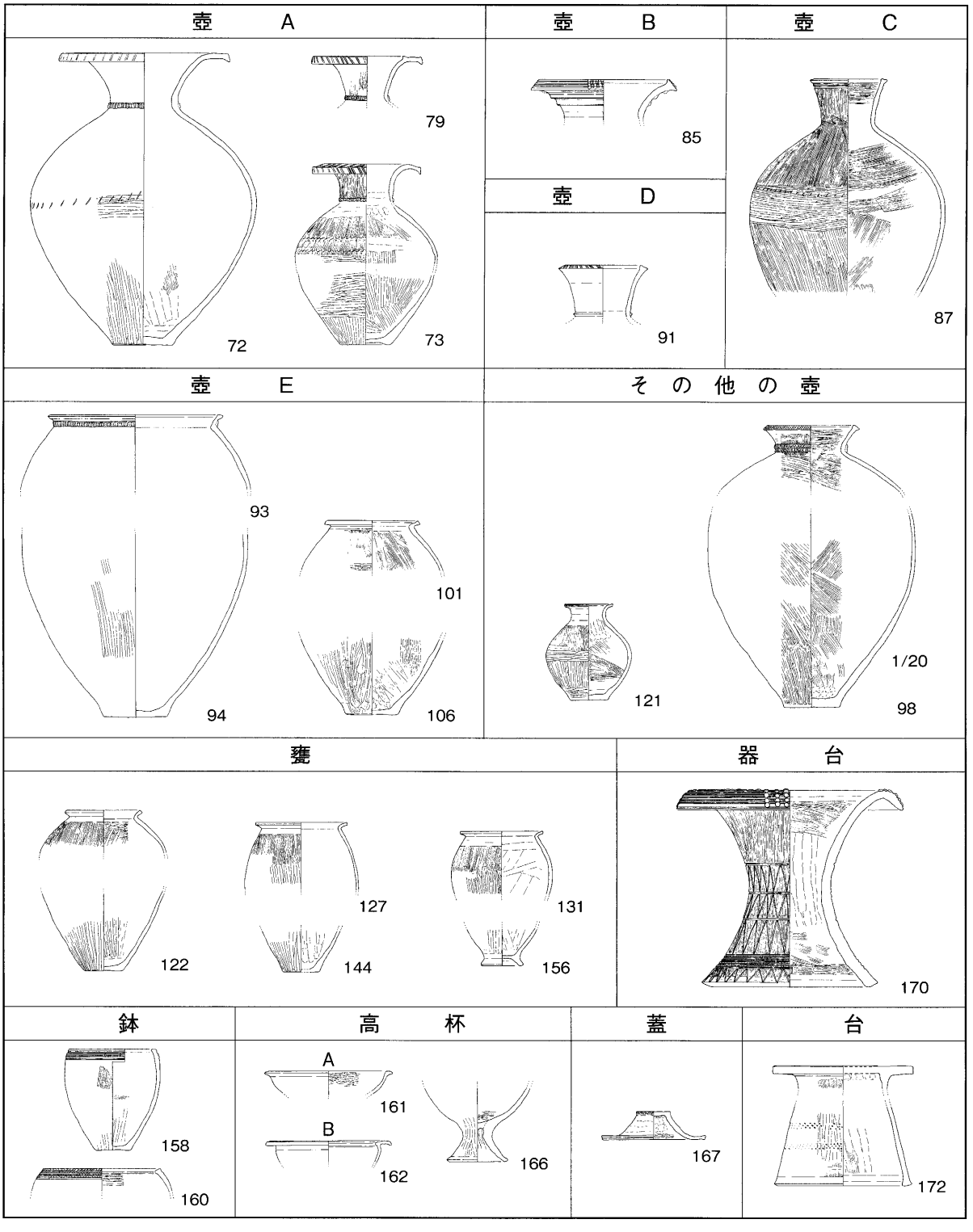
小池谷遺跡からは多くの段状遺構が検出され、これらから出土する土器はおおむね弥生時代中期中葉～後葉、特に中期中葉の中相から中期後葉古相までの短い時期に限られる。多くの土器が出土しているが、大半は小破片ばかりで、まとまって出土した遺構は少ない。この中で段状遺構12においてはまとまった量の土器が出土しており、美作における土器編年を考えるうえで重要と考えられることから、若干の検討を行いたい。

段状遺構12からは中期中葉でも新相の時期の土器一括資料が得られた。建物廃絶後にまもなく土器の廃棄場として利用されたと考えられ、出土状況からは短期間のうちに廃棄、埋没した状況が読み取れる。十分な接合ができておらず、全形のわかる個体が少ないが、図示可能な遺物の大部分を掲載できた。器種では壺、甕、鉢、高杯、器台、台形と当時の主要器種すべてが認められる点で重要である。構成比率は実測図の口縁点数で表すと、壺54.9%、甕25.9%、鉢4.8%、高杯4.8%、蓋4.8%、器台1.6%、台形3.2%である。段状遺構のため斜面下部に床面ごと流失した遺物も多いとみられるが、構成比率は大きく変わらないと考えられる。壺・甕で約８割をしめ、鉢や高杯は少量、器台はわずかに１点のみであった。

次に、段状遺構12土器群の編年的位置について検討する。事実報告と重複する部分もあるが、主要な器種の形態分類を行い、その特徴について検討してみる（第122図）。

（壺）　様々な形式が存在する。壺Ａ（72～83）は胴の張る体部から頸部で屈曲してラッパ状に開き、口縁端部は水平もしくはやや垂下するように折れ曲がる。基本的に頸部に１条突帯または押圧突帯を巡らし、口縁端部を下方にのみ拡張して面をもつものが大半をしめる。拡張した端面と口縁内面には斜線文、格子文、綾杉文いずれかを施し、一部に円形浮文も見られる。口縁部内面に突帯を巡らすもの（79）もある。中期に通有の形式で、突帯や凹線などの組み合わせにより変遷がたどれる形式である。壺Ｂ（84～86）は全形のわかる資料はないが、胴の張る体部から頸部はゆるやかにすぼまると考えられ、口縁は逆「ハ」字に開くもので、口縁に数条の突帯を巡らし、口縁端部に２～３条の凹線、斜線文、円形浮文帯が見られる。体部は櫛描文で加飾されるものが多い。壺Ｃ（87～90）は体部から頸部がゆるやかにすぼまり、口縁が直線的に伸びる。口縁に２～３条の凹線をもつ。壺Ｄ(91･92）は頸部に１条の突帯を巡らし、口縁が直線からやや開きぎみに伸びる。端部はやや面をもち、斜線文や刻目を施す。壺Ｅは頸部から「く」の字に屈曲外半する口縁をもち、口径20cmを境に大型品（93～97）と中型品(99～102）に分かれる。大型品では頸部に押圧突帯を巡らすものが多い。中型品は全形のわかるものがないが、胴の張る体部をもつと考えられる。その他には、超大型の壺や小型壺も存在する。

（甕）　「く」字に短く外反する口縁をもち、体部は肩～胴が張って底部に向けてすぼまる。およそ口径14cmを境に中型（122～129）と小型（130～136）に分かれ、中型でもやや胴の張るもの（122～124）がある。小型品の底部は高台付のものが多い。口縁の特徴として、中型品では端部をナデることで上方に僅かに摘みあげられるものが多く、中には１条凹線のような窪みが巡るものも認められる（123・124）。小型品については、ナデで仕上げるが、摘みあげは顕著でない。また、底部内面のヘラケズリは中～小型関係なしに多くの個体で確認され、ハケやミガキ調整は少ない。



第122図　段状遺構12出土土器分類表（1/10）

（鉢）　鉢は個体数が少ない。砲弾形を呈する小型の鉢(158) の他、口径20cmを測る大型品(159･160) が認められるのみである。いずれも口縁に２～３条の凹線が施されている。

（高杯）　高杯では、体部が椀状を呈するもので、口縁端部が外方へわずかに拡張されたものを高杯Ａ（161)、外方に水平に伸びるものを高杯Ｂ（162・163）とする。脚部端はわずかな面をもつ。

（器台）　器台は胴がすぼまる形態で口縁は垂下する。装飾が著しいもので、体部、口縁部に沈線状の凹線が認められる。

（台形）　円形の粘土板に脚台を接合したものである。

以上の分類や特徴をもとに段状遺構12の編年的位置について検討してみる。弥生時代中期中葉以降の土器編年においては、凹線文の発達度合いが時間的序列を表すことが明らかにされ[1]、そのまま畿内編年[2]を形作ることとなったが、現在では地域によって凹線文の出現に差があることが判明している[3]。凹線文の出現に関しては、沈線や突帯文にその系譜が求められ[4]、吉備、播磨など瀬戸内海沿岸で発生した可能性が高いとされる[5]。県南の吉備では凹線文の段階的採用が土器編年の指標とされている[6]。

美作地域における弥生時代中期の土器編年については、西吉田遺跡資料を基にした編年が行われ、追加・修正を経て現在も用いられている[7]。これに関しては美作の中期土器について基準資料の再整理を行い、中期中葉：Ⅲ期を３段階、中期後葉：Ⅳ期を３段階に区分する案を提示したことがある[8]。その中で、中期中葉・新とされた西吉田Ⅰ式を頸部凹線文出現期と考えてⅣ－１期（古）に位置付け、凹線文を含まない中期中葉・中とされた野村高尾遺跡段状遺構１をⅢ－２期、新たに口縁部への凹線文出現を指標にしたⅢ－３期を設け、杉遺跡土器だまり資料を充てた。以後、近年では大規模開発に伴う久田原・久田堀の内・夏栗遺跡の調査では中期の良好な資料が確認され、編年も行われるなど大きな成果があげられているが[9]、凹線文出現期に限っては良好な資料は確認されていないのが現状である。ここでは、美作における既存の基準資料を用い、小池谷遺跡段状遺構12とを比較検討することによって編年的位置付けを検討してみる。

弥生時代中期中葉から後葉における基準資料の変遷は第123図のとおりである。凹線文出現前のⅢ－２期の基準資料には高本遺跡ピット5,11[10]、野村高尾遺跡段状遺構１[11]がある。壺Ａの突帯は高く、未だ口縁端部など凹線は確認されない時期と考えている。わずかに高本遺跡ピット11では壺Ｅ１点の口縁端部に１条の凹線が認められ、時期が下る要素をもっている。続くⅢ－３期は凹線文の出現期と考えている。良好な資料が少なく、わずかに杉遺跡土器だまり[12]がある。壺Ａの口縁端部に凹線が認められ、高杯Ａの脚部にも凹線が認められる。続くⅣ－１期・古は頸部への凹線文が出現する時期で、西吉田Ⅰ式とされる西吉田遺跡住居４[13]などがある。壺Ａでは頸部に凹線が施される。口縁に凹線をもつ高杯Ａ、鉢、器台なども存在する。Ⅳ－１期・新では、高本Ⅱ式とされる高本遺跡住居１[14]がある。壺Ａでは発達した頸部凹線のほか、甕、鉢、高杯でも凹線が認められる段階である。

小池谷段状遺構12と上記の基準資料とを比較してみると、まず主体をしめる壺Ａは凹線をもたない一群でしめられる点でⅢ－２に含めてよいが、低い突帯形状や体部の形態はⅢ－３の杉遺跡例に類似する。壺Ｂでは口縁端部に２～３条の凹線をもつもので、美作では明確な資料がなく、西吉田住居４(3) において体部が確認できるのみである。県南部の百間川今谷遺跡溝12資料（1594）[15]に類似する。口縁部に凹線をもたないものは古相を示す。壺Ｃは口縁部に２～３条の凹線をもつものでしめられる。高本遺跡ピット５（17－１）で認められる。系譜は明らかでないが、高本遺跡ピット８（20－

<table>
<tr><th>畿内編年
（佐原1968）</th><th>県南部
（河合2004）</th><th>県南部
（高橋1980）</th><th colspan="2">美作・西吉田遺跡
（行田1985）ほか</th><th colspan="2">美作（團2004）
※今回の成果を追加</th><th>画期と特徴</th></tr>
<tr><td>第Ⅲ様式
（古）</td><td>Ⅱ－１</td><td>Ⅳａ～Ⅳｂ</td><td>中葉・中</td><td>高本Ⅰ式、
野村高尾</td><td>Ⅲ－２</td><td>高本ピット5･11、
野村高尾段１</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">第Ⅲ様式
（新）</td><td>Ⅱ－２</td><td rowspan="3">Ⅳｂ
Ⅳｃ</td><td rowspan="3">中葉・新</td><td rowspan="3">西吉田Ⅰ式、
高本Ⅱ式</td><td>Ⅲ－３古</td><td>小池谷段12</td><td rowspan="2">口縁部凹線
の出現</td></tr>
<tr><td>Ⅱ－３</td><td>Ⅲ－３新</td><td>杉土器だまり</td></tr>
<tr><td rowspan="2">第Ⅳ様式</td><td rowspan="2">Ⅲ－１</td><td>Ⅳ－１古</td><td>西吉田住４</td><td rowspan="2">頸部凹線の
出現</td></tr>
<tr><td>Ｖａ～Ｖｂ</td><td>後葉・古</td><td>金井別所</td><td>Ⅳ－１新</td><td>高本住１、
金井別所SH２</td></tr>
</table>

第123図　中期中葉～後葉の土器併行関係

１）から繋がる可能性がある。壺Ｄは凹線をもたないものから百間川今谷遺跡溝12資料（1596）をへて、時期の下る高本遺跡住１（７－１）に繋がる。壺Ｅでは１点で口縁端部に凹線が認められるが、大半は端部を摘む形態である。高本ピット11（21－２）から繋がる。甕においては、基本的に凹線は認められないが、中型品においては口縁端部の摘みあげにより凹線状を呈するものがある。これについては県南の加茂政所遺跡における甕の変遷[16]を参考にすれば、端部の形状は６類とみられる。美作のⅢ－３、Ⅳ－１期古で主体をしめるものと考えられる。また、底部内面のヘラケズリが多くの甕において認められる点は重要である。ケズリの存在は美作では顕著でなく比較できないが、県南部においてケズリが主体をしめるのは、百間川中Ⅱ期新相と考えられている[17]。鉢では口縁に沈線状の凹線が施される。小型品では西吉田住居４（24）が形態的に類似する。高杯Ａは凹線が認められない点では杉遺跡例に近い。器台は沈線状の凹線を巡らす装飾性の高いもので、形態的にも西吉田住居４（25）に類似し、県南部の例とは異なる。

以上、器種ごとに比較検討を行ったが、美作においては追検証を行える資料が非常に少なく、型式変化を追うことが困難である。段状遺構12資料は、壺Ｂ・Ｃの口縁、鉢、器台において凹線が認められる点で、美作Ⅲ－３期の範疇で捉えられる。壺Ａ・Ｄ、壺Ｅの大部分で凹線文が認められないことから、Ⅲ－３期の杉遺跡土器だまり資料よりも古い様相をもつと考えられ、現段階ではⅢ－３期を２分して、その古い段階に位置付けたい。詳細は今後の資料の増加をまって検証するしかないが、Ⅲ－３（古）の段階では、大型で口縁端部が広い壺Ｂや直口形態の壺Ｃにおいて、高杯や鉢、器台などでいち早く凹線が見られるのと同様の現象が起こっているとみられ、続くⅢ－３（新）においてようやく壺Ａなどにおける口縁部の凹線化が進むと考えられる。これに関して近年、吉備や播磨地域では、凹線文の出現期を畿内より古く位置付け、出現過程を口縁の加飾と凹線が共存する段階から凹線文のみの段階の２段階に分けている[18]。この視点でみれば、小池谷遺跡段状遺構12はその古い段階に位置する可能性があるが、凹線の普及という点では様々な形式の壺においても進んでおり、杉遺跡土器だまり資料と併行する可能性も考えられることから、美作において新たに１段階を設定することは尚早とみられ、Ⅲ－３期の新古の様相を示すに留めておきたい。今後、良好な一括資料が増加すれば、さらに再編される可能性があり、今後の資料の増加をまって検討していきたい。

２．検出された遺構について

丘陵尾根頂部から南西斜面にかけて弥生時代中期の集落が発見された。土器の検討から、おおむね弥生時代中期中葉・中相～後葉・古相の短期間に営まれたようである。時期不明のものを除き、段状遺構25基、建物１基、土壙墓８基、土壙７基を確認した。丘陵全体が削平を受けており、遺構の残りが悪く、本来、尾根上にはさらに多くの遺構が存在したと予想される。最も多く確認された段状遺構は、斜面地を造成して平坦面をつくりだしたもので、柱穴や周壁溝などの属性の在否によって遺構の性格が異なるものと考えている。柱穴や周壁溝などを伴うものは建物跡と考えられるもので、段状遺構１・４・５・７・９・10・11・12・13・14・15・18・19・20・22・23・24・25・26がある。このうち、段状遺構15・18・22は平面が円～隅丸の形態をもつ竪穴住居の可能性が考えられる。その他は側柱構造をもつ掘立柱建物と考えられるもので、多くは斜面下部が流失して山側の一列のみ検出されている。造成される段の規模は段状遺構10の10mや段状遺構４の7.6mが大きいもので、５m～６mのものが多い。建物の規模としては段状遺構４の桁行５間分の6.6mが最大で、桁行２間～３間で４m～５mの規模のものが多い。梁行は確認されたものはすべて１間である。その他では段のみの遺構は、規模が小さいものが多い。

以上の検討から、小池谷遺跡では、斜面を段状に造成した建物跡が多く築かれているのが特徴で、桁行４間～５間といった大きな建物や２間～３間の建物が散在して存在していたと考えられる。これらは段状遺構19・20のように等高線に沿って２軒の建物が切りあうように並列する例が多く、建物を建て替える際に一定の決め事があった可能性も考えられる。また、ここでは斜面地の集落で発見される長大な加工段の連続は認められず、せいぜい２軒が切りあう程度であった[19]。この違いは斜面の傾斜度や、集落の存続期間の長短によるものと考えられる。集落構造としては、建物跡の数に比べ、尾根上の削平分を入れても竪穴住居は少数であったと推定される。これに関しては短期集落であることや数の上からも、建物跡の一部は平地式の住居として機能していたと推定される。小規模なものは高床倉庫の可能性があるが、区別できなかった。また、いわゆる長方形竪穴遺構については、明確なものは確認できなかった。段状遺構18では明確な柱をもたず比熱痕をもつ点でその特徴を有するが、不明確である。津山における中期集落では、竪穴住居の比率が高いという結果[20]もあり、この違いが時期や地域性によるものか不明であり、今後の検討課題である。

３．弥生集落の展開

勝央町東南部岡・黒土地区は勝間田平野の中でもなだらかな丘陵が広範囲に存在することから、弥生時代の遺跡が多く存在している。町内でも今回の小池谷遺跡を含めて発掘調査が進んでおり、地域の歴史を知る上で重要な地区である。ここでは、おおまかに集落の展開を見てみたい。

弥生時代前期末～中期前葉に遡る土壙墓が大河内遺跡[21]で発見され、土器も出土している。町内では初となる前期の遺構であり、微高地の延びる西側に集落の存在が予想される。ここは岡山３大河川の一つである吉井川から吉野川、梶並川をへて滝川に入り、勝間田平野に入って最初の玄関口とも言える場所である。中期前葉～中期中葉古相の空白をへて、今回調査した小池谷遺跡が中期中葉中頃に丘陵上に出現している。比較的短期間の集落であったようで、少なくとも中期後葉には集落は存在しない。これに替わるように、再び平野部の大河内遺跡からは中期後葉の集落が出現している。建替

を含めて20軒以上の竪穴住居が発見され、焼失住居や土壙墓も発見されている。やはり西に延びる微高地から中期後半の土器がまとまって出土していることから、平野部における大規模な集落が想定され、この時期の拠点となる集落と考えられる。また、小池谷遺跡のすぐ南の平野で検出された及遺跡[22]でも集落は発見されていないものの、流路状の大溝から中期後葉の土器が出土しており、この時期に周辺の開発が進んだと見られる。このころ西に隣接する岡地区には建替を含め300軒の住居が発見されている小中遺跡[23]が存在しており、中期後葉から後期後半まで続く勝間田平野の拠点集落と考えられている。集落の最盛期である後期中葉～後葉に爆発的に住居の増加が認められる。大河内遺跡では後期の遺構がないことから、移住先の一つが小中遺跡であったと想定される。一方で、後期後葉には小中遺跡の背後、標高260mを測る間山山頂の田井ちご池遺跡[24]において数軒の竪穴住居が発見されている。いずれも焼失しているなど、外的・内的要因は不明ながら短期間で集落を廃棄したようである。後期末～古墳前期初めの時期には、最近調査された土居遺跡[25]があり、直径10mの大型竪穴住居が発見されている。周辺地形からも集落が広がっていると考えられ、小中遺跡に続く集落と考えられる。一方、小池谷遺跡から滝川・平野を挟んで南にある小矢田の丘陵上では最近の大規模調査により国司尾・坂田・宮ノ上遺跡[26]が確認されている。中期中葉に小規模な集落が出現し、中期後葉～後期前葉には住居跡等がまとまって発見されている。後期中葉に住居は認められない点で、小中遺跡へ移住した可能性もある。その後、後期後葉になって再度集落が営まれる。ここでは、集落と重ならない位置に中期後葉～後期の土壙墓群が検出されている。

第２節　小池谷古墳群について

調査の結果、墳丘および主体部の確認された古墳が２基、削平を受けて周溝のみ確認された古墳が５基確認され、合計７基の古墳が発見された。昭和51年の勝央町遺跡地図では８基の古墳群と記載されており、丘陵西側の崖となっている範囲、もしくは削平の著しい３号墳と５号墳の中間地点などに古墳が存在したと考えられるが、数が大きく増加することはないと考えられる。その他、古墳群に関係すると見られる同時期の土壙墓１基が確認された。副葬品が多く出土した１号墳、２号墳をはじめ、古墳群の時期や規模など多くの調査成果があった。時間的な制約もあり、それら全部検討することはできないが、古墳の調査成果、時期や出土遺物などについて検討し、まとめとしたい。

１．古墳群の調査成果

７基の古墳はすべて円墳である。尾根上から平野に面する西斜面にかけて集中しており、南の平野を意識した配置となっている。規模は３号墳の10mを最大に、１号墳の7mが最小となっている。高さは盛土の残っていた１・２号墳では１mと低く、周溝を掘って削り出し、その排土を盛り上げて墳丘を造成している。また、１・２号墳では墳丘の盛土と墓壙の設置を一連の工程で行っていることが判明した。斜面谷側に一定の盛土を行って平坦面をつくり、そこから地山まで掘り込む形で墓壙を掘削し、最後に墳丘を整えたと推定される。同じ斜面に立地する４号墳や６号墳では、上部が削平されているとはいえ、地山面で墓壙の痕跡すら確認できないことから、墓壙が墳丘盛土内に収まっていたと考えられ、これら両者の違いが何によるものか今後の検討課題である。この他に特筆すべきものでは、２号墳では、築造前に古墳の裾を示すように基準線となる弧状の溝を掘削してから周溝掘削・墳

丘盛土を行っていることが判明した。ちょうど周溝の内側で検出され、山側にのみ巡っていた。これについては小中４号墳[27]でも同様の溝が報告されており、古墳築造工程の一端を伺うことができる。その他、３号墳では、周溝の一箇所を浅く掘り残した痕跡がみられ、墓道状の施設を備える点は興味深い。主体部は１号墳で１基、２号墳で２基が確認された。埋葬施設は木棺直葬と推測され、１号墳は墓壙が長方形を呈するが、２号墳の第１主体部は墓壙の西側が先細りとなる船形を呈することから、墓壙形状に合わせた船形木棺を使用した可能性が考えられる。これについては北山２号墳主体部において船形木棺の可能性が推定されている[28]。主体部の副葬状況については、１・２号墳の２つの主体部で須恵器の杯類を枕としていた。鉄刀を脇に抱え、小口側に須恵器杯類や鉄製品をまとめて置くという状況である。埋葬頭位は２号墳主体部２が西北で、その他は東南である。副葬品の内容は、須恵器の杯類が多く、その他の壺や提瓶などは認められない。また、鉄刀・鉄鏃などの武具類、鉄斧・刀子などの工具類といった多くの鉄製品が副葬されている点は１・２号墳で共通するが、構成は若干異なっている。１号墳では装身具である玉類が出土し、鉄鎚や鉄鐸が多数副葬されている。鉄鐸は製鉄の祭祀に関係する遺物と考えられているもの[29]で、やや小型の製品15点がまとまって出土した。また、１号墳のみ周溝から埴輪が出土している。２号墳では轡・鉸具・留金具など馬具の一部や束ねられた鉄鏃群、砥石などが副葬されている。このように１号墳・２号墳では副葬品などの内容が異なっており、被葬者像を推定する上で貴重な事例と考えられる。この他、周溝から須恵器甕の破片がまとまって出土する古墳が大半を占める。３号墳では周溝が半分ほど埋没した段階で大甕の破片が流入していた。南と西の２箇所で離れたものが接合する。５号墳では大甕の破片が周溝底の３箇所にまとまってから出土し、まとまりごとで接合する。墳丘完成後まもなく周溝に甕が流入している状況である。１・２・４号墳でも墳丘から周溝にかけて少量ながら甕の破片が出土している。これについては美作の古墳では一般的に見られ、大畑１号墳では埋葬施設の時期に対応するように、新しい埋葬儀礼のたびに墳頂の古い甕を片付けたとみられるもの[30]や、大年古墳群例のように時期が下った段階に鉄滓と須恵器甕を伴う祭祀が行われた例[31]もある。本例でも古墳築造後の何らかの祭祀行為に伴うものとみられるものの実態は多様であり、３号墳と５号墳も異なる祭祀行為の可能性も考えられる。

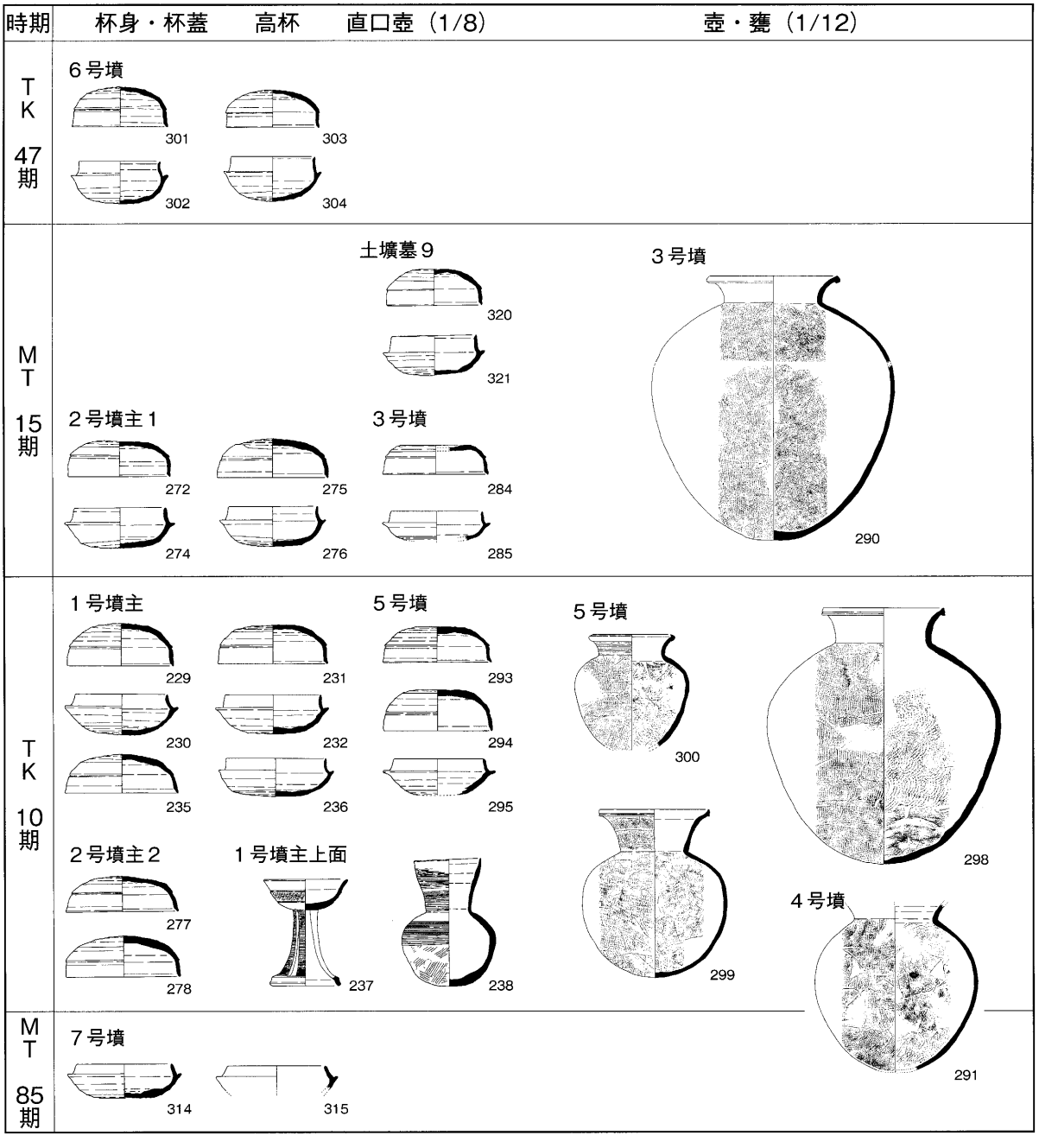
２．出土遺物について

須恵器の編年的位置について

古墳の築造時期やその他の遺物の時期を検討するうえで、出土須恵器の編年的検討が不可欠である。須恵器の編年については、大阪南部の陶邑古窯跡群における編年（以下、陶邑編年）[32]が一般的に用いられているのが現状である。美作でも津山市周辺では多くの古墳が調査されており、古墳から出土する須恵器についての編年（以下、美作編年）[33]も行われている。木棺直葬などの一括遺物が多いことから消費地でありながら編年の有効性は高いが、美作では５世紀後半以降、陶邑編年に当てはまらない形態をもつ須恵器の杯類が確認され、在地の須恵器窯の存在が推定されている[34]ことから、杯類の編年には注意を要する。

小池谷１号墳および２号墳の主体部からは一括性の高い杯身・蓋が出土しており、主体部の時期や併行関係を検討するうえでの基準となるものであることから、詳細に検討してみる。１号墳では中心主体部から須恵器の杯蓋４点・杯身４点、また、主体部上面副葬として須恵器高杯、直口壺が１点ずつ出土している。杯蓋は口径13.0cm～13.8cm、器高4.4cm～5.2cmを測る。口縁端部内面には段があり、

天井部と口縁の境界の稜線は比較的明瞭なものが大半であるが、１点(235）のみ口径が大きく、稜線が不明瞭である。杯身は口径11.2cm～12.2cm、器高4.7cm～5.0cmを測り、口縁端部は直線的に立ち上がり、尖りぎみに終わる。これらは体部の1/3にヘラケズリが及ぶ。また、１号墳とほぼ同時期とみられる小池谷２号墳第１主体部からは須恵器の杯蓋３点・杯身２点、第２主体部からは須恵器の杯蓋２点が出土している。まず第１主体部では、杯蓋(272）は口径12.5cm、器高4.4cmを測り、稜線は比較的明瞭なもので、もう１点（275）は口径13.5cmとやや大きく、稜線は不明瞭である。両者とも内面には段がみられる。杯身は口径10.8cmと11.4cm、器高は２点とも4.9cmを測る。口縁端部は直線的に立ち上がり、尖りぎみに終わる。これらは体部の1/3にヘラケズリが及ぶ。第２主体部では、杯蓋（277）は口径13.6cm、高さ4.3cm、もう１点（278）は口径14.2cm、高さ4.9cmを測り、厚みのある印象である。これらは体部の1/3にヘラケズリが及ぶ。これらの杯類については大半が美作の古墳で多く見られる在



第124図　小池谷古墳群出土須恵器変遷表

地の型式と考えられるが、杯蓋の一部で口径がやや大きく、稜線が不明瞭な一群（235、275、277）もあり、これら２者は別々の系譜が追えるものと考えられる。

以上みてきた杯身・蓋の編年的位置を考えるうえで出土状況からはっきりしていることは１号墳主体部が古く上面が新しいこと、２号墳第１主体部が古く、第２主体部が新しい点である。１号墳主体部と２号墳第１主体部の前後関係は、出土量も数点という制約を承知のうえで杯身・蓋の法量で比較すると、１号墳の杯身・蓋の口径は２号墳のそれより若干大きい。美作編年の基準資料としてよく用いられる北山古墳群[35]の資料では、北山１号墳主体部１の杯身の口径11cm、２号墳では12cmでまとまりをみせ、時期の新しい２号墳の杯類の口径が大きくなる。これに当てはめるならば、小池谷２号墳第１主体部と北山１号墳主体部２、小池谷１号墳と北山２号墳が同時期と考えられる。また、北山１・２号墳には長脚1段３方透かしをもつ無蓋高杯があり、同形式のものが小池谷１号墳主体部上面から出土していることから時期的に近接していると考えられる。また、１号墳主体部上面の副葬は、状況から主体部設置後まもない時期に行われたと考えられる。以上のことから、１・２号墳から出土した須恵器の変遷をまとめると、２号墳第１主体部→１号墳主体部→同上面→２号墳第２主体部の順が考えられる。

陶邑編年との併行関係については、基準となるＴＫ10号窯資料をみると、杯蓋の口径13cm～14cmで稜線は不明瞭、杯身では口径12cm～13cmで口縁は内傾し、段が見られないなどの特徴がある。直接対比ができないものの法量や蓋の特徴から小池谷２号墳第１主体部の杯類はＴＫ10期より古く位置付けられ、１号墳主体部の杯類も若干古い様相を呈していると考えられる。小池谷２号墳第１主体部と同時期とした北山１号墳主体部２より上層で検出された主体部１からはＭＴ15号窯の特徴をもつ杯身が共伴していることから、小池谷２号第１墳主体部はＭＴ15期の範疇に収まると考えられる。また、津山市西部の大開３号墳主体部ではＭＴ15号窯の特徴をもつ杯類と、小池谷１号墳主体部と同形式とみられる在地の杯類が須恵器枕として共伴していること[36]や、小池谷１号墳主体部上面の長脚１段透かしをもつ無蓋高杯は、ＭＴ15期～ＴＫ10期を中心とする形式であること[37]から、小池谷１号墳主体部と同上面はＴＫ10期でもＭＴ15期に近い段階に位置付けられる。小池谷１号墳主体部に続く小池谷２号墳第２主体部は杯蓋の形態からＴＫ10期の範疇に収まると考えられる。これらの結果は、美作編年とも矛盾せず、およそ２号墳主体部１をＭＴ15期：美作Ⅳ、小池谷１号墳主体部：ＴＫ10期：美作Ⅴに併行すると考えられる。

次に小池谷３号墳～７号墳、土壙墓９の須恵器について検討する。３号墳～７号墳については周溝出土資料のみであるが、少量の杯身・蓋のほかに全形のわかる甕も出土していることから、時期を検討する材料になる。まず３号墳周溝からは、杯身は口径11.2cmで、口縁は直線的に立ち上がり、尖りぎみで終わる。杯蓋は口径12.8cmで体部の稜線は明瞭で口縁端部に段をもつ。甕（290）は内面を丁寧にナデ消す特徴を残すことからＭＴ15期と考えられる。４号墳周溝の甕、瑯は詳細な時期は不明ながらＴＫ10期以降と考えられる。５号墳周溝では、少量の杯類と完形に復元される甕などが多く出土している。杯蓋は口径13cm前後で、体部境の稜線は明瞭なものと、器高が高く、稜線は不明瞭なものの２種類確認されている。高杯は長脚１段透かしと見られる。杯蓋や甕の特徴などからＴＫ10期前後と考えられる。６号墳周溝からは杯身・蓋５セット10個体が一括で出土している。杯身は口径10cm前後で口縁端部に段をもち、杯蓋は口径11cm前後で体部の稜線は明瞭、口縁端部に段をもつもので、特徴からＴＫ47期と考えられる。７号墳周溝の杯身は口径11.6cmと小さいが、器高は低く、口縁は内傾ぎ

みに立ち上がって丸く収まるもので、ＭＴ85期と考えられる。土壙墓９では杯身の口径10cm前後で、口縁部に段をもつ。６号墳資料より新しく２号墳より古いと考えられるが、ここではＭＴ15期としておく。以上を整理したものが第124図である。

埴輪について

埴輪を伴うのは唯一、小池谷１号墳だけである。大半が円筒埴輪で、少量の朝顔型埴輪、１点のみ形象埴輪の可能性のあるもので構成される。これらの円筒埴輪は色調により分けることが可能で、大きく黄褐色を呈するもの239、241、243、244、赤橙色を呈するもの247、248、249、250がある。これらから最低でも８個体の円筒が存在したと考えられる。円筒は３条突帯４段の円筒埴輪と推定され、２段目と３段目に互い違いに円形スカシをもつ形態である。法量では基底部は10cm前後、体部の突帯間は９cm～10cm、口縁は13cm～15cm、口縁径は27cm～30cmを測り、全体的にまとまっている。口縁は直線的に延びて最後にわずかに開くもので、端部はナデによる凹みをもつ。突帯は比較的しっかりとした台形を呈するものが多い。体部の外面調整は１次調整のタテハケのみが認められる。一部口縁のヨコハケも存在するが、タテハケ同様１次調整と考えられる。また、ヨコナデによりタテハケを部分的にナデ消すものが多く認められる。内面はタテハケ後にナデ消すものが大半である。基底部は特徴のある調整が認められる。外面は１次調整のタテハケ後に板状工具によるケズリもしくはナデが施され、タテハケを消している。内面は横または斜め方向のケズリを施す。この他、円筒埴輪および朝顔形埴輪の口縁部外面にはヘラ記号をもつ個体が確認された。特に円筒埴輪では「～」は３個体・「⊗」は４個体確認された。「～」は黄褐色を呈する個体、「⊗」は赤橙色を呈する個体に刻まれていることは重要と考えられるが、この使い分けが偶然によるものか個体数が少なく今後の課題である。また、他地域の例では、「～」は日上和田古墳[38]で類例がある。「⊗」のヘラ記号は北山古墳群[39]、河辺上原１号墳[40]でも出土しており、同一集団もしくは同一窯で製作した埴輪の可能性が高い。これらの埴輪の時期については、１号墳主体部出土の須恵器からＭＴ15期～ＴＫ10期と考えられる。

３．古墳群の時期と変遷

小池谷古墳群は、古墳時代後期初頭～後葉（ＴＫ47期～ＭＴ85期）、実年代では６世紀初頭～後葉にかけて築造された７基で構成される古墳群と判明した。７基は時間を共有しつつ短期間に築造されたと考えられ、いわゆる古式群集墳の典型的な例である。須恵器の検討結果をもとに、小池谷古墳群の時期変遷について検討する。丘陵上では先に検討した弥生時代中期以後の土地利用は行われておらず、古墳時代後期初頭（ＴＫ47期）になって古墳の築造が開始される。丘陵西斜面中腹においてまず６号墳が築かれ、築造後すぐに周溝内で須恵器を並べるなどの祭祀行為が行われたと推測される。群中最大規模の３号墳は次の後期前葉（ＭＴ15期）には築造されていることが明らかとなったが、古墳の立地や古墳の築造が周溝の須恵器の時期より遡る例などから６号墳と同時期に築造された可能性がある。後期前葉（ＭＴ15期）には土壙墓９の他、２号墳が築造され、第１主体部が構築される。多くの鉄器や馬具などが副葬され、最初に築かれる６号墳から引き続き勢力を保持していたと推定される。続く後期中葉（ＴＫ10期）には１号墳、４号墳、５号墳が築かれ、最盛期を迎える。１号墳では鉄器や装身具が副葬され、埴輪を配置していることは、２号墳の副葬内容と遜色なく、依然勢力を保持している。その後、２号墳が拡張され、第２主体部が設置された。後期後葉（ＭＴ85期）には丘陵下方で７号墳が築かれたが、これを最後に古墳は築造されず、古墳群としての終焉を迎えている。

４．周辺地域における古墳群の動向について

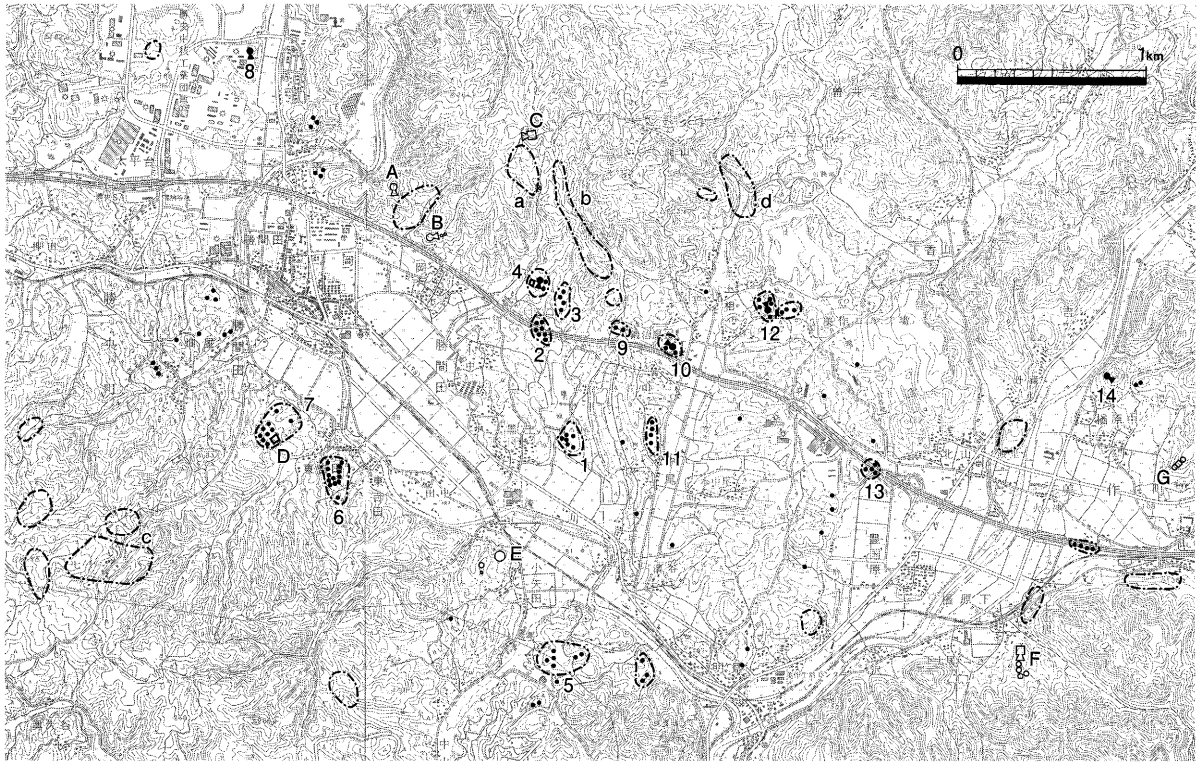
小池谷古墳群の周辺部における古墳時代中期～後期の古墳群の動向について整理し、古墳群の成立背景について検討してみたい。周辺は東北に伸びる梶並川とそれから分岐して西北に延びる滝川をとりまく平野を経済基盤に成立した多くの古墳が存在する地域である（第125図）[41]。まず滝川下流域の勝間田平野周辺における動向として、前段階の古墳時代前期～中期初頭には、首長墓とみられる琴平山古墳（方円50m）や殿塚古墳（方円40m）、南丘陵には宮ノ上１号墳（円９m）[42]が存在する。その後の明確な首長墓は確認されていないが、かろうじて勝間田平野の西北に奥まった位置で中期に遡る可能性のある愛宕山古墳（方円20m）、南の丘陵上に池の内古墳（方25m）が存在するのみで、突出した首長墓の空白期が続く。後期初頭になってようやく平野の東端で小池谷古墳群が築造開始される。相前後して平野の反対側に６基の塚ヶ迫古墳群、平野部中央南側には14基で構成される東光寺裏古墳群などが築かれており、小地域に対応する勢力分布を示している。また、小池谷古墳群の北800mには、現在、鍵の池となっている谷奥には７基の小中古墳群、４基の修理面古墳群が存在する。小中古墳群は４基が調査され、古墳時代後期後葉（ＭＴ85期～ＴＫ43期）の木棺直葬墳と判明した[43]。時期的には小池谷古墳群の後に盛行する古墳群である。小中古墳群のさらに北側の丘陵上には４基のよつみだわ古墳群がある。２号墳（方円21m）は竪穴式石室、他の円墳２基は木棺直葬とみられる。この中で１号墳は横穴式石室をもつことが判明しており、この４基が相次いで築造されたとすれば、前方後円墳の時期も後期の可能性が高い。東に尾根を越えた上相地区の平野周辺においては、中塚５号墳（方円22m）を中心とする６基の中塚古墳群、大年１号墳（方円18.5m）を中心とする４基の大年古墳群が相次いで築かれる。大年１号墳は調査が行われ、形象埴輪や装飾須恵器の存在から地域の首長クラスの墓と考えられる[44]。

一方、東３㎞に位置する梶並川流域における動向として、古墳時代前期～中期初頭には首長墓と考えられる楢原寺山古墳（方方52m）、上経塚２号墳（円26m）が存在し、中期後半以降には金焼山古墳（方円35.7m）、４基で構成される北山古墳群などが存在する。金焼山古墳は墳形や規模から周辺でも突出した首長墓と考えられる。北山古墳群は調査が行われ、１号墳で鉄製武器や農耕具、勾玉などの装身具が副葬され、円筒・形象埴輪や装飾須恵器をもち、続く２号墳は須恵器や鉄製武器の他、捩紋鏡や馬具、埴輪をもつなど豊富な副葬品からは、円墳でありながら梶並川流域の首長クラスの墓と考えられる[45]。上記のように、各地で竪穴系の主体部をもつ古墳が多数築かれる中、滝川流域内の上相地区では後期後葉頃（ＴＫ43期）、金尾12号墳において周辺では初現となる横穴式石室をいち早く導入し、それを契機に新たな古墳群を形成し始めている。同時期に伝統的な木棺直葬を堅持した小中古墳群との関係が注目される。その後、周辺では18基で構成される高塚古墳群や、11基の岩井谷古墳群のように横穴式石室をもつ古墳群へと一斉に移り変わっていくようである。

それぞれの地域の特徴としては、梶並川流域では、突出した規模の首長墓である金焼山古墳、大型円墳の北山１号墳など、平野を見渡せる位置に単独に近い形で首長墓が存在する状況がみられる。一方の滝川流域では、小河川や平野などの単位に分かれて古墳群が点在する状況がみられる。このうち上相地区では、後期後葉の首長墓である大年１号墳や、さらに遡る可能性のある中塚５号墳も同等の首長墓の可能性が高く、代々前方後円墳を築いた地区と考えられるが、上相地区の奥まった場所に立地する。勝間田平野東部では、今回明らかとなった小池谷古墳群は平野を見下ろす位置に存在し、さ

らに北に位置する小中古墳群への墓域の移転が想定され、伝統的に円墳に木棺直葬を築いた地区と考えられる。唯一、前方後円墳を築いたよつみだわ古墳群は、小中古墳群とは異なる西の谷筋を意識した立地となっており、積極的に横穴式石室を導入した可能性がある。しかし、時期が不明のため古墳群の位置付けは大きく変わる可能性がある。

以上、古墳群の変遷や地域の特徴を見てきたが、滝川・梶並川流域周辺においては、地域ごとに様々な古墳群の動向が見て取れた。中でも滝川流域における勝間田平野東部と上相地区においては、古墳群中における前方後円墳の有無という大きな差異が認められた。この前方後円墳については、階層が上位という前代までの図式が成り立たないことは、前方後円墳である大年１号墳と円墳の北山１



前期～中期の首長墳

	名　称	墳形・規模	時　期
A	琴平山古墳	方円(50m)	４Ｃ～５Ｃ
B	殿塚古墳	方円(40m)	４Ｃ～５Ｃ
C	岡高塚古墳	方方(56m)	４Ｃ～５Ｃ
D	池内古墳	方 (25m)	５Ｃ
E	宮ノ上１号墳	円（９m）	５Ｃ
F	楢原寺山古墳	方方(52m)	４Ｃ～５Ｃ
G	上経塚２号墳	円 (26m)	５Ｃ

横穴式石室を主体にもつ古墳群

	名　称	古墳数	時　期
a	高塚古墳群	18基（円）	６Ｃ末
b	岩井谷古墳群	11基（円）	６Ｃ末
c	七十古墳群	23基（円）	６Ｃ末
d	金尾古墳群	11基（円）	６Ｃ後

中期後半～後期の首長墳・古墳群

	名　称	古墳数（形状）	時　期
1	小池谷古墳群	７基(円)	６Ｃ初～中
2	小中古墳群	７基(円)	６Ｃ中～後
3	修理面古墳群	４基(円)	５Ｃ末～６Ｃ
4	よつみだわ古墳群	１基(方円21m)、２基(円)、１基(方)	５Ｃ末～６Ｃ
5	塚ヶ迳古墳群	６基(円)	５Ｃ末～６Ｃ
6	東光寺裏古墳群	14基(円)	５Ｃ末～６Ｃ
7	源族古墳群	９基(円)	５Ｃ末～６Ｃ
8	愛宕山古墳	１基(方円20m)	５Ｃ末～６Ｃ
9	鍛冶屋迳古墳群	２基(円)	５Ｃ末～６Ｃ
10	大年古墳群	１基(方円18m)、３基(円)	６Ｃ後
11	片山古墳群	４基(円)	５Ｃ末～６Ｃ
12	中塚古墳群	１基(方円22m)、３基(円)	５Ｃ末～６Ｃ
13	北山古墳群	４基(円)	６Ｃ初～前
14	金焼山古墳	１基(方円32m)	５Ｃ末

第125図　滝川・梶並川流域の古墳分布図（1/40,000）

号墳の出土遺物を比較した場合に同レベルの階層と考えられることからも明らかである。また、立地の面でも、北山古墳群や小池谷古墳群が平野を見下ろす一等地に存在しているのに対し、中塚５号墳や大年１号墳では狭小な平野でさらに奥まった位置に存在するなど、大きな差が認められる。

一方、円墳で構成される小池谷１・２号墳の副葬品は大年１号墳や北山１号墳に比べて見劣りするものの、おおきな階層差はないと考えられる。小池谷２号墳は北山２号墳と同様の船形墓壙を有することや、小池谷１号墳と北山１号墳では形態とともに共通するヘラ記号をもつ円筒埴輪を共有するなど、北山古墳群との緊密な関係が想定される。

これらのことから、円墳のみで構成される小池谷古墳群は、前方後円墳をもつ大年古墳群に従属するような関係ではなく、北山古墳群などの在地首長との密接な関係の上に成立した古墳群と考えられる。反面、上相地区にある大年古墳群は中央政権との直接的なつながりを深めた結果として前方後円墳をもつ古墳群を築きえたのではないかと推定される(46)。これに関しては、周辺における古墳の資料が少ないのが現状で問題点も多く、今後の課題としたい。

註

（１）小林行雄　佐原　真1964『紫雲出－香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究－』詫間町文化財保護委員会

（２）佐原　真1968「近畿地方」『弥生式土器集成』本編Ⅱ　東京堂出版

（３）寺沢　薫・森岡秀人編1989『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　木耳社

（４）正岡睦夫1986「凹線文・擬凹線文」『弥生文化の研究』３　雄山閣

（５）溝口孝司1987「土器における地域色－弥生時代中期の中部瀬戸内・近畿を素材として－」『古文化談叢』17集　九州古文化研究会

（６）高橋　護1980「入門講座弥生土器－山陽１・２」『考古学ジャーナル』173・175
正岡睦夫1992「備前地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編　木耳社

（７）行田裕美1985『西吉田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集　津山市教育委員会

（８）團　正雄2004「美作における弥生中期土器編年の再整理」『地域と古文化』地域と古文化刊行会

（９）江見正巳ほか2004『久田原遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184　岡山県教育委員会
弘田和司ほか2005『久田堀ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告192　岡山県教育委員会
中野雅美ほか2005『夏栗遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告194　岡山県教育委員会

(10) 井上　弘ほか1975『高本遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告８　岡山県教育委員会

(11) 行田裕美1995『野村高尾遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第55集　津山市教育委員会

(12) 日下隆春2000『杉遺跡』奥津町埋蔵文化財発掘調査報告４　奥津町教育委員会

(13) 前掲註（７）

(14) 前掲註（10）

(15) 高畑知功ほか1982『百間川兼基遺跡１・今谷遺跡１』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51　岡山県教育委員会

(16) 平井泰男1999「弥生時代中期前葉～中葉の土器」『加茂政所遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告199　岡山県教育委員会

(17) 平井泰男1982「弥生時代中期の土器」『百間川兼基遺跡１・今谷遺跡１』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51　岡山県教育委員会

(18) 長友朋子　田中元浩2007「西播磨地域の編年」『弥生土器集成と編年』－播磨編－　大手前大学史学研究所
河合　忍2004「備前・備中地域」『弥生中期土器の併行関係』第53回埋蔵文化財研究集会発表要旨集　埋蔵文化財研究会

(19) 例えば才地遺跡では等高線に沿って加工段が連続して伸びている。これは危険が増す上下を避けた結果、等高線に沿う展開になったとされる。下澤公明ほか2004『才地遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告178　岡山県教育委員会

(20) 中山俊紀2005「沼遺跡と弥生集落」吉備考古ライブラリ11　吉備人出版

(21) 岡本泰典ほか2008『大河内遺跡、稲穂遺跡、下坂遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告216　岡山県教育委員会

(22) 平成17～18年度に町教委が調査
(23) 高畑知功ほか1975『小中遺跡・小中古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７　岡山県教育委員会
朝倉秀昭ほか1997『小中遺跡、白逧古墳群、小中古墳群、湯ヶ逧古墳』岡山県埋蔵文化財調査報告117　岡山県教育委員会
(24) 光永真一ほか2003『田井たれおず遺跡・田井ちご池遺跡・岡東高塚遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告171　岡山県教育委員会
物部茂樹『田井ちご池遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告185　岡山県教育委員会　2004
(25) 團　正雄2009『土居遺跡』勝央町文化財調査報告８　勝央町教育委員会
(26) 柴田英樹ほか2006『国司尾遺跡、坂田遺跡、坂田墳墓群、宮ノ上遺跡、宮ノ上古墳群』岡山県埋蔵文化財調査報告197　岡山県教育委員会
(27) 高畑知功ほか1975『小中遺跡・小中古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７　岡山県教育委員会
(28) 松本和男ほか1973『北山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告４　岡山県教育委員会
(29) 行田裕美ほか1995『西吉田北遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第58集　津山市教育委員会
(30) 行田裕美1993『大畑遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集　津山市教育委員会
(31) 尾上元規ほか1995『大年古墳群ほか』岡山県埋蔵文化財調査報告102　岡山県教育委員会
(32) 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
(33) 小郷利幸1992『門の山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集　津山市教育委員会
(34) 前掲註（33）
(35) 前掲註（28）
(36) 平岡正宏1994『大開古墳群・大開遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第51集　津山市教育委員会
(37) 前掲註（32）
(38) 行田裕美1981『日上和田古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第６集　津山市教育委員会
(39) 前掲註（28）
(40) 小郷利幸1994『河辺上原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集　津山市教育委員会
(41) 遺跡のデータは以下の文献を参考にした。勝央町教育委員会2003『勝央町遺跡地図』勝央町　美作町教育委員会2004『美作町遺跡地図』美作町　河本　清ほか2006『美作町史』資料編１
(42) 前掲註（26）
(43) 前掲註（27）
(44) 前掲註（31）
(45) 前掲註（28）
(46) 群集墳の成立については、在地首長とのつながりを重視するもの、または中央政権との直接的なつながりを重視するものがある。
前者には、山中敏史1986「律令国家の成立」『岩波講座の日本の考古学』６　岩波書店、後者には、新納泉1983「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』30巻３号　考古学研究会がある。

出土遺物一覧表

（凡　　例）

1．本表は本書に掲載した出土遺物全点について掲載している。

2．「番号」は本文に掲載した番号と一致する。

3．「計測値」の空欄は計測不能なもの、（　）は残存値を示す。

4．本報告における土器などの色調は、新版標準土色帳（農林水産省・農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修　1998年版）によっている。

小池谷遺跡出土土器

番号	種別	器種	計測値（cm）			特徴	色調
			口径	底径	器高		
1	弥生土器	壺	18.2		(2.3)	口縁２条凹線、斜線文、円形浮文、頸部押圧突帯	にぶい黄橙色10YR7/4
2	弥生土器	甕	15.2		(3.4)	外面：ハケ、内面：ナデ	灰黄褐色10YR4/2
3	弥生土器	甕		5.8	(10.0)	外面：ミガキ、内面：ケズリ・ユビオサエ	にぶい黄橙色10YR7/4
4	弥生土器	壺			(8.3)	外面：ハケ、内面：ハケ・ユビオサエ。胴部櫛描直線文、３条一対斜線文	明黄褐色10YR6/4
5	弥生土器	壺			(12.8)	外面：ミガキ、内面：ナデ	浅黄橙色10YR8/4
6	弥生土器	壺		10.0	(3.4)	外面：ミガキ、内面：ハケ	
7	弥生土器	甕			(4.5)	外面：ハケ→ミガキ、内面：ハケ・ナデ	浅黄橙色10YR8/4
8	弥生土器	甕			(6.2)	外面：板ナデ、内面：板ナデ	にぶい黄橙色10YR7/4
9	弥生土器	壺				口縁３条凹線、内面斜格子文	浅黄橙色10YR8/4
10	弥生土器	壺				外面：不明瞭、内面：ナデ。胴部櫛描直線文、波状文、円形浮文	にぶい橙色7.5YR7/4
11	弥生土器	甕		6.0	(2.3)	外面：ミガキ、内面：ハケ	にぶい橙色7.5YR7/4
12	弥生土器	甕		5.4	(1.8)	外面：ミガキ、内面：ミガキ	浅黄橙色10YR8/4
13	弥生土器	甕			(3.5)	外面：ハケ、内面：ナデ	灰黄褐色10YR6/2
14	弥生土器	壺				外面：ハケ、内面：ハケ・ユビオサエ	にぶい橙色5YR7/4
15	弥生土器	壺				外・内面：不明瞭	にぶい橙色5YR7/4
16	弥生土器	壺				外・内面：不明瞭	にぶい黄橙色10YR7/3
17	弥生土器	壺	15.4		(4.2)	外面：ハケ、内面：不明瞭。口縁２条凹線、円形浮文、頸部押圧突帯	橙色7.5YR7/6
18	弥生土器	壺				口縁刻目	にぶい橙色7.5YR7/4
19	弥生土器	壺				口縁斜線文	にぶい橙色7.5YR7/4
20	弥生土器	壺				口縁内面斜格子文	にぶい黄橙色10YR7/4
21	弥生土器	壺				外面：ナデ、内面：ナデ。口縁２条突帯、端部３条凹線	にぶい橙色7.5YR7/4
22	弥生土器	壺				外・内面：不明瞭。口縁１条突帯	にぶい黄橙色10YR7/4
23	弥生土器	壺				口縁７条凹線、円形浮文、刻目	橙色5YR7/6
24	弥生土器	壺				外面：ミガキ、内面：ハケ・ミガキ。胴部櫛描列点文	にぶい橙色7.5YR6/4
25	弥生土器	壺		10.0	(4.3)	外面：ミガキ、内面：ケズリ・ナデ	にぶい橙色7.5YR7/4
26	弥生土器	壺		11.4	(3.2)	外面：ミガキ、内面：ケズリ	にぶい橙色5YR7/4
27	弥生土器	壺		8.0	(5.0)	外面：ミガキ・ハケ、内面：ケズリ・ユビオサエ	にぶい黄橙色10YR7/4
28	弥生土器	壺		12.0	(4.0)	外面：ミガキ、内面：ユビオサエ	にぶい黄橙色10YR7/4
29	弥生土器	壺		8.0	(3.0)	外面：ミガキ、内面：ハケ	にぶい黄橙色10YR6/4
30	弥生土器	壺		6.9	(7.4)	外面：ミガキ、内面：ケズリ	橙色5YR7/6
31	弥生土器	甕	16.0		(4.2)	外面：ハケ、内面：板ナデ	にぶい橙色7.5YR7/4
32	弥生土器	甕	16.0		(4.0)	外面：ハケ、内面：不明瞭。口縁刻目	にぶい橙色5YR7/4
33	弥生土器	甕	15.6		(1.9)	外・内面：不明瞭	にぶい黄橙色10YR7/4
34	弥生土器	甕				外面：ハケ、内面：ハケ	橙色5YR7/6
35	弥生土器	甕	15.0		(5.8)	外・内面：不明瞭	にぶい橙色5YR7/4
36	弥生土器	甕		5.0	(2.9)	外面：ミガキ、内面：不明瞭	にぶい黄橙色10YR7/4
37	弥生土器	甕		6.0	(1.9)	外面：ミガキ、内面：不明瞭	にぶい橙色7.5YR7/4
38	弥生土器	鉢				外・内面：不明瞭	にぶい橙色7.5YR7/4
39	弥生土器	不明		8.0	(4.4)	外面：不明瞭、内面：ケズリ	明黄褐色10YR7/6
40	弥生土器	壺	15.8		(4.6)	外面：不明瞭、内面：ナデ。口縁２条刻目突帯、端部２段刻目	浅黄橙色10YR8/4
41	弥生土器	壺				斜格子文、円形浮文	にぶい橙色5YR6/4
42	弥生土器	壺				外面：ハケ、内面：ユビオサエ。頸部押圧突帯	にぶい橙色7.5YR7/4
43	弥生土器	壺		16.0	(4.0)	外面：不明瞭、内面：ナデ	にぶい橙色7.5YR7/4
44	弥生土器	壺		8.0	(4.7)	外面：ミガキ、内面：ハケ→板ナデ	にぶい橙色7.5YR7/4
45	弥生土器	壺		9.4	(4.2)	外・内面：不明瞭	にぶい橙色7.5YR7/4

番号	種別	器種	計測値（cm）			特徴	色調
			口径	底径	器高		
46	弥生土器	壺				外面：ハケ、内面：ナデ・ユビオサエ。47·48と同一か	浅黄橙色10YR8/4
47	弥生土器	壺				外面：ハケ→ミガキ、内面：板ナデ。胴部列点文	浅黄橙色10YR8/4
48	弥生土器	壺		8.2	(7.6)	外面：ミガキ、内面：ナデ→ケズリ	浅黄橙色10YR8/4
49	弥生土器	壺	19.0		(3.5)	外面：ハケ、内面：不明瞭	橙色5YR7/6
50	弥生土器	甕	17.6		(4.8)	外面：ハケ、内面：ハケ	浅黄橙色10YR8/4
51	弥生土器	甕	14.4		(3.7)	外・内面：不明瞭	橙色5YR7/6
52	弥生土器	壺		7.8	(15.4)	外面：ハケ→下半ミガキ、内面：ナデ	浅黄橙色10YR8/3
53	弥生土器	甕		4.4	(2.5)	外面：ミガキ、内面：ケズリ・ユビオサエ	橙色5YR7/6
54	弥生土器	甕		4.8	(3.5)	外面：ミガキ、内面：ハケ	にぶい黄橙色10YR7/3
55	弥生土器	高杯				外面：ナデ、内面：ハケ	褐灰色10YR4/1
56	弥生土器	鉢				外面：不明瞭、内面：下半ケズリ・上半ミガキ	にぶい褐色7.5YR6/3
57	弥生土器	蓋		6.0	(4.4)	外面：ハケ、内面：ナデ	にぶい黄橙色10YR6/3
58	弥生土器	壺				外面：ナデ、内面：不明瞭	にぶい黄橙色10YR7/4
59	弥生土器	甕				外面：ハケ、内面：ハケ→ナデ	にぶい黄橙色10YR7/4
60	弥生土器	甕				外・内面：ナデ	にぶい黄橙色10YR7/4
61	弥生土器	甕				外・内面：ナデ	褐灰色10YR6/1
62	弥生土器	甕				外・内面：ナデ	にぶい黄橙色10YR7/4
63	弥生土器	甕		6.6	(6.6)	外面：ミガキ・ナデ、内面：ナデ	にぶい橙色7.5YR7/4
64	弥生土器	甕				外面：ミガキ、内面：ケズリ	灰黄褐色10YR6/2
65	弥生土器	甕		5.8	(5.7)	外面：不明瞭、内面：板ナデ	橙色5YR6/6
66	弥生土器	甕		5.6	(3.6)	外面：ミガキ、内面：ケズリ	にぶい黄橙色10YR7/4
67	弥生土器	高杯	16.4		(2.8)	外面：ミガキ、内面：ミガキ	にぶい橙色7.5YR7/4
68	弥生土器	高杯				外面：ミガキ、内面：ナデ、絞り目	にぶい橙色7.5YR7/4
69	弥生土器	高杯		16.0	(2.4)	外面：ミガキ、内面：ミガキ	にぶい橙色7.5YR7/4
70	弥生土器	台				外面：不明瞭、内面：ナデ	にぶい橙色7.5YR7/4
71	弥生土器	台		19.0	(6.3)	外面：ミガキ、内面：ナデ	にぶい橙色7.5YR7/4
72	弥生土器	壺	27.2	9.8	48.0	外面：胴部・下半ミガキ、内面：ハケ→底部ナデ。口縁斜線文、頸部押圧突帯	にぶい黄橙色10YR7/4
73	弥生土器	壺	17.8	8.0	(27.0)	外面：ハケ→下半ミガキ、内面：ハケ→下半ミガキ。頸部押圧突帯	橙色5YR6/6
74	弥生土器	壺	22.0		(8.1)	外面：ハケ→ナデ、内面：ハケ→ナデ。口縁斜線文、頸部押圧突帯	にぶい橙色5YR6/4
75	弥生土器	壺	21.0		(8.6)	外面：ハケ、内面：ハケ→ユビオサエ。口縁斜線文、頸部押圧突帯	にぶい黄橙色10YR7/3
76	弥生土器	壺	26.6		(9.0)	外面：ハケ→ナデ、内面：ナデ。口縁斜線文・円形浮文、頸部突帯	橙色5YR6/6
77	弥生土器	壺	21.2		(12.6)	外面：ハケ→ミガキ、内面：ハケ→ユビオサエ。口縁刻目、頸部押圧突帯	にぶい黄橙色10YR6/4
78	弥生土器	壺	25.4		(9.0)	外面：ハケ、内面：ナデ。口縁斜線文・円形浮文、頸部突帯	にぶい橙色7.5YR6/4
79	弥生土器	壺	18.2		(7.3)	外面：ハケ、内面：ナデ。口縁斜線文、口縁内突帯、頸部押圧突帯	橙色5YR6/6
80	弥生土器	壺	(19.6)		(10.1)	外面：ハケ、内面：ハケ→ナデ。頸部押圧突帯。口縁端剥離	にぶい橙色5YR6/4
81	弥生土器	壺	20.0		(1.8)	口縁斜格子文、円形浮文	にぶい橙色7.5YR6/4
82	弥生土器	壺			(3.5)	外面：ハケ、内面：ナデ。頸部押圧突帯	にぶい橙色7.5YR7/4
83	弥生土器	壺			(14.1)	外面：ハケ→下半ミガキ、内面：ハケ。頸部押圧突帯。体部：櫛描列点文	にぶい褐色7.5YR6/3
84	弥生土器	壺	26.6		(4.4)	口縁２条突帯、端部に３条凹線、綾杉文、棒状浮文	にぶい橙色7.5YR7/4
85	弥生土器	壺	21.0		(6.5)	口縁３条突帯、端部に４条凹線、円形浮文	にぶい橙色7.5YR7/4
86	弥生土器	壺	22.0		(5.0)	外面:ミガキ、内面:不明瞭。口縁３条突帯、端部に斜格子文、刻目	橙色2.5YR7/6
87	弥生土器	壺	12.8		(35.0)	外面：ハケ→下半ミガキ、内面：ハケ。口縁２条凹線	にぶい黄橙色10YR6/4
88	弥生土器	壺	10.6		(6.7)	外面：ハケ、内面：不明瞭。口縁３条凹線	にぶい黄橙色10YR7/3
89	弥生土器	壺	11.0		(7.7)	外面：ハケ→口縁ナデ、内面：ナデ。	にぶい黄橙色10YR7/4
90	弥生土器	壺	10.8		(11.2)	外面：ハケ→胴ミガキ、内面：ハケ→ナデ。口縁３条凹線	にぶい橙色7.5YR7/3
91	弥生土器	壺	14.6		(8.5)	口縁斜線文、頸部に突帯	にぶい橙色7.5YR6/4
92	弥生土器	壺	13.4		(6.5)	外面：ハケ→内面：ハケ・ナデ。口縁刻目、頸部押圧突帯	にぶい黄橙色10YR7/6
93	弥生土器	壺	31.2		(12.3)	外・内面：調整不明瞭。頸部押圧突帯、94と同一か	にぶい橙色5YR6/4
94	弥生土器	壺		10.4	(30.0)	外面：ミガキ、内面：ミガキ？	橙色5YR6/6
95	弥生土器	壺	19.4		(5.0)	外面：不明瞭、内面：ハケ。口縁斜線文、頸部押圧突帯	橙色5YR7/6
96	弥生土器	壺	22.2		(2.6)	頸部押圧突帯	にぶい橙色7.5YR6/4
97	弥生土器	壺			(4.2)	外面：ハケ、内面：不明瞭。頸部押圧突帯	橙色5YR7/6
98	弥生土器	壺	28.4	18.4	(93.2)	外面:ハケ→ミガキ、内面:口縁ハケ→ミガキ、胴ハケ・ナデ。口縁斜格子文、頸部２段押圧突帯	明赤褐色2.5YR5/8
99	弥生土器	壺	12.8		(9.0)	外面：ハケ、内面：ハケ。117と同一か	にぶい橙色5YR6/4
100	弥生土器	壺	16.6		(3.9)	外面：不明瞭、内面：ユビオサエ	橙色7.5YR7/6
101	弥生土器	壺	15.0		(8.0)	外面：ハケ→胴ミガキ、内面：ハケ	にぶい橙色7.5YR7/4
102	弥生土器	壺	17.8		(3.7)	不明瞭。口縁３条凹線、刻目、円形浮文	にぶい黄橙色10YR6/4
103	弥生土器	壺		9.8	(14.3)	外面：ミガキ、内面：ハケ、体部：列点文	にぶい黄橙色10YR6/3

番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	特徴	色調
104	弥生土器	壺		9.2	(10.3)	外面：ミガキ、内面：板ナデ	にぶい黄橙色10YR7/4
105	弥生土器	壺		7.8	(12.3)	外面：ミガキ、内面：ハケ→板ナデ	褐灰色7.5YR4/1
106	弥生土器	壺		8.4	(12.3)	外面：ミガキ、内面：ハケ→板ナデ	浅黄橙色7.5YR8/3
107	弥生土器	壺		9.8	(8.0)	外面：ミガキ、内面：板ナデ	にぶい黄橙色10YR7/3
108	弥生土器	壺		9.4	(8.5)	外面：ミガキ、内面：ハケ→板ナデ	にぶい橙色7.5YR6/4
109	弥生土器	壺		8.0	(9.5)	外面：ミガキ、内面：板ナデ	にぶい黄橙色10YR7/3
110	弥生土器	壺		7.0	(9.5)	外面：ミガキ、内面：ハケ、体部：列点文	にぶい橙色5YR6/3
111	弥生土器	壺		7.0	(4.0)	外面：ミガキ、内面：ケズリ→底部ナデ	にぶい橙色7.5YR7/4
112	弥生土器	壺		9.0	(5.8)	外面：ミガキ、内面：ハケ	にぶい黄橙色10YR7/4
113	弥生土器	壺		8.4	(5.4)	外面：ミガキ、内面：ハケ	にぶい黄橙色10YR7/3
114	弥生土器	壺		7.5	(6.6)	外面：ミガキ、内面：ナデ	にぶい黄橙色10YR7/4
115	弥生土器	壺		8.0	(6.0)	外面：ミガキ、内面：ナデ	にぶい黄橙色10YR7/4
116	弥生土器	壺		8.4	(4.0)	外面：ミガキ、内面：ハケ	にぶい橙色7.5YR7/4
117	弥生土器	壺		7.0	(2.7)	外面：ミガキ、内面：ユビオサエ。99と同一か	橙色5YR7/6
118	弥生土器	小型壺	13.8		(3.8)	外面：ミガキ、内面：不明瞭。口縁斜線文、３個一対の穿孔	にぶい橙色7.5YR6/4
119	弥生土器	小型壺				外面：ハケ、内面：ナデ	にぶい橙色5YR7/4
120	弥生土器	小型壺		4.2	(4.3)	外面：ナデ、内面：ハケ	にぶい黄橙色10YR6/4
121	弥生土器	小型壺	7.6	6.2	15.2	外面：ハケ→下半ミガキ、内面：ハケ	にぶい橙色7.5YR6/4
122	弥生土器	甕	12.6	6.2	(20.0)	外面：ハケ→ミガキ、内面：ハケ→ミガキ、底部ケズリ	にぶい橙色7.5YR7/4
123	弥生土器	甕	14.0		(9.2)	外面：ハケ？、内面：不明瞭。口縁１条凹線	にぶい黄橙色10YR7/4
124	弥生土器	甕	13.6		(9.5)	外面：ハケ→下半ミガキ、内面：ハケ。口縁１条凹線	黒褐色10YR3/1
125	弥生土器	甕	14.0		(8.0)	外面：ハケ、内面：ハケ	にぶい橙色7.5YR7/4
126	弥生土器	甕	16.0		(8.5)	外面：ハケ、内面：ハケ	にぶい橙色7.5YR7/4
127	弥生土器	甕	14.8		(11.0)	外面：ハケ→下半ミガキ	にぶい黄橙色10YR7/2
128	弥生土器	甕	13.4		(5.0)	外面：ハケ、内面：ハケ・ユビオサエ	にぶい橙色7.5YR6/4
129	弥生土器	甕	17.6		(4.5)	外面：ハケ？、内面：ナデ	にぶい黄橙色10YR6/3
130	弥生土器	甕	(14.0)	6.0	(21.0)	外面：ハケ→ミガキ、内面：ハケ→下半ケズリ	にぶい橙色7.5YR6/4
131	弥生土器	甕	13.4		(10.5)	外面：ハケ→下半ミガキ、内面：ハケ	浅黄橙色7.5YR8/4
132	弥生土器	甕	(12.8)		(9.8)	外面：ハケ→下半ミガキ、内面：ハケ	浅黄橙色7.5YR8/3
133	弥生土器	甕	12.4		(5.5)	外面：ハケ、内面：ハケ	にぶい橙色7.5YR7/4
134	弥生土器	甕	11.0		(6.2)	外・内面：調整不明瞭	にぶい橙色7.5YR7/4
135	弥生土器	甕	13.0		(4.3)	外面：ハケ、内面：不明瞭	にぶい橙色7.5YR7/4
136	弥生土器	甕	13.4		(4.5)	外面：不明瞭、内面：ハケ・ユビオサエ	橙色7.5YR7/6
137	弥生土器	甕	13.0		(2.5)	外面：ナデ、内面：ナデ。口縁刻目	浅黄橙色10YR8/3
138	弥生土器	甕		5.2	(14.1)	外面：ミガキ、内面：下半ケズリ	灰黄褐色10YR6/2
139	弥生土器	甕		5.8	(13.4)	外面：ミガキ、内面：ハケ→下半ナデ？	にぶい橙色7.5YR7/4
140	弥生土器	甕		4.8	(12.4)	外面：ミガキ、内面：ハケ→底部ナデ	褐灰色7.5YR5/1
141	弥生土器	甕		5.8	(12.4)	外面：ミガキ、内面：ケズリ	にぶい黄橙色10YR7/3
142	弥生土器	甕		5.2	(9.8)	外面：ミガキ、内面：ナデ	にぶい橙色7.5YR6/4
143	弥生土器	甕		7.4	(5.7)	外面：ミガキ、内面：ケズリ	にぶい橙色7.5YR7/4
144	弥生土器	甕		6.0	(5.8)	外面：ミガキ、内面：ケズリ	橙色5YR7/6
145	弥生土器	甕		5.8	(5.6)	外面：ミガキ、内面：ケズリ→ナデ	にぶい黄橙色10YR7/4
146	弥生土器	甕		5.4	(4.2)	外面：ミガキ、内面：ケズリ	にぶい黄橙色10YR7/4
147	弥生土器	甕		5.2	(5.0)	外面：ミガキ、内面：下半ミガキ・ナデ	にぶい橙色7.5YR6/4
148	弥生土器	甕		5.8	(1.5)	外面：ナデ、内面：ハケ。焼成後底部に穿孔	にぶい黄橙色10YR6/4
149	弥生土器	甕		7.0	(8.6)	外面：ミガキ、内面：下半ケズリ→ユビオサエ	にぶい橙色7.5YR7/4
150	弥生土器	甕		7.5	(12.5)	外面：ミガキ、内面：下半ケズリ→ナデ	にぶい橙色7.5YR6/4
151	弥生土器	甕		7.6	(9.0)	外面：ミガキ、内面：下半ケズリ	にぶい褐色7.5YR6/3
152	弥生土器	甕		6.5	(15.2)	外面：ミガキ、内面：下半ケズリ	にぶい橙色5YR6/4
153	弥生土器	甕		7.2	(10.5)	外面：ミガキ、内面：下半ケズリ→ナデ	にぶい橙色7.5YR6/4
154	弥生土器	甕		7.0	(6.7)	外面：ミガキ、内面：下半ケズリ→ナデ	にぶい黄橙色10YR7/4
155	弥生土器	甕		7.2	(10.0)	外面：ミガキ、内面：ハケ→下半ケズリ	にぶい橙色7.5YR7/3
156	弥生土器	甕		7.0	(6.0)	外面：ミガキ、内面：下半ケズリ	にぶい黄橙色10YR6/4
157	弥生土器	甕		6.8	(5.4)	外面：ミガキ→ユビオサエ、内面：下半ケズリ	にぶい橙色7.5YR7/3
158	弥生土器	鉢	14.4		16.5	外面：ハケ、内面底：板ナデ。口縁４条凹線	にぶい橙色7.5YR7/3
159	弥生土器	鉢	19.2		(4.0)	口縁４条凹線	にぶい黄橙色10YR7/4
160	弥生土器	鉢	19.0		(3.3)	外面：不明瞭、内面：ミガキ。口縁５条凹線、刻目	にぶい橙色5YR7/4
161	弥生土器	高杯	21.0		(4.6)	外面：不明瞭、内面：ミガキ	にぶい橙色5YR6/4
162	弥生土器	高杯	19.6		(3.8)	外面：ミガキ？、内面：不明瞭	にぶい黄橙色10YR6/4
163	弥生土器	高杯	20.4		(5.3)	外面：ミガキ 、内面：ミガキ	浅黄橙色7.5YR8/4
164	弥生土器	高杯			(8.6)	外面：ミガキ 、内面：ハケ	にぶい橙色7.5YR7/4
165	弥生土器	高杯		11.2	(4.2)	外面：ミガキ 、内面：不明瞭	橙色5YR7/6
166	弥生土器	高杯		10.0	(12.0)	外面：ミガキ、内面：ハケ。円盤充填	にぶい橙色7.5YR6/4
167	弥生土器	蓋	16.6	5.6	4.6	外面：ナデ、内面：ナデ	褐灰色5YR5/1
168	弥生土器	蓋	(10.0)	6.4	(6.0)	外面：ハケ、内面：ハケ・ユビオサエ	橙色7.5YR7/6
169	弥生土器	蓋	(15.0)	3.0	(6.0)	外面：ハケ→ナデ、内面：ハケ	橙色7.5YR6/6
170	弥生土器	器台	37.2	28.8	(32.4)	外面：ハケ、内面：ハケ・ナデ。口縁９条凹線、円形浮文、体部山形文、脚部５条凹線	にぶい橙色7.5YR6/3

番号	種別	器種	計測値（cm）			特徴	色調
			口径	底径	器高		
171	弥生土器	台			(5.5)	外面：ハケ、内面：不明瞭	にぶい橙色7.5YR7/4
172	弥生土器	台	23.0	22.6	(19.6)	外面：ハケ→ミガキ、内面：ナデ、天井部：ミガキ、体部：櫛描列点文	にぶい橙色7.5YR6/4
173	弥生土器	甕		5.8	(1.8)	外面：ミガキ、内面：不明瞭	にぶい黄橙色10YR7/4
174	弥生土器	甕				外・内面：ナデ	にぶい橙色7.5YR7/4
175	弥生土器	壺		8.0	(3.6)	外面：ミガキ、内面：板ナデ	にぶい黄橙色10YR7/4
176	弥生土器	甕		5.6	(1.9)	外面：ミガキ、内面：不明瞭	にぶい橙色7.5YR7/4
177	弥生土器	壺			(3.5)	外面：ナデ、内面：ナデ。頸部押圧突帯	にぶい橙色7.5YR7/4
178	弥生土器	壺				外面：ハケ、内面：ハケ。２条凹線	にぶい橙色7.5YR7/4
179	弥生土器	壺？			(2.2)	２条凹線	にぶい黄橙色10YR7/4
180	弥生土器	甕		4.8	(3.0)	外・内面：不明瞭	にぶい橙色7.5YR7/4
181	弥生土器	壺	18.0		(2.2)	口縁刻目	にぶい黄橙色10YR7/4
182	弥生土器	甕		5.4	(3.4)	外面：不明瞭、内面：ユビオサエ	浅黄橙色10YR8/4
183	弥生土器	甕		5.0	(1.6)	外・内面：不明瞭	にぶい黄橙色10YR6/3
184	弥生土器	台	22.0	27.0	(17.6)	外面：ハケ、内面：ナデ、脚部ハケ。天井部ミガキ	にぶい橙色7.5YR7/4
185	弥生土器	壺			(7.1)	外面：ミガキ、内面：ハケ・ユビオサエ→下半ケズリ	にぶい黄橙色10YR7/4
186	弥生土器	甕		6.8	(5.6)	外面：ミガキ、内面：ケズリ	にぶい橙色7.5YR7/4
187	弥生土器	甕	17.0		(2.2)	外・内面：不明瞭	にぶい黄橙色10YR7/4
188	弥生土器	壺	13.6		(5.4)	外面：ハケ、内面：ハケ・ユビオサエ	にぶい橙色7.5YR7/4
189	弥生土器	壺				外・内面：不明瞭。口縁突帯	橙色5YR6/6
190	弥生土器	甕	15.0		(5.7)	外面：ハケ、内面：上半ケズリ。頸部ゆるく外反する	にぶい橙色7.5YR6/4
191	弥生土器	甕		6.0	(3.8)	外面：不明瞭、内面：ハケ	浅黄橙色10YR8/4
192	弥生土器	甕				外・内面：ナデ	浅黄橙色10YR8/4
193	弥生土器	甕				外面：ハケ、内面：ハケ	にぶい橙色7.5YR7/4
194	弥生土器	高杯				外面：ミガキ、内面：ミガキ	浅黄橙色10YR8/4
195	弥生土器	壺		10.0	(5.9)	外面：ミガキ、内面：ユビオサエ	にぶい橙色7.5YR7/4
196	弥生土器	壺		8.0	(2.5)	外面：ミガキ、内面：ユビオサエ	にぶい黄橙色10YR7/4
197	弥生土器	甕		6.0	(2.7)	外面：不明瞭、内面：ナデ	灰黄褐色10YR6/2
198	弥生土器	壺				外面：ハケ、内面：不明瞭。胴部２条凹線	橙色7.5YR6/6
199	弥生土器	壺				外・内面：不明瞭	にぶい黄橙色10YR7/4
200	弥生土器	壺				外・内面：不明瞭。口縁１条突帯	にぶい橙色7.5YR7/4
201	弥生土器	鉢				口縁２条凹線、斜線文	灰褐色7.5YR6/2
202	弥生土器	壺		9.4	(9.9)	外・内面：不明瞭	にぶい黄橙色10YR7/4
203	弥生土器	高杯		12.8	(7.4)	外・内面：不明瞭	にぶい黄橙色10YR7/4
204	弥生土器	壺			(3.8)	外面：ハケ、内面：ナデ	にぶい黄橙色10YR7/3
205	弥生土器	壺				外面：ハケ、内面：ハケ→ナデ。胴部櫛描直線文、波状文	にぶい橙色7.5YR7/4
206	弥生土器	壺				外面：ハケ、内面：ハケ→ナデ。胴部櫛描直線文、波状文、３条突帯	にぶい橙色7.5YR7/4
207	弥生土器	壺		7.8	(2.8)	外面：ミガキ、内面：不明瞭	にぶい黄橙色10YR7/4
208	弥生土器	甕		6.0	(2.5)	外面：ミガキ、内面：ハケ	灰黄褐色10YR5/2
209	弥生土器	台	(20.0)		(3.3)	外面：不明瞭、内面：ナデ	にぶい橙色7.5YR7/4
210	弥生土器	甕	29.4		(3.6)	外面：不明瞭、内面：ナデ	にぶい黄橙色10YR7/4
211	弥生土器	甕		5.0	(2.2)	外面：ミガキ、内面：ナデ	にぶい橙色7.5YR7/4
212	弥生土器	甕		6.0	(1.8)	外・内面：不明瞭	褐灰色10YR5/1
213	弥生土器	壺		8.4	(3.9)	外面：ミガキ、内面：ハケ	にぶい橙色7.5YR7/4
214	弥生土器	甕		5.0	(2.5)	外面：ミガキ、内面：不明瞭	にぶい黄橙色10YR7/4
215	弥生土器	甕		5.0	(2.0)	外面：ミガキ、内面：不明瞭	褐灰色7.5YR6/1
216	弥生土器	壺		8.0	(2.5)	外面：不明瞭、内面：ハケ・ユビオサエ	にぶい橙色7.5YR7/4
217	弥生土器	壺				外面：ハケ、内面：ナデ。頸部押圧突帯	橙色5YR7/6
218	弥生土器	壺				外面：不明瞭、内面：ハケ・ナデ	灰黄褐色10YR6/2
219	弥生土器	壺				外面：ハケ、内面：不明瞭	にぶい黄橙色10YR7/4
220	弥生土器	甕		5.8	(3.8)	外面：不明瞭、内面：ナデ	橙色5YR6/6
221	弥生土器	甕		6.4	(5.0)	外面：ミガキ、内面：不明瞭	浅黄橙色10YR8/4
222	弥生土器	甕		6.0	(3.3)	外・内面：不明瞭	にぶい橙色7.5YR7/4
223	弥生土器	壺				外・内面：調整不明瞭	にぶい黄橙色10YR7/4
224	弥生土器	高杯		13.2	(3.6)	外・内面：不明瞭	浅黄橙色10YR8/4
225	弥生土器	高杯				口縁刻目	にぶい黄橙色10YR7/4
226	須恵器	杯	12.0		3.5	外・内面：ロクロナデ。底部ヘラ切り	灰白色10Y7/1
227	土師器	小皿		6.0	(1.0)	外・内面：ロクロナデ。底部ヘラ切り	にぶい黄橙色10YR7/4
228	土師器	甕	15.4		2.4	外・内面：ハケ	にぶい赤褐色5YR4/3

小池谷古墳群出土土器

番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	特徴	色調	出土遺構
229	須恵器	杯蓋	13.0		5.2	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色7.5Y5/1	1号墳主体
230	須恵器	杯身	11.2		5.0	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色7.5Y6/1	1号墳主体
231	須恵器	杯蓋	13.4		4.8	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色7.5Y6/1	1号墳主体
232	須恵器	杯身	11.6		4.8	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色7.5Y6/1	1号墳主体
233	須恵器	杯蓋	13.5		4.4	ロクロナデ→ロクロケズリ。左回転	灰色7.5Y6/1	1号墳主体
234	須恵器	杯身	12.1		5.0	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転。底部外面に平行する3条の圧痕	灰色7.5Y5/1	1号墳主体
235	須恵器	杯蓋	13.8		4.8	ロクロナデ→ロクロケズリ。左回転	灰色7.5Y6/1	1号墳主体
236	須恵器	杯身	12.2		4.7	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色7.5Y6/1	1号墳主体
237	須恵器	高杯	10.2	8.2	13.0	脚部1段3方向スカシ。口縁波状文、脚部カキ目	灰色5Y7/1	1号墳主体部上面
238	須恵器	直口壺	8.1		15.6	外面：胴部平行タタキ→カキ目、内面：ロクロナデ	灰色7.5Y6/1	1号墳主体部上面
269	須恵器	杯身	12.5		(4.1)	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色5Y4/1	1号墳周溝
270	須恵器	壺	21.0			外・内面：ロクロナデ	灰色7.5Y4/1	1号墳周溝
271	須恵器	壺				外面：平行タタキ→ヨコハケ、内面：当て具痕残す	灰白色5Y7/1	1号墳周溝
272	須恵器	杯蓋	12.5		4.4	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色N4/	2号墳1主体
273	須恵器	杯蓋	12.6		4.5	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色N4/	2号墳1主体
274	須恵器	杯身	11.4		4.9	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色2.5Y7/2	2号墳1主体
275	須恵器	杯蓋	13.5		4.7	ロクロナデ→ロクロケズリ。左回転	灰色N5/	2号墳1主体
276	須恵器	杯身	10.8		4.9	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色7.5Y5/1	2号墳1主体
277	須恵器	杯蓋	13.6		4.3	ロクロナデ→ロクロケズリ。左回転	灰色7.5Y6/1	2号墳2主体
278	須恵器	杯蓋	14.2		4.9	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転。焼成不良、器壁厚い	灰白色5Y7/1	2号墳2主体
279	須恵器	杯蓋	14.4		4.5	ロクロナデ→ロクロケズリ。左回転	灰色7.5Y6/1	2号墳周溝
280	須恵器	杯身	12.4		5.6	ロクロナデ→ロクロケズリ。左回転	灰色7.5Y6/1	2号墳周溝
281	須恵器	甕	13.6		(25.2)	外面：格子タタキ→ヨコハケ、内面：当て具痕、底部付近ナデ	灰色7.5Y6/1	2号墳周溝
282	須恵器	甕				外面：格子タタキ→ヨコハケ、内面：当て具痕残す	灰白色5Y7/1	2号墳周溝
283	須恵器	甕				外面：格子タタキ→ヨコハケ、内面：当て具痕残す。自然釉付着	灰色5Y4/1	2号墳周溝
284	須恵器	杯蓋	12.8		3.6	ロクロナデ→ロクロケズリ。左回転	灰色N5/	3号墳周溝
285	須恵器	杯身	11.2		(3.5)	ロクロナデ→ロクロケズリ	灰色N5/	3号墳周溝
286	須恵器	甕	19.4		5.8	外面：平行タタキ、内面：当て具痕残す。焼成不良。287同一	灰色7.5Y7/1	3号墳周溝
287	須恵器	甕				外面：平行タタキ、内面：当て具痕残す。焼成不良。286同一	灰色7.5Y7/1	3号墳周溝
288	須恵器	甕	19.6		4.9	外面：平行タタキ→ヨコハケ、内面：当て具痕残す。289同一	灰色5Y5/1	3号墳周溝
289	須恵器	甕				外面：平行タタキ→ヨコハケ、内面：当て具痕残す。288同一	灰色5Y5/1	3号墳周溝
290	須恵器	甕	24.4		(48.5)	外面：平行タタキ→ヨコハケ、内面：当て具痕をナデ消す	灰色N4/	3号墳周溝
291	須恵器	甕			(30.0)	外面：格子タタキ、内面：当て具痕をナデ消す	灰色5Y5/1	4号墳周溝
292	須恵器	瓏				外面：ハケ・ケズリ→ナデ→カキ目、内面：ロクロナデ	灰色7.5Y6/1	4号墳周溝
293	須恵器	杯蓋	13.4		4.4	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色N4/	5号墳周溝
294	須恵器	杯蓋	13.0		5.0	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色5Y5/1	5号墳周溝
295	須恵器	杯身	11.0		4.5	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色N4/	5号墳周溝
296	須恵器	高杯	9.0		(3.8)	脚部3または4方向スカシ。口縁波状文、刻目	灰色7.5Y4/1	5号墳周溝
297	須恵器	提瓶				外面：カキ目、内面：当て具痕残す	灰色10Y5/1	5号墳周溝
298	須恵器	甕	22.0		46.8	外面：平行タタキ→一定間隔でヨコハケ、内面：当て具痕残す、底部付近ナデ	灰色5Y6/1	5号墳周溝
299	須恵器	壺	20.0		30.8	外面：格子タタキ→ヨコハケ、内面：当て具痕ナデ消し	灰色5Y5/1	5号墳周溝
300	須恵器	壺	14.2		(20.8)	外面：平行タタキ→カキ目、内面：当て具痕残す	灰色5Y7/1	5号墳周溝
301	須恵器	杯蓋	11.8		5.0	ロクロナデ→ロクロケズリ。左回転	灰色7.5Y5/1	6号墳周溝
302	須恵器	杯身	10.0		5.2	ロクロナデ→ロクロケズリ。左回転	灰色7.5Y5/1	6号墳周溝
303	須恵器	杯蓋	11.2		4.6	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色7.5Y4/1	6号墳周溝
304	須恵器	杯身	10.2		5.4	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色10Y5/1	6号墳周溝
305	須恵器	杯蓋	11.6		4.8	ロクロナデ→ロクロケズリ。左回転	灰黄色2.5Y7/2	6号墳周溝
306	須恵器	杯身	10.4		5.3	ロクロナデ→ロクロケズリ。左回転	灰黄色2.5Y7/2	6号墳周溝
307	須恵器	杯蓋	11.2		4.3	ロクロナデ→ロクロケズリ。左回転	灰色10Y5/1	6号墳周溝
308	須恵器	杯身	9.4		5.1	ロクロナデ→ロクロケズリ。左回転	灰色10Y5/1	6号墳周溝
309	須恵器	杯蓋	11.2		4.9	ロクロナデ→ロクロケズリ。左回転	灰色10Y5/1	6号墳周溝
310	須恵器	杯身	9.8		5.0	ロクロナデ→ロクロケズリ。左回転	灰色10Y5/1	6号墳周溝
311	土師器	鉢	8.0		4.7	外・内面：ユビオサエ	にぶい黄橙色10Y7/3	6号墳周溝
312	須恵器	瓏				外面：波状文	灰色7.5Y4/1	6号墳周溝
313	須恵器	瓏				外面：ケズリ→ロクロナデ、内面：ユビオサエ	灰色7.5Y6/1	6号墳周溝

番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	特徴	色調	出土遺構
314	須恵器	杯身	11.6		4.1	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰オリーブ色5Y5/2	7号墳周溝
315	須恵器	杯身	12.0		(3.0)	ロクロナデ	灰色7.5Y6/1	7号墳周溝
316	須恵器	甕				ロクロナデ	灰色7.5Y6/1	7号墳周溝
317	須恵器	甕				外面：格子タタキ、内面：当て具痕残す	灰色5Y6/1	7号墳周溝
318	須恵器	甕				外面：平行タタキ→ヨコハケ、内面：当て具痕残す	灰オリーブ色7.5Y6/2	7号墳周溝
319	須恵器	壺				外面：格子タタキ、内面：底部ユビオサエ	灰色7.5Y4/1	7号墳周溝
320	須恵器	杯蓋	11.8		4.4	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色5Y6/1	土壙墓9
321	須恵器	杯身	10.4		5.0	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色5Y6/1	土壙墓9
322	須恵器	杯身	11.6		(4.4)	ロクロナデ→ロクロケズリ。右回転	灰色5Y6/1	包含層
323	須恵器	蓋				外面：カキ目、内面：当て具痕残す	灰色N5/	包含層
324	須恵器	小型壺				ロクロナデ→カキ目。自然釉で覆われる	灰色5Y5/1	包含層
325	須恵器	小型壺				ロクロナデ→カキ目。内面：底部ユビオサエ	灰色10Y4/1	包含層
326	須恵器	小型壺	9.0		(4.2)	ロクロナデ	灰色N5/	包含層
327	須恵器	小型壺				ロクロナデ→カキ目	灰色5Y6/1	包含層

東北斜面部出土土器

番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	特徴	色調	遺構名
328	土師器	壺	16.0			外面：不明瞭、内面：ナデ	にぶい黄橙色10YR7/4	段状遺構41
329	土師器	甕	16.0			外・内面：不明瞭	にぶい黄橙色10YR7/4	段状遺構41
330	土師器	甕	14.0			外・内面：ナデ。331と同一	橙色5YR6/6	段状遺構41
331	土師器	甕				外面：ハケ、内面：不明瞭	橙色5YR6/6	段状遺構41

1号墳出土埴輪

番号	種別	計測値(cm) 口縁高	突帯間	底部高	口・底径	調整 外面調整	内面調整	色調	備考
239	円筒	14.5			28.0	タテハケ→ヨコハケ	ナナメハケ→ナデ、一部ケズリ	明黄橙色10YR7/6	「～」ヘラ記号
240	円筒		(7.0)		24.0	タテハケ	タテハケ→ナデ	明黄橙色10YR7/6	
241	円筒	13.8			28.0	タテハケ→ヨコハケ	ヨコハケ→ナデ	明黄橙色10YR7/6	「～」ヘラ記号
242	円筒		9.3		22.6	タテハケ→ヨコナデ	ナナメハケ→ナデ	にぶい黄橙色10YR7/4	ヘラ記号
243	円筒	15.0			28.6	タテハケ	ナナメハケ→ナデ	橙色7.5YR7/6	「～」ヘラ記号
244	円筒	13.5	9.3		30.0	タテハケ→ヨコナデ、ヨコハケ	ヨコハケ→ナデ	橙色7.5YR7/6	「～」ヘラ記号
245	円筒	(7.4)				タテハケ→ヨコナデ	ナデ	橙色5YR6/6	
246	円筒	(8.4)				タテハケ→ヨコナデ	ナデ	橙色5YR6/6	「⊗」ヘラ記号
247	円筒	(11.0)	10.0		27.0	タテハケ	ナデ	橙色5YR6/6	
248	円筒	13.0	9.5		27.4	タテハケ	ナデ	橙色5YR7/6	「⊗」ヘラ記号
249	円筒	15.0			29.0	タテハケ	ナナメハケ→ナデ	橙色5YR6/6	「⊗」ヘラ記号
250	円筒	(9.1)			27.0	タテハケ	ナナメハケ→ナデ	橙色5YR7/6	「⊗」ヘラ記号
251	円筒		10.0		24.0	タテハケ→ヨコナデ	ナナメハケ→ナデ	橙色5YR7/6	
252	円筒		(8.5)		25.0	タテハケ	ナデ	橙色5YR6/6	
253	円筒		(7.2)		25.0	タテハケ→ヨコナデ	ナデ	橙色5YR7/6	
254	円筒		9.5		25.0	タテハケ→ヨコナデ	ナデ	橙色5YR7/6	
255	円筒				22.0	タテハケ→ヨコナデ	ナデ	橙色5YR7/6	
256	円筒				21.0	不明	不明	橙色5YR6/6	
257	円筒			10.0	21.8	タテハケ→ケズリ	ナナメハケ→ケズリ、ナデ	明黄橙色10YR7/6	
258	円筒			(8.0)	22.0	タテハケ→板ナデ、ケズリ？	ナデ	橙色5YR7/6	
259	円筒			(8.3)	20.5	タテハケ→板ナデ、ケズリ？	ナナメハケ→ケズリ、ナデ	橙色7.5YR7/6	
260	円筒			(5.3)	20.0	タテハケ→板ナデ、ケズリ？	ナデ	橙色5YR6/6	
261	円筒			(9.0)		タテハケ→板ナデ、ケズリ？	ケズリ→ナデ	明黄橙色10YR7/6	
262	円筒			(8.2)		タテハケ→板ナデ、ケズリ？	ケズリ→ナデ	にぶい黄橙色10YR7/4	
263	円筒			(6.2)		タテハケ	不明	橙色5YR7/6	小スカシ
264	円筒			(5.6)		不明	不明	橙色5YR6/6	
265	朝顔	(12.0)			46.0	タテハケ	ヨコハケ→ナデ	橙色7.5YR7/6	ヘラ記号
266	朝顔	(7.0)			40.0	タテハケ	ヨコハケ→ナデ	橙色5YR7/6	
267	朝顔					タテハケ	ヨコハケ→ナデ	橙色5YR7/6	
268	形象			(5.2)	16.0	タテハケ	不明	橙色5YR7/6	

石器・石製品（玉類以外）

番号	種別	時代	計測値（cm）			石材	遺構名	備考
			長さ	幅	厚さ			
S1	砥石？	弥生	(4.0)	(2.7)	0.7	花崗岩	段状遺構5	小破片
S2	石鏃	弥生	1.9	1.4	0.3	サヌカイト	段状遺構10	
S3	？	弥生	(9.3)	(5.8)	1.8		段状遺構10	
S4	砥石	弥生		(4.0)	2.2		段状遺構11	小破片
S5	磨製石斧	弥生	(5.0)	(5.2)		花崗岩	段状遺構12	
S6	磨製石斧	弥生	(5.5)	(7.2)	3.5		段状遺構12	
S7	叩き石	弥生	17.5	8.6	7.0		段状遺構12	
S8	石包丁	弥生	11.0	6.0	1.3	粘板岩	段状遺構12	未製品か
S9	？	弥生	(4.0)	(4.5)	(0.6)		段状遺構15	小破片
S10	砥石	弥生	(2.8)	2.2	0.4	頁岩	段状遺構20	小破片
S11	すり皿	弥生	10.0	8.0	1.5	砂岩	段状遺構25	
S12	砥石	弥生	4.6	3.2	0.5	サヌカイト	段状遺構29	
S13	石錘？	弥生	6.0	5.3	4.3		土壙4	小孔、条痕
S14	石斧	弥生	(11.2)	6.2	4.0		包含層	
S15	叩き石	弥生	12.0	4.4	4.3		包含層	
S16	？	弥生	8.7	5.0	4.3		包含層	
S17	石槍？	弥生	(9.8)	3.6	2.0		包含層	
S18	石包丁	弥生	11.5	5.3	0.7	頁岩	包含層	
S19	打製石包丁	弥生	(7.3)	2.8	0.8	サヌカイト	包含層	
S20	石錘	弥生	6.2	2.1	1.1	流紋岩	包含層	
S21	砥石	古墳後期	15.7	3.2	1.8	頁岩	２号墳１主体	
S22	叩き石	古墳中期	17.5	7.0	4.2	安山岩？	段状遺構41	

鉄器・鉄製品

番号	種別	形式	計測値（cm）		遺構名		備考
			長さ	最大幅			
M1	鉄刀		97.3	3.8	１号墳	１主体	木質残存、目釘孔２箇所
M2	鉄斧		9.3	3.5	１号墳	１主体	鍛造
M3	鉄鏃		(10.5)	3.2	１号墳	１主体	
M4	鉄鏃	平根	13.5	3.4	１号墳	１主体	
M5	鉄鏃	平根	(12.0)	1.0	１号墳	１主体	
M6	鉄鏃	平根	(9.4)	3.6	１号墳	１主体	
M7	鉄鏃	平根	(7.0)	(3.4)	１号墳	１主体	
M8	鉄鏃	尖根	(2.7)	1.1	１号墳	１主体	
M9	鉄鏃	尖根	(4.0)	0.7	１号墳	１主体	
M10	鉄鏃	尖根	(4.1)	(1.3)	１号墳	１主体	他に未接合破片あり
M11	鉄鏃		(8.1)	(0.8)	１号墳	１主体	
M12	鉄鏃		(6.8)	(0.8)	１号墳	１主体	
M13	刀子		(10.5)	1.2	１号墳	１主体	
M14	鉄鎚		(4.5)	1.8	１号墳	１主体	
M15	鉄鐸		3.8	2.0	１号墳	１主体	
M16	鉄鐸		3.6	1.9	１号墳	１主体	内部に別の製品付着
M17	鉄鐸		(4.2)	1.9	１号墳	１主体	
M18	鉄鐸		(4.7)	(1.6)	１号墳	１主体	
M19	鉄鐸		(3.5)	(1.4)	１号墳	１主体	舌あり
M20	鉄鐸		3.2	1.8	１号墳	１主体	
M21	鉄鐸		3.3	1.7	１号墳	１主体	
M22	鉄鐸		3.3	1.4	１号墳	１主体	舌あり
M23	鉄鐸		(2.9)	(1.3)	１号墳	１主体	
M24	鉄鐸		2.8	1.6	１号墳	１主体	
M25	鉄鐸		(2.0)	(0.8)	１号墳	１主体	
M26	鉄鐸		(2.1)	(1.2)	１号墳	１主体	
M27	鉄鐸		(2.5)	(1.3)	１号墳	１主体	
M28	鉄鐸		(2.8)	(1.2)	１号墳	１主体	
M29	鉄鏃	尖根			１号墳	主体部上面	
M30	鉄鏃	尖根	12.0	1.2	１号墳	主体部上面	
M31	鉄鏃	尖根	(10.8)	1.1	１号墳	主体部上面	木質残存
M32	鉄鏃	尖根	(10.6)	1.1	１号墳	主体部上面	
M33	鉄鏃	尖根	(9.9)	0.9	１号墳	主体部上面	
M34	鉄鏃	尖根	(10.5)	0.9	１号墳	主体部上面	
M35	鉄鏃	尖根	(7.4)	(1.1)	１号墳	主体部上面	
M36	鉄鏃	尖根	(5.6)	(1.2)	１号墳	主体部上面	
M37	鉄鏃	尖根	(3.2)	(1.2)	１号墳	主体部上面	
M38	鉄鏃	尖根	(4.4)	(0.5)	１号墳	主体部上面	
M39	鉄鏃	尖根	(9.5)	(0.7)	１号墳	主体部上面	
M40	鉄鏃	尖根	(7.5)	(0.6)	１号墳	主体部上面	

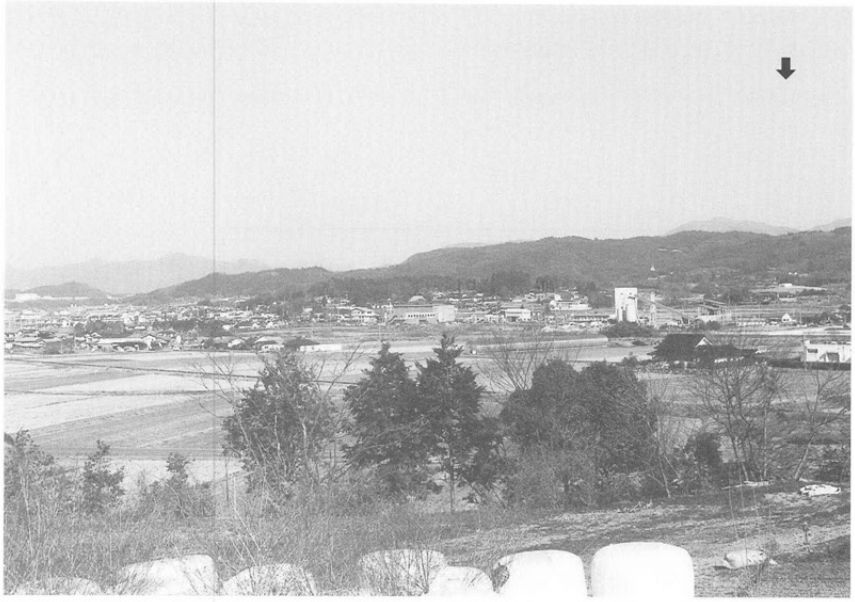
番号	種別	形式	計測値(cm) 長さ	計測値(cm) 最大幅	遺構名		備考
M41	鉄鏃	尖根	(5.3)	(0.7)	1号墳	主体部上面	
M42	鉄刀		46.2	2.7	2号墳	1主体	木質残存
M43	鉄斧		11.0	4.8	2号墳	1主体	鍛造、柄の木質残存
M44	鉄鏃	平根	11.5	3.4	2号墳	1主体	木質残存
M45	鉄鏃	平根	(10.2)	3.8	2号墳	1主体	
M46	鉄鏃	平根	12.7	3.0	2号墳	1主体	木質残存
M47	鉄鏃	平根	(12.9)	(3.1)	2号墳	1主体	木質残存
M48	鉄鏃	平根	(10.9)	(2.5)	2号墳	1主体	木質残存
M49	鉄鏃	平根	(4.4)	(3.3)	2号墳	1主体	棺材の木質付着
M50	鉄鏃	平根	(4.7)	(2.8)	2号墳	1主体	棺材の木質付着
M51	鉄鏃	平根	(8.2)	(2.5)	2号墳	1主体	木質残存
M52	鉄鏃	平根	(8.4)	(3.4)	2号墳	1主体	
M53	鉄鏃	平根	(10.3)	(2.4)	2号墳	1主体	木質残存
M54	鉄鏃	平根	(11.4)	(1.9)	2号墳	1主体	木質残存
M55	鉄鏃	尖根	(9.4)	(1.1)	2号墳	1主体	
M56	鉄鏃	尖根	(8.5)	(1.5)	2号墳	1主体	
M57	鉄鏃	尖根	(13.8)	0.7	2号墳	1主体	木質残存
M58	鉄鏃		(2.6)	(0.7)	2号墳	1主体	
M59	鉄鏃		(4.0)	(1.0)	2号墳	1主体	木質残存
M60	鉄鏃		(8.5)	(0.9)	2号墳	1主体	木質残存
M61	刀子		(6.0)	(1.4)	2号墳	1主体	
M62	不明		(4.5)	(5.0)	2号墳	1主体	錆びぶくれ
M63	馬具・轡				2号墳	1主体盗掘穴	
M64	馬具・兵庫鎖				2号墳	1主体盗掘穴	3連
M65	馬具・兵庫鎖				2号墳	1主体盗掘穴	2連
M66	馬具・不明				2号墳	1主体盗掘穴	67と接合か
M67	馬具・不明				2号墳	1主体盗掘穴	66と接合か
M68	馬具・不明				2号墳	1主体盗掘穴	
M69	馬具・鈕具				2号墳	1主体盗掘穴	
M70	馬具・留金具				2号墳	1主体盗掘穴	5箇所の鋲
M71	鉄鏃	平根	(6.6)	(3.0)	2号墳	2主体	
M72	鉄鏃	平根	(4.2)	(3.8)	2号墳	2主体	
M73	鉄鏃	平根	11.7	4.6	2号墳	2主体	木質残存
M74	刀子		(12.0)	1.5	2号墳	2主体	
M75	鉄鎌		13.5	(3.7)	4号墳	周溝	
M76	鉄滓				7号墳	周溝	
M77	炉壁				製鉄炉	排滓溝	
M78	炉壁				製鉄炉	排滓溝	
M79	鉄滓				製鉄炉	排滓溝	
M80	鉄滓				製鉄炉	排滓溝	
M81	鉄滓				製鉄炉	排滓溝	

玉類

番号	種別	材質	計測値(cm) 長さ	計測値(cm) 幅	遺構名		備考
S21	管玉	碧玉	2.50	0.80	1号墳	1主体	
S22	管玉	碧玉	2.40	0.80	1号墳	1主体	
S23	管玉	碧玉	2.40	0.70	1号墳	1主体	
S24	管玉	碧玉	2.30	0.90	1号墳	1主体	
S25	管玉	碧玉	2.30	0.80	1号墳	1主体	
S26	管玉	碧玉	2.30	0.80	1号墳	1主体	
S27	管玉	碧玉	2.30	0.80	1号墳	1主体	
S28	管玉	緑色凝灰岩	2.00	(0.70)	1号墳	1主体	
S29	管玉	緑色凝灰岩	2.20	0.70	1号墳	1主体	
S30	管玉	緑色凝灰岩	1.20	(0.50)	1号墳	1主体	
G1	小玉	ガラス	0.20	0.35	1号墳	1主体	
G2	小玉	ガラス	0.30	0.42	1号墳	1主体	
G3	小玉	ガラス	0.38	0.55	1号墳	1主体	
G4	小玉	ガラス	0.75	0.74	1号墳	1主体	
G5	小玉	ガラス	0.32	0.50	1号墳	1主体	
G6	小玉	ガラス	0.25	0.42	1号墳	1主体	
G7	小玉	ガラス	0.38	0.62	1号墳	1主体	
S31	丸玉	水晶	0.73	0.90	1号墳	1主体	
G8	小玉	ガラス	0.60	0.90	5号墳	周溝	
G9	小玉	ガラス	0.70	0.90	5号墳	周溝	
G10	小玉	ガラス	0.70	0.82	5号墳	周溝	
G11	小玉	ガラス	0.54	0.82	5号墳	周溝	
G12	丸玉	ガラス	1.10	1.10	5号墳	周溝	

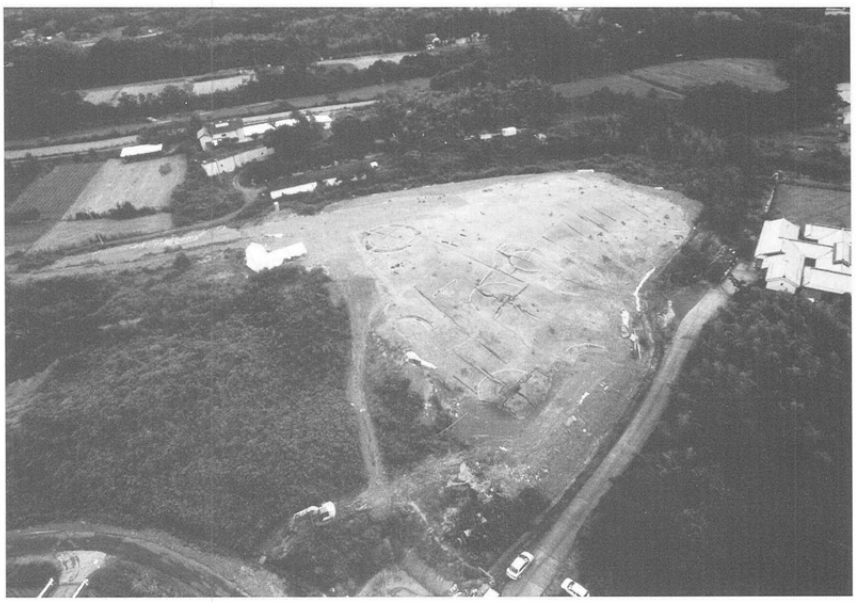
写　真　図　版

図版 1

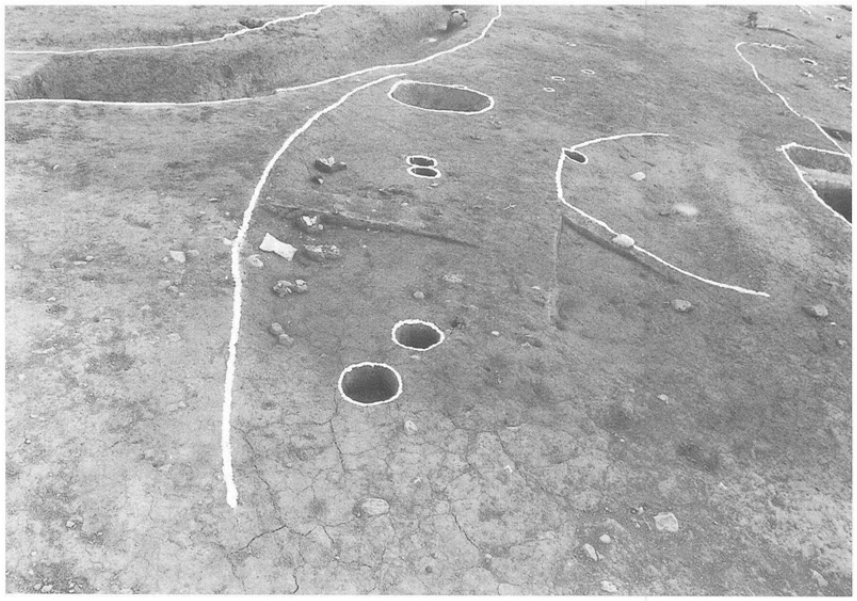


1　調査地遠景（南から）
右端中央テント

2　調査区全景（東から）



3　調査区全景（西から）



１　段状遺構１（西から）

２　段状遺構４（西から）

３　段状遺構５（東から）

図版３

１　段状遺構７・８
遺物出土状況（西から）

２　段状遺構７・８（東から）

３　段状遺構９（西から）